

宮本武蔵

空の巻

吉川英治

青空文庫

普賢ふげん

一

木曾路へはいると、随所にまだ雪が見られる。

峠くぼの凹みから、薙なぎ刀なたなりに走っている白い閃ひらめきは、駒ヶ岳の

雪のヒダであり、仄ほのあか紅い木々の芽を透すかして彼方に見える白い斑まだらのものは、御おん岳たけの肌だった。

だがもう畑や往来には、浅い緑がこぼれている。季節は今、な
んでも育さかつ盛りなのだ。踏ふんづけても踏ふんづけても、若い草は伸

びずにいない。

まして城太郎の胃ぶくろと来ては、いよいよ、育つ権利を主張する。この頃殊に、髪の毛が伸びるように、背の寸法までが伸びそうに見えて、将来の大人ぶりも思いやられる風がある。

もの心つくつと、世間の波へ抛り出されて、拾われた手はまた、流転るてんの人であつた。勢い、旅から旅の苦勞を舐めな、どうしてもおませになるべく環境が迎えてくるので仕方がないが、近頃、時々あらわす生意気さ加減には、お通もよく泣かされて、

(なんだってこんな子に、こう馴なつかれてしまったのかしら)
と、ため息ついて、睨んでやることもある。

しかし効きき目のあろうわけはない。城太郎は知り抜いているの

だ。そんな怖い顔こわしたって、心のなかでは、おいらが可愛くてならないくせに——と。

そういう横着と、今の季節と、飽くことを知らない胃ぶくろが、行く先々、食べ物とさえ見れば、

「よう、よう、お通さんてば。あれ買っておくれよ」

と、彼の足を、往来へ釘づけにしてしまう。

先ほど、通りこえた須原すはらの宿しゆくには、木曾將軍の四天王、今井兼かねひらねひらとりのであと、平の砦の址があるところから「兼平せんべい」を軒並み売っていたため、とうとうそこでは、お通が根負けして、

「これだけですよ」

念を押して、買って与えたが、半里はんみちと歩かない間うちに、それも

ぼりぼり食べ終つてしまい、ややともすると、なにか物欲しそうな顔をする。

寢覚ねざめでは、宿場茶屋の端をかりて、早目な昼めしを喰べたので、事なく済んだが、やがて一峠越えて、上松あげまつのあたりへかかると、「お通さん、お通さん。干し柿が下がっているぜ。干し柿喰べたくないかい？」

そろそろ謎をかけ始める。

牛の背に乗つて、牛の顔のように、お通が聞えない振りをしてるので、空むなしく、干し柿は見過ごしてしまつたが、程なく木曾第一の殷賑いんしんな地、信濃しなの福島ふくまの町中へさしかかると、折から陽も八刻頃やつだし、腹も減へり頃なので、

「休もうよ、そこらで——」

と、また始め出した。

「ね、ね」

こう鼻で捏こね出すと、駄ね々に粘ねばりが出るばかりで、歩けばこそ、テコでも動く顔つきではない。

「よう、ようつ。黄粉餅きなこもちたべようよう。……嫌かい？」

こうなつては一体、ねだっているのか、お通を脅迫しているのか、分らない。彼女の乗っている牛の手綱は、城太郎の手に曳かれているため、彼の歩き出さぬうちは、どう焦いら々思つても、黄粉餅屋の軒先を、通り越えることができないからである。

「いい加減におしなさい」

遂に、お通も意地になつてしまふ。城太郎と共謀して、往來の地面を管なめまわしている牝牛めうしの背から、眼にかどを立てて、

「ようござんす。そんなに私を困らすなら、先へ歩いていらつしやる武蔵様へ、いいつけて上げるから——」

そして彼女は、牛の背から降りそうな真似をしたが、城太郎は笑つて見ている。止める真似もしないのである。

二

城太郎は、意地わるく、

「どうするの……?」

彼女が、先へ行く武蔵へ、いいつけに行かないことは、百も承知の顔つきでいう。

牛の背から降りてしまったので、お通は、仕方なしに、
「さ、はやくお喰べなさい」

と、黄粉餅屋の陰へはいつて行く。

城太郎は威勢よく、

「餅屋のおばさん、二盆おくれ——」

呶鳴っておいてから、軒先の馬うまつな繋ぎに牛をつなぐ。

「わたしは喰べませんよ」

「どうしてさ」

「そんなに喰べてばかりいると、人間が莫迦ばかになりますから」

「じゃあ、お通さんのと、二盆喰べてしまうぜ」

「——まあ、呆れた子」

なんといわれようが、喰べているうちは、耳のないような城太郎の姿である。

がらにもない大きな木剣が、かが屈みこむとあばら肋骨にさわ触つて、よろこ欣ぼうとする官能の邪魔になる気がするのであろう、中途から、その木剣をぐるりと背中へ廻して、一度、むしやむしややりながら往来へ眼を遊ばせた。

「はやく喰べてしまいませんか。よそ見などしていいないで」

「……おや？」

城太郎は、盆に残っている一つを、あわてて口へほう抛りこむと、

なにを見たか、往来へ駈け出して、小手をかざした。

「もういいんですか」

ちようもく

鳥 目をおいて、お通も後から出て来ようとすると、城太郎は彼女を床しょうぎ几へ押しもどして、

「待ちなよ」

「まだなにかねだるつもり？」

「今、彼方むこうへ、又八が行ったからさ」

「嘘」

お通は信じない。

「——こんな所を、あの人が通るわけがないではありませんか」

「ないかあるか知らないけれども、たった今、彼方むこうへ行ったもの。

編笠をかぶっていたぜ。そして、お通さんは気がつかなかったかい。おいらとお通さんをじつと見てたよ」

「……ほんとに」

「嘘なら呼んで来ようか」

——飛んでもないことである。又八という名を聞いただけでも、彼女はまた、元の病人へ帰ったように、顔の血がさつと退ひいていく程ではないか。

「いいよ、いいよ、心配しないでも、もし何かして来たら、先へ歩いている武蔵様のとこへ駈けて行って、呼んで来るから」

その又八を怖れて、いつまでもここにいれば、自分たちより何町か先へ歩いている武蔵とも、自然かけ離れてしまうことになる

う。

お通は、再び牛の背に腰かけた。まだ、病後の体は決してほんとはではない。ふと、今のようなことを聞いても、動悸がなかなかしずまらない。

「ね？ お通さん。おいらには、ふしぎでならないよ」

ふいに城太郎はこういつて、彼女の褪あせた唇を、思い遣りなく、牛の前から振り仰いだ。

「——何がふしぎかっていえばさ、馬籠峠まごめとうげの滝つぼの上までは、お師匠さんも口をきき、お通さんも口をきき、仲よく三人づれで来たのに、あれからこつち、ちつとも口をきかないじゃないか」

お通が答えないので、彼はまた、

「どうしてなのさ、え？ お通さん。——道も離れて歩くし、晩もちがった部屋に寝るし……喧嘩でもしたのかい？」

三

——またよけいなことを訊く。

喰べ物のことをいわなくなつたと思うと、今度はませた口で休みなくお喋しゃべりなのだ。それもよいが、お通と武蔵との仲を、とやかくと穿うがつてみたり、探つてみたり、からかつてみたりする。

(子供のくせに)

と、お通は、胸いたに傷いところであるだけに、真面目に答える気

にはなれない。

こうして牛の背をかりて旅の出来るほどには、体のぐあいも癒よくなつては来たが、彼女の病やまい以上の問題は、決してまだ解決はしていない。

あの馬籠峠まごめの——女滝めたきと男滝おたきの滝津瀬たきつせには、まだあの時の、自分の泣き声と、武蔵の怒った声が、どうしようと、淙そう々と咽むせび合つて、そのまま二人の喰い違つた気持ちを百年も千年も、この心が解けあわぬうちは、怨みに残していることであろう。

思うたびに、今でもそれが彼女の耳よみがえへ甦よみがえつてくる。

(なぜ私は?)

と彼女はあの折に、武蔵が自分へ迫つて求めた烈しいそして率

直な欲望を、自分もまた、満身の力で拒こばんでしまったことを、幾たびも、

(なぜか? なぜか?)

と心の中で悔いてみたり、分ろうとする努力をしてみたり、頭から離れぬものとなっているが、果ては、

(男というものは、誰でもあんなことを、女に強しいるものなのかしら?)

と、悲しくなり、浅ましくなり、年久しく独り抱き秘めていた恋の聖泉は、この旅先の女滝男滝の山を越えてから、その滝水のように狂おしく烈しく胸を揺りつづけるものと変っていた。

そして、もっと彼女自身、分らなくなっていることは、武蔵の

強い抱擁を交^かわして逃げたくせに、その後の旅でも、こうして武蔵の姿を絶えず見失うまいとしながら、後に尾^ついて行く矛盾^{むじゆん}であつた。

勿論、あれからというものは、変に気まずくなつて、お互いに口も滅多にきかないし、道中も並んでは歩かない。

しかし先へ行く武蔵の足も、後から来る牛の歩みに合せて、初めの約束の如く、江戸表まで共に出ようといった言葉を破棄してしまう考えはないらしく、城太郎のため時々道草をして遅くなつても、何処かで必ず待つていてくれた。

五町七辻の福島を出端^{でははず}れると、興禪寺^{こうぜんじ}の曲り角から登りになつて、彼方^{かなた}に関所の柵^{さく}が見える。関ヶ原^{いぐさ}の戦^{いくさ}から後は、牢人調べ

や女の通行がやかましいと聞いていたが、烏丸家からもらつて来た手形がものをいって、ここも難なく通り、両側の関所茶屋から眺められながら牛に揺られて来ると、

「ふげんて、なんだろう。——お通さん、ふげんて何のこつたい？」

と、城太郎がいきなり訊ねだした。

「今ネ。あそこの茶屋に休んでいた坊さんだの旅の者が、お通さんを指して、そういつたんだよ。——牛に乗ったふげんみたいじやのう……つてね」

「普賢菩薩ふげんぼさつのことでしょう」

「普賢菩薩のことか。じゃあおいらは、もんじゆ文殊様だ。普賢菩薩と

文殊菩薩は、どこでも並んでいるからね」

「食いしん坊の文殊様ですか」

「泣き虫の普賢様となら、ちようど似合うだろう」

「また！」

とお通が、嫌がつて顔を紅あからめると、

「文殊と普賢菩薩は、どうしてあんなに並んでるんだろう。男と女でもないくせに」

と、奇問を発する。

お寺で育ったお通であるから、それについてなら、説明はできるが、城太郎の執拗な反復を惧おそれて、ただ手短たかに、

「文殊は知慧を現し、普賢は行ぎよう願がんを現している仏様です」

といった時、いつのまにか何処からか、蠅はえのように牛の尻尾へついて来た一人の男が、

「おいつ」

と、尖とがった声で呼び止めた。

さつき福島で、城太郎がちらと見かけたという、本位田又八であつた。

四

そこらで待ちうけていたものに違いない。

——卑劣な男。

お通は彼の顔を見るや、すぐこみあげてくる侮蔑ぶべつの念を、どうしようもない。

「……………」

又八は又八で、彼女のすがたを見ると、愛憎こもごも、血を駆け巡めぐって、おのずから眉間みけんに感情の錐きりが立ち、まったく常識というものを欠いてしまう。

まして彼は、武蔵とお通が、京都を出てから連れ立っていた姿を見ている。その後、口もきかずよそよそしく歩いているのも、ひつきよう畢は竟ば、昼間だけ人目を憚はばつかているに過ぎないものと見ていた。それだけに人目のない二人だけの時にはどんなに——と瞋しん恚いの炎ほむらに燃えて邪推もされる。

「降りろ」

命じるように、彼は、牛の背に俯向うつむいているお通へやがていつた。

「……………」

お通には答える言葉もない。疾とうに心からない人なのだ。いやもう数年も前に、先の方から許いいなずけ嫁よめという未来の日を破棄したあげく、先頃、京都の清水寺の谷間では、刃やいばを持って自分を追い、危うく殺されかけた程、怖ろしい目に会わせられた人間。

答えるならば、

(今になって何の用が——)

という以外、挨拶がないではないかと、黙っている眼のうちに、

いよいよ、彼に対する憎悪と蔑さげすみが漲みなぎってくる。

「おいつ、降りないか！」

又八は、二度さげんだ。

この息子も、あのお杉婆という母親も、村にいた頃からの口ぐせを未だに持って、もう許嫁でもなんでもない彼女へ、権ぺいに吩咐いいつがましくいうことが、今のお通には、謂いわなく思われて、憤むつと反感をあらわれてならない。

「なんでございますか。わたくしには降りる用はございませんが」
「なに」

又八は、側へ来て、その袂たもとをつかみ、

「なんでもいいから降りろつ。お前にはなくても、俺には用があ

るのだ」

声で脅すように、往来の見得もなく、そう呶鳴った。

——と、それまでは、黙って見ていた城太郎が、牛の手綱を捨てて不意に、

「嫌だつていうもの、無理じゃないか！」

又八に負けない声を出していっただけならよいが、手を出して、相手の胸いたを突いたから納まらない。

「おやつ——此奴こいつ」

又八は、踏み躓よろめいた足を、草履の緒へかけ直すと、尻込みする城太郎へ、物々しい肩を昂あげて、

「なんだか、見たような鼻くそだと思つたら、てめえは北野の酒

屋にいた小僧ツ子だな」

「大きなお世話だ。自分こそあの頃は、よもぎの寮のお甲つていうおかみさんに、いつも叱られて、小^ちつちやくなっていたくせに」
これは又八に取つて何をいわれるより痛かつたに違いない。ましてお通をそこにおいてはである。

「このチビ」

掴^{つか}みかかると、城太郎はすばやく、牛の鼻先から向う側へ逃げ廻^{まわ}つて、

「おいらが鼻くそなら、自分なんか何だい。鼻の下の長い洩^{はな}たれだろう」

もう勘弁ならぬという顔を示して、又八が近づくと、城太郎は

牛を楯にして、二、三度、お通の下をぐるぐると逃げ廻ったが、とうとう襟がみをつかまれてしまい、

「さあ、もう一遍いつてみる」

「いうともツ」

長い木剣を半分まで引き抜いた時、彼の体は、並木の外の藪へ、
猫みたいに抛り飛ばされていた。

五

藪の下は、畦あぜの小川であつた。城太郎は泥鰌どじょうのようになって、元の並木へ這いあがつた。

「……おやツ？」

往來を見廻すと、牛は、お通を背に乗せたまま、重い体を揺さ振^ぶつて、彼方へ駈出しているではないか。

その手綱を引つ張りながら、手綱の一端をムチに打ち振り、共に砂を上げて、駈けてゆく影は、又八に相違ない。

「ちつ、畜生」

彼の血は、それを見るや、一時に頭へのぼって、自分の責任感と小さい力のみを奮い起し、急を他へ告げて、はやく策をとることを忘れてしまった。

動いているのであろうが、白い雲の帯は、動いているとも目に

は見えない。

うんぴよう
雲 表

にある駒ヶ岳は、その広い裾すその一つの波ともいえる丘に足を休めている一人の旅人へ、何か無言のことばをかけているように、鮮やかに仰がれた。

(はて。おれは何を考えていたろう?)

武蔵はふと、われに返つて、わが身を見直した。

眼は山を見ながら、心はそこになく、お通のことばかりがつき纏まとう。

彼には解けないのだ。

いくら考えてみても、処女おとめごろの真まの相すがたがわからない。

やがては、腹が立ってしまったのだ。なぜ彼女へ率直に迫つ

たことがいけないか。その火を自分の胸から呼び出したのは彼女ではないか。自分は、自分の情熱の相をそのまま彼女に見せた。すると彼女の手は、案に相違して自分を刎ね退け、自分を見下げ果てたもののように、身を躲してしまつた。

あの子の慚愧、恥ずかしさ、遣り場もない苦い男の氣持。それを滝つぼに投げこんで、心の垢を洗い上げたつもりであつたが、日が経つに従い、またどうにもならない迷妄がわいてくる。幾度か、自分の愚を嘲つて、

(女など、振り切つて、なぜ先へ行つてしまわぬか！)

武蔵は、自己に命じてみたが、それはただ、おろかな自分に、
言い訳の虚飾をつけてみるに過ぎない。

江戸表に出て、貴女あなたは好きな道を習え、自分も志す所へ邁進して——と、暗に未来の誓いを与えて、こうして京都から立って来たについては、十分自分にも、責任がある。途中で振り捨てては行かれるものではないと思う。

(——どうなるのだ、こうして二人は。おれの剣は！)

山を仰いで、彼は唇を噛んでいた。余りにも小さい自分が恥じられてくる。そうして、駒ヶ岳むかと対い合っていることさえ苦しくなってくる。

「まだ来ない」

たま耐りかねて、ぬつと立った。

それは、もう疾とうに、後から見えて来なければならぬはずの、

お通と城太郎へいった^{つぶや}眩きである。

今夜は藪^{やぶ}原^{はら}で泊るといつてあるのに、宮腰の宿場もまだ遙かてまえなのに、すでに陽は暮れかけているではないか。

ここの丘から見ていると、十町も先の森まで、一瞬^{ほん}に街道は見渡されるが、それらしい人影はいつまでも見出せない。

「はてな？ …… 関所でなにか暇どつているのだろうか」

捨てて行こうかとすら惑いながら、その影が、うしろに見えなくなれば、武蔵はすぐ心配になって、一步も先へは出られなかった。

その低い丘から彼は駈け降りた。この地方に多い放し飼いの野馬が、彼の影に愕^{おどろ}いたもののように、薄陽の原を八方へ逃げて

飛ぶ。

「もしもし、お侍さま。あなたは牛へ乗った女子衆おなごしゆうの、お連れ様じゃございませんか」

彼が、街道へ出るとすぐ、往来の一人が、そういいながら側へ寄つて来た。

「えつ、その者に、なにか間違いでもござつたか」

先のことばを聞かないうちに、虫の知らせか、武蔵は早口に問い返した。

きそかんじや
木曾冠者

さつき関所茶屋から程遠からぬ場所、本位田又八が、お通の牛に鞭打つて、彼女ぐるみ、何処かへ攫つて行つたということは、目撃していた旅人の口から伝わって、もうこの街道筋では、隠れもない噂ばなしにのぼっている。

丘にいたため、それを知らずにいたのはかえって武蔵一人であつた。

その武蔵は今、倉皇と、もと来た道の方へ駆け戻つて行つたが、すでに事件が伝わってから半刻ほど経た後のことである。

——もし彼女の身に何らかの危急が襲つたとすれば、間に合う

かどうか。

「亭主、亭主」

関所の柵さくは、六刻むつで閉まる。それと一緒に、床几しょうぎをたたんでいた茶店のおやじは、後ろに立って、こゝろ喘あえぎ声でよぶ人影に、
「なにかお忘れ物でも？」

と、ふりかえった。

「いや、半刻はんときほど前に、ここを通った女子おなごと少年を探しておるのだが」

「ああ、牛に乗った普賢ふげんさま様のようなお女中でございましたな」
「それだ。その二人を、牢人ろうにん体の男が、無体むたいに連れ去ったというが、その行く先を知るまいか」

「見ていたわけではございませぬが、往来の噂では、この店の首塚のある所から横道へ曲つて、野婦のぶのいけ之池の方へ、どんどん駈けて行つたと申しますが」

その指さす薄暮の中へ、武蔵の影はもう宙を飛んで淡うすれて行く。
途々みちみち、聞きあつめた噂を綜合してみても、なんのために、何者が、彼女を拉らっして行つたのか、見当がつかない。

その下手人が又八であるなどは、彼には想像もできなかつた。いづれこの道中で後から追いついて来るか、江戸表で落合うかすることにはなっているが、いつぞや叡山えいざんの無動寺から峰越えして大津へかかる途中の峠茶屋で五年越しの誤解を解き、お互いが幼友達おさなの昔に返つて、

(きょうまでのことは水に流して)

と手を握り、

(貴様も真面目になって、希望を持って)

と武蔵が励ませば、又八も目に涙すらたたえて、

(勉強する。きつと真人間になって遣り直すから、おれを弟とも

思つて、これからは導いてくれ)

と、あれほど欣んでいった又八。

その又八が? —— などとどうして疑われようか。

疑えば、戦後の各地に、職を求めながら職にも就けず、結局、

浮浪の徒とよばれている牢人の中のよからぬ者か。或は、世の中

の推移にかかわらず世間の抜け目ばかり窺うかがっているゴマの灰とか、

人買とかいひ、道中荒らしの鼠賊か。さもなければ、剽悍ひようかんなるこの地方の野武士か。

武蔵としては、そんなふうにしかな下手人を考えられなかったが、それとて闇をつかむようなもので、野婦之池のぶのいけの方角というだけを目あてに急いでみたが、陽が暮れると、冴え切った星空に反して、地上の暗さは、一尺先の足元も覚おぼつかない。

第一、野婦之池とか聞いたが、その池らしい所へもなかなか出て来なかつた。そして田も畑も森も、ゆるい傾斜に乗つて、道も少しずつ登り気味なのを考えると、すでに駒ヶ岳すそのの裾野を踏んでいるらしいが——と武蔵は立ち迷い、

「道を間違えたな？」

と、思った。

行く手を見失ったように——そうして広い闇を見まわしている
と、駒ヶ岳の巨大な壁を負つて、一ひとむら叢の防風林に囲まれた農家
から、なにか外で焚たいている明りか、竈かまどの火か、ぼうと赤い光が
木立ちの垣に映さして見えた。

近づいて、その地内を覗いて見ると、武蔵にも見覚えのある
斑まだらめうしの牝牛が——ただしお通のすがたはどこにも見えないが——そ
の牛だけは健在に、明りの映さしている百姓家の厨くりやの外に繋がれて、
無事に啼いているではないか。

「……お？ あの斑牛ぶちだが」

ほつとして武蔵は胸をなで下ろした。

この家やに、お通の乗っていた牛が繋がれているからには、お通の身も、共にここへ連れ込まれていることはもう疑う余地もあるまい。

だが。

この防風林の中の百姓家はいったい何者の住居すまいか。——不覚に踏み込んで、再度、お通を隠されるようなことになってはならないと、同時に、武蔵は戒心する。

で、しばらくの間、影を密ひそめて、中の様子を窺のぞっていると、

「おつ母かあ、いいかげんにもう止めんかい。眼がわるい眼が悪いといいながら、そんな暗れえとこでいつまで、仕事してるだ」
薪まきや糲もみ殻がらの散らかっている隅の暗がりから、途方もない大声でいう者がある。

次の気配に耳を澄ましていると赤々と火の影の揺れているのは、厨くりやの次の炉ろ部べ屋やで、その部屋か、次の破れ障子の閉まっている辺りで、微かに、糸をつむぐ糸車の音がする。

しかし、すぐその音が止んだのは、おつ母かあと今呼んだ怖ろしく威張った息子のいうことを聞いて、すぐ仕事を片づけているものと思われた。

隅の小屋で、なにか働いていた息子は、やがてそこを閉めなが

らまた、

「今、足を洗うからすぐ飯が喰えるようにしといてくれえ、いいかあおつ母」かあ

草履を持って、厨くりやのそばを流れている溝みぞぎわの石に腰かけ、二度足をぎぶぎぶやっている、その肩へ、斑まだらの牝牛めうしがのっそりした顔をつき出した。

息子は牝牛の鼻づらを撫でながら、いつこう返辞もない母屋の人へ向つてまた大きな声でいう。

「おつ母」かあ、後で手があいたら、ちよつとここへ来て見さつしやい。おらあ今日、飛んでもねえ拾い物をして来たぜよ。——何だと思う？ 分るめえが、牛だよ、しかもすばらしい牝牛だ。畑にも使

えるし、乳も搾とれる」

その言葉も、外に佇たたずんでいた武蔵が、よく耳に入れて、その人間の何者かをもっと見届けていたら、後の間違ひもなかったであろうに——生あいにく憎と彼はもうあらかたの空気を察して、この木立ち囲いの一軒の入口を求め、家の横へ迫っていた。

農家としては、かなり広そうだし、壁造りを見ても、旧家の間違ひないが、小作もない女気もない、藁わら屋根も苔こけに朽ちながら、その屋根葺やねふきの手も乏しい無人の家らしく思われた。

「……?」

明いている横の小窓。その小窓の下の石を踏み台にして、武蔵は、母屋の内をまずそつと覗のぞいてみた。

なにより先に、彼の眼を射たのは、黒い長押ながしに掛かつている一筋の薙なぎ刀なただった。めつたに民間にあつていい品物ではない。尠なくも、一かどの武将が手艶てんにかけた業物わざもので、鞆たもとの揉皮もみかわには金紋はくの箔おぼすら朧おぼろに残つて見える。

——さては。

と、武蔵は思い合せて、よけいに疑いを深くした。

さつき、隅の小屋から足を洗いに飛び出した若い男の面つらがまえは、ちらと火影ほかげに見ただけであるが、到底、凡者ただものの眼まなざしではなかつた。

腰きりの野良着に、泥まみれな脚絆きやはんを穿はき、一本の野差刀のざしを腰にぶちこんでいるが、丸っこい顔に、そそけ立つ髪の毛を、眼

尻あがりに藁でつかね、背は五尺五寸に足るまいが、胸の肉づき
 といい、足腰のよく地にすわっている動きといい、一見、

(こいつ曲者くせもの)

と感じないでいられないものを武蔵は先に見ていたのである。

案のじよう、母屋には、百姓の持つべきでない薙なぎ刀なたなどがあ

る。そして、藁いを敷いた床に人も見えぬ、ただ大きな炉の中に、
 ばちばちと松まつ薪まきが燃え、その煙は、一つの窓からむうつと外へ
 吐き出されてくる。

「……あつ」

武蔵は、袂たもとで口をおおったが、忽ち咽むせんで、怵こらえようとする程

——咳せきをしてしまった。

「誰じゃ？」

厨くりやの中で、老婆の声が出た。武蔵が窓の下にかがみ込んでいると、炉部屋にはいつて来たらしく、再びそこで、

「権之助っ。——小屋は閉めたか。また、栗あわ泥棒がそこらへ来て、くさめをしておるぞよ」

三

——来たら幸い。

まずあの猪ししおとこ男を手捕りにして、お通をどこに隠したか詮議

はそれからのことにしよう。

老婆の息子らしい勇猛そうなその男のほかにも、いざとなれば、まだ二、三名の敵は飛び出すかも知れないが、彼さえ取ツちめれば、物の数ではない。

武蔵は母屋の中の老婆が、権之助権之助と呼び立てると共に、小窓の下を離れて、この家を囲む立木の一部に身を隠していた。するとやがて、

「どこにつ？」

と、権之助とよばれた息子は、裏から大股に素ツ飛んで来て、もいちど其処そこで、

「おつ母かあ、なにがいたんだ？」

と呶鳴つて訊く。

小窓に、老婆の影が立つて、

「その辺で、今咳しわぶき声が聞えたがの」

「耳のせいじゃないか。おつ母はこの頃、眼も悪くなつたし、耳もとんと遠くなつたからなあ」

「そうでない。誰か、窓から家の内を覗き見していたに違いない。煙むに咽むせた声じやつた」

「ふうん……?」

権之助は、十歩二十歩、その辺を、あたかも城郭でも見廻るよ
うに歩いて、

「そういえば、何だか、人間臭いぞ
と、眩つぶやいた。」

武蔵が迂濶うかつに出なかつた理わけは、闇に光る権之助の眼の実にらんと害意に燃えているためであつた。

それと、足のつま先から胸いたにかけて、ちよつと当り難い構えを備えているので、それも不審に思い、何を持つていいのか得え物を確かめるつもりで、彼の歩みまわる影を凝視していると、右の手裡てうらから小脇を後ろに抜け、約四尺ばかりの丸棒をしのばせていることが分つた。

その棒も、そこらの麵棒めんぼうやしん張棒はりぼうを、有り合うまま、引つ抱えて来たものとは違い、一種の武器としての光を持つている。——のみならず、棒と、棒を持つ人間とが、武蔵から見ると、まったく二つにして一つのものとなっている。いかにこの男が、常

にその棒と共に暮しているかが分るほどなのだ。

「やつ、誰奴どいつだツ？」

ふいに棒は風を呼んで、権之助の背から前へ伸びた。武蔵はその唸りに吹かれたように、棒の先から、やや斜めに、身を移して立った。

「連れ人を引取りに来た」

——相手が、自分を睨ねめすえたまま黙っているので、

「街道からこれへ誘かどわか拐かして来た女子おなごと童わらべを返せ。——もし無事に戻して詫わびるならば免まじておくが、怪我などさせてあつたら承知せぬぞ」

と、重ねていった。

この辺の塀といつてもよい駒ヶ岳の雪溪から、里とはひどく温度の差のある冷たい風が、星の下を、時折そよそよ忍んでくる。

「——渡セツ。連れて来いッ」

三度めである。

武蔵がその雪風よりも鋭い声で斬るようにいうと、逆手さかてに棒を握つて、喰い付くような眼をすえていた権之助の髪の毛が、針ねずみのように、颯さつと立つた。

「この馬糞まぐそめ！ おれを誘拐かどわかしたと？」

「おう、連れもない、女童おんちべと見くびつて、これへ誘拐して来たに違いあるまい。——出せつ、隠した者を」

「な、なんだとッ」

権之助の体から突然、四尺余の棒が噴いて出た。——棒が手か、手が棒か、その迅いはやことは眼にもとまらない。

四

武蔵は避けるより仕方がなかった。驚くべきこの男の練磨わざと技の体力を前にしては。

で、一応、

「おのれ、後のちに悔ゆるな」

警告を与えておいて、自分は数歩跳とび退のいたが、不可思議な棒の使い手は、

「なにを、洒落くせえ」

と喚わめきながら、決して一瞬の仮借かしゃくもするのではなかった。十歩退のけば十歩迫り、五歩躲かわせば五歩寄つてくる。

武蔵は相手から跳び開く間髪ごとに、二度ほど、刀の柄へ手をやりかけたが、その二度とも、非常な危険を感じて、遂に、抜き放いとまつ違すらもない。

なぜならば、手を柄にかける一瞬でも、敵の前に肘ひじを曝さらす隙となるからである。敵によつて、そんな危険は感じない場合と、戒心する場合があるが、当面の相手が振りこんで来る棒の唸りは、武蔵が心で用意する行動の神経よりは遙かに迅速で、それへ無謀な勇をむりに奮ふるつて、

(この土民めが何者ぞ)

と、敢て誇れば、当然、棒の一撃にのめるであろうし、焦心あせりを持つだけでも、呼吸にうける圧迫から、身体のみだれをどうしようもなくなってしまう。

それにまた、もう一つ武蔵を自重させた理由は、相手の権之助なる人間が、一体何者か、咄嗟に、見当がつかなくなったことである。

彼の振る棒には、一定の法則があるし、彼の踏む足といい、五体のどこといい、武蔵から見て、これは立派な金剛不壊こんごうふえの体をなしている。かつて出会った幾多の達人中にも考え出されないほど、この泥くさい田夫でんぷの体の爪の先までが、武術の「道」にかない、

そして武蔵も求めてやまない、その道の精神力に光っているのだ
つた。

——こう説明してくると武蔵にも権之助にも、お互いが敵を観
る間まを持つて悠悠構えているように思われるであらうが、事實は
寸秒に次ぐ寸秒で、わけでも権之助の棒は、眼まばたきする間も停
止していない。

——おおうつ。

と、満身から息をしたり、

——えおおうツ！

と、躡かかとを蹴つて来たり、また、りゆうりゆうと棒の攻撃を改め
てかかり直して来るたびに、

「この、どたぐそ」

とか、

「かったい坊め」

とか、口汚い方言で悪たれつきながら、打ちこんで来るのであった。

いや、棒に限っては、打ち込むという言葉は当らない。——それは打ち込みもするし、薙なぎもするし、突まきもするし、旋まわしもするし、片手でも使うし、両手でも使う。

また、太刀は切きつ先さきと、柄の部分とが、はつきり分れていて、その一方しか活用できないが、棒は両端が切先ともなり、穂先ともなって、それを自由自在に使いわけける権之助の練磨は、飴屋あめやが

飴をのぼすように、長くもし、短くもするのではないかと眼に怪しまれる程だった。

「権ごんつ。気をつけいよ、その相手は、凡ただもの者でないぞ！」

不意に、その時、母屋の窓から、彼の老母がこう叫んだ。――

武蔵が敵に感じていることを、老母も息子の身になって、同じように感じているのであった。

「でえじようぶだよつ、おかあつ母！」

権は、すぐ横の小窓から、母が案じながら見ていることを知つて、その勇猛に拍車をかけたが、一颯さつのうなりを肩越かわしに躲かしてはいつて来た武蔵の体が、権の小手をつかんだと思うと、巨おおきな石でも降おろしたように、ずしんと地ひびきして権は背中で大地を

打ち、足は高く星の空を蹴っていた。

「待たツしやい！ 牢人」

わが子の一命が今や危うしと思つたか、小窓に縫すがつていた老母は、その竹格子を突き破つて、凄まじい一声を武蔵に浴びせ、その血相は、武蔵の次の行動に思わずためらいを与えた。

五

その時、老母の髪の毛が逆立って見えたのは、肉親として、さもある筈のところであろう。

息子の権が投げられたことは、この老母には、非常な意外であ

つたらしい。——投げつけた武蔵の手は当然、次の咄嗟とつさには、匆はね起きる権之助の真つ向へ、抜打ちに一太刀行くべきであつた。だが、そうではなくて、

「おう、待つてやる」

武蔵は、権之助の胸へ馬のりになり、なお、棒を離さない右の手頸てくびを足で踏みつけたまま老母の顔の見た小窓を振り仰いだ。

「……？」

はツと、武蔵はしかしすぐ眼を反そらした。

なぜならば、老母の顔は、もうその窓に見えなかつたからである。——組み伏せられながらも権之助は、絶えず武蔵の手を外はずそうともがいているし、武蔵の制圧も届かない彼の二本の脚は、空くう

を蹴ったり、地へ突つ張ったり、その腰車の脚あしわざ技のあらゆる努力をあげて、敗地を挽回ばんかいしようとしているのだった。

それも決して、油断はできない上に、窓から消えた老婆の影は、すぐ厨くりやの蔵からさつと走り出て来て、敵に組み敷かれている息子のののしを罵っていることには、

「何のざまじや、この不覚者が。母が助太刀して取らず、負くるな」

——窓口から待てという言葉だったので、武蔵は必ずや老母がこれへ来て、額ひたいを地にすりつけて、わが子の助命を乞うのかと思つていたところ、案に相違して、九死一生の淵にある息子を励まし、なお戦おうというつもりらしい。

見れば、老母の小脇には、皮鞆かわざやを払った薙刀なぎなたが星明りを吸つて、後ろ隠しに持たれている。そして武蔵の背を窺うかがいながら、「ここな痩せ牢人めが、土民とあなどつて、小賢こざかしい腕立てしやつたの。ここをただの百姓家と思うてか」と、いう。

背中へ迫られることは武蔵にとって苦手であつた。組み敷いているものが生き物なので、自由に向き直るわけにゆかないのだ。権之助はまた、背中の着物も皮膚も破れるであろう程、地上を摺すりうごいて、母に有利な位置を作ろうと、敵の下から計はかっている。「なアに、こんなもの。——おつ母かあ、心配しんぺえしねえでもいい。あんまり近寄つてくれんな。今、刎ね返けえしてみせる」

呻うめきながら、権がいうと、

「焦あせ心せるでない！」

と、老母はたしなめて、

「元よりこのような野宿者に負けてよいものか。御先祖の血をふるい起せ。木曾きそどの殿のみうちの御内にも人ありと知られた太夫房かくみょう 覚あき 明あきらの血はどこへやったぞ」

すると、権之助は、

「ここに持っている！」

いいながら、首くびを擡もたげて、武蔵の膝行袴たつつけの上から、股ももの肉へ喰くいついた。

すでに棒を離して、両手も下から働きかけ、武蔵をして何の技

をする余地も与えないのだ。加うるに老母の影は、薙なぎ刀なたの光を曳いて、背中へ背中へと狙つけ廻まわつて来る。

「待てつ、老母」

遂にこんどは武蔵からそういった。争う愚が分つたからである。これ以上のことは、斬られるか、どつちかが死を受けなければ解決しない。

それまで行つても、お通が救われるとか、城太郎が助かるとかいうならよいが、その点はまだ疑いに過ぎないのである。——ともあれ一応穏やかに事情を打明けてみるのがいいのではあるまいか。

そう考えたので、武蔵はまず老母に向つて、刃やいばを退ひけというど、

老母はすぐおうとはいわないで、

「権。どうしやるか」

と、組み伏せられている息子へ、和協の申し出^いでを、容^いれるか容れないか、相談するのであつた。

六

炉^ろの松薪^{まつまき}はちようど燃え旺^{さか}つていた。この家^やの母子^{おやこ}が、そこへ武蔵^{ともな}を伴^{ともな}つて来たことは、やがてあれから、話し合つた末、双方の誤解が溶けたものであろう。

「やれやれ、危ないことではあつた。とんだ行き違いからあのよ

うな——」

さも、ほつとしたように、老母はそこへ膝を折つたが、共に坐りかけた息子を抑えて、

「これ権之助」

「おい」

「坐らぬうち、そのお侍をご案内して、念のために、この家の内くまを隈なくお見せ申したがよい。——今外で、お訊ねをうけた女子おなごや童わらべが隠してないことを、よう見届けて戴くために」

「そうだ、おれが街道から、女など誘かどわか拐かして来たかと、疑われているのも残念。——お武家、おれに尾ついて、この家のどこでも改めてもらおう」

上がれ——と招ぜられたまま、武蔵はわらじを解いて、もう炉の前に席を占めていたが、母子の者の共々なことばに、

「いやもう、ご潔白は分りました。お疑い申した罪は、ご勘弁ねがいたい」

詫び入るので、権之助も間が悪くなつて、

「おれも良くなかつた。もつとそつちの用向きを糺ただした上で怒ればよかつたのだが」

と、炉べりへ寄つて、あぐらを組む。

だが武蔵としては、こう打解けたところで訊ねたい疑問がまだある。それは先刻さつき、外から見届けておいた斑まだらの牝牛めうしで、あれは自分えいざんが叡山えいざんから曳いて来て、途中から病弱なお通のため道中の乗

物に与えて、城太郎に、確しかとその手綱を預けておいたものである。

その牝牛が、どうして、この家の裏やに繋がれているのか？

「いや、そんな理わけなら、おれを疑ぐつたのもむりはねえ」

権之助はそれに答えている。——実は自分はこの辺に田を少しばかり持って百姓をしている者だが、夕方、野婦のぶのいけ之池から鮒ふなを網に打って帰つて来ると、池尻の川に一頭の牝牛が足を突つこんで躓もがいている。

沼がふかいので、もがく程、牛は沼にすべにり込み、その囷ウ体を持てあまして、哀れな啼き声をあげている様子。引き上げてやつて見ると、まだ乳ぶさも若い牝牛であるし、辺りをたずねても飼主の姿はみえぬし、てつきりこれは何処からか盗み出して来た野

盗が持ち扱って、捨てて行ったものに違いあるまい——と独りぎめにきめてしまった。

「牛一匹あれば、ヘタな人間の半人前は野良仕事をするので、これはおれが貧乏で、おつ母かあにろくな孝養もできねえから、天が授けてくれたものと——あはははは良い気になって曳っぱって来ただけのものさ。飼主が分っちゃ仕方がねえ、牛はいつでも返すよ。だが、お通とか城太郎とか、そんな人間のこと、おらあ一切知らねえぞ」

話が分つてみると、権之助なるこの若者は、いかにも粗朴な田舎漢なかもので、最初の間違ひは、その率直な美点からむしろ起つたものといえる。

「じゃが旅のお侍、さだめしそれは心配なことでござろう」

と老母はまた老母らしく側から案じて、息子にいう。

「権之助、はよう晩飯を掻つこんで、その気の毒なお連れを一緒に探してあげい。野婦之池あたりにうろついでいてくれればよいが、駒ヶ岳のふところへでもはいりこんだら、もう他国者の衆よそもものに知れることじゃない。——あの山には、馬や野菜物さえのべつ攫さらつてゆく野伏のふせりが、たと巢しわざを喰うているそうな。おおかたそんな無頼者ならずものの仕業しわざであらうが」

七

ぶすぶすと、たいまつ松明の先つぽに風が燃える。

おお巨きな山岳の裾は、風が来たと思うと、ぐわうと草木もふき捲いて、ひととき凄い一瞬の鳴りを起すが、止んだとなると、ハタと息をひそめて、不気味なほど静かな星のまたたきばかりとなる。

「旅の者」

権之助は、手に持つ松明を挙げて後から来る武蔵を待ちながら

「気の毒だが、どうしても知れねえのう。これから野婦之池までゆく途中、もう一軒、あの丘の雑木林のうしろに、りょう猟をしたり、百姓したりしている家があるが、そこで訊いても知れなければ、もう探しようがねえというもんだが」

「ご親切に、かたじけな辱い。これまで十数軒を訊き歩いて、なんの手懸りもなければ、これは拙者が方角ちがいへ来ているのであろう」
「そうかも知れねえ。女を誘かどわか拐す悪党などというものは、悪智恵に長たけているから、滅多に追いつかれるような方角へ逃げる筈はねえ」

もう夜半よなかを過ぎていた。

駒ヶ岳の裾野——野婦村のぶむら、樋口村、その附近の丘や林など、宵からおよそ歩き尽くしたといつてもいい。

せめて、城太郎の消息でも知れそうなものだが、誰一人、そんな者を見かけたという者もない。

わけてお通の姿には特徴があるから、見た者があればすぐ知れ

るわけだが、どこで訊いても、

「はてねえ？」

と、氣永に首をかしげる土民ばかりであつた。

武蔵は、その二人の安否に胸を傷めると共に、縁もゆかりもないのに、この労苦を俱ともにしてくれる権之助にすまない気がしてくる。明日も野良へ出て働かなければならない体だろうにと思う。

「とんだ迷惑をおかけ申したのう。そのもう一軒を尋ねてみて、それでも知れぬとあれば、ぜひがない、諦あきらめて戻るといたそう」

「歩くぐれいなこと、夜どおし歩いた所で、何のこともねえが、

いつたいその女子おなごと童わらわというのは、お武家の召使か、それとも姉きようだい

弟あせたちかね」

「されば——」

まさか、その女性おんなの方は恋人で、子供は弟子とも、答えられないので、

「身寄りの者です」

と、いうと、そういう肉親の少ない身を淋しく考え出してでもいるのか、権之助は無口になって、ひたすら野婦之池へ出るという雑木の丘の細道を先に歩いて行く。

武蔵は今、お通と城太郎を案じる気持で、胸もいっぱいになっていたが、その中にも心のうちでは、この機縁を作ってくれた運命の悪戯いたずらに——たとえば悪戯であろうと感謝せずにはいられなかった。

もしお通にその災難がかかって来なかつたら、自分は、この権之助に会う機会はなかつたろう。そしてあの棒の秘術も見る折がなかつたに相違ない。

流転の中で、お通と行きはぐれてしまったことは、彼女の生命につつがない限り、やむを得ない災難と思うしかないが、もしこの世において、権之助の棒術に出会わずにしまつたら、武芸の道に生涯する自分として、大なる不幸であつたろうと思う。

——で、折もあらば、彼の素姓を問い、その棒術についても深くただ糺さつしてみたいと先刻さつきから考えていたが、武道のことと思うと、不ぶしつけに訊きかねて、つい折もなく歩きつづけていると、

「旅の者、そこに待っている。——あの家だが、もう寝ているに

きまつているから、おれが起して訊いて来てやる」

木々の中に沈んで見える一軒の藁屋根を指さすと、権之助はひとり、そこらの崖がけ藪やぶを掻きわけ、がさがさと駈け降りて、その戸を叩いていた。

八

程なく戻つて来た権之助が、武蔵へ向つて告げることには。

どうも雲をつかむような返辞ばかり、ここに住む獵師りようしの夫婦

も、こちらの尋ね事については、さっぱり要領を得ないが、ただ内儀かみさんが夕方、買物に出た帰り途みち、街道で見かけたという話は、

ことによると一縷いちるの手懸りといえるやも知れない。

その内儀さんの話によると、もう星の白い宵の時刻ころ、旅人の影も途絶え、並木の風ばかりが淋しい道を、おいおいと泣き声あげながら、向う見ずに素ツ飛んでゆく小僧がある。

手も顔も泥まみれのままで、腰には木刀を差し、藪原やぶはらの宿場の方へ駈けて行くので、内儀さんがどうしたのかと訊いてやると、
 (代官所はどこにあるか教えておくれ)

となお泣いていう。

代官所へ何しに行くかと、根を掘って訊くと、

(連れの者が、悪者に攫さらわれて行ったから、奪とり返してもらおうんだ)

との答え。

それならば代官所へ行つてもむだなことだ。お役所という所は、誰か偉い人が旅で通るとか、上かみからのお吩咐いいつけとでもあれば、てんでこ舞して、道の馬糞ばふんを取つて砂まで撒まくが、弱い者の訴えなどに、どうして本気に耳をかして捜してなどくれるものか。

殊に、女が誘かどわか拐かどわかされたとか、追剥おいはぎにあつて裸にされたとかいう小事件は、街道筋には朝に夕にあることで、めずらしくもなるともない。

それよりは藪原の宿一つ先へ越して、奈良井まで行くとよい。町の四ツ辻だからすぐ知れる所に奈良井の大蔵だいぞうさんというて、お百草を薬にして卸おろしている問屋がある。その大蔵さんにわけを

いうて頼めば、この人はお役所と反対に、弱い者のいうことほど、親切に聞いてもくれるし、正しいことなら、人のために身銭を切つてなんでもひき受けてくれるから——

内儀かみさんの言葉をそのまま、権之助は口うつしにそこまで語つて、

「こういつてやると、その木刀を差した小僧は、泣きやんでまた、後も見ずに駈けて行つたということなんだが——もしや連れれの城太郎とかいう子供が、それじゃあるめえか」

「才、それです」

武蔵は、城太郎の姿を、見るが如く想像しながら、

「——すると、拙者が探しに来たこの方角と、まるで違つた方へ

行つたわけですな」

「それやあ、此処ここは駒ふもとの麓だし、奈良井へ行く道からは、ずっと横へ入っている」

「何かと、お世話でござつた。それでは早速、拙者もその奈良井の大蔵とかを、尋ねて参ろう。——お蔭かすで微いとぐちかながら、緒いとぐち口の解ほぐれて来た心地がする」

「どうせ途中になるから、おれの家へ寄つて、一ひとやす寝みした上で、朝飯でも喰つて立つといい」

「そう願おうか」

「その野婦之池を渡つて、池尻へ出ると、半分道で帰けえられる。今、断つておいたから、舟を借りてゆくとしよう」

そこから少し降りてゆくと、楊柳かわやなぎに囲まれた太古のような水がある。周囲ぎつと六、七町もあるうか。駒ヶ岳の影も、いちめんの星も、ありのままに、池の面おもてに泛うかんでいた。

なぜなのか、この地方にそう見えない楊柳かわやなぎが、この池の周りにだけには生い茂さっている。権之助は棹さおを持ち、その代りに、彼の手にあつた松明たいまつは武蔵が持ち、すべるように池の中央を横切つて行つた。

水の上を行く松明たいまつの火は、暗い水に映つて、一倍赤々と見え
た。——その流るる焰を、お通はその時、眼に見ていたのである。
人の世の皮肉といおうか、飽くまで薄縁な二人の仲といおうか、
場所も、そう遠くない所から。

毒齒どくし

一

水に映る火影ほかげと、小舟の中に人のかざしている火と、深夜の池
心を行く松明たいまつは、一つの光でありながら、ちようど二羽の火の
鴛鴦おしどりが泳いでゆくように遠くからは見える。

「……オオ？」

お通がそれを知った時、

「やつ、誰か来る」

と、狼狽あわてぎみに、声を出して、お通の縄尻を引つ張つたのは又八で、大それたことをやるくせに、何か事にぶつかると、臆病な持ち前はすぐ体に出してしまう。

「どうしよう？ ……そうだ、こつちへ来い。やいつ、こつちへ来やがれ」

そこは楊柳かわやなぎにつつまれている池畔ちはんの雨乞堂あまごいどうであつた。なにを祠まつつてあるか郷土の人もよく知らないが、ここで夏の早ひでりに雨を祈ると、うしろの駒ヶ岳からこの野婦之池のぶのいけへ沛然と天恵が降るといふことが信じられている。

「いやです」

お通は動くまいとする。

堂の裏手にひきすえられて、先刻さつきから又八に、責めせさいな苛まれていた彼女だった。

いまし縛められている両手がきくものならば、及ばぬまでも、突きとばしてやりたいと思うがそれも出来なかった。隙があつたら眼の前の池に飛びこんで、堂の棟に上がっている絵馬えまのように、楊柳の幹を巻いて、呪のろう男を呑まんとしている蛇身になつても——と
思うが、それも出来なかつた。

「立たねえか」

又八は、手に持っている篠しのを鞭むちにして、お通の背を、いやという程打った。

打たれる程、お通は意志が強くなる。もつと打つてみると望み

たくなる。……黙って又八の顔を睨めつけていた。すると又八は、気が挫けて、

「歩けよ、おい」

と、いい直す。

それでもお通が起たないので、今度は猛然と、片手で襟がみをつかみ、

「来いっ」

ずるずると、地を引き摺られながらお通が、池心の火へ向つて、悲鳴をあげようとする、又八はその口を手拭で縛つて、引つ担ぐように、堂の中へ抛りこんだ。

そして、木連格子きつれを抑えながら、彼方の火影がどう来るか窺うかがつ

していると、その小舟はやがて雨乞堂から二町ほど先の池尻の入江へすべ迂り込んで、たいまつ松明の火もやがてどこかへ立ち去つたらしい。

「……あ。いい按配」

ほつとして、それには胸を撫でたが、又八の気持はまだ落着きを
を得なかつた。

お通の体は今、自分の手の中にあるが、お通の心はまだ自分の物となりきれない。心のない肉体だけを持ち歩いていることの実に大変な辛勞であるということを、彼はつぶさに宵から経験した。無理に——暴力をもつても、彼女のすべてを、自分のものにしてしまおうとすると、お通は死の血相を見せるのであつた。舌をかみ切つて死のうとするのである。それくらいなことはきつとや

るお通であることは幼少から知っている又八なので、

(殺しては)

と、つい盲目な力も情慾も挫^{くじ}けてしまう。

(どうして俺をこんなに嫌い、武蔵を飽くまで慕うのだろうか。

——以前は、彼女の心のなかに、俺と武蔵はちようどあべこべであつたものを)

又八は、分らなかつた。武蔵より自分の方が、女に好かれる素質を持つているのに——という自信がどこかにある。事実彼は、お甲を始め、幾多の女に、そうした経験がある。

これはやはり武蔵が、最初にお通の心を誘惑し、手なずけてからは、折あるごとに、自分を悪くいって、お通につよい嫌悪を抱

かせるようにしたためにちがいない。

そして自分に出会えば、自分にはいかにも友情の深いようなことをいって——

（俺は、お人好しだ。武蔵に騙たばかられたのだ。その偽にせせものの友情に涙をこぼしたりなどして……）

と、彼は木連格子に倚よりかかりながら、膳所ぜの色街でさんざいわれた——佐々木小次郎の忠言を今、心のうちで呼び返していた。

二

今になって思いあたる——

あの佐々木小次郎が、自分のお人好しを嗤い、武蔵の肚ぐろいことをさんざん罵つて、

(尻の毛まで抜かれるぞ)

といった言葉。

それが今、彼の心にぴったりする忠言として、甦よみがえつて聞えて来る。

同時に、武蔵に対しての、又八の考えは一変した。これまでも、何度となく豹ひょうへん変してはまた持ち直して来た友情ではあるが、今度は今までの憎悪に輪をかけて、

「よくも俺を……」

と、心の底からわき上がる呪のろいとなつて、唇を深く噛んだ。

人を憎んだり嫉そねんだりすることは、日常、人一た倍烈しい質たちの又八であるが、呪咀じゆそするほどの強い意力は、人を恨むことにすら出た来ちない質たちの又八であつた。

けれど今度という今度こそは、武蔵に対して、七生までの仇かたきのような怨おんねん念ねんが醸かもされてしまった。彼と自分とは、同郷の友として育ちながら、どうしても、生涯の仇に生みづけられて来た悪縁かのように思われて来るのだった。

似非えせ君子くんしめ。——と思う。

そもそも、あいつが自分を見るたびに、いかにも真ましやかことに、やれ真人間になれの、発奮しろの、手を取り合つて世の中へ出ようのと、いう口吻こうふんからして、思えば面憎つらにくい限りである。

その泣き落しにのせられて、涙をこぼしたかと考えると、又八は、業腹ごうはらでたまらない。自分のお人好しを、武蔵に見すかされてほんろう翻弄されたかのように、体じゆうの血が、呪のろいと口惜しさにたぎ沸り立ってくる。

（世の中の善人なんていう者は、みんな武蔵のような君子面くんしづらした奴ばかりだ。ようし、おれはその向うに廻ってやろう。くそ勉強して、窮屈をしのんで、そんな似非者えせもののお仲間入りは真まつ平びらだ。悪人というならいえ。おれはその悪方あくがたへ廻って、一生涯、野郎の出世さまたを邪よこしまげてくれよう）

何事につけ、いつもよく出す又八の根性ではあったが、今度の場合に限っては、彼が生れて以来胸に抱いた精神力のうちの最大

のものであった。

——どんと、ひとりでのように、彼の足は、後ろの木連格子きつれを蹴とぼしていた。たった今、そこへお通を押籠めた前の彼と、外に立って腕拱うでぐみして入り直して来た彼とは、わずかな間に、へビが蛇じやになった程、変っていた。

「——ふん、泣いてやがら」

雨乞堂の中の暗い床ゆかを眺めやって、又八は、こう吐き出すように冷たくいった。

「お通」

「……………」

「やいっ。……さっきの返辞をしろ、返辞を」

「……………」

「泣いていちゃ分らねえ」

足をあげて、蹴ろうとすると、お通は早くもそれを感じて、肩をかわ躲しながら、

「あなたへする返辞などはありません。男らしく、殺すならお殺しなさい」

「ばかをいえ」鼻でわら嗤つて——

「おらあ今、肚を決めた。てめえと武蔵とが、俺の生涯を誤らせただから、おれも生涯、てめえと武蔵とに、復讐しかえししてやるのだ」

「うそをおいいなさい。あなたの生涯を間違えたのは、あなた自

身です。それから、お甲という女のひとではありませんか」

「何をいやがる」

「あなたといい、お杉ばば様といい、どうして、あなたの家のお血すじは、そう他人を逆恨みするのでしょうか」

「よけいな口をたたくな。返辞をしろといったのは、おれの家内になるか嫌か、それを一言聞けばよいのだ」

「その返辞ならば、何度でもいたします」

「おう吐ぬかせ」

「生きているあいだはおろかなこと、未来まで、わたくしの心に結んだお人の名は宮本武蔵様。そのほかに、心を寄せるお人があつてよいものでしょうか。……まして貴方あなたのような女々めめしい男、

お通は、嫌いも嫌い、身慄みぶるいの出るほど嫌いでございます」

三

これ程にいえば、どんな男でも、殺すか、諦あきらめるか、どつちかにするであろう。

お通はそういつてから、なんだか胸がすいた。そして又八に、どうされてもやむを得ないと観念していた。

「……ウウム、いったな」

又八は、体のふるえを慄こらえながら、努めて冷笑して見せようとした。

「それ程、おれが嫌いか。——はつきりしていいいや。——だ
がお通、おれもはつきりいつておくぜ。それは、てめえが嫌おう
が好こうが、俺はてめえの体を、今夜から先は、自分のものにし
てしまおうということだ」

「……？」

「なにを顫ふるえるんだ？ ……ええおい、てめえも今の言葉は、相
当な覚悟をもつていったのだろうが」

「そうです、私はお寺で育ちました。生みの親の顔すら知らない
孤みなしご児です、死ぬことなど、いつでも、そう怖いとは思っており
ません」

「冗談いうな」

又八は、傍^{そば}へしやがみ込んで、反^{そむ}向ける顔へ、意地悪く顔を持つて行きながら、

「誰が殺す？——殺してたまるものか。こうしておくのだ！」
いきなり彼は、お通の肩と左の手頸^{てくび}をかたくつかまえた。そして着物の上から——彼女の二の腕のあたりを、がぶつと、深く噛みついた。

——ひいイツ、お通は思わず悲鳴をあげた。
身を床^{ゆか}にもがいて暴れた。そして、彼の歯を挽^もぎ離そうとするほど、彼の歯の尖^{さき}を肉へ深く入れてしまった。

淋漓^{りんり}たる血しおが、小袖の下を這つて、縛られている手の指先までぽとぽと垂れてきた。

又八は、それでもなお、鰐わにのような唇くちを離さなかつた。

「……………」

お通の顔は、月明りでも受けているように、見るまに白くなつてしまった。又八はぎよツとして、唇を離し、そして彼女の顔の猿ぐつわを脱とつて、彼女の唇を調べてみた。——もしや舌でも噛み切つたのではなからうかと。

余りの痛さに、喪そうしん心したのであろう、鏡の曇りのような薄い汗が顔に浮いていたが、唇の中にはなんの異常もなかつた。

「……………おいつ、堪忍しろ。……………お通、お通」

身を揺すぶると、お通は、われにかえつたが、途端に、ふたたび体を床に転ばせて、

「痛い。……痛い。……城太きあん、城太きあん！……」
と、うつつに叫び出した。

「痛てえか」

又八は、自分も蒼白になって肩で息をつきながらいった。

「血は止まっても、齒型の痣は何年も消えることじゃねえ。おれの、その齒の痕を、人が見たら何と思う？……。武蔵が知ったら何と考えるか。……まあ当分の間、いずれ俺の物となるてめえの体に、それを手付の証印として預けておくれ。逃げるなら逃げてもいい。おれは天下に、おれの齒型のある女に触れた奴は、おれの女めがたき讐だといって歩くから」

「……………」

うつぱりちり
梁の塵を微かにこぼして、真つ暗な堂内の床には、よよと泣き
むせぶ声ばかりだった。

「……止せつ、いつまで、泣いてやがって。気が滅入めいつてしまわ
あ。もう苛いじめねえから黙れ。……うむ、水をいっぺい持って来て
やろうか」

祭壇から土器かわらけを取って、外へ出て行こうとすると、その木
連格子の外に立って、誰か、覗き見していた者がある。

四

誰か？ ——ときよつとしたが、堂の外に見えた人影は、途端

にあわてて逃げまろ転んで行く様子なので、又八は猛然と、木連格子を排おして、

「野郎っ」

と、追い駈けて出た。

捕まえてみると、この附近の土民らしく、馬の背に、穀物の俵を積み、夜を通して、塩尻しおじりの間屋まで行く途中だという。そしてなお、諄々くどくどと、

「べつに、どういう心算つもりでもなく、お堂の中に、女子おなごの泣き声が聞えたので、不審に思つて、覗のぞいてみただけでござります」と、言い訳して、平蜘蛛ひらぐものように、詫び入るだけだった。

弱い者にはどこまでも強くなれる又八であるから、忽ち、反身そりみ

になつて、

「それだけか。——それだけの考えに相違ないか」

と、まるで代官のように威張つていう。

「へい、まつたく、それだけのことで……」

と、一方が愈々《いよいよ》ふるえ顫おののくと、

「うむ、それなら勘弁してつかわそう。だが、その代りに、馬の背の俵をみんな降ろせ。そして、俵のあとへ、あのお堂の中にいる女を括くくしつけて、俺がもうよいという所まで乗せて行くのだ」

勿論、こんな無理を押しつける場合は、又八でない人間でも、必ず刀をひねくり返して見せることは忘れない。

嫌いや応おうなしの脅おどしである。お通は馬の背中へ括くくしつけられた。

又八は、竹を拾つて、馬を曳く人間を撲る鞭なぐむちとしながら、

「こら土民」

「へい」

「街道すじへ出てはならねえぞ」

「では、どこへお越しなさるのでございますか」

「なるべく、人の通らない所を通つて、江戸まで行くのだ」

「そんなことを仰つしやつても無理でございます」

「何が無理だ。裏街道を行けばいいのだ。さしずめ、中山道なかせんどうを

避よけて、伊那から甲州へ出るように歩け」

「それやあ、えらい山路で、姥神うばがみから権兵衛峠を越えねばなり

ませぬで」

「越えればいいじゃねえか。骨惜しみすると、これだぞ」

と、馬を曳く人間へ、絶えず鞭むちを鳴らして、

「飯だけはきつと喰わせてやるから、心配せずに歩け」

百姓は、泣き声になって、

「じゃあ旦那、伊那までお供いたしますが、伊那へ出たら放しておくんないですか」

又八は、かぶりを振った。

「やかましい。俺がいいという所までだ。その間に、変な素振り
をしやがると、ぶツた斬るぞ。俺の要いり用ようなのは、馬だけで、人
間などは、かえって邪魔くせえくらいなものだ」

道は暗い、山にかかるほど、嶮けわしくなつてゆく。そして馬も人

も疲れた頃、やっと姥うばがみ神の中腹までかかり、足もとに、海のような雲の波と、朝の光を微かに見た。

馬の背にしがみついたまま、ひとこと一言も物をいわずにきたお通も、朝の光を見ると、それまでの間に、もう心をすえてしまったかのように、

「又八さん。後生ですから、もうそのお百姓さんを放してやってください。この馬を返してあげて下さい。——いいえ、私は逃げはしませぬ。ただ、そのお百姓さんが可哀そうですから」

又八はなお、疑ぐつていたが、再三再四、お通が訴えるので、遂に、彼女を馬の背から解いて降ろした後、

「じゃあきつと、素直に俺について歩くな」

と、念を押した。

「ええ、逃げはしませぬ。逃げても、蛇へびはがた齒型がたが消えないうちは
むだですから——」

二の腕の傷いたみをおさえながら、お通はそういつて、唇を噛んだ。

星の中

一

いかなる場所でも場合でも、武蔵は、寝ようと思う時にすぐ眠り得る修養と健康を持っていた。しかしその時間は、至って短か

った。

ゆうべも——

権之助の家へ戻つて来てから、着のみ着のまま、一間を借りて横になったが、小鳥の声がし始める頃は、もう眼をさましていた。けれど昨夜、野婦のぶのいけ之池から池尻へ出て、ここへ戻つて来たのがもう夜半よなか過ぎであつた。あの息子も疲れているだろうし、老母もまだ眠っているに違いない。——そう察しられるので、武蔵は小鳥の声を耳にしながら、寢床の中で、やがて雨戸の音のするのをうつらうつらと待つていた。

——すると。

隣の部屋ではない。もう一間ほど先の襖ふすまらしかった。そこで誰

やら、しゆくしゆくすすと噉り泣いている者がある。

「……おや？」

耳を澄ましていると、泣いているのは、どうやらあの精悍せいこんな息子らしく、時々、子どものように慟どうこく哭して、

「おつかあ、それやああんまりだ。おらだつて、口惜しくねえことがあるものか。……おらのほうが、おつかあよりも、どんなに、口惜しいか知れねえけれど」

と、言葉も、とぎれとぎれにしか聞き取れない。

「大きなりをして、何を泣く——」

こう三みツご児でもたしなめるように、しつかりした声で——しかし静かに叱っているのは、かの老母に間違いなく、

「それ程、無念と思うなら、この後は心を戒めて、一心に道を究めて行くことじゃ。……涙などこぼして、見苦しい。その顔を拭きなされ」

「はい。……もう泣きませぬ。昨日のような不覚なざまをお目にかけました罪は、どうかお宥し下さいまし」

「——とは叱りましたが、深く思うてみれば、下手と上手の差。また、無事がつづくほど、人間は鈍るという。そなたが負けたのは、当り前なことかも知れぬ」

「そうおつかあにいわれるのが、なによりおらあ辛い。平常も朝夕に、お叱りをうけながら、昨夜のような未熟な負け方。あんなざまでは、武道で立つなどという大それた志も、われながら恥ず

かしい。この上は、生涯、百姓で終るつもりで、武技を磨くよりはくわ鍬を持ち、おつかあにも、もつと楽をさせまする」

何事を歎いているのかと、初めは武蔵も他よそごと事に聞いていたが、どうやら、母子おやこの対象としている者は、自分以外の他人ではないらしい。

武蔵は、ぶぜん慚然として、寢床のうえに坐り直した。——なんといいうつよい勝敗への執着だろうか。

昨夕の間違いは、もうお互いの間違い事と、心に済ましているのかと思えば、それはそれとして、武蔵に負けたという点を、この母子おやこは、今もつて、飽くまで不覚な恥辱として、涙にくれるほど無念がつているのである。

「……怖ろしい負けず嫌い」

武蔵は眩つぶやいて、そつと次の部屋へかくれた。そして夜明けの薄
い光の洩れているそのまた次の一室の内を、隙間からそつと覗のぞい
てみた。

見ると、そこは、この家の仏間であつた。老母は仏壇を背にし
て坐り、息子はその前に泣き伏している。——あの逞ましい大男
の権之助が、母の前には他愛もなく顔をよごして泣いている。

武蔵が、ふすまの陰から見ているとも知らず、老母はその時ま
た、何が氣さわに障つたのか、

「なんじやと、……これ権之助、今、なんといやつたか」

ふいに、声を励まして、息子の襟えりがみをつかんでいた。

二

年来の志望であつた武道を捨てて、明日あしたからは、生涯百姓で終るつもりで孝養するといった息子のことばが——氣に添わないのみか、かえつて、老母の心を怒らせたものの如く、

「なに。百姓で終るとか」

息子の襟がみを膝へ引き寄せると、三ツ児の尻でもたたたくように、彼女は、齒がゆそうに、権之助を叱るのだった。

「どうぞして、そなたを世に出し、まいちど家名を興おこさせたいものと願えばこそ、母もこの年まで、世に望みを繋いでいたものを、

このまま、草屋に朽ち終るほどなら、なんで幼少からそなたに書
を読ませ、武道を励まし、稗粟ひえあわに細々生きてまで、露命の糸を
つむいで来ようぞ」

老母は、ここまでいうと、子の襟がみを抑えたまま、声も嗚咽おえつ
になつてしまつて――

「不覚を取つたら、なぜその恥をそそごうとは思わぬか。幸いな
ことには、あの牢人はまだこの家に泊つておる。眼をさましたら
改めて手合せを望み、その挫くじけた気持に信念を取り戻したがよい」
権之助は、やつと顔を上げたが、間まが悪そうに、

「おつかあ、それが出来るほどならば、おらが何で弱音を吐くも
のか」

「常そなたの其方にも似あわぬこと。どうしてそのように意気地のうなりやつたか」

「ゆうべも、半夜のあいだ、あの牢人を連れ歩くうち、絶えず、ひとう一撃ちくれてやろうと、狙い続けていたが、どうしても、打ち撲ることができなかつた」

「そなたが、ひる怯みを抱いているからじや」

「いいや、そうでねえ。おらの体にもきそざむらい木曾侍の血は流れている。

おんたけ御岳の神前に二十一日の祈願をかけ、じょう杖の使い方を悟つたこの権之助だ、なんで名もない牢人ずれに——と、幾度

も自分では思つてみるが、あの牢人の姿を見ると、どうしても、手が出ねえだ。手を出す先に、駄目だと思つてしまうのだ」

「杖じょうをもつて、必ず一流を立てますると、御岳の神に誓つたそなたが——」

「でも、よくよく考えてみると、今日までのことは皆、おらの独りよがりだった。あんな未熟で、どうして、一流を興おこすことなどできるものか。そのために貧乏して、おつかあに飢ひもしい思いをかけるより、きよう限り、杖を折つて、一枚の田でもよけいに耕たがやしたほうがいいとおらあ考えただが」

「今まで、多くの人々と手合せしても、一度として、負けたということのないそなたが、きのうに限つて敗れたのも、思いように依つては、そなたの慢心を、御岳の神がお叱りなされて下されたのかも知れぬが、そなたが杖を折つて、わしに不自由なくしてく

れても、わしが心は、美衣美食で楽しみはせぬ」

そう論さとしてから、老母はなおもいうのだった。奥のお客が眼醒めざめたら、改めてもう一度、技わざを競あつてみるがよい。それでも敗れたら、お前の氣の済むように、杖を折つて、志を断つもよからうが——と。

ふすまの陰で始終の事を聞いてしまった武蔵は、

(さて、困ったことが……)

と、当惑しながら、そつと去つて、ふたたび自分の寢床とこのうゑに坐りこんだ。

どうしたものでしょう？

やがて、自分が顔を見せれば、必ず母子おやこの者から、試合を求められるに違いない。

試合えば、自分は、きっと勝つ。

武蔵はそう信じる。

けれども、今度もまた、自分に敗れたなら、あの権之助は、今日まで誇っていた杖じょうの自信を失って、ほんとに志を断つであろう。

また、わが子の達成を、唯一の生きがいとして、貧困の中にも子の教育を忘れずに今日まで来た——あの母親の身になったら、どんなに落胆するだろうか。

「……そうだ、この試合は、外はずすに限る。だまつて、裏口から逃げ出そう」

縁の戸をそつと開けて、武蔵は外へ出た。

もう朝の陽ひが木々の梢こずえから薄白くこぼれている。ふと納屋のある片隅を見ると、きのうお通にはぐれて此家ここへ拾われて来た牝牛めうしが、今日は今日の陽を豊かに浴びて、そこらの草を喰べていた。

(おい、達者で暮せよ)

そんな気持がふと牛に向つてもわくのであつた。武蔵は防風林の垣を出て、駒の裾野の畑道を、もう大股に歩いていた。

片方の耳はひどく冷たいが、今朝は鮮あきらかに全姿を見せている駒いただきの頂いただきから落ちてくる風に、足元から払われて行くと、ゆうべか

らの疲れも 焦しょうそう 躁そう も颯さつつと遠方とんぱうのものになつてしまふ。

仰ぐと、雲が遊んでゐる。

ちぎれちぎれな無数の白い綿雲。各すが、各がの相すがたを持ち、氣ままに自由に屈託なく、碧あおぞら空をわがもの顔に戯れてゆく。

「——焦あせ心こころるまい、あまりこだわるまい。会うも別れるも、天地の何ものかがさせてゐる力だ。幼い城太郎にも、弱いお通にも、幼ければ幼いなりに、弱ければ弱いなりに、世間のなかの——それが神だともいえる——善ぜん性しょうの人の加護があるであろう」

昨日きのうから迷まよれかけた——いや、馬籠まごめの女滝めたき男滝おたきからずつと外それがちに彷徨さまよつてばかりいた武蔵の心が——ふしぎにも今朝は、自分の歩むべき大道へ、しつかと返つてゐる心地だった。お通は？

——城太郎は？——とか、そんな眼の傍そばのことのみでなく、死後の先までかけている生涯の道の行く手がこの朝——、彼には見えていた。

ひる午刻過ぎごろ。

彼の姿は奈良井の宿場の中に見かけられる。軒先の檻おりに生きた熊を飼っている熊くまの胆屋いやだの、獣皮を懸け並べた百獣屋ももんじやだの、木曾櫛きそぐしの店だの、ここの宿場もなかなかの雑ざつ鬧とう。

その熊の胆屋の一軒。なんの意味か「大熊」と看板に書いてある角かどみせ店の前に立って、

「ものを訊ねたいが」

と武蔵がのぞく。

後ろ向きに釜の湯を、自分で汲んで呑んでいた熊の胆屋のおや
じが、

「はあ、何でござりますか」

「奈良井の大蔵殿というお人の店はどこであろうか」

「ああ、大蔵殿のお店ならば、これからもう一つ先の辻で——」

と、湯呑み茶碗を持ったまま、おやじは、店みせ頭さきまで出て来て

道を指さしたが、折ふし、外から帰って来たとんぼ頭でうちの顔
を見かけると、

「これこれ。こちら様はの、大蔵殿のお店を尋ねて行かっしやる
という。あのお店構えは、ちよつと分らんによつて、前まで、お
連れ申して来こう」

と、いいつけた。

丁稚^{でっち}は、領^{うなず}いて、先にてくたく歩いてゆく。武蔵は心のうちで、その親切にも感じたが、かねて権之助から聞いていた言葉も思い合せて、奈良井の大蔵という者の徳望のほどが惚^{しの}ばれた。

四

お百草の卸問屋^{おろしや}といえ、軒並みにある旅人相手の店の一つのようなものかと思つて来たところ、見れば、まるで想像は外^{はず}れて
いる。

「お侍さん、ここが奈良井の大蔵様のお宅でございますよ」

案内してくれた熊の胆屋の丁稚は、なるほど、側まで連れて来て貰わなければそれとも分るまいと思われる——目の前の大家を指さして、すぐ走り戻つて行つた。

店と聞いていたが、暖簾も看板も懸けてはない。渋で塗つた三間の出格子に、二た戸前の土蔵がつづき、その他は高塀で取り繞らしてある。入口には、葎障子が下りていて、訪れるにも、ちよつと億劫なほど、大きな老舗の奥ふかさを持つてゐる。

「(づ)免」

武蔵はそこを開けていう。

中は暗い。そして、醤油屋の土間のように広くて、冷たい日陰の空気が顔に触れた。

「どなたさままで——」

と、帳場筆筒だんすの隅から程なく立って来る者がある。武蔵は、後ろを閉めて、

「それがしは宮本と申す牢人者ですが、連れの城太郎——ようやく十四歳ほどの童わらわが、昨日か——ことによると今朝あたり——ご当家を頼つて来たように途中で聞いて参りました。もしやご当家のお世話になつてはおりますまいか」

武蔵のことばが終らないうちに、番頭の顔には、ああその子供か——という頷うなずきが漂い、

「それはそれは」

と、丁寧ていねいに敷物をすすめたが、辞儀をした後の返辞は、武蔵を

失望させるものだった。

「それは、残念なことをいたしましたわい。その子供なら、ゆうべ夜半よなかに、ここの表戸をどンドン叩きましてな——ちようど手前どもの主人大蔵様には旅立ちの立ち振舞いで、まだ賑やかに大勢して起きておりました折なので——何事かと開けてみますと、ただ今、あなたのお訊ね遊ばしたその城太郎という子供が、門に立っておいりましたようなわけで」

老舗しにせの奉公人の常として、実直まえおすぎて前措まへおきも諄々くどくどしいが、つづまる所、要旨は、次のようなことだった。

（この街道のことなら何でも奈良井の大蔵さんの所へ頼みに行け）と、武蔵も誰かに教えられた通り、城太郎もまた、お通さらを攫さらわ

れたわけを告げて、此処へ泣きこんで来たところ、主人の大蔵が
いうには、

(そいつは容易たやすくないぞ。念のため、手配はしてやるが、この近
くの野武士や荷持人足の仕業しわざならすぐ分るが、旅の者が旅の者を
誘かどわか拐かしたことだ。いづれ往来の街道を避よけて、間道へ出てしま
つたにちがいない)

そう見込みはつけたが、つい今朝方まで、八方へ人を派して、
搜索したけれど、大蔵の予言のとおり、なんの手懸りも得られな
かった。

愈 《いよいよ》、知れないとなると、城太郎はまた、ベソを
掻き出したが、ちようど今朝は、大蔵が旅立ちの日なので、

（どうだ、おれと一緒に歩かないか。そうしたら、途々も、みちみちそのお通さんとやらを探せるし、また、ひよいと、武蔵とかいうお前のお師匠さんに会えない限りもないからなあ）

なぐさ 慰め半分に、大蔵がいったところ、城太郎は地獄で仏に会ったように、ぜひ一緒に行くといい——一方もそれではと、急に連れて行く気になって、旅の空へ立ったばかり——という番頭の話なのである。

それも、時間にすれば、わずか二ふたとき刻ばかりの違いなのに——と、いかにも気の毒そうに、繰返していった。

五

二刻の差があつては、いくら急いで来たところで、間に合わなかつたことは確實だが、それにしても——と武蔵は残念な気がする。

「して、大蔵殿のお旅先は、いずれでござろうか」

訊ねると、番頭の答えはまた、甚だ漠ばくとしたもので、

「ご覧の通り、手前どもの店は、表を張つておりませぬし、薬草

は山で製つくり、売子は春秋の二回に、仕入れた荷を背負つて、諸国

へ行あきない商あきないに出てしまいます。それゆえ、主人は閑あるじの多い体で、

間まがあれば神社仏閣に詣でたり、湯治に日を暮したり、名所を見たりするのが道楽なのでござりましてな——今度も、多分、善光

寺から、越後路を見物して、江戸へはいるのではないかとは思いますが」

「では、お分りにならぬのか」

「とんともう、はつきりと、行く先をいつて出た例ためしのないお方で、それから、番頭は、

「まあ、お茶をひとつ」

と、一転して、店からそこまで、歩くにもかなりかかるような奥へ茶を取りにはいつて行ったが、武蔵は、ここに落着いている気にもなれない。

やがて、茶を運んで来た番頭に向い、主人の大蔵の容貌や年配を訊いてみると、

「はいはい、道中でお会いなされましても、てまえどもの御主人なら、一目でお分りになるに違いございません。お年は五十二におなりでございませうが、どうして、まだ屈強な骨ぐみで、お顔はどちらかといえば角かくで赭あから顔がおのほうで、それに痘瘡ほうそうの痕あとがいつぱいござりましてな、右の小鬢こびんに、少々ばかり薄うす禿はげが見えまするで」

「背丈せたいは」

「並の方とでも申しませうか」

「衣服は、どんな物を」

「これは、今度のお旅には、堺さかいでお求めなされたとかいう唐木綿しほの縞しまを着て行かれました。これは珍しいもので、まだ世間一般に

は着ているお方も稀でございますから、主人を追つておいで遊ばすには、何よりもよい目印になるうかと存じまする」

彼の人柄はそれであらまし分つた。なおこの番頭を相手にして話をしていたら限りきもあるまい。折角なので、茶を一喫きつするとすぐ武蔵はそこを出て、先へと急いだ。

明るいうちにはもう難かしいかも知れないが、夜を通して、洗せ馬ばから塩尻の宿場を過ぎ、今夜のうちに、峠まで登つて待ちかまえていれば、その間に、二刻の道みちのり程は追い越し、やがて夜明けと共に、後から奈良井の大蔵と城太郎が通りかかるにきまつてゐる。

「そうだ。先へ越えて、彼処あそこで待てば——」

贄にえがわ川、洗馬も過ぎて、麓ふもとの宿場までかかると、すでに陽はか
 げつて、夕煙の這う往来に、軒ごとの燈とも火しびが、春の晩くれながら、
 なんともいえない山国の佗わびしさを瞬またたいている。

そこから塩尻峠の頂までは、なお二里以上はある。武蔵は、息
 もつかず登りつめた。そしてまだそう更ふけぬうちに、いの字ヶ原
 の高原に立ち、ほつと息をつきながら、身を星の中に置いて、し
 ばらく恍こうこつ惚こつとなつていた。

導母どうぼの杖じょう

武蔵はふかく眠った。

今、彼の眠っている小さい祠ほこらひさしの廂には、浅間せんげん神社という額が見える。

そこは高原の一部から、瘤こぶのように盛り上がっている岩山の上で、この塩尻峠では、さし当って、ここより高い所は見当らない。

「おおうい。登って来いよ。富士山が見えるで」

ふいに耳元で人声がしたので、祠ほこらの縁に手枕で寝ていた武蔵は、むつくりと起きあがって、いきなり眩まぼゆい暁雲に眼を射られたが、人影は見えないで、はるか彼方かなたの雲の海に、真つ赤な富士のすがたを見出した。

「ああ、富士山か」

武蔵は少年のように驚異の声を放った。絵に見ていた富士、胸に描いていた富士を、眼まのあたりに見たのは、今が生れて初めてなのだった。

しかも寝起きの唐突に、それを自分と同じ高さに見出して、対むかい合つたのであるから、彼はしばらくわれを忘れ、ただ、

「——ああ」

というため息を胸の中に曳いて、瞬まじろぎもせず眺め入っていた。

何を感じたのであろうか、そのうちに武蔵の面おもてには涙の玉が転まろびはしっている。拭こうともしないで、その顔は朝の陽に灼やかれて涙のすじまで紅く光って見えた。

——人間の小ささ！

武蔵は衝うたれたのである。宏大な宇宙の下にある小なる自己が悲しくなつたのであつた。

明らかに彼の胸を割れば、一乗寺下り松で、吉岡の遺弟何十名という数を、まったく自己の一剣の下に征服してからは、いつのまにか彼の胸にも、

(世の中は甘いぞ)

と、ひそかに自負の芽が萌きざしていた。天下の剣人と名乗る者は数あつても、およそ何程のものでもあるまいという慢心が首を擡もたげかけていた。

だが。

たとい剣において、望むがごとき大豪となつたところで、それがどれほど偉大か、どれほどこの地上で持ち得る生命いのちか。

武蔵は、悲しくなる。いや富士の悠久と優美を見ていると、それが口惜しくなってくる。

ひつきよう
畢 竟

人間は人間の限度にしか生きられない。自然の悠久は真似ようとして真似られない。自己より偉大なるものが厳然と自己の上にある。それ以下の者が人間なのだ。武蔵は、富士と対等に立っていることが恐こわくなった。彼はいつのまにか地上にひざまずいていた。

「……………」

そして合掌していた。

合わされたふたつの掌を通して、彼は母の冥福を祈った。国土の恩を感謝した。お通や城太郎の無事を祈った。また神の天地のごとく、偉大なるわけにはゆかないが、人間として、小ならば小なりに偉くなりたい——と自己の希望をも心のそこで祈った。

「……………」

なお、彼は掌をあわせていた。

すると、

——ばか、なぜ人間が小さい。

と、いう声がした。

——人間の眼に映って初めて自然は偉大なのである。人間の心に通じ得て初めて神の存在はあるのだ。だから、人間こそは、最

も巨おおきな顯けん現げんと行動をする——しかも生きてる靈物ではないか。

——おまえという人間と、神、また宇宙というものとは、決して遠くない。おまえのさしている三尺の刀を通してすら届きうるほど近くにあるのだ。いや、そんな差別のあるうちはまだだめで、達人、名人の域にも遠い者といわなければなるまい。

合掌のうちに、武蔵がそんな閃ひらめきを胸むねに享うけていると、
「なアるほど！ よく見えらあ」

「お富士様が、このように拝める日は、すくのうござりますよ」
下から這い上がって来た四、五名の旅人たちが、手をかざして、
ここの景観を称たたえ合っていた。その町人たちの中にも、山を単なる山として仰おのぐ者と、神として仰おのぐ者と、自おのらずかふたつあった。

二

瘤山こぶやまの下の高原の道には、もう西と東から行き交かう旅人の影が、蟻のように見下ろされる。

祠ほこらの裏へ廻つて、武蔵は、その道を見張つていた。——やがて奈良井の大蔵と城太郎が、麓から登つて来るにちがいない。

そしてもし此方こちらで見つけ損ねても、先方があれを見落す気づかいはあるまい——と安心していた。

なぜならば、彼は入念に、この岩山の下の道ばたに、板切れを拾つて、それへこう書いて目につく崖に立てかけて置いてあるか

らである。

奈良井の大蔵どの

御通過のみぎりは

お会い申したく、

上の小祠しょうしにて、お

待ち申しおり候

城太郎の師 武蔵

ところが、往来の多い朝の一刻を過ぎ、高原のうえに陽の高くなる頃まで待つても、似た人も通らないし、彼の立ててきた札を見て、下から声をかける者もない。

「おかしいなあ？」

と、怪訝いぶからざるを得ない気持ちに囚とらわれてしまう。

「来ないわけではないが？」

と、どうしても思う。

この高原の嶺を境にして、道は甲州、中山道なかせんどう、北国街道の三方にわかれているし、水はみな北へ駛はしつて、越後の海へ落ちてゆく。

奈良井の大蔵が、たとい善光寺平だいらへ出るにしても、中山道へ向うにしても、ここを通らないという理窟は考えられない。

だが、世間のうごきを、理窟で推おしてゆくと、とんだ間違いが往々に起る。何か急に、方角を変えたか、まだ手前の麓ふもとに泊まっているかもしれない。腰に一日の用意は提げているが、朝飯と午ひ

飯をかねて、麓の宿場まで戻ってみようか？

「……そうだ」

武蔵は、岩山を降りかけた。

その時である。

岩山の下から、

「あッ、いたっ」

と、ぶしつけな呶鳴り方をした者がある。

その声には、殺気があった。おとといの晩、いきなり身をかすめた棒の唸りに似ていた。はっと思ひながら武蔵が岩につかまりながら下を覗くと、果たせるかな、声を投げて仰向いている眼はあの時の眼であった。

「——客人、追つて来たぞ」

こう呼ばれる者は、駒ヶ岳のふもとの土民権之助で、見ると、あの百姓家にいた母親までを連れてくる。

その老母を牛の背にのせ、権之助は、例の四尺ほどの棒と手綱を持って、武蔵の姿を睨めあげていうのだった。

「客人！ いい所で会った。だまって俺の宿から逃げ出したのは、こっちの肚を察して、かわ躲したつもりだろうが、それでは俺の立つ瀬がねえ。もういつペン試合をしろ。おれの杖をじょううけてみる」

——降りかけた足を止めて、武蔵は岩と岩の間の急な細道の途中で、しばらく、岩に縋すがつたまま、下を見ていた。

降りて来ない、と見たか、下なる権之助は、

「おつかあ、ここで見ていさっしやい。なにも、試合するには、平地ひらちと限ったこたあねえ。登って行って、あの相手を、眼の下へたたき落してみせる」

母の乗っている牛の手綱を放し——小脇の杖を持ち直して——やにわに岩山の根へ取りつこうとすると、

「これ！」

彼の母はたしなめた。

「いつぞやも、そのような粗忽そこつが不覚もとの因もとではないか。いきり立

つ前に、なぜよう敵の心を読んでおかぬのじや。もし上から石でも落されたらどうしやる」

なお何か、母子おやこのあいだで、交わしている声は聞える。しかし意味は武蔵の所までは聞きとれない。

その間に、武蔵は肚を決めていた。——やはりこの挑戦は避けるに如しくはないという考えである。

すでに自分は、勝っているのだ。彼の杖の技倆もわかっている。改めてなお勝つ要はさらさない。

のみならず、あの一敗を口惜しがって、母子してここまで自分の後を慕って来たところを見ると、愈 《いよいよ》、負けずぎらいな母子の恨みの程が怖ろしい。吉岡一門を敵とした例を見て

も、怨みののこるような試合はすべきでない。益は少なくて、ま
ちがえば、天命を縮めてしまう。

それにまた、武蔵は、子を盲愛するの余り人を呪う無知な老母
の恐ろしさは、身にも骨にも沁みて、一日一度は必ず思い出すほ
どだった。

あの又八の母親——お杉ばばの影を。

何を好んで、また人の子の母から、呪いを買おう。どう考えて
も、これは逃げるの一手、ほかに当り障りなく通る道はなさそう
に思われる。

で、彼は無言のまま、半ばまで降りて来た岩山を、またふたた
び上へ向って、のそのそと登りかけた。

「——あつ、お武家」

その背へ、下からこう呼んだのは、気の荒い息子の方ではなく、今、牛の背を降りて地上に立った老母の方であった。

「……………」

声の力にひかれて、武蔵は足もとを振りかえつてみた。

見ると、老母は、岩山の根の辺りに坐つて、じつと自分を見上げてゐる。武蔵の眸が下へ振向いたと知ると、老母は両手をついているのである。

武蔵はあわてて、向き直らずにいられなかつた。一夜の恩にこそ預かっているが、そして、なんの礼ものべずに裏口から逃げ出してしまつてこそいるが、この長上から、地へ両手をついて、辞

儀されることは何もしていない。

（お老母、勿体ない、お手を上げてください）

そういいたそうに、武蔵は思わず、伸ばしていた膝を^{かが}屈めてしまつた。

「——お武家、さだめし、我の^がつよい者、他愛ない奴と、お蔑^{さげす}みでございましょうの。恥かしゆうござりまする。しかし……遺恨の、自惚^{うぬぼ}れのと、思い募^つるのではございませぬ。年頃、杖をつかい馴^なれて、師もなく、友もなく、またよい相手に巡り会わぬこの^{せがれ}倅^{ふびん}を、不愆^{ふびん}と思し召して、もう一手のお教えをうけたいのでござりまする」

武蔵はなお、無言であつた。けれど老母が、届きかねる声を一

心に張つて、こう下からいう言葉には、耳を洗つて聞かなければならぬまこと真がこもつていた。

「このままお別れ申しては、どうにも残念でござります。ふたたび貴方のようなお相手に会えるやらどうやら。——なおなお、あの見苦しい敗れ方のままでは、この子も、この母も、以前は名だたる武門であつた御先祖に、どう顔向けがなりませう。意趣ではございませぬぞ。敗けるにしても、あれではただの土民がねじ伏せられただけのものでござります。折角、巡り会うた貴方のよくなお方から、なにも得ずに過ぎては、それこそ口惜しい限りでございます。わしは、それを俵に叱つて連れて参りました。——どうぞわしの願いをかなえてしあ試合つてやつて下されい。お願い申

しまする」

いい終ると、老母は、武蔵の踵かかとを拝むように、また、大地へ両手をつかえていた。

四

武蔵は黙って降りて来た。そして道傍みちばたの老母の手を取って、牛の背へ押しもどし、

「権どの、手綱を持って、歩きながら話そう。——試合しあうか、試合わぬかは、わしも歩きながら考えるところとして」と、いった。

次に彼は、黙々と、その背を母子の者に向けて歩いて行く。話しながら歩こうといったのに、その沈黙は変わらない。

武蔵が何を迷っているか、権之助にはその肚が酌めないのである。疑いの眼を彼の背へ光らしている。そして一歩でも距へだつまいとするもののように、遅のろい牛の脚を叱咤しながら尾ついて行った。

嫌いやというか。

応か。

牛の背の老母もまだ不安そうな顔に見えた。そして、十町か二十町も高原の道を歩いたかと思う頃、先に歩いていた武蔵が、

「ウム！」

と独り返辞をしながら、くるりと、踵きびすをめぐらし、

「——立合おう」

と、いきなりいった。

権之助は手綱を捨て、

「承知か」

即座にもと思つたらしく、もう足場を見まわすと、武蔵は、意
氣ごむ相手を眼の外に措おいて、

「じゃが——母御」

牛の背へいのである。

「万が一のことがあつてもよろしいか。試合と斬合とは持ち物が
ちがうだけで、紙一重ほどの相違もないが」

念を押すと、老母は初めてにこと笑つて、

「御修行者、お断りまでもないことを仰せられる。杖を習じょうまなび出してからもう十年。それでもなお、年下のあなたに負けるような俵であつたら、武道に思いを断つがよい。——その武道に望みを断つては、生きるかいいないといひやる。さすれば、打たれて死んだとて当人も本望である。この母も、恨みにはぞんじませぬ」

「それまでにいうならば」

と、武蔵は、眸を一転して、権之助の捨てた手綱をひろい、

「ここは往来がうるさい。どこぞへ牛を繋いで、心ゆくまで、お相手いたそう」

いの字ヶ原のまつただ中に、枯れかけている一本の巨おおきな落から葉

松まつが見える。あれへと指して、武蔵はそこへ牛を導き、

「権どの。支度」

と、促した。

待ちかねていた権之助は、おうと武蔵の前に棒をひっ提げて立った。武蔵は直立したまま、相手を静かに見た。

「……………」

武蔵には木剣の用意がない。そこらの得物を拾って持つ様子もなかった。肩も張らず、二本の手は柔かに下げたままである。

「支度をしないのか」

今度は権之助からいった。

武蔵は、

「なぜ？」

と、反問した。

権之助は、憤むつと、眼から出すような声で、

「得物を把とれ、何でも好む物を」

「持っておる」

「無手か」

「いや……」

首を振って、武蔵は、左の手をそつと忍しのばすように、刀の鍔つばの下へ移して、

「此処に」

といった。

「なに！ 真剣で」

「……………」

答えは、唇の端に歪めた微笑を以てした。低い一声、静かな呼吸の一つも、もう徒らに費やすことはできないものになっている。落葉松の根元へ、濡れ仏のように、べたつと坐り込んでいた老母の顔は、途端にさつと蒼ざめた。

五

——真剣で。

武蔵がいったために、老母は急に動顛したのであろうか。

「ア。待つて賜も」

ふいに横からいった。

だが、武蔵の眼、権之助の眼、そう双ふたつのものは、もうそれくらいな制止では、針程も動かなかつた。

権之助の棒は、この高原の気をみんな吸つて、一撃の唸りにそれを噴き出そうとするものののように、じつと小脇に含んで構え、武蔵の片手は、鏢つばの下に膠こうちやく着やくしたまま、相手の眼の中へ、自分の眼光を突つこむような眼をしているのである。

もう二人は、内面において、斬り結んでいるのである。眼と眼とは、この場合、太刀以上、棒以上に相手を斬る。まず眼を以て斬り伏せてから、棒やいばか刃やいばか、どっちかの得物がはいつて行こうとするのである。

「待たツしやれ！」

老母は、また叫んだ。

「——何か？」

と、答えるためには、武蔵は四、五尺も後へ身を退いていた。

「真劍じゃそうな」

「いかにも。——木劍でいたしても、真劍でいたしても、拙者の試合は同じことですから」

「それを止めるのではないぞえ」

「お分りならばよいが、劍は絶対だ……手にかける以上、五分までの、七分までの、そんなかしゃく仮借があるものではない。——さもなくば、逃げるかがあるばかり」

「元よりのこと。——わしが止めたは、それではない。これほどな試合に、後で名乗り合わなんだことを悔やんではと——ふと思ひ寄つたからじゃ」

「うむ、いかにも」

「怨みではなし、しかし、どちらから見ても、会い難きよい相手、この世の縁えにし。——権よ、そなたから名乗つたがよい」

「はい」

権之助は、素直に一礼して、

「遠くは、木曾殿の幕下、太夫房かくみょう 覚あき 明あきらと申し、その人を家祖といひ伝えております。なれども、覚明は木曾殿の滅亡後、出家して、法ほうねん 然ぜん上人じつの室むろに参じておりますゆえ、その一族やも知れ

ませぬ。年久しく、土民として今、私の代に至りましたが、父の世の頃、或る恥辱をうけ、それを無念におもいまして、母と共に誓いをたて、御^{おんたけ}岳神社に参籠して、必ず、武道をもつて世に立つことを神文に誓つたのです。——そして神前において、会得したこの杖術を、自ら夢想流^{むそう}と称し、人はてまえを呼んで、夢想權之助といっております」

彼が口を結ぶと、武蔵も礼儀を返して、

「拙者の家は、播^{ばん}州^{しゅう}赤松の支流、平田^{しやうげん}将^{しょう}監^{げん}の末で、美^{みまさ}

作^か宮本村に住し、宮本無二齋とよぶものの一子、同^{どう}苗^{みょう}武蔵

であります。さして、有縁の者もおりませず、また、元より武辺に身をゆだねて世にさすろう以上は、たとえこれにおいて、其^{そこ}も

許との杖の下に、敢あえなく一命を終ろうとも、毛骨のお手数などは
ご無用な業わざです」

と、いった。そして、

「では」

と、立ち直ると、権之助も杖を把とり直して、

「では」

と、応じた。

六

松の根もとに坐りこんだ老母はその時、息もしていないように

見えた。

降りかかった災難とでもいうならばともかく、われから求めて、追いかけて来てまで、わが子を今、白刃しらはの前に立たせている。——常人には到底考えられない心理の中に、しかし、この老母は自じ若じやくとしているのだ。万人が何といおうが、自分だけは深く信じるところがあるもののような姿をして——。

「……………」

べたんと、坐ったまま、肩をすこし前へ落とし、行儀よく両手を膝にかさねている。幾人の子を生み、幾人の子を亡なくして、貧苦しほの中に耐えてきた肉体か、その姿はいかにも小さい。そして萎しほみきつている。

——だが今、武蔵と権之助とが、何尺かの土の間に対峙して、
「では」

と、戦端を切つたせつなに、老母の眸は、天地の仏神が皆集まつてそこから覗いているような、巨大な光を発した。

彼女の子は、すでに武蔵の剣の前に、その運命を曝さらしていた。

武蔵が鞆さやを払つた瞬間に、権之助はもう自分の運命がわかつたよ
うな気がして、体がさつと冷たくなった。

（はて、この人間は？）

と今、観みえて来たのである。

いつぞや、わが家の裏で、不用意に闘つて感得した敵とはまるでその体たいが違う。文字でいうならば、彼は、草書の武蔵を見て、

武蔵の人間を律していたが、きょうの厳肅で、一点一画もゆるがせにしない、武蔵の楷書の体たいを見て、自分が敵を量はかるに、意外なまちがいを抱いていたことを覚さとつたのである。

また、それが覚える権之助であるから、いつぞやは自信にまかせて、滅多打ちに振りこんだ杖じょうも、きょうは、頭上へたかく振りかぶつたまま——まだ一打の唸りすら呼び起すことができない。

「……………」

「……………」

いの字ヶ原の草霽くさもやは、かかるあいだに薄うツすらと霽はれかけていた。遠くかすんでいる山の前を、一羽の鳥影が悠々と横ぎつてゆく。

——ぱつと、二人のあいだの空気が鳴った。飛ぶ鳥も落ちるような見えない震動である。それはまた、杖が空気を搏つたのか、剣が大気に鳴ったのか、いずれともいえないことは、禪でいう、隻手の声は如何いかんというのと同じことである。

——のみならず双方の五体と得物えものの一如になうごき方は、とても肉眼に依つて見て取ることは難かしい。はつと、視覚から脳へそれが直感する一秒間の何分の一かわからない一瞬に、すでに眼に映うつる二人の位置と姿勢はまるで変つてゐる。

権之助が振り落した一撃は、武蔵の体の外を搏うち、武蔵が小手ひるがえを翻して、中位から上位へ向けて薙なぎ上げた刃やいばは、権之助の体の外とはいいながら、殆ど右の肩から小鬢こびんの毛をかすめるくらいに

閃ひらめいていた。

同時に、この場合も、武蔵の刀は、彼のみの持っている特質として、相手の身を外それて行く所まで行くと、ヒラと、すぐ松葉形なりに切先を返して来た。この返す切先の下こそ、いつも彼の相手の地獄となるところであつた。

ために、第二撃を、敵に与える違いとまもなく、権之助は杖の両端を持つて、武蔵の刀を、頭上で受け止めた。

かんと、彼の額ひたいの上で、杖は鳴つた。白刃しらばと杖とのこんな場合、杖は当然両断になつてしまひそうなものだが、刃が斜めに来ない限り、決して切れるものでない。従つて、受ける方にも、その手心があつて、権之助が頭上へ横に翳かざした杖は、敵の手元へ深く左

の肱ひじを突ツこみ、右の肱をやや高く折り曲げて、咄嗟、武蔵のみずおちを、杖の突端で突かんとしながら受けたものであった。しかし武蔵の刃やいばはたしかに止まったが、その捨て身な迅業はやわざは、成功しなかった。——なぜならば、杖と刀とが、彼の頭上で、がつきと十字に噛み合つたせつな、杖じょうの先と武蔵の胸のあいだには、惜しくも、ほんの一寸ほどの空間を残していたからである。

七

引きもならない。

押してもゆけない。

無碍むげにそれをやろうとすれば、忽ち、焦心いらだつほうが敗れるに
きまつている。

これが、刀と刀との場合ならば、つばぜ競りというのであろうが、
一方は刀でも、一方は杖である。

杖には鐔つばがない、刃がない、また、切先も柄つかもない。

けれど、丸い四尺の杖は、その全部が刃であり、切先であり、
また、柄であるともいい得る。従つて、これを上手に使われると、
杖の千変万化なことは、到底、劍の比ではない。

劍の六感で、

(こう来るな)

というような測定をもつたらとんだ目にあう。杖は、時によつ

て、刀のような性格を持って、短槍と同じ働きもするからである。十文字になった杖と刀の上から、武蔵が刀を引けない理由は、その予測がゆるされないからであつた。

権之助の方はなおさらである。彼の杖は、武蔵の刀を、頭上に支えているのであるから、受身の体たいであつた。——引くはおろか、もし、満身の気魄きはくを、びくとも弛ゆるめたらば、

(得たり)

と、武蔵の刀は、そのまま一押しで、彼の頭を砕いてしまふであらう。

おんたけ

御岳の夢想をうけて、杖の自由を体得したという権之助も、

今はどうすることも出来なかつた。

見ているまに、彼の顔は蒼白になって行つた。下唇へ前歯がめりこんでいる。吊るしあがつた眼じりからあぶらあせ脂汗がねつとりと流れ出す。

「……………」

頭上に受けとめている杖と刀の十字が波を打ってくる。その下に、権之助の息が刻々に荒くなっていた。

——すると。

その権之助以上、蒼ざめた形相となつて、松の根がたから凝視していた老母が、

「権ッ」

と、さけんだのである。

権——と絶叫した瞬間に老母はわれを忘れていたに違いない。

坐っていた腰を伸び上げて、その腰を自分で強かに打ちながら、

「腰じゃわえ！」

と罵つて、そのまま血でも吐いたのか、前へのめつてしまった。

武蔵も権之助も、ふたりとも石に化るまで離れそうにも見えなかつた杖と刀が、とたんに、噛み合つたせつなよりも凄まじい力を持って、ぱツと離れた。

武蔵の方からである。

退いたのも、二尺や三尺ではない。右か左か、どつちかの踵が、土を掘つたような勢いであつた。その反動、彼の体は七尺も後ろへ移っていた。

しかし、その距離は、権之助の飛躍と、四尺の杖に、すぐ迫られて、

「——あッ」

と、武蔵は辛くも横へ払い退けた。

死地から攻勢に立ったとたん、に払い捨てられたので、権之助は、頭を大地へ突つこむような勢いで、だツと、前へのめつた。そして、強敵に会つた隼が、死にもの狂いとなつたように、髪逆立てた武蔵の眼の前に、明らかに、空いている背中を曝してしまつた。

一本の雨のような細い閃光が、その背を切つた。——うううつと、仔牛のように唸きながら、権之助はなお、ととととと、三足ほど歩いてそのまま仆れ、武蔵も片手でみずおちを抑えながら、

草の中へ、どたつと、腰をついて坐ってしまった。

そして、

「――負けた！」

と叫んだ。

武蔵がである。

権之助は声もない。

八

前のめりに仆れたまま、権之助はいつまでも動かなかつた。――
――それを見入っているうちに、老母も喪そうしん心してしまった。

「みね打ちです」

武蔵は、老母へ向つて、こう注意を与えた。それでもまだ、老母が起つて来ないので、

「はやく、水をおやりなさい。御子息には、何処も怪我はない筈だ」

「……えっ？」

老母は、初めて顔を上げ、やや疑うように権之助の姿を見ていたが、武蔵のいうとおり、血にまみれてはいなかったので、

「オオ」

次には、蹠^{よろ}めいて、いきなりわが子の体へ、縋^{すが}りついた。水を与え、名を呼んで、老母がその体を揺り動かすと、権之助は息を

ふき返した。——そして茫然と坐っている武蔵を見ると、

「怖れいりました」

いきなりその前へ行つて土に額ぬかずいた。武蔵はわれに還ると共に、慌ててその手を握り取つて、

「いや、敗れたのは、其許そこもとではない、拙者の方です」

彼は、襟えりもと元ひらを披ひらいて、自分のみずおちを、二人へ見せた。

「杖じょうの先が、赤い痕あとになつているでしょう。もう少し入つたら、恐らく拙者いのちの生命はなかつたに違ちがいない」

いいながらも、武蔵はまだ、茫然としていたのである。どうして敗れたかを理解し切るまでは。

同じように、権之助も老母も、彼の皮膚にある一点の紅い斑はんて

点をながめて、口もきけなかつた。

武蔵は襟を合わせて、老母に訊ねた。——今、二人が試合のうち、腰！ と叫んだのは何のためか。あの場合、権之助殿の腰構えに、そも、どういふ虚を見出されて、あんな声を発しられたのか。

すると、老母は、

「お恥かしいことじゃが、せがれはただ、あなたの刀を杖で支えるに必死となつて、両足を踏まえておりました。退ひいても危ない、突いても危ない、絶体絶命の縛りに会つての。——それを横から見ておるうち、はつと、武術も何も判らぬわしにすら見えた虚がある。それは——あなたの刀に心のすべてを奪われていたから縛

りに会ったのじゃ。手を引こうか、手をもつて突こうかと、逆上うわすっているので更に気がつかぬようじやったが、あの体のまま、手もそのまま、ただ腰を落しさえすれば、自然に杖の先が、相手の胸元へどんと伸びる……そこじやと、思うたので、何を叫んだのやら思わず口走ったのでござりました」

と、いう。

武蔵はうなずいた。よい教えを受けたと、この機縁に感謝した。黙然と、権之助も聞いていた。彼にも何か会得するところがあつたに違いない。これは、御おんたけ岳の神の夢想ではない、眼の前に、子が斬られるか生きるかの境を見て、現実の母が、愛の中からつかみ出した「窮極の活理」であつた。

木曾の一農夫権之助、後に、夢想権之助と称して、夢想流杖じょう術じゆつの始祖となつた彼は、その伝書の奥書に、

「導母どうぼの一手いっしゅ」

なる秘術を誌しるして、母の大愛と、武蔵との試合を審つまびらかにしているが「武蔵に勝つ」とは書いていない。彼は生涯、武蔵に負けたと人にも語り、その負けたことを尊い記録としていた。

それはそうと、この母子おやこの多幸を祈つて別れ、いの字ヶ原を去つて、武蔵が上諏訪かみすわの辺りまで行き着いたかと思わるる頃、

「この道筋を、武蔵という者が通らなかつたであらうか。たしかに、この道へ来たわけだが——」

と、馬子の立場たてばだの行き交う旅人に、途々みちみち訊合ききあわせながら、

後を慕ってゆく一名の武家があつた。

一 いっせき
夕の恋

一

どうも痛む……。

みずおちの中心を外それて少し肋骨ろっこつにかかっている。夢想権之助
からうけた杖じょうの痛みである。

麓ふもとか、上諏訪かみすわのあたりに足をとめて、城太郎の姿を探し、お通
の消息を知らねばならぬと思うのであつたが、なんとなく気が冴

えない。

彼は、下諏訪まで足を伸ばした。下諏訪まで行けば温泉がある。そう思ってから急に真つ直に歩いたのである。

湖畔の町は、町屋千軒といわれていた。本陣の前の屋根のある風呂小屋が一カ所見えたが、後は往来傍ばたにあつて、誰が入浴はいろうと怪しむ者はない。

武蔵は、着物を立木の枝に懸け、大小を括くくり付けた。そして、野天風呂の一つに体を浸つけて、

「ああ」

と、石を枕に、眼をふさいだ。

今朝から革かわぶくろのように硬かたばつていたみずおちを、そうして

湯の中で揉もんでいると、眠くなるような快さが血管を繞めぐってくる。陽ひが傾きかけている。

漁りようし師の家でもあろうか。湖畔の家と家の間から見える水面には、茜あかねいろ色の淡靄うすもやが立って、それも皆湯のように感じられる。二、三枚の畑を隔てたすぐそこの往来には、馬や人間や車の行き交う物音が頻繁であつた。

と——その辺の油や荒物を売っている小さやかな店先で、

「草鞋わらじを一足くれぬか」

と床しょうぎ几を借りうけて、足あし拵しらえを直している侍がいつているのである。

「うわさはこの辺へも聞えておろう。京都一乗寺の下り松で、吉

岡方の大勢を一身にうけ、近頃ではめずらしい、よい試合ぶりをした男だ。確かに通つたに違いないが、気づかなかつたかの」

塩尻峠を越えると間もなくから、往來を訊いて歩いてゐる例の武家であつた。そのくせ、そうよくは知らないと見えて、問われた者から、服装や年頃などを反問されると、

「さあ、その程は」

と、あいまいなのである。

しかし、何の用があるのか、熱心は熱心で、そこでも見かけないという返辭を聞くと、ひどく落胆して、

「何とか、会いたいのだが……」

と、草鞋の緒おをくくり終えても、まだ愚痴のように繰返してい

る。

自分のことではないか。

武蔵は、畑越しに、湯の中からその武家を篤と見ていた。

旅焦たびやけのしている皮膚——四十ぐらいな年配——牢人ではない

主しゆもち持である。

笠の紐ひもぐせ癖でそそけているのかも知れないが、小鬢こびんの毛が荒く

立って、これが戦場に立ったら、武者面むしやづらのほどもしの俣はばれる骨柄

である。裸にしたらよろい鎧よろいずれや具足ぐそくだこで鍛え抜かれている体だろ

うとも思われる。

「はて……覚えがないが」

考えている間に、武家は立ち去ってしまった。吉岡の名を口に

したところから見て、事によつたら、吉岡の遺弟ではあるまいかなどとも思つてみる。

あれだけの門下のうちだ。気骨のある人間もいよう。奸計かんけいをめぐらして、復讐しようとして狙っている者がないとはいえない。体を拭き、衣服を着けて、武蔵がやがて往来へ姿を現すと、何処からか出て来た最前の武家が、

「お訊ね申すが」

と、ふいに彼の前に会釈して、しげしげと顔を見ながらいった。「もしや尊公は、宮本殿ではござるまいか」

不審顔に、武蔵がただうなず頷くと、彼を糺ただしたその武家は、

「やあ、さてこそ」

と、自分の六感に凱歌をあげて、また、さもさも懐かしげに、
「とうとうお目にかかることが出来、大慶至極。……いや何かし
ら、今度の旅では、何処かでお目にかかれるような気持が、初め
からいたしておった」

と、独りで欣よろこんでいる。

そして武蔵が、何を問ういとま違もなく、とにかく今夜はご迷惑でも
同宿ねがいたいといい、

「さりとて、決して不審な者ではござらぬ。こう申しては、
烏漣おこ

のようなれど、いつも道中には、供の者十四、五名は連れ、乗り換え馬の一頭も曳かせて歩く身分の者でござる。念のため名乗り申すが、奥州青葉城の主あるじ、伊達政宗公だての臣下で、石母田外記いしもだけきという者でござる」

とつけ足した。

意にまかせて伴われてゆくと、外記は湖畔の本陣きに泊りを定め、通るとまず、

「風呂は」

と、自分で訊ねながら、すぐ自分で打ち消して、

「いや、尊公はもう、野天風呂でおすみじやな。では失礼して」と、旅装を解き、気軽に手拭を持って、出て行ってしまふ。

おもしろそうな男ではある。しかし武蔵にはまだ分っていない。一体、何であんなに自分の後を尋ね、自分に親しみを持っているのか？

「おつれ様も、お召替えなさいませぬか」

と、宿の女が、どてらを出して彼へすすめる。

「わしは要^いらぬ。都合によつては、ここへ泊るか泊らぬか、まだ分らぬのだから——」

「おや、左様でございますか」

開け放してある縁へ出て、武蔵はようやく暮れてきた湖水へ眸^{ひとみ}をやり、その眸に、またふと、

「どうしたか？」

と物思わしく、彼女の悲しむ時の睫毛まつげなどを、描いていた。

うしろで女中が膳をすえている物音が静かにする。やがて燈火あかりが背から映さす。そして欄てすりの前のさざ波は、見ているうちに濃藍のうらんから真つ暗になつてゆく。

「……はてな、この道へ来たのは、方角を取り違えたのではないか。お通は誘拐かどわかされたという。女を誘拐す程な悪い奴が、こんな繁華な町へさしかかるわけではない」

そんなことを考えたりしていると、耳に彼女の救いをよぶ声が聞えるような気がする。何事も天意だと達観していながら、すぐ居ても立つてもいられない心地がしてくる。

「いや、どうも、大きに失礼を仕つかまつた」

石母田いしもだ外記げきが戻つて来た。

「さ、さ」

と早速、膳の前へ、着座をすすめたが、自分だけのどてら姿に
気づいて、

「尊公も、どうぞ、お着替えください」

と、強たつていう。

それを武蔵も、強たつて固辞して、常に樹下石上のおきふしに馴
れている身、寝るにもこのままの姿、歩くにもこのままの姿、そ
れでなかなか寛くつろげもすれば窮屈でもございませぬと答えると、

「いや、それよ」

と、外記げきは膝を叩いて、

「政宗公のお心がけは、行住坐臥、やはりそこにござる。かくもあろうお人とは思っていたが、ウウムさすがは」

と、燈火を横にうけている武蔵の顔を、穴のあく程、見惚れて
いるのだった。

そしてわれに戻ると、

「いざ。おちかづきに」

と、杯を洗つて、これからの夜を心ゆくまで楽しもうとするもののように、慇懃いんぎんに一献いっけん向ける。

辞儀だけして、手は膝においたまま、武蔵は初めて訊ねた。

「外記殿。これは一体どうしたご好意でござりますか。路傍の拙者を追つて、このお親しみは？」

三

改まって、何のために？ と武蔵から訊かれると、外記は初めて、自分の独りのみ込みに気づいたらしく、

「いや成程、ご不審はごもつともじゃ。——しかしべつだん意味はないので、強^しいて、何のために、路傍のそれがしが路傍の尊公に、かくまでも親しみを持つかと問わるるならば——一言で申さば——惚れたのでござるよ」

と、いつてまた、

「あははは。男が男に、惚れたのでござるよ」

と、いい重ねる。

石母田外記げきは、これで十分、自分の氣持を説明したつもりらしいが、武蔵にとつては、少しも説明されたことにはならない。

男が男に惚れるということはありません。けれど武蔵はまだ、惚れる程な男に会った経験がない。

惚れるという対象に持つには、沢庵は少し恐こわすぎるし、光悦とは住む世の中が隔へだたりすぎ、柳生石舟齋となるともう余りに先が高すぎて、好きな人とも呼びかねる。

かくて過去の知己を振向いてみても、男が惚れる男などが、そういうある筈のものではない。——それをこの石母田外記は無造作に、
(あなたに惚れた)

と、自分へいう。

お追ついで従しようであろうか。そんなことを軽々しくいう男はよほど軽薄と思つてもよい。

けれど外記の剛毅な風貌から見ても、そんな軽薄な徒ではないことは、武蔵にも何だか分る気がするのである。

そこで彼は、

「惚れたと仰つしやるのは、いかなる意味でございましたか」

愈 《いよいよ》、真面目に、こう問い直すと、外記はもう次にいうことばを待っていたように、

「——実は、一乗寺下り松のお働きを伝え聞いて、失礼ながら、今日まで、見ぬ恋にあこがれておつたのじゃ」

「ではその頃、京都に御逗留ごとうりゆうでございましたか」

「一月より上洛して、三条の伊達屋敷だてにありましたのじや。あの一乗寺の斬合いがあつた翌日、何気なくいつも参る烏丸光広卿をやかたお館にたずねてゆくと、そこで種さまざま々な尊公の噂。お館は一度、尊公とも会つたことがあると仰せられ、お年ばえや、閱歴えつれきなども承つて、愈思慕のおもいに駆られ、どうかして一度、会いたいものと念じていた願いかなつて——今度の下向げこうに、計らずも尊公が、この道を下つているといふことを——あの塩尻峠に書いておかれた立札で承知したのでござる」

「立札で？」

「——されば、奈良井の大蔵とかをお待ちになる由を、札に書い

て、道ばたの崖へ立てて置かれたであろう」

「ああ、あれを御覧になられたのですか」

武蔵はふと世の中の皮肉をおぼえた。——此方こつちで探し求める者とは巡り会わずに、かえつて、思いがけない無縁の人にこうして探し当てられているとは——

だが、外記の心を聞いてみれば、この人の衷ちゆうじよう情は身に過ぎて勿体ない。三十三間堂の果し合いといい一乗寺の血戦といい、武蔵にとつては、むしろ慚愧ざんきな傷心いたみが多く、誇る気もちなどは毛頭ないが、あの事件は、相当世間の耳目を聳しようどう動して、うわさの波を天下に拡げているらしい。

「いや、それは面目ないことです」

武蔵は、心からいった。そして心から恥ずかしかつた。こんな人に惚れられる資格など自分にないと思うのであつた。

ところが外記は、

「百万石の伊達武士のうちにも、よい侍はずいぶんいる。また、こう世間を歩いてみるに、劍の達人上手も少なくない。したが、尊公のようなのは稀でござろう。末たのもしいというのは尊公のような若者じゃ。まったくそれがしは惚れました」

と、称揚して熄まない。——そしてまた、

「で、今夜は、それがしが一夕の恋を遂げた訳。ご迷惑でも、どうか一献お過ごしあつて、存分、わがままをいってもらいたいのじゃ」

と、手の杯を洗い直した。

四

武蔵は心を開いて杯をうけた。そして例のごとくすぐ赤くなつてしまう。

「雪国の侍は、みな酒が強うござるよ。——政宗公がおつよいので、勇将の下、もと弱卒なしで」

と、石母田いしもだげき外記は、まだなかなか酔うほどに行っていない。酒を運ぶ女に、幾度か、灯を剪きらせて、

「ひとつ今夜は、飲み明かし、語り明かそうではないか」

武蔵も腰をすえて、

「やりましょう」

と、笑みを含め、

「——外記殿は最前、烏丸のお館やかたへはよく参ると仰せられたが、光広卿とご懇意でございますか」

「ご懇意という程でもないが——主人の使いなどで、しげしげ参るうちに、あのように御気ごきさくなので、いつのまにか、馴なれなれ々しゅう伺つておるので」

「本阿弥光悦ほんあみどのお紹介ひきあわせで、私もいちど、柳町の扇屋でお目にかかりましたが、公卿くげにも似あわぬ、快活な御気性と見うけました」

「快活？ ……それだけでござったかの……」

と外記はすこしその評に不満らしく、

「もつと長く話してみたら、必ずあの卿が抱きみ

でもお感じになったであろうに」

「何分、場所が、遊里でござりましたゆえ」

「なるほど、それではあの卿が、世間を化かきみ

せなさるまい」

「では、あの方の、ほんとの相はどすがたこにあるのですか」

何気なく、武蔵が問うと、外記は坐り直して、ことばまで改め、

「憂うれいの中にあるのでござる」

と、いった。

そして、なお、

「——その憂いはまた、幕府の横暴にあるのでござりますると、いい足した。」

湖水のゆるい波音のあいだに、白々と燈ひは揺れていた。

「武蔵どの。——尊公はいつたい、誰のために、劍を磨こうとなされるか」

こんな質問は、受けたことがない。武蔵は率直に、

「自分のために」

と、答えた。

外記は大きく、

「ム。それでいい」

と頷うなずいたが、またすぐ、

「その自分は、誰のために」

と、たたみかける。

「……………」

「それも自分のためか。まさか尊公ほどな精しょうじん進しんを持つ者が、
小さな自己の栄達えいだつだけでは、ご満足がなるまいが……」

話は、こんな緒いとぐち口くちから始まったのである。いやむしろ外記が
こんな緒口を自分をつくつて、自分の話したい本心を披ひらき出した
といったほうが適切かも知れない。

彼の話によると、今、天下は家康の手に歸きして、一応、四海万
民みな泰平をたたえているやに見えるが、いったい、ほんとに民

のために幸福な世の中が出来たろうか。

北条、足利、織田、豊臣——と長いあいだにわたって、いつも虐げられてきたものは、民と皇室である。皇室は利用され、民は値なき労力のみにかき使われ——両者のあいだにただ武家の繁栄だけを考えて来たのが、頼朝以後の武家政道——それを倣った、今日の幕府制度ではあるまいか。

信長は、ややその弊に気づき、大内裡を造営して見せたり、秀吉も後陽成天皇の行幸を仰いだり、一般を賑わし楽しませる庶民の福祉政策を取ったりもしたが、家康の政策が本意とする所は、飽くまで徳川家中心で、ふたたび庶民の幸福も皇室も犠牲にして、幕府ばかり肥え太ってゆく専横時代がやって来るのではなからう

かと、世の趨く先が案じられる——。

「それを案じている者は、天下の諸侯中でも、わが主君伊達政宗公より他にはほかござらぬ。——そして公卿では烏丸光広卿などで」と、石母田外記は、いうのであった。

五

自慢というものは元より聞きづらいものだが、主人の自慢だけは聞いていても悪い気はしない。

わけてこの石母田外記は、主人自慢であるらしかった。今の諸侯の中で、心から国を憂い、また皇室へも、心から直すぐな心をよせ

ている者は、政宗を措おいて誰もいない——というのである。

「……ははあ」

武蔵はただそううなず頷く。

彼には、正直なところ、そう頷くだけの知識しかなかった。関ヶ原の以後、天下の分布図は一変したが、

(世の中がだいぶ変ったな)

と思うだけで、秀頼方の大坂系大名がどう動こうとしているか、徳川系の諸侯が何を目企もくろみつつあるか、島津や伊達などの惑星が、その中にどう厳存しているか——などという大きな時勢への眼は、改めて向けてみたこともないし、それらの常識は、至って浅かった。

それも加藤とか、池田とか、浅野、福島などといえ、武蔵にも、二十二歳の青年なみの観察は持っているが、伊達などという
と、もう漠^{ばく}として、

(表^{おもてだか} 高は、六十余万石だが、内容は百万石以上もある陸奥^{みちのく}の大藩)

という以外、これぞという知識も持ち合せていない。

だから、ははあと、^{うなず}頷くばかりで、時には疑い、時には、

(政宗とは、そんな人物か)

と、聞き入るのであった。

外記は、数々な例証をあげて、

「わが主人政宗は、一年二回は必ず国内の産物を挙げて、
近衛家^{このえけ}

の手より禁中へ献上なされる。——どんな戦乱の年でも、この伝
献を怠られたことはござらぬ。——今度、自分が都へ上つたのも、
その伝献の荷駄について上洛いたしたので、無事お役を果したの
で、帰り途だけ閑暇^{ひま}を賜わつて、ひとり見物がてら仙台までもど
る途中でござる」

といい、また——

「諸侯のうちで、城内に、帝座の間^まを設^{しつ}らえてあるのは、わが青
葉城があるばかりでござろう。御所の改築の折、古材木をいただ
いて、遠く船で運んで来たものとか申します。とはいえ、いと
も質素なもので、主人は朝夕、遠く仰拝する室としているばかり
でござるが、武家政道の歴史^{かんが}に鑑みて、一朝、見るに見かねる暴

状でも世に行われれば、いつ何時なんどきでも、朝廷方の御名をかりて、武家をあいてに戦うお心を抱いておられるのじゃ」

外記は、そういつてなお、

「そうじゃ、こういうお話もある。それは、朝鮮御渡海の時き——」

と、話しつづける。

「あの役えきの折には、小西、加藤など、各が功名争いして、いかがわしい聞えもござったが、政宗公のお態度はどうであつたか。朝鮮陣中で、背に日の丸の旗差物をさして戦われたのは、政宗公おひとりでござったぞよ。お家の御紋もあるに、何故に左様な旗差物をお用いあるかと人が問われた時、公はこう仰せられた。——

「いやしくも海外に兵をひっさげて参った政宗は、一伊達家の功名などで戦い申そうか。また、一太閤のために働き申すのでもない。この日の丸の旗を故郷ふるさとのしるしと見て身を捨て申す覚悟——とお答えになつたとか」

武蔵は、何しろ興味ふかく聞いていた。外記は杯を忘れてゐる。

六

「酒が冷えた」

外記は手をたたいて女を呼んだ。そしてなお、酒をいいつけそうなので、武蔵はあわてて、

「もう十分です。私は湯漬ゆづけを頂戴いたしたい」

固辞すると、

「……何の、まだ」

と外記は、残り惜し気につぶや呟いたが、相手の迷惑を思ったか、急に、

「では、飯を貰おうか」

と、女へいい直した。

湯漬を喰べながらも、外記はまだ頻りと主人自慢を話しつつづけている。中で武蔵が心を傾けさせられたものは、政宗公という一箇の武辺を中心として、伊達藩の者がこぞって、

（如何に武士たるべきか）

と——武士の本分を、「士道」というものを、磨き合っている風の旺さかんなことだった。

今の社会に、「士道」はあるかないか、といえは、武士の興つた遠い時代から、漠とした士道はあつた。けれど漠としたままそれは古い道徳となり、乱世のつづくうちに、その道義も乱れ果てて、今では太刀を持つ人間の間、かつての古い士道さえ見失われてしまっている。

そしてただ、

(武士だ)

(弓取りだ)

という観念だけが、戦国のあらしとともに強まっているのみで

ある。新しい時代は来つつあるが、新しい士道は立っていない。従つてその武士だ、弓取りだと自負する者のうちには、屢《しばしば》、田夫や町人にも劣る下劣なのが見かけられる。勿論、そういう下劣なる武將は、自ら滅亡を招いてはゆくが、そうかといつて、真に「士道」を研^{みが}いて、自国の富強の根本としてゆこうと自覚している程な將は——まだ豊臣系や徳川系の諸侯を見わたしても極めて少ないのではあるまいか。

かつて。

それは姫路城の天主の一室へ、武蔵が、沢庵のために、三年のあいだ幽閉されて、陽の目もみずに書物ばかり見ていたあの頃である。

あの沢山な池田家の蔵書の中に、一冊の写本があつたことを覚えてゐる。それには、

ふしきあんさまにちようしゆうしんかん
不識庵様日用修身卷

という題だいせん簽がついてゐた。不識庵とは、いうまでもなく、上杉謙信のことである。書物の内容は、謙信が自身の日用の修身を書きならべて、家臣へ示したものであつた。

それを読んで武蔵は、謙信の日常生活を知ると共に、あの時代、越後の富国強兵ないわれを知つた。——けれど「土道」というものにまではまだ思い至らなかつた。

ところがこよい、石母田外記の話をつらつら聞いてみると、政宗はその謙信にも劣らない人物と思われて来るのみでなく、伊達

一番には、この乱麻らんまの世の中にあつて、いつのまにか、幕府権力にも屈しない「土道」を生み、それを磨き合っている風が勃ぼつ々ぼつとして、ここに在る、石母田外記一人を見ても、分る気もちがするのであつた。

「いや、思わず、それがしばらくり勝手なことを喋しゃべ舌べつたが……どうじやな武蔵殿。いちど仙台へもお越しなさらぬか。主人は至つて無造作なお方でござる。土道のある侍なら、牢人であろうと、誰であろうと、お気易くお会いなされる質たちじや。それがしから御推挙もいたそう。ぜひおいでなされ。——ちようどころした御縁の折、何ならば、御同道申してもよいが」

膳を下げてから、外記は、熱心にこうすすめたが、武蔵は一応、

「考えた上で」と答えて、臥床ふしどにわかれた。

べつな部屋へわかれて、枕についてからも、武蔵は眼が冴えていた。

——士道。

じつと、そこに、思索をあつめているうちに、彼は、忽然こつねんと、それを自己の剣かえりに省みて悟った。

——劍術。

それではいけないのだ。

——劍道。

飽くまで劍は、道でなければならぬ。謙信や政宗が唱えた士道には、多分に、軍律的なものがある。自分は、それを、人間的

な内容に、深く、高く、突き極めてゆこう。小なる一個の人間と
いうものがどうすれば、その生命を托す自然と融ゆうごうちょうわ合調和して、
天地の宇宙大と共に呼吸し、安心と立りつみよう命の境地へ達し得るか、
得ないか。行ける所まで行ってみよう。その完成を志して行こう。
剣を「道」とよぶところまで、この一身に、徹してみることだ。

——そう心に決定をつかんでから、武蔵はふかく眠りに落ちた。

錢ぜに

眼をさますと、武蔵はすぐ思い出す。——お通はどうしたろう。また、城太郎はどこを歩いているだろう。

「やあ昨夜は」

と、朝の膳で、石母田外記と顔をあわせる。忘れるともなく話に紛れて、やがて旅籠はたごを立ち出ると、この二人も、中山道なかせんどうを往還する旅人の流れの中に交じって行く。

武蔵は、その行き来の流れに、絶えず無意識のうちにも眼をくばっていた。

似た人の後ろ姿にも、はつとして、

(もしや?)

と、すぐそれかと思う。

外記も気がついたのか、

「誰方か、お連れでも、お探しかの」

と、訊く。

「さればです」

と、武蔵は掻かいつまんで事情わけを話し、江戸へ参るにしても、途み々ちみち、その二人の安否を心がけて行きたいから、ここでべつな道を取りたいと、それを機しおに、夜来の礼をのべて別れかけた。

外記は、残念そうに、

「折角よい道連れと存じたが、それではぜひもござらぬ。——したが、昨夜も諄々くどくどお話ししたが、ぜひ一度、仙台の方へお越しください」

かたじけの
「忝う存じます。——折もあらばまた」

「伊達だての士風を見ていただきたいのじゃ。さもなくば、さんさ時し雨ぐれを聞くつもりでおざれ。歌もいやならば、松島の風光を愛めでに渡らせられい。お待ち申すぞ」

そういつて、一夜の友は、すたすたと和田峠の方へ一足先に行つてしまった。何となく心ひかれる姿だった。そして武蔵は心のうちで、いつか、伊達の藩地を訪ねてみようとその時思つた。

その時代、こういう旅人に出会うことは、武蔵ばかりでなかつたろう。なぜならば、まだ明日あすをも知れぬ天下の風雲である。諸国の雄藩は頻りと人物を求めている。路傍からよい人物を見出して行つて、主君へ推挙することは、家臣として、大きな奉公の一

つだからであつた。

「旦那、旦那」

後ろで誰か呼びかける。

一度和田の方へかかりながら武蔵がまた、足を回めぐらして、下しも諏訪すわの入口へもどり、甲州街道と中山道のわかれに立って、思案にくれていると、その姿を見かけて来た宿場人足たちの声なのである。

宿場人足といつても、荷持にもちもあれば馬曳うまひきもあるし、これから和田へかけては登りなので、極めて原始的な山駕の駕かきもいる。

「——何か？」

と、武蔵はふり返つた。

その姿を、無作法に眼で撫で廻しながら、人足たちは木像蟹もくぞうがにのような腕を拱くんで近づいて来た。

「旦那あ。さつきからお連れを探している様子だが、お連れは別べ嬪つびんですかえ。それともお供でもおあんなさるかね」

二

持たせる荷物もないし、山駕かごを雇う気もない。

武蔵はうるさくて思つて、

「いや……」

と、首を振つたのみで、黙々と、人足たちの群れを離れて、歩

みかけたが、彼自身まだ、

(西せんか？ 東せんか？)

心に迷っている姿だった。

一度は、何事も天意にまかせて、自分は江戸表へと、心にきめたが、やはり城太郎をふと考え、お通の身を思うと、そうも行かない。

(そうだ、きょう一日だけでも、この附近を尋ねてみよう。……もしそれでも知れなければ、ひとまず諦めて先へ立つとして)

彼の考えがきまった時、

「旦那、もしや何か、お探しになることでもあるなら、どうせあつしらは、こうして陽なたぼっこして遊んでいるのでございます

から、お指図なすつておくんなさいまし」

また、寄つて来た人足の一人がいうと、他の者も、

「駄賃なんざあ、いくらくれとは申しません」

「一体お探しになつてゐるのは、お女中でござんすか、ご老人で
すかえ」

余りいうので、武蔵も、

「実は——」

と仔細を話して、誰か、そんな少年と若い女を、この街道筋で
見かけた者はないかと訊くと、

「さあ？」

と、彼らは顔を見合わせ、

「誰もまだ、そんなお人は、見かけねえようですが、なあに旦那、こちとらが手分けをして、諏訪塩すわしおじり尻の三道にかけて、探すとなれやあ造作アありませんぜ。誘拐かどわかされた女子おなごだって、道のねえ所を越えてゆく筈はなし、そこは蛇じゃの道はへびつてもんで、訊き廻るにも、土地に明るいこちとらでなければあ分らねえ穴がございますからね」

「なるほど」

武蔵はうなずいた。大きにそれは理窟がある。土地にも不案内な自分が、いたずらに歩いてみたり焦躁するよりは、こういう輩やからを使えば忽ち、二人の消息は分るかも知れない。

「——では頼む、ひとつ其方そのほうたちの手で、探してくれまいか」

率直にいうと、人足たちは、

「ようがす」

と、一斉にひき受けてから、しばらくがやがや手分けの評議をしていたが、やがて一名の代表者が前へ出て、もみで揉手をしながら、

「ええ、旦那え。エへへへ、まこと寔に申しかねますが、なにしろ裸商売、こちとらあまだ、朝飯も喰べておりません。夕方までにやあ、きつと、お尋ねのお人を突き止めますから、半日の日雇い賃と、わらじ銭とを、ちつとばかりやっておくんなさいませんか」

「おう、元よりのこと」

武蔵は当然に思つて、貧しい路銀をかぞえてみたが、彼の要求する額には、その全部をはたいても足りなかつた。

武蔵は金の貴重なことを人よりも身に沁みて知っている。なぜならば、孤独である。また旅にばかり暮しているから。——しかし武蔵はまた、金に執着を持ったことがない。それは、孤独の彼には、誰を扶養する責任もない。その身一つは、寺に宿り、野に臥し、時には知己の清浄を恵まれ、なければ喰べずにしても、その痛痒つうようには感じない。——そのうちに何とかなつて来たのが今日までの流浪生活の常であつた。

考えてみると、ここまで来た道中の費つひえも、一切お通が見てくれたのだつた。お通は、烏丸家から莫大な路銀を恵まれ、それをもつて、道中の経済をしていた上、武蔵へもなにがしかの金を頒わけて、

(お持ちになつていらつしやいまし)

と、渡してくれたものだった。

そのお通からもらつた全部を、武蔵は人足たちに皆渡して、

「これでよいか」

といった。人足たちは、てのひら掌へ錢を頒わけ合つて、

「ようがす。負けておきましよう。——じゃあ旦那は、すわ諏訪明神

の楼門でお待ちなすつていておくんなさい。晩までにや、きつと、
よ吉いお報しらせをいたしますから」

と、くも蜘蛛の子みために散らかつて行つた。

八方、人手を分けて、探しているとはいえ、この一日を、空しく待っているのも智慧がないので、武蔵は武蔵で、高島の城下から、諏訪一円を歩き暮した。

お通と城太郎の消息を尋ね歩いていると、武蔵は、こうして暮れてゆく一日が惜しかった。彼の頭には、絶えず、この辺の地勢とか、水理とか、また、誰か聞えた武術家などはいないかなどと——そのほうへ頻りと心が動く。

だが、その両方ともに、大した収穫もなく、やがて黄昏頃、たそがれ人足たちと約束した諏訪明神の境内へ来てみると、楼門の辺にも、まだ誰も来ている様子がない。

「ああ、疲れた」

眩つぶやきながら、彼は楼門の石段へどつかり腰をおろした。

気づかれといふのか、こんな眩つぶやきが、嘆ためいき息のように出ること

は滅多にない。

誰も来ない。

やや退屈を感じて広い境内を、一巡りしてまた戻つて来た。

まだ約束した人足は一人も見えていなかった。

闇の中で、時々、夏かつ、夏かつ、と何か蹴るような響きがするの
で、武蔵は、時々、はつとわれに返るような眼をみはつた。――

それが気にかかるらしく、楼門の石段を降りて、ふかい木蔭の中
にある一棟の小屋を窺うかがつてみると、その中には、白い神馬しんめが繫かが

れているのだった。耳についた物音は、神馬が床を蹴つて暴れる音だつた。

「御牢人、なんじゃ」

馬に飼糧かいばをやつていた男が、武蔵の影を振り向いて訊ねた。

「何ぞ、社家に御用事でもあるのか」

咎とがめるような眼つきでいう。

そこで武蔵が、わけを話して、一応怪しい者でないことを弁明すると、白はくちよう丁を着ているその男は、

「あははは。あははは」

腹を抱えて笑い止まないのである。

憤むつとして武蔵が、何を笑うかというと、その男はなお笑つて、

「あんたは、そんなことで、よう旅が出来なさるの。なんであの道中の蠅はえみたいな悪人足が、先に銭を取って、正直に一日中、そんなお人を探して歩いているものか」

と、いうのであつた。

「では、手分けをして、探すといつたのは嘘であろうか」

武蔵が糺ただすと、こんどはむしろ気の毒になつたように、その男も真顔になつていった。

「お前さんは、騙だまされたのじゃ。——道理で、きよう十人ばかりの人足が、裏山の雑木林で、昼間から車座になつて、酒をのみながら博奕ばくちなどしておつた。おおかた、その連中であつたかもしれぬ」

それから、その男は、この諏訪塩尻あたりの往還で、旅客が人足の悪手段にのつて路銀をせしめられる屢 《しばしば》の实例を幾つも挙げて、

「わたる世間も同じ事ですよ、これからはよく御用心なさるがよい」

と、空になつた飼糧かいばおけ桶をかかえて、彼方へ行つてしまった。

武蔵は、茫然としていた。

「……………」

何か、大きな未熟を自己に発見したような気持で。

剣を持つては、隙がないと自負している自身も、世わたりの俗世間に立ち交じる、無智の宿場人足にもほんろう翻弄される自分でしか

なかった——と明らかに世俗的な不鍛錬が分ってくる。

「……仕方がない」

武蔵はつぶやいた。

口惜しいとも思わないが、この未熟は、やがて三軍を動かす兵法のうえにも現れる未熟である。

これからは謙虚になって、もつと俗世間にも習おうと思う。

——そして彼はまた、楼門の方へ足を返して来たが、ふと見ると、自分の去った跡へ来て、誰か一人立っている。

四

「才。旦那」

楼門の前で辺りを見廻していたその人影は、武蔵の姿を見つけると、石段を降りてきて、

「お探しになつていらっしゃるお人の、一方だけ分りましたから、お報しらせに参りましたんで」

と、いった。

「え？」

武蔵はむしろ意外な顔して——よく見るとそれは、今朝、半日の駄賃をやつて、八方へ手分けして走らせた宿場人足の中の一人であつた。

たつた今、

(騙だまされたのだ)

と、神馬しんめ小舎ごやの前で嘲わらわれて来ただけに、武蔵は、意外だったのである。

同時に彼は、自分から半日の駄賃と酒代さかてを詐取さしゆした十幾人もの人間が世間に満ちてはいるが、

(世間の全部が、詐欺師さぎしではない)

と分つて、それが先ず、欣うれしかった。

「一方が分つたとは、城太郎という少年の方か、お通の方が知れたのか」

「その城太郎っていう子を連れている、奈良井の大蔵さんの足どりが分つたのでございます」

「そうか」

武蔵は、それだけでも、ほっと心の一面が明るくなった。

正直者の人足は、こう話した。

——今朝、駄賃をせしめた仲間なかまの手輩てあいは、元よりそんな者を探すつもりは毛頭ないので、皆、仕事を怠けて、博奕ばくちに耽っているが、自分だけは、ご事情を聞いてお気の毒だと思い、一人で塩尻から洗場せばまで行つて、立場立場の仲間に、尋ねあるいてみると、お女中衆の消息はさつぱり知れないが、奈良井の大蔵さんなら、つききょうの午頃ひる、諏訪すわを通つて、和田の山越えにかかつて行つたということ、中ちゆうじき食じきをした旅籠屋はたごやの女中から聞きました——
——というのである。

「よく知らせてくれた」

武蔵は、この人足の正直と功勞に對して、酒代を酬むくいたいと思つたが、ふところに手を当ててみると、路銀はみなほかの狡ずるい連中に取りられてしまったので、考えてみると、今夜の飯代しか残っていない。

(——でも、何かやりたい)

と、彼はなお、考えた。

しかし、身につけている物で、値あたいのある物などは何一つもない。彼は遂に、今夜は食べずにしのぐときめて、一度の飯代にと残しておいたわずかな錢を、革かわぎんちやく巾着の底を払つて、皆、その男に与えてしまった。

「ありがとうございます」

正直者は、当然なことをして、過分な礼に会ったので、額錢をひたいに押しただくと、ほくほくして立ち去った。

——もう一箇の錢もない。

武蔵は、無意識の中に、錢の後ろ姿を見送っていた。与えながら、与えた後は、ちよつと途方に暮れた気持になった。すきばら空腹はもう夕刻から頻りに迫っていたのであるし——。

けれど、あの錢が、あの正直者に持ち帰られれば、自分の空腹をみたす以上、何かよいことに費つかわれるにちがいない。それからあの男は、正直に酬あしたわれることを知って、明日もまた、街道へ出て、ほかの旅人へも正直に働くだらう。

「そうだ……この辺で一宿の軒端を借りて朝を待つより、これから和田峠を越えて、先へ行つたという奈良井の大蔵と城太郎に追いつこう」

今夜のうち和田を越えておけば、明日は何処かでその人と城太郎に出会うかも知れない。——武蔵は忽ち思い立って、やがて諏訪すの宿場を出はずれ、久しぶりに暗い道を、独りすたすたと夜旅の味を踏みしめて行つた。

五

——独り夜を歩む。

武蔵は好きだった。

これは彼の孤独な生来から来るものかも知れない。自分の踏むあしおと 躓音をかぞえ、耳に天空の声を聞いて真つ暗な夜道を、黙々と歩いていると、すべてをわすれて、楽しいのであった。

人中の賑やかな中にいると、彼のたましいはなぜか独り淋しくなる。淋しいやみよ 暗夜を独り行く時は、その反対に、彼の心は、いつも賑わしい。

なぜならば、そこでは、人中では心の表に現れないさまざな実相がうか 泛んでくるからであつた。世俗のあらゆるものが冷静に考えられると共に、自分の姿までが、自分から離れて、あかの他人を見るように、冷静に観みることができた。

「……才。燈ひが見える」

しかし——

行けども行けども闇の夜道に、ふと一つの燈を見出すと、やはり武蔵もほつと思う。

人の住む燈ひ！

われに返った彼の心は、人恋しさや、なつかしさに、顫ふるえるほどだった。もうその矛盾むじゆんを自分に問うている違いとまもなく、

「——焚火たきびをたいているらしい。夜露にぬれた袂たもとをすこし乾かしてもらおう。ああ、腹もすいた。稗ひえがゆ粥がゆなどあらば無心して」

と、足はおのずとその燈へ向って急いでいる。

もう夜半よなかであろう。

諏訪を出たのは宵だったが、落合川の溪橋たにばしを越えてからはほとんど山道ばかりだった。一の峠は越えたが、まだ先に和田の大峠と大門峠だいもんとうげが、星空に重なっている。

その二つの山の尾根と流れ合っている広い沢の辺りに、ポチと、燈ひが見えたのである。

近づいてみると、たった一軒の立場茶屋だった。廂ひさしの先には「馬うまつな繋なぎ」と呼ぶ棒杭ぼうぐいが四、五本打ち込んであり、この山中のしかも深夜に、まだ客があるのか、土間のうちからパチパチと火のはぜる音に混まじって、粗野な人声が洩れてくる。

「——さて？」

と、当惑した顔つきで、武蔵はその軒端に立ち迷った。

ただの百姓家か木樵きこりの小屋でもあれば、暫時ざんじの休息も頼めるし、稗ひえがゆ粥の無心ぐらいはきいてもくれるであらうが、旅人を相手に商売している茶店では、一ぱいの茶も、茶代をおかずに立つわけにはゆかない。

どう考えても、金はもう一枚の鑿びたも持っていないのだ。しかし、温かそうな煙に混じって洩れる煮物においては、彼の飢えをつよく思い出させて、もう到底、去り得ないほどだった。

「そうだ、仔細をいって、彼品あれでも、一飯あたいの値ちの代りに取つてもらおう」

そう思いついた抵当の品というのは、背に負っている武者修行包みの中の一品だった。

「……ごめん」

彼がそこへ入るまでには以上のような当惑やら苦心のあげくであつたが、中でがやがやいつていた連中には、まったく唐突な姿だつたに違いない。

「……？」

びつくりしたように皆、黙つてしまった。そして彼の姿を、いぶかしげに見まもつた。

土間の真ん中に大きな自在鉤じざいが懸かつている。土足のまま囲めるように炉ろは土へ掘つてあり、鍋には、猪ししの肉と大根がふつつ煮えていた。

それを肴さかなに、樽たるや床しょうぎ几ぎへ腰かけて、酒壺を灰へ突っこみなが

ら、茶碗を廻していた野武士ていの客が三人。——老爺おやしは後ろ向きのまま今、漬物か何か刻みながら、その客たちと、馬鹿ばなしでもしていたらしい。

「なんだ？」

老爺に代つて、そういつたのは、中でも眼のするどい、五分月さ代かやきの男だった。

六

猪汁ししじるのにおいや、この家の暖かい火の気につつまれると、武蔵の飢渴きかつは、もう一刻ときもしのべなくなつた。

居合せた野武士ていの男が、何かいったが、それに答えもせず、ずつと通つて、空いている床しょうぎ几の隅を占め、

「おやじ、湯漬でもよい、はやく飯を支度してくれい」

亭主は冷飯ひやめしと猪汁ししじるを運んで来て、

「夜どおしで、峠をお越えなされますか」

「ウム、夜旅じゃ」

武蔵はもう箸を取っている。

猪汁の二杯目を取つて、

「きよようの昼間、奈良井の大蔵という者が、一名の童わらべを連れて、峠を越えて行かなかつたであろうか」

「さあ、存じませんなあ。——藤次どのや、他の衆のうちで、そ

んな旅の者を見かけた者はごぎいませんか」

おやじが、土間炉の鍋越なべごしに訊ねると、首を寄せて、酌つぎ合つたり囁ささやいたりしていた三名は、

「知らねえ」

膠にべもなく皆、顔を振つた。

武蔵は満腹して、一碗わんの湯をのみほし、体も温まると共に、さて食事の価あたいがかりになつた。

最初に、事情わけを告げて、それからにすればよかつたが、他ほかに三名の客が飲んでいるし、慈悲を乞うつもりでもないので、先に腹を拵たえてしまつたが、もし亭主がきき入れてくれなかつたらどうしよう。

その時には、刀の筭こうがいでも——と思いきめて、

「おやじ、寔まことに相済まぬ頼みだが、実は、鳥目を一錢も持ち合せ
ておらぬ。——と申しても、無心を頼むわけではない、此方このほうが持
ち合せておる品物を、その価として取っておいてくれまいか」

いうと、案外気やすく、

「ええ、よろしゅうござりますとも。——したが、そのお品とは、
なんでございますな」

「観音像じゃ」

「え、そんな物を」

「いや、某なにがしの作しというような品ではない。拙者が旅のつれづれに、
梅の古木へ小刀彫ほりで彫った小さい坐像の観世音。一飯の価には

足らぬかもしれぬが……。まあ、見てくれい」

背に負っている武者修行包みの結び目を解きかけると、炉の向う側にいる三名の野武士たちは、杯を忘れて皆、武蔵の手を凝視していた。

武蔵は、包みを膝にのせた。それは雁皮がんぴの紙縫こよりに渋汁しぶを引いた一種の糸で、袋のように編んだ物である。武者修行して歩く者は皆、その袋へ、大事な物を押し籠めて負っているが、武蔵の包みの中には、今彼のいった木彫きぼりの観音と、一枚の肌着と貧しい文房具しかはいつていなかった。

編あみぶくろ袋の一方を持って、武蔵はそれを振り動かした。すると、

中からずしりと、土間へ転がった物がある。

「……やっ？」

これは、茶屋のおやじとまた、炉の向う側にいた三名の口から出た声だった。——武蔵は自分の足元へ眼を落したまま、ただ唾^あ然^{ぜん}たる顔でしかない。

金の包みである。

慶長小判や銀や金^{こんじき}色のかねが、そこらまで散らばった。

（——誰の金？）

と、武蔵は思った。

四人も、そう疑ぐつていられるらしく、息をのんで、土間の金へ、眼を奪われていた。

武蔵は、もう一度武者修行袋を振ってみた。すると、金の上へ、

さらにまた、一通の書面がこぼれた。

七

怪しみながら披ひらいてみると、それは石母田いしもだ外記げきの置手紙であつた。

それもたつた一行、

当座の御費用に被成なごるべく候

外記

としか書いてない。

けれど少なからぬ金である。この一行が何をいつているか。武蔵にはわかる気もする。要するにこれは、伊達政宗ばかりでなく、

諸国の大名がやっている一つの政策である。

有為の人材を常に召し抱えておくことはむずかしい。しかし時代の風雲は、愈々、有為な人材を要望している。関ヶ原くずれの浮浪人は、路傍に満ちて、禄を漁りあさあるいているが、さて、これはという人材は極めてない。あれば忽ち、家の子郎党の厄介者付きでも、何百石、何千石の高禄で、すぐ売れ口がついてしまう。

いざ戦いくさ——という日でも、集まる雑兵はいくらでも集まるが、求めても容易たやすく来ないような人物を、今は各藩で血眼ちまなこに探しているのだ。そして、これかと思う人物には、何らかの方法で、必ず恩恵を売っておく。或は黙契もっけいをむすんでおく。

その、大物どころでは、大坂城の秀頼が、後藤又兵衛に捨て扶

持をやっていることは天下の周知である。九度山に引籠っている
真田幸村へ、年ごとに、大坂城からどれほどな金銀が仕送りさ
れているかくらいなことは——関東の家康でも調べ上げていると
ころであろう。

閑居している佗わび牢人に、そんな生活費のいるはずはない。し
かし、幸村の手から、その金銀はまた、零細な幾千人の生活費に
なつてゆくのである。そこには、戦いくさのある日まで、遊んで暮して
いる沢山な人間が町に隠れていることはいうまでもない。

一乗寺下り松のうわさから、後を追いかけて来た伊達家の臣下
が、すぐ武蔵の人物に、食指をうごかしたことは当然すぎる。——
既にこの金が、明らかに、外記の底意そこいを証拠だてていると見て

間違いはない。

——困った金である。

費^{つか}えば恩を買^かう。

なければ？

（そうだ、金を見たから、惑うのではないか。なければ、ないでもすむものを）

武蔵はそう思つて、足もとに落ちてゐる金を拾い集め、元通りに武者修行袋へつつみこんで、

「——では亭主。これを飯の代に、取つておいてくれい」

自分の手すさびに彫^{きぼり}つた木彫の觀世音をそこへ出すと、茶店の

老爺^{おやじ}は、今度は甚だしく不平顔で、

「いけませんよ旦那、これやあ、お断りしますべ」

と、手を出さない。

武蔵がなぜ？ というと、

「なぜって、旦那は今、持合せが一文もねえと仰っしゃるから、観音様でもいいといったのじゃが……見ればないどころか、持て余している程、お金を持ってござらっしゃるではねえか。どうか、そんなに見せびらかさねえで、お金で払っておくんなさいまし」

最前から、酒の酔をさまして、固唾かたずをのんでいた三名の野武士は、おやじの抗議を、尤もだというように、後ろでうなずいていた。

八

自分の金ではない——というような弁解を試みるのも、この場合は、愚の至りである。

「そうか……では仕方がない」

武蔵は、やむなく一箇の銀片を出して、おやじの手に渡した。

「はて、剩つり銭がないが。……旦那様、もつと細かいお鳥目で下さいませ」

武蔵はまた、金を調べてみた。しかし包みは慶長小判と、それがいちばん小さくて安い銀ぎん片ぺんであった。

「剩つり銭はいらぬ、茶代に取っておくがいい」

「それは、どうも」

と、おやじは急に打つて変る。

もう手をつけた金なので、武蔵はそれを腹巻へ巻いた。そして、茶店のおやじから嫌われた木彫の観音像を、元のように、武者修行袋に入れて背中へ背負う。

「まあ、あたって行かつしやれ」

と、おやじは薪まきをくべ足したが、武蔵はそれを機しおに、戸外そとへ出た。

夜はまだ深い。けれど腹ごしらえもまずできた。

夜明けまでに、この和田峠から大門峠まで踏破してしまおうと思う。昼ならば、この辺りの高原は、石楠花しやくなげやりんどや薄雪

草も数あるらしいが、夜はただ渺びようとして、真綿のような露が地を這っているばかり。

花といえ、空こそ、星のお花畑とも見える。

「おおおいっ」

立場茶屋を離れておよそ二十町も来た頃である。

「——今の旦那あ、お忘れ物をなされたぞよ」

さつき茶店に居合せた野武士ていの中の一入であつた。

側へ駈けて来て、

「早いお脚だの、あんたが出て行つてから、しばらくしてから気づいたのじゃ。——このお金は、あんたの物じやろうが」

てのひら
掌に、一粒の銀片ぎんぺんをのせて、武蔵に見せ、それを返そうと追

にかけて来たのだという。

いやそれは自分の物ではあるまいと武蔵はいったが、野武士での男は、かぶりを振って、確かにあなたが金包みを落した時、この一片が土間の隅へ転がったものに違いない、と押し戻して来る。

数えて持っている金ではないので、そういわれてみると、そうかも知れないと武蔵は思うほかなかった。

で、礼をいって、それを袂たもとに納めたが、武蔵は、この男の正直な行為が、なぜか少しも自分の感激に触れないことに気づいた。

「失礼じゃが、あんたは、武道を誰まなに習びなされた」

用がすんでからも、男は要らぬ話をしかけて、側へついて歩く。

それもおかしい。

「我流ですよ」

と、武蔵は、投げつ放しな語調でいう。

「わしも、今は山に籠つてこんな業わざをしておるが、以前は侍でな」

「ははあ」

「さつき居合せた者も皆そうじゃ。蛟こうり龍りょうも時を得ざれば空し

く淵ふちに潜むでな、みな木樵きせりをしたり、この山で、薬草採りなどし

て生計たつきをたてているが、時到れば、鉢の木の佐野源左衛門じやな

いが、この山刀ひとこし一腰ひとこしに、ぼろ鎧よろいを纏まとつても、名ある大名の陣場

を借りて、日頃の腕を振うつもりじやが」

「大坂方ですか、関東方でございますか」

「どっちでもいい。まずやはり旗色を見て加わらぬと、一生を棒にふるからなあ」

「はははは、大きに」

武蔵は、まるで相手にしない。なるべく足も大股に努めてみたが、男もそれにつれて大股になるので何の効かいもない。

そしてなお、気になることには、自分の左側へ左側へと、男は好んで寄り添ってくるのだった。これは、心ある者は最も忌むところの、抜討ちを仕かける時の姿勢である。

九

——だが武蔵は兇暴な道連れの狙っているその左側を、わざと空^あけて、甘んじて相手に窺^{うかが}わせておいた。

「どうじやな修行者。もし嫌でなかったら、おれたちの住居へ来て、今夜は泊ってゆかないか。……この和田峠の先には、大門峠がある。夜明けまでに越えるというても、道馴れない者にはどうして大変だ。これから先は、道も嶮^{けわ}しくなるばかりだし」

「ありがとうございます。おことばに甘えて、泊めて戴きましようかな」

「そうするがいい、そうするがいい。——だが何も、もてなしはないぜ」

「元より、体さえ横たえれば、それでいいのでございます。して、

お住居すまいは」

「この谷道から、左の方へ五、六町ほど登った所さ」

「えらい山中にお住いですな」

「さつきもいった通り、時節の来るまで、世から隠れて、薬草採りをしたり、獵りようし師の業わざをまねたりして、あの者たちと三人して暮しているのじゃ」

「そういえば、後のお二人は、どうなされましたか」

「まだ立場で飲んでいるじやろう。いつも彼家あそこで飲むと酔いつぶれて、小屋まで担いで行く役がおれときまつているが、今夜は、面倒なので置いて来た。……おツと、修行者、その崖がけを降りるとすぐ谿たに川がわの河原だ、あぶないから気をつけろよ」

「彼方^{むこう}へ、渡るのですか」

「ム……その流れの狭い所の丸木橋を渡って、谿川づたいに、左へ登ってゆく……」

と、男は低い崖の途中に立ち止まっている様子だった。

武蔵は、振り向きもしない。

そして丸木橋を渡りかけていた。

崖の中途からぽんと跳んだ男は——いきなり武蔵の乗っている丸木橋の端に手をかけて、彼の姿を、激流の中へ振り落そうとして、持ち上げたが、

「何をする？」

と、河の中の声にぎよっとして首を上げた。

武蔵の足は、橋を離れて、飛沫しぶきの中の岩の上に、鵺せきれいが止まつたように立っていた。

「——あッ」

抛ほうり出した丸木橋の端が、白い飛沫しぶきを途端に散らした。その水玉の傘が地まで落ちないうちに、河中の鵺せきれいはぱつと跳んで返つて、いわゆる抜く手も見せない間髪に、狡智こうちに長たけたその卑怯者を斬り撲なぐつた。

——こんな場合、武蔵は、斬つた死骸には眼もくれなかつた。死骸がまだ踰よろめいているうちに、彼の劍は、もう次の何ものかを待っている。彼の髪は、鷲わしの逆毛さかげのように立って、満山皆敵と観みるものようであつた。

「……………」

果たして、ぐわあん！ と谷間の撃けるような音が溪流の向う側からとどろいた。

いうまでもなく、猟銃の弾である。弾は正しく、武蔵の在った位置を、ぴゅんと通りぬけ、後ろの崖土の中へ潜った。

弾が土の中へ入った後から武蔵も同じところへ仆れた。そして対岸の沢を見ていると、螢の火みたいな赤いものがチラチラする。

——二つの人影が、そろそろと河べりまで這い出して来る。

一足先に冥土へ立った卑怯者は、後の二人の仲間は、立場の居酒屋でのみつぶれていると嘘をいったが、先へ廻って、待ち伏せの手ぐすね引いていたのである。

それも、武蔵の考えていた通りであつた。

獵師だとか、藥草採りくすりだとかいっていたのは勿論うそで、この山に巢喰う賊であることは疑ぐつてみるまでもない。

けれど、さつき、

(時節が来るまで)

と、途々みちみちいつた言葉は、ほんとであろう。

どんな盜賊でも、子孫まで盜賊でやつて行こうと考えている者は一人もあるまい。乱世の方便としての世渡りに、諸国には今、山賊と野盜と市盜が急激にふえつつある。そして、いざ天下の合戦となると、これが皆、一かどの鑄槍さびやりとボロ鎧よろいをかついで、陣借りして、真人間に生き甦かえるのだ。——ただ惜しいかなこの手輩てあい

は、雪の日、客に梅を焚たいて、時節を待ちながらも時節を度外している雅懐がかいはないのである。

虫焚むしたき

一

火繩ひなわを口に咥くわえ、一人は二度目の弾込たまごめをしているらしい。

もう一人は、身を屈かがめて、こつちを見ている。対岸の崖の下へ、武蔵の影が仆れはしたが、なお疑つて、

「……大丈夫か」

と囁ささやいているのだった。

鉄砲を持ち直したのが、

「確かだ」

と、うなずいて、

「手応てごたえがあつた」

という。

それで安心して、二人は丸木橋を頼つて、武蔵の方へ渡つて来ようとした。

鉄砲を持った方の影が、丸木橋の中ほどまでかかつて来ると、武蔵は起き上がった。

「——あッ」

引金に懸けた指は、もちろん、正確を失っていた。どうんと、弾は空へ走って、ただ大きなこだま響を呼んだ。

ばらばらつと、二人は引り返して、たにがわ谿川ぞいに逃げ出した。武蔵が追いかけてゆくと、ごうはら業腹になつたものか、

「やいやい、逃げる奴があるものか、相手はひとり、この藤次だ
けでも片づくが、引り返して助太刀しろ」

鉄砲を持たない方がけなげにもこういつて立ち止まった。

自分で藤次と名乗っているし、物腰から見ても、これが山さんさい寨
に住む賊の頭目であろう。

呼び返されて子分か分らぬが、もう一名の賊は、それに励まされ、

「おうっ」

と答え、火縄を抛りすてたと思うと、鉄砲を逆手にして、これも武蔵へかかつて来た。

武蔵はすぐ感じた。これはそう根からの野武士ではない。わけでも、山刀を揮って来た男の腕に多少筋がある。

——だが、彼のそばへ近づくと、賊の二人とも、一撃に匆ね飛ばされたように見えた。鉄砲を持った方の男は、完全に肩から袈裟にふかく割りこまれて、溪流の縁から、だらんと半身落ちかけている。

口程もなく、藤次と名乗った賊の頭目は、小手の傷を抑えながら、逃足早く、沢から上へ駆け上ってゆく。

ざぎざぎ、と土の落ちてくる後を辿^{たど}つて、武蔵も何処までも、追つて行つた。

ここは和田と大門峠の境で、山毛櫨^{ぶな}が多いままぶな谷と呼ばれている。沢を登りつめた所に、一^{ひとむら}叢の山毛櫨につつまれた家があつた。その家もまた、山毛櫨の丸太で組み建てたような巨^{おお}きな山小屋に過ぎない。

ボツと、そこに燈^ひが見えた——

家の内にも明^さりが映^さしているが武蔵の眼に見えたのは、その家の軒先に、誰か、紙燭^{ししよく}を持って立つてでもいるらしい燈^ひであつた。

賊の頭目はばたばたと、それへ向つて逃げて行きながら、

「燈ひを消せつ」

と呶鳴なつた。

すると、袂たもとで燈ひをかばいながら、戸外そとに立たつていた影かげが、

「どうしたのさ」

と、いった。

女の声であつた。

「まあ、ひどい血になつて——。斬やられたのかえ。今、谷の方で

鉄砲の音がしたから、もしやと思つていたら？ ……」

賊の頭目は、うしろから迫る登音とねに、振向きながら、

「ば、ばかつ。はやくその燈を消してしまえ。家の中の燈も」

と、息を喘きつて、また呶鳴なつた。

彼が、土間の中へ転げ込むと、女の影も、燈をふき消して、あわてて姿を隠してしまった。——やがて武蔵が、その前へ来て立った時は、家の中の明りも洩れず、手をかけてみても、戸はかたく閉まっていた。

二

武蔵は怒っていた。

だが、この怒りは、卑劣だとか偽あざむかれたとか、对人的に怒っているのではない。元より虫けらのような鼠賊そぞくと思ひながら、社会的に免ゆるしておけない気持がする。いわゆる公憤なのである。

「開けろっ」

いってみた。

当然、開ける筈はない。

足で蹴つても破れそうな雨戸だが、万一をおそえて、武蔵は戸から四尺ほど離れている。それへ手をかけて叩いたり、がたがた試みたりするような不用意は、武蔵でなくとも、多少心得のある人間のすべき業わざではない。

「開けないか」

戸の中は、なお、しんとしている。

武蔵は抱え易い程度の岩を両手に持った。いきなりそれを戸に向つて抛ほうりつけたのである。

戸の継ぎ目を狙ったので、二枚の戸が内側へ仆れた。その下から山刀が素つ飛び、続いて、一人の男が、這い起きて、家の奥へ逃げ転まろんでゆく。

武蔵が跳びかかって、その襟えりがみをつかむと、

「あつ、免ゆるせつ」

と、悪人が悪事に失策しくじると、きまつて吐ほぎく脆もろい声をあげた。

そのくせ、平蜘蛛ひらぐもになつて、謝あやまるのではなく、間断なく隙を狙つて、武蔵へ肉鬪してくるのである。最初から武蔵も感じていたとおり、賊の頭目だけに、この男の小手技こてわざには、かなり鋭いところがある。

その小手技を、ぴしぴし封じて、武蔵が許す気色もなく、捻ねじ

伏せかけると、

「く、くそつ」

猛然、この男は、生来の暴勇をふるい起し、短刀を抜いて、突っかけて来た。

引っぱずして、

「この鼠賊そぞく」

と体たいを抄すくい込み、どんと、次の部屋まで投げつけると、その脚か手が、炉の上の自在鉤じざいかぎへぶつかったのである。朽ち竹の折れる響きと共に、炉の口から、火山のような白い灰あがが噴ふき騰あがった。

武蔵を近づけまいとして、その濛もうもう々と煙る中から、釜のふただの、薪だの、火箸だの、土器などを、所きらわず投げつけてく

る。

——やや灰が落着いたところで、よく見ると、それは賊の頭目ではない。彼はすでに、どこか強く打ちつけたとみえて、柱の下に長く伸びているのである。

——それなのになお、

「畜生、畜生」

と、必死になつて、手当り次第に、物を取つては、武蔵へ向つて投げつけて来るのは、賊の妻らしい女であつた。

武蔵は、すぐその女を組み敷いた。——女は組み敷かれながらもまだ、髪こうがの筍いさかてを逆手に抜いて、

「畜生」

と、突きかけていたが、その手を、武蔵の足に踏まれてしまう
と、

「——お前さん、どうしたのさ！ 意気地のない、こんな若僧に」
と、齒がみをしながら、もう氣を失っている賊の良人を、おっと無念
そうに、叱咤していた。

「……あつ？」

武蔵は、その時、思わず身を離した。女は男以上に勇敢だった。
刎ね起きぎさま、良人の捨てた短刀を拾って、再び、武蔵へ斬りつ
けて来たが、

「……おつ、おばさん？」

武蔵が意外な言葉を与えたので、賊の妻も、

「——えっ？」

息をひいて、喘あえぎながら相手の顔をしげしげと——

「あつ、おまえは？ ……。オオ武蔵たけぞうさんじゃないか」

三

今もまだ、幼名の武蔵を、そのまま自分へ呼ぶ者は、本位田又八の母のお杉おばばを措おいて、誰があらう？

怪しみながら、武蔵は、そう馴々しく自分を呼んだ賊の妻を見まもつた。

「まあ、武たけさん、いいお武家たけにおなりだねえ」

さもさも懐かしそうな女のことばだった。それは、伊吹山のもぎ造り——後には娘の朱実あけみをおとりに、京都で遊び茶屋をしていた、あの後家のお甲であつた。

「どうして、こんな所にいるのですか」

「……それを訊かれると恥ずかしいが」

「では、そこに仆れているのは……あなたの良人か」

「おまえも知つておいでだろう。元、吉岡の道場にいた、祇園藤ぎおん次の成れの果てですよ」

「あつ、では吉岡門の祇園藤次が……」

啞然あぜんとしたまま、武蔵は、後のことばも出なかつた。

師家の傾く前に、藤次は、道場の普請ふしんにと集めた金を持って、

お甲と駈落ちしてしまい、侍にあるまじき卑劣者と——当時京都で悪い噂を立てられたものだった。

武蔵も、小耳にはさんでいる。その成れの果てがこの姿か——と、他人ひとの身の末とはいえ、淋しくならずにいられなかった。

「おばさん、早く介抱してやるがよい。あなたの亭主と知つたなら、そんな目に遭あわせるのではなかったが」

「穴でもあつたらはいりたい気がする」

お甲は藤次のそばへ寄つて、水を与え、傷口を縛り、そしてまだ半ばうつつな顔つきへ、武蔵との縁故を話した。

「えっ？」

と、藤次は、活を入れられたように白眼を上げて、

「じゃあ其許そのもとが……あの宮本武蔵どのか。——ああ、面目ない」
 さすがに恥は知つている。藤次は頭を抱え、それへ詫び入つた
 まま、しばらくは上げる面おもてもない様子。

武門を落ちて、山沢さんたくの賊となつて生きてゆくのも、大所から
 観みてやれば、流々るる転てん相そうの世の中の泡つぶ、こうしてまで、生
 きてゆかねばならぬほどに落ちたのかと思えば、あわれともいえ
 る、不愆ふびんともいえる。

武蔵はもう憎む気もちを忘れていた。夫婦の者は、時ならぬ賓ひ
 客んきやくを迎えたように、塵ちりを掃き、炬ぶちを拭いて、薪を新たに
 くべ足した。

「何もございませぬが」

と、酒など爛ける様子に、

「もう、山の立場で、腹はできておる。かもうてくれるな」

「——でも、久しぶりに、山の夜語り、わたしの心づくしを喰べてくださいませ」

と、お甲は、炉の上に鍋などかけ、酒壺を取ってしきりにすすめる。

「伊吹山のふもとを思い出しますなあ」

外は、ごうごうと、峰の夜あらしであった。閉めきつても、炉の焰は、黒い天井へめらめらと背を伸ばす。

「もう、いうて下さいますな。……それよりも、朱実はその後、どうしたでしょうか。何か噂を聞きますか」

「叡山えいざんから大津へ出る途中の山茶屋で、数日、わずらっていたのですが、連れの又八の持物を奪つて、逃げてしまつたとその折ちよつと耳にしたが……」

「では、あの子も」

と、お甲は自分の身にひき較べて、さすがに、暗い面おもてを伏せた。

四

お甲だけではない。祇園ぎわん藤次もふかく恥じ入った様子で、今夜のことは、まったく出来心に他ほかならないといい、他日、世に出た時は、必ず元の祇園藤次になつてお詫びするから、どうか今夜の

ところは、水に流して見のがしてくれという。

山賊まがいの藤次が、以前の祇園藤次に返ったところで、大した変りばえもないが、それだけ道中の旅人は明るくなれよう。

「おばさん、あなたも、もう危ない世渡りは、よした方がいいでしょう」

強いられた酒に少し酔って、武蔵がこう意見すると、お甲も、

「なあに、あたしだって好きこのんで、こんなことをしているわけじゃないけれど、京都みやこ落ちを極め込んで、御新開の江戸で一稼すわぎと来る途中、この人が、諏訪すわで博奕ばくちに手を出して、持物から路銀までみんなはたいてしまい、やむなく、元のもぐさ採りから思いついて、ここで薬草を採って町へ売っては喰べるような始末に

なつてしまつたのさ。……もう今夜に懲りたから悪い出来心は起さないようにしますよ」

相変らず、この女は、酔うと以前の婀娜な調子が出る。

もう幾歳いくつだろうか。この女に年齢としはないようである。猫は家に飼うと人間の膝に媚態を作るが、これを山に放つと、暗夜にも爛ら々んらんと光る眼の持主となつて、行路病者の生きた肉へも、野辺の送りの柩ひつぎを目がけても跳びついてくる。

お甲はそれに近い。

「……ねえ、お前さん」

と、藤次を顧みて、

「今、武蔵たけぞうさんから聞けば、朱実も江戸へ行つたらしい。わた

し達も、何とか、人中へ出る算段をして、もう少し人間らしい暮らしをしようじやありませんか。あの娘こでも捕まえれば、また何とか商売の思案もあろうというものだし……」

「うむ、うむ」

と藤次は、膝を抱えて、生返辞を与えていた。

この男もまた、この女と同棲してみても、先にこの女から捨てられた本位田又八と、同じような後悔を、もう抱いているのではあるまいか。

武蔵は、藤次の顔が気の毒に見えた。そして又八の身を憐あわれみ——やがては自分も一度この女の招く魔の淵に誘われたことなども思い出されて、ふと肌がそそけ立つ思いがした。

「——雨ですか、あの音は」

武蔵が、黒い屋根を仰ぐと、お甲はほんのり酔ったながし眼で、
「いいえ、風がつよいから、木の葉や、木の小枝が、折れては降
つて来るんですよ、山の中というものは、夜になると、何か降ら
ない晩はない。——月は出ても、星は見えても、木の葉が降つた
り、山土がぶつけて来たり、霧が降つたり、滝の水がしぶいて来
たり」

「おい」

藤次は、顔を上げて、

「——もうじきに夜が白んで来る頃だ。おつかれだろうから、あ
ちらへ寝道具をのべて、おやすみになるようにしたらどうだ」

「そうしましようかね。武蔵たけぞうさん、暗いから気をつけて来てく
ださい」

「では、朝までお借りしようか」

武蔵むさしは起つて、お甲の後から暗い縁を尾ついて行つた。

五

彼の寝た板小屋は、谷間の崖に建てた丸太の上に支えられてい
た。夜なのでよくわからないが、おそらく床下は、すぐ千せん仞じんの
谷底へ通じているのではあるまいか。

霧が降ってくる。

滝水が吹きつけてくる。

ぐわうという度に、寝小屋は、船のようにうごいた。

——お甲は、白い足を、簀すの子こにしのばせて、そつと、前の炉部屋へもどつて来た。

炉の火を見つめて、考えこんでいた藤次が、するどい眼を振向けて、

「……寝たか」

と、問う。

「寝たらしいよ」

お甲は、側へ膝を立てて、

「どうする、え？」

と藤次の耳へいう。

「呼んで来い」

「やるかえ」

「あたりめえだ。慾ばかりじゃねえ、彼奴あいつを殺やつてしまえば、吉岡一門の仇を取つたということにもなる」

「じゃあ、行つて来るよ」

どこへ行くのか。

お甲は、裾すそを端折つて、戸外おもてへ出て行つた。

深夜である。深山である。真つ暗な風の中を、暮まつしぐらに駈けてゆく白い足と、うしろに流れる髪の毛とは、魔性ましようの猫びようぞく族

でなくて何であろう。

大山たいざんの皺しわに棲むものは、鳥獸ばかりとは限らない。彼女が駈け歩いた峰や沢や山畑の遠方おちこち此方こちから、忽ちにして、簇むらり集まつて来た人間は、二十名以上もある。

しかもその行動には、訓練があつた。地を掃はいて来る木の葉よりも静かに、藤次の小屋の前に集まると、

「ひとりか？」

「武士さむらいか」

「金は持つてるのか」

などと密々ひそひそさや囁ささき交わし、指真似ゆびまねや、眼くばせで、各、いつも通りの部署につくべく分れて行く。

猪突ししつき槍や、鉄砲や、大刀どすを持って、その一部は、寝小屋の外

を窺い、また、半分は小屋のわきから絶壁を下りて、確か、谷底へ廻つたらしい。

なお、その中から、べつに二、三人の賊は、崖の中途を這つて、ちようど武蔵の眠っている小屋の下へ辿りついた。

準備は出来たのである。

谷間へ懸出してあるこの小屋は、つまり彼らの罾なのである。

その小屋は、藁を敷き、たくさんな薬草の乾草を積み、薬研や製薬の道具などわざと置いてあるが、それはここへ入れる人間の安眠剤であつて、元より彼らの職業は、薬刻みや、薬草を乾すことではない。

武蔵も、そこへ横になると、快い薬草のにおいに、眠りを誘わ

れて、手足の先にまで、腫れぼったい疲れが出て来たが、山で生れ、山で育った武蔵には、この谷間の懸出し小屋に、一応、領けないものがあつた。

自分の生れた美作の山々にも、薬草採りの小屋はあるが、薬草はすべて湿気を忌う。こんな、鬱蒼と雑木の枝をかぶつて、しかも滝しづきの来るような所に、乾小屋は持っていない。

枕元には、薬研台の上に、錆びた鉄の灯皿がおいてある。その微かな燈心の揺らぎで見返しても——また合点のゆかないふしがある。

それは、四隅の材木と材木との継ぎ目である。銚子付けになっているが、その銚子の穴がやたらに見える。そして継ぎ目と、木

の肌の新しい所とが一、二寸ずつ喰い違っている。

「ははあ」

彼の寝顔は、苦笑をうかべた。しかしまだ彼は木枕に顔をつけていた。――

しとしとと霧の音につつまれるように、ふしぎな気配をうつつに感じながら。

六

「……武蔵^{たけぞう}さん。……寝^{やす}たんですか。もうお寝^{やす}みかえ」

障子の外へ、そつと摺^すり寄っていうお甲の小声であった。

寢息を聞きすますと、すうと其^{そこ}処をあけて、お甲は、武蔵の枕元まで忍び寄り、

「ここへ、お水を置きますからね」

わざと、寝顔へ断りながら、盆をおいて、また静かに、障子の外へもどって行った。

^{おもや}母屋を闇にして、待っていた祇園藤次が、

「いいか」

囁くと、お甲は眼に手つだわせて、

「ぐつすりだよ……」

藤次は、しめたというように、縁先から裏へ飛び出して、谷間の闇を覗きこみ、手に持っている火縄をチラチラ振って見せた。

それが合図であつた。

武蔵の眠つている一棟の板小屋は、それと共に、崖の途中で、支えている床柱ゆかばしらを外されはずす、ぐわうーんと凄い音をたてながら、棟も板も、乱離となつて、千仞せんじんの底へ吞まれてしまつた。

「それっ」

鳴りをひそめていた賊は、もう仕止めたかりゆうど 人が姿を見せるように、公然と、声をあげて、猿ましらの如く思い思いに、谷底へすべ下り降りて行つた。

手に余る人間と見れば、彼らはいつても、こうして寝小屋もろとも、旅人を谷へ落して、その死骸からやすやすと、目的の物を奪とり上げていた。

そして簡単な寝小屋はまた、次の日のうちに、絶壁へ懸出^{かけだ}して組むのであつた。

谷底にも一^{ひとむれ}群の賊が、先へ廻つて待つていた。寝小屋の板や柱がばらばらに墜^おちて来ると、彼らは、骨に跳びつく犬のように、それへ集^{たか}つて、武蔵の死骸を求め始めた。

「どうした？」

上の人数も降りて来て、

「あつたか」

と、共に探しまわる。

「見えねえぞ」

誰かいう。

「何が」

「死骸がよ」

「ばかあいえ」

しかしまた、やがて同じあぐねた声が放たれた。

「いねえや、はてな？」

誰よりも血ちまなこ眼に藤次が呶鳴りつけた。

「そんな筈はねえ。途中の岩にぶつかって、は匆ね飛ばされているのかも知れねえ。もつと、そつちも探してみろ」

その言葉の終らないうちに、彼の見廻している谷間の岩も水も雪崩なだれの草も、いちめん夕焼色にぱつと明るく染まった。

「——あつ？」

「——おやつ？」

賊は皆、顎あごを空へ振り上げた。およそ七十尺もある絶壁である。その上に乗っていた藤次の住居は、棟、障子、窓、四方から真っ赤な焰を噴き出しているではないか。

「あれえつ。あれえつ。来ておくれよつ」

ただ独りで、気も狂わんばかりな悲鳴をあげているのは、お甲にちがいない。

「大変だ、行ってみろ」

道を攀よじ、藤づるを攀じ、賊はまた、上へ這い上がった。断崖の上の一軒屋、焰と山風にはよい弄なぶり物だった。お甲はと見れば、火の粉をかぶりながら、近くの樹の根に後ろ手を縛くりつけられて

いる。

いつの間に、どうして抜けたろうか。逃げたという武蔵が、賊には何だか信じられなかった。

「追っかける、これだけいけば——」

藤次はいう勇氣もなかったが、武蔵を知らぬ他の賊はそのままではいる筈もない。旋風つむじになつてすぐ後を追つた。

けれども武蔵の影はもう見当らなかつた。道のない横道そへ外れたのか、樹の上で今度はほんとに熟睡でもしているのか、そうこうする間に、美しい山の火事の中に、和田峠も大門峠も、白々と朝の姿を見せていた。

くだじよろしゆう
下り女郎衆

一

甲州街道には、まだ街道らしい並木も整っていないし、えきでん駅伝の制度も、頗る不完備であつた。

その昔——というほど遠くもない、えいろく永禄、げんき元亀、天正へかけての武田、上杉、北条、その他の交戦地であつた軍用路を、そのまま後の旅人が往還しているだけで、従つて、裏街道も表街道もありはしない。

上方から来た者が、もつとも弱るのは、りよしゃ旅舎の不便で、一例

をいえば、朝立ちの際に、弁当ひとつ拵えさせても、餅を笹の葉で巻いた物とか、飯をいきなり柏かしわの乾葉ほしばでくるんで出すとか——藤原朝時代の原始的な慣わしならを、今でもやっているという風。ところが、笹子ささご、初狩はつかり、岩殿いわどのあたりの草深いそんな旅籠屋はたごやでも、この頃の客の混みあう様は、凡事ただごととも思えない。そしてその多くが上りよりも、下りの客だった。

「やあ、きょうも通る——」

と、小仏こぼとけの上で休んでいた旅人たちは、今、自分たちの後ろから登つて来る一団の旅の群れを、これは観物みものと、道みちばたで迎えていた。

やがて、がやがやとそれへ来た人数を見ると、なるほど、これ

は大変。

若い女郎衆だけでも、およそ三十名ぐらいいはしよう。子守ツ子みたいな禿かむろばかりでも五人、中年増ちゆうどしまや婆さんや、男衆など合せると、総勢四十人からの大家族である。

その他、荷駄には、つづらや、長持や、一方ならぬ荷物を積み、この大家族の主人と見える四十がらみの男は、

「草鞋わらじまめができたなら、草履に代えて、緒おを縛つてあるけ。なに、もう歩けないと、何をいう。子どもを見なさい、子どもを」と、坐りぐせのついている女郎衆を歩かせるのに、口を酢すっぱくしている。

(今日も通る)

と路みちばたで声のするように、こうした上かみがた方女郎衆の輸送は、三日にあげず通った。もちろん流れてゆく先は、新開発の江戸表である。

新將軍の秀忠が江戸城に坐つてから、いわゆる御ご新開しんかいの膝ひざ下とへは、急激に上方の文化が移動して行つた。東海道や船路のほうは、ためにほとんど、官用の輸送や、建築用材の運搬や大だい小しょう名みの往来でいっぱい、こういう女郎衆の行列などは不便をしのんで、中山道や甲州筋を選ぶほかなかつた。

きようこれまで来た女郎衆の親方は伏見の人で、どういう了りよう見けんか侍のくせに、遊女屋の主人となつて、目端めはしや才覚きも利くところから、伏見城の徳川家へ手づるを求め、江戸移住の官許を取

つて、自分ばかりでなく、他の同業者にもすすめて、続々と、女を西から東へ移動させている庄司甚内しょうじじんないという者だった。

「さあ、休め休め」

小こ仏ほとけの上まで来ると、甚内は程よい所を見つけ、

「すこし早目だが、ついでに、弁当をつかつてしまおう。お直婆なおおさん、女郎衆かむろや禿かむろたちに、弁当をくばっておくれ」

荷駄の上から、一ひと行李こくりもある弁当が下ろされて、乾葉卷ほしばまきの飯が、一つ一つ渡されると、女郎たちは、思い思いにわかれてそれへ貪むさぼりつく。

どの女の皮膚も黄いろく、髪は、笠や手拭をかぶっても、みな白ほこりっぽく埃ほこりになっている。湯茶もなく、ぽそぽそと、舌つづみ打

つている姿には、行く末は誰が肌ふれん紅の花——などという色も香もない。

「アア、お美味かつた」

親が聞いたたら、涙をこぼすであろうような声を出して、しんから叫ぶ。

すると中の妓の二、三が、折ふし通りかけた旅すがたの若衆を見つけて、

「あら、いい恰好だ」

「ちよつとしてる」

などと囁き合っていると、べつな妓はまた、

「あの人なら、わたしやあよく知っているよ。吉岡道場の門人衆

と、たびたび来たことがあるお客だもの」

といった。

二

上方から関東といえ、関東の者が、みちのくを思うより遠か
った。

(これからどんな土地で店を張るのやら)

と、心細い気持に囚とらわれている彼女たちは、たまたま、伏見で
馴染なじみ馴染なじみの客が通ると聞いて、

「どの人さ」

「どの人さ？」

と、忽ちかしま姦しい眼をそばだてた。

「大きな刀を背中へ懸けて、威張つて歩いて来る若衆だよ」

「アアあの前髪の武者修行」

「そうそう」

「呼んでごらん、名前はなんていうの」

思いがけぬ小仏峠の上などで、自分がこんなに大勢の女郎衆に注目されているとは知らず、佐々木小次郎は、手を振つて、荷駄や人足の間を通り抜けた。

すると、黄いろい声で、

「佐々木さん、佐々木さん——」

それでもまだ、まさか自分とは思わず、振向きもしないで行く
と、

「前髪さん——」

と、来たので、これは怪けしからぬことだと、眉をしかめて振り
向いた。

荷駄の脚元に坐りこんで、弁当をつかっていた庄しょうじ司じんない甚内は、
妓おんなたちを叱りつけて、

「何じゃ、御無礼な」

といって、小次郎の姿を仰ぐと、これはいつか、吉岡の門人達
が大勢して、伏見の店へあがった時、挨拶に出た覚えがあるので、
「これはこれは」

と、草をはたいて立上がり、

「佐々木様ではごぎいませんか。どちらへお越しなさいますか」

「やあ、角屋すみやの親方どのか。わしは江戸へ下向するが、問いたいの、おぬしたちの行く先、大層な引つ越しじゃないか」

「てまえどもは、伏見を引払つて、江戸の方へ移りますので」

「なぜあんな古い廓くるわを捨て、まだどうなるかも知れない江戸表へなど移るのだ」

「あまりよど澱んでいる水には、腐すえた物ばかり湧わいて、水草は咲きません」

「御新開の江戸へ行つたところで、城普請しろぶしんだの弓鉄砲の仕事はあろうが、まだ遊女屋などの、悠長な商売は成り立つまい」

「ところが、そうじゃございません。灘波なになの葦わを拓きり開いたのも、太閤様より妓おんなの方が先でございますからね」

「何よりも、住む家があるまいが」

「今、どしどし家を建てている町中の、葭原よしわらという沼地を、何十町歩と、私たちのために、お上かみから下さいました。——でもう他の同業者ほかなかまが、先へ行つて地理めをしたり、普請ふしんをいたしておりますから、路頭に迷うような心配はございません」

「なに、徳川家では、おぬしのような者にまで、何十町歩という土地をくれているのか。——それは無料ただか」

「たれが、葭よしの生えている沼地など、金を出して買うものがございましょう。そればかりでなく、普請の石材木なども、多分にお

下げくださるので」

「ははあ……なるほど、それでは上方から、世帯を担いで、皆下るはずだ」

「あなた様も、何か、御仕官の口でもあつて」

「いいや、わしは何も仕官は望んでいないが、新將軍の膝下となり、新しく天下へ政道を布く中心地ともなることだから、見学をしておかねばならない。もつとも、將軍家の指南役になら、なつてもよいと思つているが……」

甚内は、黙つてしまった。

世間の裏、景氣のうごき、人情の種々相にくわしい彼の眼から見て、劍術は上手かどうか知らないが——今の口吻では、語るに

足りないと思つたのである。

「さあ、ぼつぼつ出かけようかな」

小次郎を他よそにして、一同へこう促うながすと、女郎衆の人数を讀んで

いたお直という奉公人が、

「おや、女郎衆の頭数が一人足りないじゃないか。いないのは一

体誰だえ。——几帳きちようさんか、墨染すみぞめさんか。ああそこに、二人

ともいるね。おかしいねえ、誰だろう？」

三

まさか、江戸へ移住して行く女郎衆の同勢と、道連れになる気

もないので、小次郎は先へ一人で歩き出したが、後に残った角屋すみやの大家内は、一人の落伍者のために皆其処そこを立ちかねて、

「つい、その辺まで、私たちの中に、姿が見えていたのに」

「どうしたのである？」

「ひよつと、逃げたのではあるまいか」

などと頻りにうわさしては、二、三の者は、わざわざ探しに道を戻って行った。

その噪さわぎに、小次郎へわかれを述べて、此方こっちへ顔を向けた親方の甚内は、

「おいおいお直、逃げたとは、誰がいったい逃げたのだ」

自分の責任でも問われたように、お直と呼ばれた年よりは、

「朱実あけみという女でございますよ。……ほれ、親方様が、木曾路で見かけて、女郎にならぬかといつて、お抱えになった、旅の娘っ子で」

「見えないのか——その朱実が」

「逃げたのじゃないかと、今、若い者が麓まで見つけに行きました
たが」

「あの娘なら、何も証文を取つて、身代金みのしろぎんを貸したわけじゃない、女郎になつてもよいから、江戸まで連れて行つてくれるとうし、容貌きりようも踏める玉だから抱えようと約束したまでのこと。ここまでの旅籠代が少しばかり損は損だが、まあ仕方がない。そんな者は抛ほうつておいて、出かけようぜ」

今夜八王子泊りとなれば、あしたは江戸に入ることができぬ。
少しは、夜にかかっても、其処まではと、親方の甚内は、急せき
立てて先に立つ。

すると、道の傍らから、

「皆さん、どうもすみません」

と、探しぬいていた朱実が姿をあらわして、もう歩き出してい
る一行の中へ交じって、自分も共に尾ついて歩きだした。

「どこへ行っていたのさ」

と、お直は叱るし、

「おまえさん、黙って横道へ行っちゃいけないよ。逃げるつもり
ならいいけれど」

と、朋輩の女郎たちはいかに心配したかということ、さも大おおぎよう
仰おぎようにいつて、たしなめる。

「でもネ……」

と、朱実は、叱られても、怒られても、笑つてばかりいた。

「わたしの知つた人が通つたから、会うのは嫌でしょう、だから、
後ろの藪やぶの中へ、あわてて隠れてしまったの。そしたら、下が崖
で、この通りすべ辻すべつちまつて……」

着物を破いたことだの、肱ひじをすりむいたことばかりいつて、濟
みませんとはいっているが、少しも濟まないような顔つきはして
いない。

先に歩いていた甚内は、ふと小耳にはさんで、

「おい、娘っ子」

「わたしですか」

「ああ、朱実といつたつけな。覚えにくい名前だな。ほんとに女郎衆になる気なら、もつと、呼びいい名にしなくちや困るが、おめえほんとに遊女になる覚悟か」

「遊女になるのに、覚悟なんているでしょうか」

「ひと月勤めてみて、いやになったら、やめるといふような理わけにはゆかないからなあ。何しろ遊女になったら、客の求めることは嫌いや応おうはいえないのだ。それだけの決心がなくちや困る」

「どうせ、わたしなんか、女の大事な生命いのちともいふものを、男の奴に、滅茶苦茶にされたんですから——」

「だからといって、もつと滅茶苦茶にしていという法はない。江戸へ着くまでのあいだに、よく考えておくがいいよ。……なかに、途中の小遣こづかいや旅籠はたごせん銭ぐらいは、何も返してくれとは、いはしないから」

火ひ悪いた戯ずら

一

ゆうべ高たか雄おの薬王院わらじに草鞋わらじを解いた何処かの御隠居がある。

下男げなんに挟はさみばこ筥なを担になわせ、もう一人、十五ぐらいな少年を供どもに連

れ、

「参詣は明日とし、お宿にあずかり申したい」

と、黄昏たそがれ頃、薬王院の玄関へ立った者である。

今朝は夙とく起きて、供の少年を連れ、一山を巡めぐって午ひる近くに帰つて来たが、ここも上杉、武田、北条以後、戦乱に荒れ果てているのを見て、

「御修理の屋根葺ふき料にも」

と、黄金三枚を寄進して、すぐ草鞋わらじをはきかけた。

薬王院の別当は、この奇特な人の少なからぬ寄進に驚いて、倉そ皇うこうと見送りに出、

「お名前をどうぞ」

と、訊ねたところ、他の僧が、

「いえ、宿帳にいただいてございます」

と、それを示した。

見ると、

木曾御岳山おんたけさんした下百草房

奈良井屋大蔵

とあるので、

「——あああなた様が」

と別当は見上げて、ゆうべからの粗略を、かえすがえす口惜しげに詫び入った。

奈良井の大蔵という名は、全国到る所の神社仏閣の寄進札に見かける名であった。必ず黄金何枚ずつか——或る霊場には、黄金

何十枚という寄進をしている所もあつた——それは道楽か、売名か、まつたくの奉公心か、本人以外に分らないが、とにかく、今の世の中に変つた奇特家として、別当も夙つとにその名を聞いているものとみえる。

——で、にわか遽に、ひき止めてみたり、宝物を御覧にと、すすめたりしたが、大蔵はもう供の者と門を出て、

「しばらく江戸におけるつもりですから、またそのうち拝観に出ましよう」

と、辞儀して去る。

「では、山門まで、お送り申しあげましょう」

と、別当は従ついて来て、

「今夜は、府中でお泊りなされますか」

「いや、八王子でと思つてゐるが」

「それならお楽に参れまする」

「八王子は今、誰方どなたの所領でござりますな？」

「ついこの頃から大久保長安様の御支配になりました」

「ああ、奈良奉行から移つた——」

「佐渡のお金山かねやまぶぎょう奉行も、御支配だそうで」

「えらい才人だからの」

山を下りると、陽の高いうちに、大蔵以下三人は、もう繁華な八王子二十五宿の往来に姿を見せて、

「城太郎、どこへ泊ろうかな？」

と、巾きんちやく着ぎのように、腰へ尾おいて歩あいている彼を振向むく。

城太郎は、直ちに答えた。

「おじさん、お寺は止とまそうよ」

そこで、町の中でも一番大きな旅籠はたごと見える家構えを選んで、

「ごやつかいになるよ」

大蔵の人品もよし、挟はさみ筥ぼこまで担かがせて歩あいている旅客なので、

「おはやいお着きで」

中庭を隔へてた奥の間へ通して、下へも措おかない扱あいである。

だが、やがて陽も暮れて、どやどやと客の混む頃おあいになると、主人あるじと番頭が顔を揃あえて来きていうには――

「まことにご無理なお願いでございますが、よんどころのない大

勢の相客で、下座敷はかえってお騒がしゅうございましょうから、ひとつ二階へお部屋がえを……」

と、恐縮して、頼むのだった。

「ああ、いいとも。ご繁昌で結構だ」

大蔵は、気軽に承知して、手廻りの荷物を持たせ、急に二階へ引越したのだが、それと入れ交ちがいに、ここへ入って来たのは角屋すみやの女郎衆の同勢であつた。

二

「さてさて。とんだ旅籠うちへ泊りあわせたものだて」

大蔵は、二階へ来てから、こう愚痴めいて、自分の落着きを見まわした。

時ならぬ混雑に、いくら呼んでも、召使は来ない。お膳も来ない。

やっと、食事が来たと思うと、こんどはそれを退げさに来ない。それに、どたばたと、階下したも二階も忙しげな登音が絶えなかつた。腹も立つが、ああして目をまわしている雇人も気の毒と思うと、怒りもされないのである。

片づかない部屋の中に、奈良井の大蔵は手枕で横になっていたが、ふと、何か思い立ったように首を擡もたげ、

「助すけい市いち」

と、下男を呼んだが、見あたらないので、

「城太郎、城太郎」

と、呼び直して坐る。

その城太郎もまた、何処へ行つたか、影が見えないので、部屋を出てみると、中庭を下へ臨んで、ここの縁えんの欄干てすりには、まるで花見でもしているように、二階の客が揃そろいも揃そろつて、階下したの奥座敷を見おろしながら、何やらわいわい騒いでいるのであつた。

その中に交まじつて、城太郎も一緒になつて階下したをのぞいていたのを見出し、

「これ」

と、抓つまんで来て、

「何を見ているのだ」

と、大蔵が眼で叱ると、城太郎は、家の中でも離さずにいる長やかな木剣を、畳につかえて坐りながら、

「だって、みんな見てるんだもの——」

と、尤もな^{もつと}ことをいう。

「みんなは、何を見ているのだい」

大蔵も多少、興をひかれていないわけでもない。

「何って……あの、階下^{した}の奥へ泊った、沢山な女の人を見ているんだろ」

「それだけか」

「それだけだよ」

「何がそんなものおもしろい」

「わからない」

城太郎は、有ありてい体に首を振る。

大蔵を落着かせぬ原因は、雇人の跫音よりも、階下したへ泊り合せた角屋の女郎衆よりも、むしろそれを上から覗いている、二階の客どもの騒ぎにあつた。

「わしは少し、町を歩いて来るからな、なるべく、部屋にいないてはいけないよ」

「町へ行くなら、おいらも連れて行つておくれよ」

「いや、晚はいけない」

「なぜ」

「いつもいつている通り、わしの夜歩きは、遊びではない」

「じゃあ、何さ？」

「信心だ」

「信心は昼間しているからたくさんじゃないか。神様だって、お寺だって、晩は寝てるだろ」

「社寺をお参りすることばかりが信心ではない。ほかに祈願もあることだな」

と、相手にしないで、

「その挟みはさ筥ぼこから、わしの頭陀袋ずだぶくろを出したいが、開くか」

「開かない」

「助市が鍵を持っているはずじゃ、助市はどこへ行つたな」

「階下へ行つたぜ、さつき」

「まだ風呂場か」

「階下で、女郎衆おんなしゅうの部屋をのぞいてたよ」

「あいつもか」

と、舌打ちして、

「——呼んで来い、早く」

大蔵は、そういつて、帯を締め直しにかかった。

三

四十人からの同勢である。

旅籠はたごの下座敷は、ほとんど、

角屋すみやの

連中で占めている。

男たちは、帳場寄りの部屋に、女郎おんなたちは、中庭の向うの部屋に。

何しろ、賑やかを通り越して、姦かしましいこと一方かたでない。

「あしたはもう、歩けんがなあ」

と、大根のような白い足に、大根おろしを摺すつて、足の裏の火照てりに塗つてもらつている傾城けいせいもある。

元気なのは、破やれ三味線を借りて来て爪弾つめびきをしているし、皮膚の青白いのは、もう夜の具ものを被かすいで、壁に向つて寝こんでいる。「おいしそうだね、あたいにも、よこしなよ」

と、喰べ物を引ツ張りっこ。——また、行燈あんどんとさし向いで、

かみがた
上方の空に残して来た契り^{ちぎ}ある男へ、筆を走らせている苦界^{くがい}の
後ろ姿もある。

「あしたはもう江戸とやらへ、着くのかえ」

「どうだかね。ここで訊けば、まだ十三里もあるってえもの」

「勿体ないね、夜の灯り^{あか}を見ると、こうしているのは」

「おや、たいそう、親方思いだね」

「だって……。ああじれつたい、髪^{かみ}の根がかゆくなつた。釵^{かんざし}をお
かし」

こんな風景でも、京女郎衆と聞くからに、男の眼はそばだった
のであろう。風呂場から上がった下男の助市は、湯ざめをするの
も忘れて中庭の植込み越しに、いつまでも、見惚れていた。

すると、後ろから耳を引張って、

「いい加減におしよ」

「ア痛」

と振向いて、

「なんだ、この城太郎め」

「助さん、呼んでるぞ」

「誰が」

「お前の主人がさ」

「うそいえ」

「うそじゃないよ。また、歩きに出かけるんだとき。あの小父おじさん、年がら年中、歩いてばかりいるんだな」

「あ、そうか」

助市の後から、城太郎も駈出して行こうとすると、庭木の陰から思いがけなくも、

「城太さん——。城太さんじゃないの？」

と、呼ぶ者があつた。

はつと、城太郎の眼が、真剣になつて振ふり顧かえつた。何もかも忘れ切つて運命に尾ついて歩いているかのようでも、彼の心のどこかには絶えず、見失つた武蔵とお通の身を氣にとめているらしかつた。

今、呼んだのは、若い女の声であつた。もしや？——とすぐ胸がどきつとしたものとみえる。じつと、大きな八ツ手の陰をす

かして、

「……誰？」

おずおず寄ると、

「わたし」

と、木陰の白い顔は、葉の下を潜くぐって、城太郎の前に立った。

「なアんだ」

がっかりしたように、城太郎がいい放ったので、朱実は舌うちして、

「なあに、この子はまあ」

と、自分の寄せかけた感傷のやり場を失って、憎そうに、城太郎の背を打った。

「ずいぶん久し振りじゃないの。どうして、お前、こんな所へ来ているの」

「自分こそ、どうしたのさ」

「あたしはネ……知ってるだろ。よもぎの寮の養母おつかさんとも別れちまって、それからいろんな目に会ってね」

「あの……大勢の女郎衆と、一緒なのかい」

「でも、まだ、考えてるの」

「何をさ」

「傾城けいせいになろうか、やめようかと思って」

こんな子供にと思つても、朱実には、こんな嘆息ためいきを、ほかに聞いてもらう人はなかった。

「……城太さん、武蔵様は今、どうしていらっしやるの？」
やがて、そつといったが、彼女が初めから訊きたいことは、むしろそれだけらしかった。

四

武蔵の消息を訊かれると、城太郎は、そのことなら、此方こつちから訊きたいところだと、いわぬばかりに、

「知らないよ、おいらは」

「なぜ、あんたが知らないのさ」

「お通さんとも、お師匠様とも、途中でみんな、迷はぐれてしまった

んだもの」

「お通さんて——誰？」

朱実は、急に、彼のことばに、注意をかたむけ、そして、何か
憶い出したように、

「……ああそうか。……あのひとは、いまだに武蔵様の後を追い
まわしているのね」

と、つぶや眩くらいた。

朱実が常に想像している武蔵は、行雲流水の修行者であつた。

樹じゆげせきじょう下石上の人だつた。それゆえに、いくら想いを懸けたとこ

ろで、届き難がたい心地がして、同時に、自分の荒すさびかけた境涯も顧
みられ、

(所詮、かなわぬ恋)

という弱気な諦めにつつまれてしまふのだった。

けれど、その武蔵の生活の影に、もうひとり、べつな女性の影が重なっていると想像すると——朱実の諦めは、到底、灰をかぶせられた埋め火のままではない。

「城太さん、ここじゃ、他の人の目がうるさいから、戸外へ行かない？」

「町へかい」

出たくて耐らなかつた折なので、そう誘われると、一も二もない。

旅籠の庭木戸をあけて、ふたりは宵の往来へ出る。

二十五宿といわれる八王子の燈ひは、今までの何処よりも繁華に見えた。秩父ちちぶや甲州境の山の影が、どつぷり町の西北を囲つてはいるが、ここに纏まとまっている宵の燈ひには、酒のにおいだの——博ばくろうの声だの、機屋はたやのおさの響きだの、問屋場役人の呶鳴る声だの、町芸人の佗わびしい音楽だのがつつまれて、人間の聚楽じゅらくを賑わしていた。

「あたし、お通さんというひとのことは、又八さんからよく聞いてたけれど、いったい、どんな女ひと——」

朱実は、ひどくそれが、気になり出したらしい。

武蔵のことは、ひとまず胸の隅へあずけておいて、彼女の胸には、お通という者に対して、何か、燃えるようなものが、焦いら々いら、

立ちはじめていた。

「いいひとだぜ」

と、城太郎がことさらに――

「やさしくつて、思いやりがあつて、綺麗でサ――。おいら、大好きだ、お通さんは！」

と、いったので、朱実の胸はよけいに、或る脅威を感じてきた。けれど、そういう脅威は、どんな女性でも決してあらわには顔色に出さない。反対に、彼女も、ほほ笑むのであつた。

「そう、そんないいひと」

「ああ、そして、何でもよくできるよ、歌もよむし、字もうまいし、笛も上手だしね」

「女が、笛なんか上手だつて、なんにもなりやしないじゃないの」
「けれど、大和やまとの柳生やぎゆうの大殿様でも、誰でも、お通さんのことは賞ほめるぜ。……ただおいらにいわせれば、いけないことがひとつあるけれど」

「女には、誰にだつて、いけない性分が沢山あるものよ。ただそれを、あたしみたいに、正直にうわべに出しているか、おしとやか振ぶつて、うまく包んでいるかの違いしかありやしないものよ」
「そんなことないよ。お通さんのいけないのはたった一つしかないよ」

「どんな性分があるの」

「すぐ泣くんだよ。泣虫なのさ」

「泣くの。……まあ、どうしてそう泣くんでしよう」

「武蔵様のことを思い出しちゃあ泣くんだろ。一緒にいると、それだけが、陰気になって、おいら嫌いさ」

——もう大概に、相手の顔いろを見て喋ればいいのに、城太郎はおかまいなしに、まだこの上にも、朱実の胸はおろか、全身を嫉妬しつとの火で焼きかねないほど——無邪気を通り越していた。

五

ひとみ 眸の底にも、皮膚にも、蔽おおいきれない嫉妬のいろをたたえなが

ら——なおなお、朱実は求めて訊きたがった。

「いったい、お通さんて、幾歳いくつなの？」

城太郎は、見較べるように、彼女の顔をながめて、

「おんな
同じぐらいだろ」

「わたしと？」

「だけど、お通さんの方が、もつと、綺麗で若いよ」

そのくらいでこの話題が打切れればよかつたのに、朱実の方が
らまた、

「武蔵様は、人なみ以上、武骨だから、そんな泣虫のひとは嫌い
だろう。そうだよきつと、そのお通つてひとは、泣いて男の気持
をひきつけようとする——角屋すみやの女郎衆みたいなひとに違いない」

どうかして、お通を、城太郎にだけでも、好く思わせまいと努

めるのであったが、結果はかえって反対に、

「それでもないぜ。お師匠様も、うわべは優しくしないけれど、ほんとは、お通さんが好きらしいんだよ」

とまで、いわせてしまった。

凡ならぬ顔いろはもうとうに通り過ぎていた朱実であった。歩ただいている側に河でもあれば、すぐ飛びこんで見せてやりたいような火の塊りが胸へこみあげてくる。

これが、子供相手でもなければ、もつと行ってやりたいことあるけれど、城太郎の顔いろを見ては、その張合いもない。

「城太さん、おいで」

ふいに、彼女は、町の辻から横町の赤い燈ひを見て、引っ張った。

「ア、居酒屋じゃないか、そこは」

「そうさ」

「女のくせにおよしよ」

「何だか、急に飲みたくなつたのよ。ひとりじゃ間がわるいから

——

「おいらだつて、間がわるいや——」

「城太さんは、何でも喰べたいものを喰べればいいじゃないか」

覗いて見ると、幸いにも、ほかの客はいないらしい。朱実は、

河へ飛び込むよりもつと強い盲目めくらになつて、中へはいるなり、

「……お酒を」

と、壁へ向つていった。

それから彼女は矢つぎばやに酒を体に容れた。城太郎が恐れて止めた頃には、もう城太郎の手におえなかつた。

「うるさいね、何サ、この子は——」

と、^{ひじ}肱で振払って、

「もつと、お酒を……お酒をくださいな」

そのくせ、もう焰のような顔して、俯^うつ伏^ぶしながら、息もくるしげなのである。

「いけないよ、やっちやあ」

城太郎が、間に立って、心配そうに断ると、

「いいよ、お前はどうぞせ、お通さんが好きなんでしょ。……あたしはね、泣いて男の同情をかうような、そんな女、大っ嫌いさ」

「おいら、女のくせに、酒なんか飲むやつ、大つ嫌いだ」

「わるかったね。……お酒でも飲まなければやいられないあたしの胸は……おまえみたいなのチンチクリンには分りません——だよ」

「はやく勘定をお払いよ」

「おかねなんて、あるかとさ」

「ないのかえ」

「その旅籠はたごに泊っている、京の角屋すみやの親方さんから貰っておくれ。どうせもう売った体……」

「アラ、泣いてら」

「わるいかえ」

「だって、お通さんの泣虫を、さんざん悪くいった癖に、自分で

泣くやつがあるもんか」

「あたしの涙は、あのひとの涙とは、涙がちがいますよ。——アア面倒くさい、死んでやろうか」

ふいに身を起すと、戸外おもての闇を目がけて駈け出したので、城太郎は、びっくりして抱き止めた。

こういう女客も、稀にはあるとみえて、居酒屋の者は笑っていたが、ふと、隅に寝ていた牢人者が、むっくり酔眼すいがんをさまして見送っていた。

六

「朱実さあん。朱実さあん。——死んじやいけないよ」

城太郎は追いかけてゆく。

朱実は先へ走ってゆく。

暗い方へ、暗い方へと。

先が闇であろうと、沼であろうと無鉄砲に駈けているもののように見えるが、朱実は、城太郎が泣き声だして、後ろで呼んでい
ることを知っている。

ひそかな芽生めばえを乙女の胸にもちながら、その芽を、あらぬ男

に——あの吉岡清十郎にふみにじられて——住吉の海へまつしぐ

らに駈けこんだ時には、ほんとに、死の彼方あなたまで行く気であつた

が——今の朱実には、その口惜しさだけがあつても、それまでの

純真さはすでない。

(誰が、死ぬものか)

と、自分へいいながら、ただわけもなく、城太郎が後ろから駆け来て来るのが面白くて、世話をやかせてやりたいのだった。

「あつ、あぶないっ」

城太郎は、呶鳴った。

彼女の先に、濠ほりの水らしいものが、闇に見えたからであつた。たじろぐ彼女を後ろからひしと抱き止めて、

「朱実さん、およしよ、およしよ。死んだってつまらないじゃないか」

引きもどすと、よけいに、

「だって、おまえだって、武蔵様だって、みんなあたしを、悪者のように思ってるじゃないか。あたしは、死んでこの胸に、武蔵様を抱いてゆく。……そして添わせるものか、あんな女に」

「どうしたのさ。何が、どうしたのさ」

「さあ、その濠の中へ、あたしを突きとばしておくれ。……よ、よ、城太さん」

そして両手を顔に当て、さめざめと、泣きぬくのであった。

城太郎は、その姿を見て、ふしぎな恐こわさに取り憑つかっていた。自分も泣きたくなったらしく、

「……ネ。帰ろう」

と、宥なだめると、

「ああ、会いたい。城太さん——探して来ておくれ。武蔵様を」

「だめだよ、そんな方へ歩いてゆくと」

「——武蔵様」

「あぶないッたら」

この二人が居酒屋の横町を駈け出した時から、すぐ後を尾^つけて来た牢人者は、その時、狭い濠を繞^{めぐ}らした屋敷の角から、嗅^かぎ寄るように歩いて来て、

「こら、子ども。……この女は、おれが後から送り届けてやる。

お前は帰ってもいい」

と、朱実の体を、いきなり小脇に抱きしめて、城太郎を突き退^のけた。

身丈みのたけのすぐれた三十四、五の男である。かなつぽ眼まなこに青髯あおひげのあとが濃い。関東風というのか、江戸へ近づくに從つて、ひどく眼につくのが、着物や裾すその短いことと、刀の大きいことだった。

「おや?」

見上げると、下顎したあごから右の耳へかけて、刀の切先で撫であげられた古傷が、桃の割れ目のように歪ゆがんでいる。

(強そうなやつだぞ)

と思つたのであろう。城太郎は生唾なまつばをのんで――

「いいよ、いいよ」

朱実を連れ戻そうとすると、

「みる、この女は、やっと虫が納まって、いい気持そうに、おれ

の腕の中に締められて寝てしまった。おれが連れて帰ってやる」

「だめだよ、おじさん」

「帰れっ」

「……?」

「帰らないな」

ゆつくり、手をのばして、城太郎の襟がみをつかむと、城太郎は、羅生門らしやうもんの綱（渡辺綱のこと）が鬼の腕に耐えるように踏んばって、

「な、なにをするのさ」

「この餓鬼め、溝どぶの水を喰らって帰りたいか」

「なにをっ」

この頃は、体以上の木剣も、やや手について、ひねり腰に抜くがはやいか、牢人の横腰をなぐりつけた。

——しかし、自分の体も途端に、あぎやかなもんどりを宙に打って、溝へは落ちなかつたが、どこか、そこらの石にでもぶついたらしく、ううむと唸^{うな}って、それなり動きもしなかつた。

七

ひとり城太郎に限らず子供というものはよく気絶する。大人のような遅疑^{ちぎ}がないので、事にぶつかると、素純なたましいは、この世とあの世の境を、つい弾^{はず}みでも、超えてしまうのであろう。

「おーい、子どもう」

「お客さん」

「子ども……ウ」

耳元で、かわるがわるに呼ばれて、城太郎は、大勢の中に介抱されている自分を、ぱちぱち見まわした。

「気がついたかい」

皆に問われて、城太郎は、間がわるそうに、自分の木剣を拾うが早いか、歩き出した。

「これこれ、お前と一緒に出た女子おなごはどうした」

宿屋の手代は、あわてて彼の腕をつかまえた。

そう訊かれて、彼は初めて、この人々が、奥に泊っている角屋すみや

の者と、旅籠はたごしの雇人たちで、朱実を探しに来たものと知った。

誰が発明したのか、重宝ちようほうがられて上方でも流行っている

「ちようちん」と呼ぶ物が、もう関東にも来ているとみえ、それを持った男だの、棒切れを持った若者などが、

「おまえと、角屋の女子が、侍につかまって、難儀をしていると、知らせてくれた者があるのだ。……何処へ行ったかおまえは知っているだろうが」

城太郎は、首を振って、

「知らない。おいらは、何も知らない」

「何も？ ……ばかをいえ、何も知らぬことがあるものか」

「何処か、彼方むこうのほうへ、抱えて行ったよ。それきりしか、知ら

ない」

城太郎は、とかく返辞をいいしぶつた。関かかり合いになつて、後で奈良井の大蔵に叱こわられることが恐こわかつたのと、もう一つの理由は、相手に抛ほうりつけられて、氣絶きぜつしてしまつた不覚ふかくを、大勢の前でいうのが、間まがわるいのであつた。

「どつちだ。その侍の逃げた方は」

「あつちだ」

指さしたのも、いい加減であつたが、それつと、大勢が駈かけ出すとすぐ、ここにいた、ここにいたと、先で叫こゑぶ者がある。

提ちようちん燈ちん

や棒ぼうが駈かけ集あまつてみると——朱実しゆまはしどけない姿すがたを

農家の藁わら小屋こゝやらしい陰かげに曝さらしていた。その辺へんに積たんである乾ほしくさ草くさ

の上に押し伏されていたものとみえ、人の蹠音に驚いて、髪も着物も、わらや乾草だらけになつて、起き上がつていたが、襟はひらいてゐるし、帯はだらりと解けてゐる――

「まあ、どうしたのじゃ」

提燈の明りに、それを見た人々は、すぐ或る犯行を直感したが、さすがに、口へいい出す者もなく、犯行者の牢人者を追うことも忘れていた。

「……さ、お帰り」

手をひくと、その手を払つて、彼女は小屋の羽目はめへ顔を当てたまま、よよと、声をあげて、泣きじゃくつた。

「酔つてゐるらしいね」

「何でまた、戸外そとで酒など？」

人々は、しばらく、彼女の泣くにまかせて、見まもっていた。

城太郎も、遠くからその様子を覗いていた。彼女がどんな目に遭ったのか、彼にははつきり頭に描くことはできなかつたが、彼はふと、朱実とはまるで縁のない過去の或る体験を思いだしていた。

それは、大和やまとの柳生の庄のはたご屋に泊った時、はたごの小茶ちゃんという少女と、馬糧まぐさ小屋のわらの中で、抓つねったり、かじりついたりして、ただ狝ちんころのように、人の登音を恐れるおもしろさを味わった——あの経験であつた。

「行こうツ——と」

すぐ、つまらなくなつて、城太郎は駈けだした。駈けながら、
たつた今、あの世のてまえまで行つた魂を、この世に遊ばせて歌
いだした。

野なかの、野中の

金^{かな}ぼとけ

十六娘をしらないか

迷つた娘を知らないか

打つても、カーン

訊いても、カーン

くさひばり
草雲雀

帰る旅籠はたごは、分りきったつもりでいたらしいが、向う見ずに飛んで来るうちに、

「おや、違つたかな？」

城太郎は初めて、自分の駈けている道に、疑いを抱き、前や後ろを見まわして、

「来る時には、こんな所は歩かなかつたぞ」

と、やっと気がついたような顔つきである。

この辺には、古い砦とりでの蹟あとを中心に、一廓かくの武家町がある。砦の

石垣は、かつて他国の軍に占領されて、ひどく壊こわされたまま荒れているが、一部を修復して、今ではこの地方を支配する大久保長安の役宅か住居になっている模様である。

戦国以後に発達した平城ひらじろとちがひ、極めて旧式な——土豪時代の砦とりでなので、濠ほりも繞めぐらしてないし、従つて城壁も見えない。唐橋もない。ただ、漠ばくとした一面の藪山やぶやまであつた。

「あつ? ……誰だろう……あんな所から人間が?」

城太郎が佇たたずんでいた道の片側は、砦とりでの下を繞めぐっている侍屋敷の塀へいであつた。

そして一方は、田圃たんぼと沼であつた。——

その沼と田圃はすの端はすれからすぐ、嶮けわしい藪山の裏が、生はえたよう

に急に聳え立っている。

道もないし、石段も見えないから、恐らく、この辺は砦の掬からめ手てであろう。——だのに今、城太郎が見ていると、その藪山の絶壁から、綱を垂らして、降りて来る人間がある。

綱の先には、カギがついてみるとみえて、その綱の端まで降りてくると、足の先で、岩や木の根を探り、下から振ってカギを外はずし、またさらに下へ綱をのばして、スルスルと降りて来る。

——そして遂に、田圃たんぼと山の境まで下がって来ると、その人影はいったん其処らの雑木藪やぶの中に見えなくなってしまうた。

「なんだろ？」

城太郎の好奇心は、自分の身が宿場の灯から遠い所へ迷って来

ていることをも忘れさせてしまった。

「……？」

だがもう、彼がいくら眼をまるくしていても、何も見えて来なかつた。

それだけにまた、彼の好奇心は、そこを去りかねた様子で、往來の樹陰こかげにひたと身をつけて、やがて田圃たんぼの畦あぜを渡つて、自分の前へ来そうな氣のする——先刻さつきの人影を待ちぬいていた。

彼の期待は外はずれなかつた。ずいぶん時とき経つてからであつたが、やがて、畦道あぜみちからのそのそと此方こつちへ来る人間が見える。

「……なんだ薪まき拾ひろいか」

他人の山の薪を盗む土民は、一背負いの薪のために、夜を選ん

で、随分あぶない崖も越えるが、もしそんな者だったら——と城太郎はふとつまらない待ちくたびれを感じた。しかし再び、驚くべき事実を眼まのあたりに見せられて、彼の好奇心は、満足を通り越え、恐怖の顫ふるえに襲おそわれた。

——田圃あぜの畦から往来端へ上がった人影は、彼の小さい影が、樹の陰にへばりついているとも知らず、悠々、彼の側を通って行ったが、そのせつな、城太郎はよくも、

「あっ！」

という声を出さなかつたものである。

なぜなら、それは慥たしかに城太郎が先頃から身を託している奈良井の大蔵に違ちがいがないからである。

けれど彼はまたすぐ、

「いや、人間ひとまちが違ちがいだろ？」

と、自分の眼で見た瞬間のものを、打ち消そうとした。

そう打ち消してみると、間違いかとも信じられた。——かなた彼方へ

すたすたと行く後ろ姿を見れば、黒い布で顔をつつみ、黒い膝たつ行つ袴つげや脚絆つげもはいて、足も身軽なわらじ穿ばきではないか。

そして背中には、なにやら重たげな包しっかみを確乎しっかと背負っている。

その頑健な肩といい、腰ぼねといい、どうして、五十を越えた奈良井の大蔵であるものか——と、思われぬでもなかった。

見ていると、先へ行く人影は、また、往来から左の丘の方へ向つて、曲がって行く。

べつに深い考えもなく、城太郎も後に尾ついて歩いてた。

どっちにしても、彼も、帰る方角をきめて、歩き出さなければならぬ場合にあつたので、ほかに道を問う人影はなし、漫然、その男の後に尾ついて行つたら、宿場の燈火あかりが見えて来るだろう――ぐらいな思案にすぎなかつたのである。

ところが。

先の男は、横道へはいると、担かついでいた囊ふくろのような物を、重そうに、道みち標しるべの下におろして、石の文字を読んでいた。

「あら？ ……変だな……やっぱり大蔵様に似ている人だ」

それから城太郎は、いよいよ不審を増して、今度はほんとに、見え隠れに、その男を尾行^{つけ}てみる気になった。

男が、もう丘の道を登っているので、後から、道^{みち}標^{しるべ}の碑^ひの文字を読んでみると、

首塚の松

このうえ

と、彫つてある。

「ああ、あの松か」

その梢^{こずえ}は、丘の下からも仰がれた。後からそつと行つてみると、先に着いた男はすでに、松の根方に腰をおろし、煙草をつけて喫^す

っている。

「いよいよ、大蔵様にちがいないぞ」

と、城太郎は^{つぶや}呟いた。

なぜならば、その頃、ここらの田舎^{いなか}の人や町人が、滅多に煙草など持っているはずがない。煙草の味を教えたのは、南蛮人だそうであるが、日本で栽培するようになってからでも、高価なので、上方あたりでも、よほど贅沢な者でなければ喫^すわない。値^めだんばかりでなく、日本人の体はまだ喫煙の害に馴^なれないので、眩^{めま}い起したり、泡をふいたりする者が多いので、美味^{うま}いけれど、魔薬であると考えられている。

だから、奥州の伊達侯などは、六十余万石の領主であり、大の

煙草の好者すきしやといわれているが、祐筆ゆうひつの御日常書ごにちじようがきによると、

朝、お三ぶく

夕、御四ぶくおん

御寝ぎよしん、ご一ぶく

などと誌されてある。

そんなことは、城太郎の知ったわけのものでないが、城太郎にも、滅多な者が喫うべきものでないことは分っている。——また、それを奈良井の大蔵が、日常時をきらわず、陶器製の煙管きせるで喫っていたことも見ていた。もつとも大蔵が喫っているのは、木曾一の大家たいけの主人であるから、不審には思わなかったが、今、首塚の松の下で、スパリスパリと喫っている螢火ほどな煙草の火には、

恐ろしい疑念がわいた。

「何をしてるんだろ？」

彼は、冒険に狎なれて来て、いつのまにか、かなり近くの物陰まで、這い寄ってながめていた。

やがてのこと。

悠々と、煙草入れを仕舞うと、男はぬつくと立ち上がった。そしてかぶっている黒い布ぬのを脱とつたので、顔もよく見えた。やはり奈良井の大蔵なのである。

覆面に使っていた黒布を、手拭のように腰に挟むと、彼は、大地にはびこっている巨松の根を、一ひとまわ周まわりぐると巡つてあるいた。そしてどこから拾い出したのか、手には、いつのまにか、一

挺ちようくわの鍬くわを持つている。

「……？」

鍬を杖に立てて、大蔵はしばらく夜の景色でも眺めるように突つ立っている。城太郎もそれで気づいた。この丘は、町場のある本宿と、砦とりでや屋敷ばかりの住宅地との境になっている丘であった。

「うむ」

大蔵は、独りでうなずいた。そしてやにわに、松の根の北側に
ある一個の石を転がし、その石のあつた下を目がけて、ざくと、
一ひとくわ鍬入れはじめた。

鍬を振りだした大蔵は、わき目もふらずに、土を掘りのけた。

みているうちに、人間の体が立ったままであらかたはいるぐらいな穴になった。——そこで彼は、腰の黒い手拭で、ひと汗拭いた。

「……？」

草むらの石の陰に、石みたいになって、眼をまろくしていた城太郎は、その人間が、大蔵にちがいないと見てはいるが、それでもまだ、自分の知っている奈良井の大蔵とは、人がちがう気がしてならなかった。世の中に、奈良井の大蔵という者が、二人いるような気がして来るのだった。

「……よし」

大蔵は、穴の中にはいつて、地面から首だけ出して、そういつた。

穴の底を、足で踏み固めているのだった。

自分を埋めて、土をかぶるつもりなら、止めなければならぬ——と城太郎は考えていたが、そんな心配はいらなかつた。

穴から跳び出すと、彼は松の木の下に置いてあつたふくろ囊のような重い物を、穴のそばまで、ずるずる引き摺つて来て、囊の首をくく括つてある麻の紐をひも解いている。

風呂敷かと思つたら、それは革の陣羽織であつた。陣羽織の下に、もう一重、ひとえ幕みたいな布でぬの包んである物を開けると、驚くべ

き黄金の海鼠なまこがあらわれた。二つ割りの竹の節のあいだに、熔とかした黄金を流したもので、竹流しの竿さお金きんともよぶ地金で、それが何本もあった。

それだけかと思っていると、彼はこんどは帯を解いて、腹巻だの、背中だの、体じゆうから、慶長判に鑄ふき上げてある金を、何十枚となく振りこぼした。それを手早く掻き集めて黄金の地金といっしよに、陣羽織にくるむと、穴の中へ犬の死骸でも蹴く込むように、ずしーんと落した。

土をかぶせる。

足で踏みつける。

そして石を、元のとおりな位置へすえ、新しい土塊つちくれが、そこ

らに目立たぬように、枯草や木の枝などを撒きちらし、こんどは、自分の身装みなりを、平常の奈良井の大蔵に変えているのだった。

草鞋わらじや脚絆きやはんや、不用になった物は、鋏くわにくくし付けて、人の

はいらない藪の中へ投げこんだ。そして十徳を着、十徳の胸へ、雲水の掛けているような頭陀袋ずだぶくろをさげ、草履まで穿はきかえると、

「アア、一ひとほね骨ほねだつた」

呟つぶやいて、丘の彼方へ、さつさと降りて行つてしまった。

その後で、城太郎はすぐ、生き埋めになつた黄金のあとに立つてみた。どう見ても、掘りかえしたらしい痕あとは残っていない。彼は魔術師の掌てのひらを見つめるように、大地を見ていた。

「……そうだ。先へ帰っていないと、変に思われるぞ」

町場の燈火あかりが見えているので、もう帰り途の見当はついていて、彼は、大蔵とちがう道をえらんで風の子みたいに丘から駈けだした。

何喰わぬ顔をして、旅籠の二階へあがり、自分たちの部屋へ入ってゆくと、いいあんばいにまだ大蔵は戻っていない。

ただ、行燈あんどんの下に、下男の助市が、挟み筈はさきばこへよりかかって、孤影悄然と、よだれをたらして眠っていた。

「おい、助さん、風邪かぜひくよ」

わざと、揺り起すと、

「あ。城太か……」

助市は、眼をこすって、

「こんな遅くまで、御主人様へも無断で、わりやあ何処へ行つていたのだ」

「何いつてんだい」

城太郎はやり返して、

「おいらはもう、とつくの昔に帰っていたじやないか。寝ぼけて、知りもしないくせに」

「嘘をつけ。わりやあ、すみやおんな角屋の妓を引っぱり出して、外へ行つたというじやねえか。——今から、そんなまねしやがって、未恐ろしいやつだ」

間もなかつた。

そこへ奈良井の大蔵が、

「今もどつたよ」

障子を開けて入つて来た。

四

どう歩いてても、十二、三里はある。陽のあるうちに江戸へ着こうとすれば、よほど早立ちをしなければならぬ。

角屋の一行は、まだ暗いうちに八王子を立つた。奈良井の大蔵の組は、悠々、朝食をしたため、

「さて」

と宿を立ち出でたのが、もう陽のたかい時分。

挟み筥ばこの下男と、城太郎とは、例によつて、お供に従ついていたが、きよようの城太郎は、ゆうべの事実があるので、何となく、大蔵に対する気ぶりが違つていた。

「城太」

大蔵はふり向いて、浮かない彼の顔つきへ、

「どうした、きよようは」

「へ？ ……」

「どうかしたのか」

「どうもしません」

「ひどく、きよように限つて、むつつりしているじゃないか」

「はい……、大蔵様。実は、こうしてはお師匠様にいつ行き

会えるか分らないから、おいら、おじさんと別れて捜そうと思うんだけれど……いけないかな」

大蔵は膠にべなくいった。

「いけないな」

すると城太郎は、いつものように、馴なれなれ々なれしくすが縋りかけたが、急に手を引っ込めて、

「どうして」

と恟おぞおぞ々おぞいう。

「一ぶくしよう」

大蔵はそういつて、武蔵野の草に腰をおろした。そして挟みはこ篭かを担いでいる助市へ、先へ行けと手を振って見せる。

「おじさん、おいら、どうしても、お師匠様をはやく捜したいもの。だから一人で、歩いたほうがいいと思つて——」

「いけないというのに」

難かしい顔を示しながら、大蔵は陶器すえものの煙管きせるで、すぱりとくゆらしながら、

「お前は、きようから、おれの子になるのだ」

と、いった。

問題が重大なので、城太郎は唾つばをのんだ。だが、大蔵はもうにやにや笑っているので、冗談をいわれたのだと解して、

「いやなこつた。おじさんの子になんかなるの嫌だ」

「どうして」

「おじさんは、町人だろ。おいらは武士さむらいになりたいたんだもの」
「奈良井の大蔵も、根を洗えば、町人ではない。きつと、偉い武士にさせてやるから、わしの養子になれ」

どうやら本気らしいので、城太郎は身ぶるいを覚えながら、

「なぜおじさんは、急にそんなことをいい出すのだい？」

——すると大蔵は、いきなり城太郎の手を引き寄せて、ぎゅつと、羽交はがいじ締めじに抱き込みながら、彼の耳へ、唇くちをつけて、小声にいった。

「見たな！ 小僧」

「……え？」

「見たろう！」

「……な、なにをさ」

「ゆうべ、おれがしたことを」

「………」

「なぜ見た！」

「………」

「なぜひとの秘密を見る！」

「……ごめんよ、おじさん、ごめんよ。誰にもいわないから」

「大きな声を出すな。もう見てしまったことだから、叱こじと言はいわぬ。その代りに、わしの子になれ。それが嫌なら、可愛い奴だが、

殺してしまわなければならぬのだ。——どうだ、どっちがいい？」

五

ほんとに殺されるかも知れないと思った。生れて初めて恐こわいというものに出会った気持であった。

「ごめんよ、ごめんよ。殺しちや厭いやだい。死ぬのは厭いやだい」
抑えられた雲雀ひばりのように、城太郎は、大蔵の腕の中で軽くもがいた。大きく暴れると、すぐに死の手がお押しつぶさってくるようにおそに惧れもするのであった。

そのくせ大蔵の手は、決して、彼の心臓がつぶれる程、強い力で締めつけているのではない。

やんわりと、膝のなかへ抱えこんで、

「じゃあ、おれの子になるか」

と、まばらな髯ひげを城太郎の頬へ摺すりつけていう。

その髯が痛い。

そのやんわりとした力がとても怖ろしい。大人臭いにおいが体を縛しばってしまふ。

どうしてだろう。城太郎にも分らなかつた。危険というだけなら、これ以上あぶない目には何度も出会っているし、それに対しては、むしろ向う見ずな性質たちなのに、声も手も出ないで、嬰児あかごのように、大蔵の膝から逃げることができなかつた。

「どっちだ。どっちがいい？」

「……………」

「おれの子になるか、殺されたほうがいいか」

「……………」

「これ、はやくいえ」

「……………」

城太郎はとうとうベソを掻き始めた。汚い手で顔をこするものだから、涙が黒いしずくになって小鼻のそばに溜たまっている。

「なにを泣くか。おれの子になれば、倅さむらいせじやあないか。武士さむらいになりたければ、なおさらのことだ。きつといい武士に仕立ててやる」

「だって……………」

「だってなんだ」

「……………」

「はつきりいえ」

「おじさんは……………」

「うむ」

「でも」

「焦^じれたい奴。男というものは、もつと何でもはつきり物をいうものだ」

「……………だつてね……………おじさんの商売は、泥棒だろ」

もし大蔵の手が、軽くでもかかっているなければ、途端に彼は、雲をかすみと駈け出していたに違いないが、その膝が深い淵^{ふち}のように、起つこともできなかつた。

「あははははは」

大蔵は、泣きじやくる背を、ぽんとたたいて、

「だから、おれの子になるのは、嫌だつていうのか」

「……う、うん」

城太郎がうなずくと、彼はまた、肩をゆすつて笑いながら、

「おれは、天下を盗む者かもしれないが、けちな追おいはぎ剥はぎや空巢くわうね

らいたあ違ちがう。家康も秀吉も信長も、みな天下を奪とつた人間じゃないか。——おれに従したがって長い目で見てみると、今にわかつて来る」

「じゃあおじさんは、泥棒でもないの」

「そんな割わりの合わない商売はしない。——おれはもつと太い人間

「さ」

もう城太郎の思案では、どう答えていいか、背が足りなかつた。大蔵は、膝の上から、ぽんと彼を離して、

「さあ、泣かずに歩け。きょうからはわしの子だ。可愛がつてやる代りに、^{おくび}曖にも、ゆうべのことをひとに喋^{しゃべ}舌るな。——喋^{しゃべ}舌るとすぐ、その首を捻じ切つてしまふぞよ」

くさわけ
草分の人々
ひとびと

本位田又八の母が、江戸表へ来たのは、その年の五月末頃であった。

気候は、めつきり暑くなっていた。ことしは空梅雨か、ひと粒の雨も見えない。

「こんな草原や葭よしの多い沼地へ——なんでまたこんなに家が建つのじやろ？」

江戸へ来て、彼女の第一印象は、そんな眩つぶやきであった。

京の天津を出てから約二カ月近くもかかって、彼女はやっと今、着いたのである。道は東海道をとって来たものらしく、途中では、持病やら信心詣りやら、道草も多いので、都をば霞かすみとともに出でしかど——という歌どおり遙けくふり返られる。

高輪街道には、近頃植えた並木や、一里塚もできていた。汐たかなわ入おいりから日本橋へゆく道は、新しい市街の幹線道路なので、わりあいに歩きよいが、それでも、石や材木をつんだ牛車がひっきりなしに通るのと、人家の普請ふしんや、埋地うめちの土運びなどで、足もとも悪く、雨もふらないので、濛々もうもうと、白い埃ほこりが立っている。

「——ア、なんじゃ？」

彼女は、目角を立てて、普請中の新しい民家の中を睨ねめつけた。中で笑う声があった。

左官屋が壁を塗っているのである。こての先から飛んできた壁土が、彼女の着物をよごしたのであった。

年は老とつても、こういうことには我慢のならない婆ばばであった。

ついこの年頃まで、郷里では、本位田家の隠居で通った権けん式しきぐせが、とたんに憤むつと出るのである。

「往來の者へ、壁土をはね返しながら、詫わびもせず、笑うているという法があるうか」

郷里の畑でこういえば、小作や村の者は、慥しやう伏ふくしたものであつた。しかし、御新開の江戸へ遽にわかに流れて来て、荒い土をこねている左官屋職人は、こてをうごかしながら鼻で笑つた。

「なんだつて。——変なばばあが、なにか、ぶつぶついつてるぜ」
お杉婆は、いよいよ怒つて、

「今、笑うたのは、いつたい誰じゃ」

「みんなだよ」

「なんじやと」

ばばが肩をいからせる程、職人たちは笑っていた。

年がいもない——よせばいいのにと、足を止めた往来の者は、はらはらしていたが、ばばの性格がそれではすまなかつた。

黙つて、彼女は土間の中へ入つて行つた。そして左官たちが、足場にして乗っている板へ手をかけながら、

「おのれであろうが」

と、板を外はずした。

左官たちは、漆喰しつくい板の泥を浴びて、板の上からころげ落ちた。

「こん畜生」

匆はね起きると、左官たちは、ひとつかみにしてしまいけんそんな権

まくで、お杉ばばの前に立ったが、

「さあ、外へ出い」

婆は、脇差に手をかけて、少しも年よりらしい怯みひるは見せない。その勢いに、職人たちは、気をのまれてしまった。こんな婆さんがあろうかと意外であつた。すがたや言葉づかいから考えて、侍のおふくろであることは知れているし、へたな真似をしては——と、急におそ懼れをなした顔いろである。

「この後、今のような無礼をしやると、承知せぬぞよ」

これでいいのだ、ばばは気がすんだとみえて、往来へ出て行つた。往来の者は彼女のきかない気らしい後ろつきを見送つてちらかつた。

すると、かんな屑くずを泥足にひきずった左官屋の小僧が、ふいに普請場の横から駈け出して行つて、

「この、ばばめ」

いきなり、手桶のへどろを、彼女の体へぶちまけて、隠れてしまつた。

二

「何するかつ」

振り向いた時は、もう悪戯いたづらの下手人はいなかつた。

自分の背に浴びた壁土に気づくと、彼女の顔は、無念そうなう

ちに、泣き出しそうな顔を顰めて、

「何を笑う？」

と、こんどは、笑っている往来の者へ向つて、いいちらした。

「げらげらと、何がおかしゆうて、笑い召さるのじゃ。老いぼれは、わしのみではないぞえ。おぬしらも、やがては年を老るとやは、はるばると遠国から越えて来たこのとしよりを、親切に宥らうとはせず、捏ね土を浴びせたり、齒をむいて嘲笑うたりするのが江戸の衆の人情か」

ののし
罵るために、往来はよけい足を止め、また愈々《いよいよ》、
笑い声を増すことが、お杉婆には分らぬらしい。

「お江戸お江戸と、日本じゆうでは今、この上もない土地のよう

に、偉いうわさじやが、何のことじや、来てみれば、山を崩し、
葭沼よしぬまを埋め、堀を掘つては海の洲すを盛っている慌あわだしい埃ほこりばかり。
おまけに人情はすすどうて、人からの下品げびていることは、京
から西には見られぬことじや」

これで、婆は少し胸がすいたとみえる。なお笑う群衆を捨てて、
忌々いまいましげに、脚をはやめて行つた。

町はどこを見ても、木口も壁も新しくて、ぎらぎらと眼を射る
し、空地へ出ると、まだ埋めきれない土の下から、葭よしや蘆あしの根が
枯れて喰はみ出している。乾いた牛の糞ふんは、眼や鼻にはいる気がす
るのであつた。

「これが江戸か」

彼女は、事々に、江戸が気に入らなかつた。新開発の江戸の中でいちばん古い物が、自分の姿のように思われた。

実際、この土に活動しているものは、ことごと悉くが若い者に限られていた。店舗てんぽを持つている主人も若いし、騎馬で歩いている役人も、編笠を抑えて大股に過ぐる侍も、労働者も、こうしよう工匠も、物売りも、歩卒も部将も、すべてが若かつた。若い者の天地だった。「尋ねる者でもない旅なら、こんな所に、一日とて、居てくれるのではないが……」

ぶつぶついつているまに、婆はまた、足を止めた。ここもまた、堀を掘っているので、道を曲がらなければならなかつた。

掘り出した土の山は、どんどんと、土車で運ばれてゆく。そう

して、葭よしや蘆が埋つてゆくそばから、大工は家を組み、大工のはいつているうちに、もう白おしろい粉の女が、暖簾のれんの陰で眉を刷はいたり、酒を売つたり、生薬きぐすりの看板をかけたたり、呉服反物を積みあげていたりしていた。

ここらは以前の千代田村と日比谷村のあいだを通っている奥州街道の田圃たんぼみち道が開けているので、もつと、江戸城の周圍に寄れば、太田道灌どうかん以後、天正の御入国以来のまとまった大名だいまようこう小路じや屋敷町もあつて、多少、城下としての落着きもあるのであつたが、婆はまだ、そこへは足を踏んでいない。

そして、昨日今日、急拵えにできかかっている新開地を見て、江戸の全体を考えているので、ひどく落着かないのであつた。

掘りかけている空堀からぼりの橋のたもとに、ふとみると、一軒のほ
つたて小屋がある。四方は蓆張むしろばりで、削ぎ竹そたけを抑えに打ち、入
口にのれんを掛けて、そこから一本の小旗が出ている。
見ると、一字、

「ゆ」

と書いてある。

永楽のびた銭一枚を、湯番にわたして、ばばは、湯にはいった。
汗をながすのが目的めあてではなかった。竿さおを借りて、抓つまみ洗いをした
着物を小屋の横ほに干し、その乾くあいだ、襦袢じゆばん一枚で、洗濯
物の下にはほそい脛すねをかかえて、往来をながめていた。

三

時々、干し竿ほざおの着物を手で触つてみる。陽が強いのですぐ乾きそうに思われたが、なかなか乾かないのである。

襦袢一枚に、湯巻の上へ帯を巻いたきりで、これを待っているので、見得みえを知らないばばも、往来から見えないように、銭湯小屋の陰に、いつまでも縮ちぢまっていた。

すると、往来の向う側で、

「幾坪いくつぽあるのだい、この地所は——安けれやあ相談に乗ろうじやないか」

「総坪で、八百坪からござんすよ。値だんは、申し上げたより負

かりません」

「高いなあ。すこし、べら棒じゃないか」

「どういたしましたして、土盛りの人足賃だつて、安かあございません。——それにサ、もうこの界隈かいわいには地所はありませんぜ」

「なあに、まだ、あの通り埋立てているじゃないか」

「ところが、葭よしの生えているうちから、みんなあばき合いで、買手を待っている地所なんぞ、十坪だつてありませんや。——もつとも、ずっと隅田川の河原寄りなら幾らかありやすがね」

「ほんとに、八百坪あるのかい、この地面は」

「だから念のために、縄なわを引いてごらんすつて」

四、五名の町人どうしで、頻りと、土地売買の取引をしている

のだった。

その値だんを、往来ごしに聞いて、お杉ばばは、眼をまろくした。田舎なら米のできる田が何十枚という値が、ここの一坪か二坪の値だった。

江戸の町人のあいだには今、熱病のように、土地売買の思惑おもわくが行われているので、こんな風景は、随所に見られるのであったが、

「米も実ならなければ、町なかでもない地面を、どうしてここらの衆はあんなに買うのか」

と、彼女には、不思議でならなかった。

そのうち取引の相談がまとまったのであろう。埋地に立つて

いた人影は、手打ちをして散らかつて行つた。

「——おやつ？」

ぼんやりと、そんな物を見ているうちに、誰か背後うしろへ来て、自分の帯へ手を入れた者があるので、ばばはその手を掴つかんで、

「泥棒っ」

と、さげんだ。

小出しの財布はもう帯の間を抜けて、土工か駕かごかきらしい男の手に掴まれたまま、往来の方へ飛んでいた。

「——泥棒じゃっ」

自分の首を持って行かれたように、ばばは追すがい縋すがつて、男の腰へしがみついた。

「——来てくだされツ。往来の衆ツ。盗人じゃつ」

一つや二つ、顔を撲つても、容易にばばの手が離れないので、
持て余した搔かつ攫さらいは、

「うるせえつ」

と、いいながら、足をあげて、ばばの脾腹ひばらを蹴とばした。

並たいていの老婆と心得たのがその小泥棒には不覚であつた。

うむうつ——と呻うめいてばばは仆れたものの、それと共に、襦じゆ袷ばん

一重になつても差していた小脇差を、抜きざまに酬むくいて、相手の
足くびを斬っていた。

「ア痛いててて」

財布を持った小泥棒は、ちんばを曳いたままそれでも十間ばかり

り逃げたが、おびただ夥しい血がこぼれるのを見て、貧血して、往来へ坐つてしまった。

今、埋地で土地の手打をして、一人の乾児こぶんと共に歩いていた半瓦んがわらの弥次兵衛は、

「——やつ？ そいつあこの間まで、部屋にごろついていた甲州者じゃねえか」

「そうのです。財布を握っていますぞ」

「泥棒という声が聞えたが、部屋を出ても、まだ手癖てくせがやまねえな。……おお彼方むこうに老婆としよりが仆れている。甲州者はおれが捕まえているから、あの老婆としよりをいたわ労つて来い」

半瓦は、そういうと、逃げかけるちんばの襟がみをつま抓んで、ばった蝨

でも叩きつけるように、空地の方へ抛り出した。

四

「親分、そいつが、婆さんの財布を持っている筈ですが」

「財布はおれが奪り返して預かっている。としよりはどうした」

「たいして怪我もございません。気を失っていましたが、気がつくとすぐあの通り財布財布と喚いております」

「坐っているじゃねえか。起てねえのか」

「そいつに、脾腹を蹴とばされたんで」

「よくねえ奴だ」

はんがわら 半瓦は、小泥棒を睨めつけて、乾児こぶんの男へいつけた。

「丑うし。杭くいを打て」

杭を打て——と聞くと甲州者の小泥棒は、刃物を当てられたより顛ふるえあがって、

「親分、それだけは、どうぞご勘弁を。以後は改心して、よく働きますから」

ひれ伏して、拜んだが、半瓦は首を振って、

「ならねえ、ならねえ」

その間に、走って行った乾児は仮橋普請ふしんをしている大工を二人連れて来て、

「この辺へ打ってくれ」

と、空地の中ほどを足で示して大工へいう。

ふたりの大工は、そこへ一本の杭くを打ちこんで、

「半瓦の親分、これでようがすか」

「よしよし。野郎をそこへふん縛くつて、頭の上のあたりへ、板を一枚打つてくれ」

「なにか、お書きになるので」

「そうだ」

大工の墨つぼを借りて、それへ差尺さしがね筆ふでで、

一ツ 泥棒一ぴき

せんだつて迄、半瓦の部屋の飯食い者、再度悪事のかどこれ之有あり候おにつき、雨ぎらし陽ひざらし、七日七晩きゅうめいきゆうめいさせ置お

きそろうろう
候 ものなり。

大工町

弥次兵衛

「ありがとう」

墨つぼを返して、

「すまねえが、死なねえ程に、弁当飯のあまりでも、時々エサをやつといてくれ」

と、橋普はしづしん請の大工や、近くで働いている土工たちへ頼んだ。

一同は口を揃えて、

「承知いたしました。たんと笑ってやりやしよう」
と、いった。

笑つてやるといふことは、町人社会でさえ、この上もない制裁であつた。年久しく武家は武家と戦争ばかりして、民治や刑法がゆき届かないために、町人社会はそれ自体の秩序のために、こういう私刑の方法を持つていた。

新興の江戸政体には、もう町奉行の組織だの、大庄屋制度をそのままいか厳めしく延長したような職制や民治が体をなしかかつていたが、民間の旧習というものは、上ができたからといって、にわか遽に余風が革まるものではない。

けれど、私刑の風などは、新開発の半途にある混雑な社会には、まだ当分あつてもよいものとして、町奉行でも、べつにこれを取締ることはしなかつた。

「丑、そのとしよりへ、財布を返してやれ」

はんがわら
半瓦は、それをお杉ばばの手へ戻してから、また、

「かあいそうに、この年して、ひとり旅の様子じゃねえか。……
着物はどうしたんだ」

「風呂小屋の横に、洗濯して、乾ほしてありますが」

「じゃあ着物を持って、としよりを負おぶって来い」

「家へ連れて帰かえるんで？」

「そうよ、盗ぬすつ人ひとだけ懲こらしたつてこのとしよりを捨てておいた
ら、またどいつかが悪い量見りょうみを起おこさねえとも限かぎるまい」

なまがわ
生乾なまがわきの着物を抱かかえ、彼女を背せなかに負おぶつて、乾こ児ぶんの男が、

半瓦のあとに尾おいてそこを立たち去いると、往來わらいにつかえていた人垣ひとがき

も、ぞろぞろと東西へ崩れだした。

五

日本橋は、竣工^{でき}してからまだ一年も踏まれていなかった。

後の錦絵などで見ると、その河幅はずっと広くて、両岸から新しい石垣の築出し^{つきだ}が築かれ、そこにまだ新しい白木の欄干が架^かかっていた。

鎌倉船や、小田原船が、橋の際^{きわ}までいっぱいには行って行った。その向う河岸に、魚くさい人間がわいわいと市を立てている。

「……痛い。うう痛い」

ばばは、乾児こぶんの背なかで、顔をしかめながらも、魚市場の人声に何事かと、眼をみはった。

半瓦は、乾児の背から、時々聞える呻うめきをふり向いて、
「もう直じきだよ、辛抱しねえ、生命いのちに別条があるじやなし、余り唸うなりなさんな」

往来の者が、頻りと振向くので、こう注意したのである。

それから、おとなしくなつて、ばばは嬰兒あかごみたいに、乾児の背へ顔を寝かせていた。

鍛冶町かじだの、槍町だの、紺屋町こんやだの、畳町だの、職人色に町がわかれていた。大工町の半瓦の家は、その中でひどく変っていた。屋根の半分が瓦で葺ふいてあるのが、誰の眼にもついた。

二、三年前の大火以後、町の家は板屋葺いたやぶきになつたが、その以前は、草葺屋根くさいぶきがおおかたであつた。弥次兵衛やじべえは往来に向つた方だけ、瓦で葺いたので、

(半瓦、半瓦)と、それが通り名になつてしまひ、自分も得意だつた。

江戸へ移住して来た初めは、弥次兵衛はただの牢人者だつたが、才氣きようきと俠氣きようきが備わつていたので、人を御すぎよのが上手、町人になつて、屋根請負うけおいを始め、やがて、諸侯の普請人足ふしんを請負うようになり、また、土地の売買をやつたりして、今では懐手ふところをして「親分」という特殊な敬称をうけている。

「親分」とよばれる特殊な権力家は、新しい江戸には今、彼のほ

かにも、簇生ぞくせいしてきた。しかし彼はその中でも顔のひろい「親分」であつた。

町の者は、武家をさむらいと尊敬するように、彼らの一族をも「男伊達だて」と敬称して、むしろ武家の下風にある自分たちの味方の者としていた。

この男伊達も、江戸へ来てから、風俗だの精神は大いに變化したが、江戸の町から発生した生え抜きはではない。足利あしかがの末の乱世には、もう茨いばらぐみ組などという徒党があつて——もちろんそれは男伊達などとは敬称されなかつたが、「室町殿物語」などによると、

ソノ装束ハ、赤裸セキラニ茜アカネソメ染ノ下帯、小王打コワウチノ上帯ハ幾重

二モマハシ、三尺八寸ノ朱鞆シユザヤノ刀、柄ハ一尺八寸ニ卷カセ、
 二尺一寸ノ打刀ウチガタナモ同ジニ仕立テ、頭ハ髪ヲツカミ乱シ、
 荒縄ニテ鉢巻ムズトシメ、黒革クロカハノ脚絆キヤハンヲシ、同行常ドウカウニ二
 十人バカリ、熊手マサカリ、鉞ニナナド担フモアリテ……

そして群集はそれを見ると、

(当時聞ゆる茨いばらぐみ組ぞ、あたりへ寄るな、物いうな)

と、怯おそじ怖おそれて、道をあけて通したほどな威勢であつたとある。

その茨組は、口には王義を唱えながら、時には、

(物奪ものり強盗は武士の慣い)

と出かけ、市街戦の時には、乱破らっぱに化けて、敵へも味方へも節操を売りなどしたため、平和になると、武家からも民衆からも追

われてしまい、素質の悪いのは、山野に封じこめられて追剥稼おいはぎかせぎに落ち、性しょうぼね骨のある者は、新開発の江戸という天地を見つけて、ここに起りかけてある文化に眼ざめ、

（正義を骨に、民衆を肉に、義と侠の男らしさを皮にして——）
新興男伊達なるものが、いろいろな職業や階級の中から今、名乗りをあげているのだった。

「帰ったぞ、どいつか、出て来ねえか。——お客さまをお連れ申しているのだ」

半瓦は、自分の家に入ると、大まかな町屋造りの奥へ向って、
こう呶鳴った。

喧嘩河原

一

よくよく居心地がよいとみえ、お杉ばばがはんがわら半瓦おきふの家に起し臥しを始めてから、月日はいつか一年半も巡っている。

その一年半の間、ばばは何をしていたかという、体が、がつしり癒なおつてからは、

(思わず長いお世話になりましたわいの。もうお暇いとまをせにやならぬ)

と、今日は明日はと、いい暮して来たに過ぎない。

しかし、暇を乞おうにも、主人の半瓦弥次兵衛とは、めつたに顔を合わすこともない。たまたま、いたと思えば、

（まあまあ、そう気のみじかいことをいわずに、ゆるりと、敵をさがしなされ。身内の者も、絶えず心がけているのだから、追っつけ、武蔵の居所をつきとめ、ばば殿に、助太刀しようというてゐるのに）

そういわれると、彼女もまた、ここの軒から立つ気も失せる。初めのうちは、およそ江戸という土地がらや風俗を、忌み嫌っていた彼女も、この半瓦の家一年半も過ごすうちに、

（江戸の人の親切さ）

を身に沁みて、

(何という、気ままな暮し)

と、目を細めて、この土地の人間を眺めるようになっていた。わけても、半瓦の家はそうだった。ここには百姓出の怠け者もいるし、関ヶ原くずれの牢人も、親の金を蕩とうじん尽して逃げて来た極道者も、おととい牢屋から出て来た入墨者いれずみものもいるが——それが弥次兵衛という戸長もとの下に、大家族式な生活を営み、ぎツかけない、粗あらっぽい、極めて不しだらな——中にも整然たる階級を持つて、

(男を磨きあう)

ということを御神燈みあかしに立てて、一種の六方者むほうもの道場を世帯として
ているのだった。

この六方者道場には、親分の下に兄哥あにきがあり、兄哥の下に乾児こぶんがあり、その乾児のうちにも古参新参の区別がやかましく、他の客分格だの、仲間の礼儀作法も、誰が立てたともなく、非常に厳密であつた。

(ただ遊んでござるのが退屈だったら、若い者の世話などみてくれると有難い)

と、弥次兵衛にいわれたところから、お杉ばばは、一間ひとまにあつて、沢山ながさつ者の洗濯とか、縫物などを、お針子を集めて来ては、整理してやっている。

(さすがに、土さむらいのご隠居だ。本位田家とやらも、相当な家風を持つた家筋とみえる)

がさつ者は、噂し合つた。お杉ばばの厳格な起居と家政ぶりは、ひどく彼らを感嘆せしめた。また、それが六方者道場の風紀を正すうえに役立つた。

六方者ということばは、無法者にも通じる。柄つかの長い大小を突出し、二本のから脛すねと、二本のこじりを突つ張つて歩く男だての姿から来た町の綽名あだななのである。

「宮本武蔵という侍が立ち廻つたら、すぐあのばば殿へ知らせてやれ」

半瓦の身内は、等しくこう心がけていたが、すでに一年半からになるが、その武蔵の名は杳ようとしてこの江戸には聞かなかつた。

半瓦弥次兵衛は、お杉ばばの口から、その意志や境遇を聞いて、

甚だしく同情を抱いたのである。で、彼の持った武蔵観かんは、当然、お杉ばばの武蔵観であつた。

「えらい婆殿だ。憎むべき野郎は武蔵とやらだ」

そうして彼は、お杉ばばのために、裏の空地へ一室を建ててやったり、家にいる日は、朝ちようせき夕、挨拶に出たりして、賓客に仕えるように、このばばを大事にした。

乾児が、彼に訊ねた。

「お客を大事になさるのはいいが、親分ともあろう者が、どうして、そんなに鄭重になさるんですかえ」

すると、半瓦はこう答えた。

「この頃おれは、他人の親でも年よりを見ると、親孝行がしたく

なるんだ。……だから俺が、どんなに、自分の死んだ親には、親不孝だったか分るだろう」

二

町なかの野梅は散った。江戸にはまだ桜はほとんどなかつた。わずかに、山の手の崖に、山桜が白く見られる。近年、浅草寺せんそうの前に、桜の並木を移植した奇特家があつて、まだ若木ではあるが、ことしはだいぶ蕾つぼみを持ったという。

「ばば殿、きようは一つ、浅草寺へお供しようと思うが、行く気はないか」

半瓦の誘いに、

「おう、観世音は、わしも信仰じゃ。ぜひ伴つれて行つてたも」

「では——」

と、いうので、お杉ばも加えて、乾児の菰こもの十郎に、お稚児ちごの小六の二人に弁当など持たせて、京橋堀から舟に乗った。

お稚児ちごといえは優しげに聞えるが、これが向う傷のある肉のかたじまりな、いかにも喧嘩早い生れつきに出来ているような小男で、櫓ろはうまい。

堀から隅田のながれへ漕ぎ出すと、半瓦は、重じゅう 筥ばこを開けさせて、

「おばあさん、実は今日は、わしのおふくろの命日なのです。墓は

かまい

詣りといつても、故郷は遠国なので、浅草寺へでもお詣りして、何か一つ、今日は善いことをして帰ろうと思うのだ。……だから遊山のつもりで、一献飲みましょう」

と、杯を持って、舷から手をのぼし、大川の水を杯洗にしてさつと雫を振って婆へ酌した。

「そうか。……それはそれは優しいお心がけじやな」

お杉はふと、自分にもやがて来る命日考えた。それはすぐ、又八を考えることでもあった。

「さ、少しは飲けるでしょう。水の上だが、わしらがついているから、安心して酔うておくんなさい」

「御命日なのに、酒をのんでも、悪いことはござりませぬか」

「むほうもの六方者は、嘘や飾りの儀式が大嫌い。それに此方人は、門徒だから、物知らずでいいのです」

「久しゆう、酒も飲まなんだ。——酒はたべても、このように、のびのび暢々とはのう」

お杉は、杯を重ねた。

すみだじゆく隅田宿の方から流れてくるこの大河は満々として広がった。

しもうさ下総寄りの岸の方には、うつそう鬱蒼とした森が折り重なり、河水に

樹の根の洗われている辺りは、水もまつ蒼な日陰の澗とろになつてい
る。

「才うぐいす才、鶯が啼きぬいて」

「梅雨頃には、昼間も、昼ほとときすが啼きぬくが……まだ時ほとと

鳥ぎすは「

「ご返杯じゃ。……親分様、きようは婆もよい供養のおこぼれにあずかりましたわえ」

「そう、欣よろこんでくれると、わしも有難い。さあ、もつと重ねぬか」
すると、櫓ろを漕こいでいるお稚児が、羨ましそうに、

「親分、こつちへも、少し廻してもらいてえもので」

「てめえは、櫓がうまいから連れて来たのだ。行きに飲ますとあぶねえから、帰りにはふんだんに飲め」

「我慢は辛いものだ。大川の水がみんな酒に見える」

「お稚児、あそこで網を打っている船へ寄せて、肴さかなを少し買い込め」

心得て、お稚児が漕ぎよせて、漁師りようしにかけ合うと、なんでも持つて行きなされと、漁師は船板を開けてみせる。

山国で老いたお杉ばばには、目をみはるほど珍しかった。

船底にバチャバチャ生きている魚を見ると、鯉、鱒ますがある。すずき、鯊はぜにくろ鯛がある。手長えびなますや鯰もある。

半瓦は、白魚しらうおをすぐ醤油につけて喰べ、彼女にもすすめたが、「生ぐさは、よう喰べぬ」

と、ばばは首を振って、おぞけをふるった。

舟は間もなく、隅田河原の西へついた。河原を上がると、波打ち際の森の中に、すぐ浅草観音堂の茅葺かやぶき屋根が見えた。

三

人々は河原へ降りた。ばばは少し酔っている。年のせいかな舟から足を移すのに、よろめく気味であつた。

「あぶない、手をとろう」

半瓦が手をひくと、

「なんの、やめてくだされ」

婆は手を振る。

年より扱いが元から嫌いな性たちなのである。乾児こぶんの菰こもの十郎とお

稚児の小六は、舟をつないで後から従ついた。河原は渺びよう々びようとし

て眼の限り石ころと水であつた。

するとその河原の石ころを起して、蟹かにでも捕まえているらしい子供が、たまたま、河から上がった珍しい人影を見て、

「おじさん、買つとくれ」

「ばばさん、買つとくれよ」

と、半瓦とお杉のまわりに集まって来て、うるさく強請せがむ。

子供が好きとみえて、半瓦の弥次兵衛はうるさがりもせず、

「なんだ蟹かにか。蟹なんざいらねえよ」

子供らは、一斉に、

「蟹じゃないよ」

と、着物の裾をふくろにしたり、ふところに入れたり、手に持っている物を示して、

「矢だよ、矢だよ」

と争つていう。

「なんだ、やしり鏝か」

「ああ、鏝だよ」

「浅草寺のそばの藪やぶに、人間や馬を埋めた塚があるよ。お詣りする人は、そこへこの鏝を上げて拝むよ。おじさんも上げてくれよ」

「鏝は要らない。だが、銭をやるからいいだろう」

半瓦が、銭を与えると、子供たちはまた、散らかつて、鏝を掘っていたが、すぐ附近の藁屋根わらの家から、子供たちの親が出て来て、銭だけを取り上げて行つた。

「ちえつ」

半瓦は、嫌な気がしたとみえ、舌打ちして、眼をそらしたが、
ばばは恍惚こうこうつと、広い河原の眺めに見惚れていた。

「この辺から、あのようやじりに鏃がたと出るところを見ると、この
河原にも、合戦があつたのじやろうのう」

「よくは知らぬが、荏土えどの庄といわれていた頃、戦いくさがたびたびあ
つたらしいな。遠くは、治承の昔、源頼朝が、伊豆から渡つて、

関東の兵をあつめたのもこの河原。——また、南朝の御世みよの頃、

新田武蔵守むさしのかみが小手指こてさしケ原の合戦から駈け渡つて、足利方あしかがの矢

かぜを浴びたのもこの辺りだし——近くは、天正の頃、太田道どうか

灌んの一族だの、千葉氏の一党が、幾たびも興り、幾度も亡んだ

跡が——この先の石浜の河原だそうな」

話しながら、歩き出すと、菰こもの十郎とお稚児ちごのふたりは、もう浅草寺せんそうじの御堂みどうの縁へ行つて、先に腰かけている。

見れば、寺とは名のみ、ひどい茅葺堂かやぶきどうが一字と、僧の住むあばら屋が、堂の裏にあるだけに過ぎない。

「……なんじゃ、これが江戸の衆がよくいう金龍山浅草寺かいな」
ばばは、一応失望した。

奈良京都あたりの古い文化の遺跡を見た眼には、余りにも原始的であった。

大川の水は、洪水の時、森の根を洗って浸ひたるとみえ、御堂のすぐ側まで、平常でも、支わかれ水がひたひたと寄せていた。御堂を囲む木は皆、千年も年経ったような喬木であった。——何処かでそ

の喬木を仆す斧おのの音が、怪鳥でも啼くように、時々、コーン、コーンとひびく。

「やあ、おいでなされ」

不意に、頭の上で、挨拶する声が聞えた。

（——誰？）

と驚いて、ばばが眼をあげてみると、御堂の屋根の上に坐つて、茅かやで屋根の修繕をしている観音堂の坊主たちであった。

半瓦の弥次兵衛の顔は、こんな町の端にも知られていると見える。下から挨拶を返しながら、

「ご苦労様。きようは、屋根でござりますかな」

「はあ、この辺の木には、巨おおきな鳥が棲んでおりますでな、繕つくろつ

ても繕つても、茅をついばんでは、巢へ持つて行つてしまうので、雨漏りがして弱りますわい。……今降おりますゆえ、しばらく、おやすみ下さいませ」

四

神みあかし燈をあげて、堂の中へ坐つてみると、なるほど、これでは雨も漏ろう、壁からも屋根裏からも星のように、昼の明りが洩れてみえる。

によにちこくうじゆう
如日虚空住

わくひあくにんちく
或被悪人逐

墮落こんごうせん金剛山

念彼觀音力ねんぴかんのんりき

不能損一毛

或わくじおんぞくによ值怨賊遶

各執刀加害

念彼觀音力ねんび

咸げん即起慈心

或わくそ遭王難苦

臨りんぎ刑欲壽終りんぎようよくじゆじゆう

念彼觀音力

刀尋だんだんね段々壞

半瓦と並んだお杉は、袂たもとから、数珠ずずをとり出し、もう無想になつて、普門ふもん品ほんを称となえていた。

初めは低声こごえであつたが、そのうちに半瓦や乾児こぶんがいることも忘れ果てた有様で、朗々と声の高まるにつれて、顔の形相も、物に憑つかれたように變つてしまふ。

一卷を誦よみ終ると、打ちふるえる指に数珠を押し揉み、

「——衆中八万四千衆生、皆かんぱつむ発はつ無む等とう々、阿耨多羅三藐三菩あのかたらさんみやく ぼだい提しん心。——南無大慈大悲 觀世音菩薩——なにとぞ、ばばが一

念をあわれみたまひ、一日もはやく、武蔵を討たせたまえ。武蔵を討たせたまえ。武蔵を討たせたまえ。」

それからまた、遽にわかに、声も体も沈めて、ひれ伏しながら、

「又八めが、よい子になり、本位田家の栄えまするよう」

彼女の祈りが終った様子をさし覗いて、堂守の僧が、

「あちらへ、湯を沸かしておきました。渋茶などお上がり下さいまし」

半瓦も乾児も、ばばのために、しびれをさすりながら起ち上がった。

乾児の十郎は、

「もう、ここなら、飲んでもようございましょう」

許しをうけると早速、堂裏にある僧の住居の縁側に、弁当をひろげ、舟で買い求めた魚などを焼いてもらつて、

「この辺に、桜はねえが、花見に来たような気がするぜ」

と、お稚児ちごの小六を相手に、すっかり落着きこむ。

半瓦は、布施ふせをつつんで、

「お屋根料の足たしに」

と、若なにかし干かを寄進したが、ふと壁に見える参詣者の寄進札のうちに、眼をみはった。

寄進の多くは、今彼がつつんだ程度の金か、それ以下の額であったが、中にたったひとり、ずば抜けた篤志家がある。

黄金十まい

しなの奈良井宿 大蔵

「お坊さん」

「はい」

「さもしいことをいうようだが、黄金十枚といつちや当節大金だ。いったい奈良井の大蔵というのは、そんな金持かな」

「よう存じませんが、昨年、年の暮に、ぶらりとご参詣なさいまして、関東一の名刹めいさつが、このお相すがたはいたましい、ご普請ふしんの折には、お材木代の端に加えてくれといって、置いて行かれましたので」

「気持のいい人間もあるものだな」

「ところが、だんだん聞きますと、その大蔵様は、湯島の天神へも、金三枚ご寄進なさいました。神田の明神へは、あれは平たいらの将門さかど公まっを祠まつつたもので、将門公が謀叛むほん人などと伝えられているのは、甚だしいまちがいだ。関東が開けたのは、将門公のお力も

あるのに——といつて黄金二十枚も献納したということでございます。世には、ふしぎな奇特人もあるもので……」

と——その時、河原と寺内との境の森を、向う見ずに、ばらばらと駆け込んで来る狼ろうぜき藉あしおとな跫音あしおとがあつた。

五

「童わっばどもつ。遊ぶなら河原で遊ぶ、寺内へ入つて来て乱暴するじやないつ」

番僧は、縁側に立つて、こう呶鳴つた。

駆け込んで来た子供らは、目高めだかの群れのように、その縁側へと

集まって来て口々に、

「たいへんだよ、お坊さん」

「何処かのお侍さんと、何処かのお侍さん達が、河原で喧嘩して
るよ」

「一人と四人で」

「刀を抜いて」

「はやく行ってごらんよ」

番僧たちは、聞くとすぐ草履へ足を下ろして、

「またか」

と、つぶや眩くらいた。

すぐ駆け出そうとしたが、半瓦やお杉たちを顧みて、

「お客様方、ちよつと失礼いたします。なにせい、この辺の河原は、喧嘩には足場がよいので、なんぞというところ、果し合いの場所になつたり、誘き出しだの、撲り合いだの、絶えず血の雨のふる所でした。——その度に、お奉行所から始末書を求められますので、見届けておかぬと」

子供たちはもう、河原の森の際きわへ行つて、なにか声をあげて昂奮している。

「斬合か」

嫌いでない半瓦の乾兒こせぶん二人も、その半瓦も、駈けて行つた。

お杉ばばは、一番後から森を抜けて、河原境の樹の根に立つて見渡した。——だが、彼女の足がおそかつたので、彼女がそこへ

出てみた時は、なにも、それらしい者は見えなかった。

また、あれほど躁さわいでいた子供も、駈け出した大人も、その他この界隈の漁村の男女も、皆、森の際や木の間こまがくれに、しいんと、生なまつば睡をのんでしまつて、声一つ立てる者がない。

「……？」

婆はいぶかしく思ったが、すぐ彼女も、同じように息をひそめ、ただ凝視の眼を、じつとすえていた。

見わたす限り、石ころと水ばかりな広い河原であつた。水は澄んだ空と同じ色をしていた。燕の影が、その天地を独り自由に翔かけている。

——見ると今、そのきれいな流れと、石ころの道を踏んで、彼

方から澄ました顔をして歩いて来る一名の侍がある。人影といつては、それしか見当らない。

侍はまだうら若い男で、背に大太刀を負っているのと、ぼたんい牡丹色のはくさいじ舶載地の武者羽織を着ている体ていがひどく派手やかであった。そして、かくも大勢の眼に、木陰から見られているのを、知ってか知らずにいるのか、いつこう無関心らしく、ふと、立止まつた。

「……ア。ア」

と、その時、ばばの近くにいた傍観者が、低い声をもらした。ばばも、はっと、眼をひからした。

牡丹色の武者羽織が立ちどまった所から、約十間ほど後に、四

つの死骸が、算をみだして、斬りふせられていたことがわかった。喧嘩の勝敗はもうそれでついていたのである。四人に対して、一人の若い武者羽織の方が、決定的に、勝ちを占めたものらしい。ところが、まだその四人のうちには、薄傷うすでの程度で、多少呼息いきのある者があつたとみえ、牡丹色の武者羽織が、ハツと振向くと、その死骸から、人魂のように、血まみれな一箇が、

「まだッ、まだッ。勝負はまだだつ。逃げるなつ」と、追いかけて来た。

武者羽織は、向き直つて、尋常に待ちかまえていたが、火の玉のような負傷ておいが、

「まだ、お、お、おれはまだ、生きてるぞつ」

喚わめいて、斬りかかると、此方こなたは、一步退ひいて、相手を泳がせ、

「これでも、まだかつ」

西瓜すいかを割ったように、人間の顔が斬れてしまった。斬った刀は、武者羽織の背中に負っていた「物干竿」とよぶ長剣であったが、肩越しに、柄つかを持った手も、斬り下げた手元も、眼には見えないほどな技わざであった。

六

刀を拭ぬぐっている。

それから、流れで、手を洗っている。

度々、この辺で、斬合を見つけている者でも、その落着きぶりに、嘆息ためいきをもらしたが、また余りにも、凄愴なものに打たれて、なかには観ているだけで、蒼ざめてしまった者もある。

「……………」

とにかく誰も、その間、一語を発する者もなかった。

手を拭いた牡丹色の武者羽織は身を伸ばして、

「岩国川の水のようにだ。……故郷くにを思い出すなあ」

と、つぶやいて、しばらく、隅田河原のひろさや、水をかすめて飛び翻かえる燕の白い腹を見送っていた。

——やがて彼は、急に足を早めた。もう死骸が追いかけて来る憂いはなかったが、後の面倒を考えたらしい。

河原の水瀬みなせに、彼は、一艘そうの小舟を見つけた。櫓ろも付いているし、恰た好なな乗物と思つたのであろう。それへ乗つて、繋いでいる綱を解きかけるのであつた。

「やいつ、侍」

半瓦の乾児こもの、菰こもの十郎とお稚児ちごの小六の二人だつた。

こう木の間からいきなり呶鳴うなつて、河原の水際へ駈け出して行き、

「その舟を、どうする気だ」

と、咎とがめた。

武者羽織の体には、近づくとまだ血ちなまぐさ腥いにおいが感じられた。はかま袴にもわらじの緒にも、返り血かへりちがこびりついていた。

「……いけないのか」

解きかけた繋綱もやいを放して、その顔がにっと笑うと、

「あたりめえだ。これは、俺たちの持舟もちぶねだ」

「そうか。……駄賃をやったらよろしかろう」

「ふぎけるな、俺たちは、船頭じゃあねえ」

たった今、そこで四人を一人で斬り捨てた侍に対して、こういう口がきける気の暴あらさは、お稚児こもや菰こもの口を借りて、関東の勃興文化がいうのである。新將軍の威勢や江戸の土がいうのである。

「……」

悪かったとはいわない。

しかし、牡丹色の武者羽織も、それに横車は押せなかったと見

え、小舟から出ると、黙ってまた河原を下流しもの方へ歩き出した。

「小次郎どの。——小次郎どのじゃないか」

お杉はその前に迫って立っていた。顔を見あわすと、小次郎は、やあと行って、初めてせいそう凄愴な青白さを、顔から捨てて笑った。

「いたのか。こんな所に。——いや、その後は、どうしたかと思うていたが」

「身を寄せている半瓦あるじの主や若い者と、観世音へ参詣にの」

「いつであつたか、そうそう、叡山えいざんでお目にかかった折、江戸へと聞いていたので、会いそうなものと思つていたが、こんな所でとは」

と、振りかえつて、呆氣あつけにとられている菰やお稚児を眼でさし

ながら、

「では、あれが婆殿の連れの者か」

「そうじゃ。親分というお人は出来ている人間じゃが、若い者たちは、ひどくがさつ揃いでの」

ばばが小次郎と馴々しく立話しを始めたことは、衆目をそばだたせたばかりでなく、半瓦の弥次兵衛も、意外であつた。

で、半瓦はそれへ来て、

「なにか唯今、乾児こぶんの者が、不作法を申しあげたらしゅうござい
ますが」

と、丁寧に詫び、

「てまえどもも、もう帰ろうとしている所、何ならば、お急ぎの

先まで、舟でお送り申しませう」

と、すすめた。

かなな屑くず

一

帰りの小舟の中。

同舟という言葉があるが、ひとつ舟に身を託すとなれば、いやでもお互いに心の溶とけあうものである。

まして、酒もある。

新鮮な魚鱗ぎよりんもある。

それに、婆と小次郎とは、以前からふしぎに、気心も合い、その後の話も積もるほどあつて、

「相変らず、御修行かの」

と、ばばがいえば、

「そちらの大望はまだか」

と、小次郎が訊く。

ばばの大望とは、いうまでもなく「武蔵を討つ」ことにあるが、その武蔵の消息が、この頃はとんと知れないので——といえ、小次郎が、

「いや、昨年の秋から冬頃までの間に二、三の武芸者を訪れたう

わさがある。まだ多分、江戸表にいるにちがいない」

と、小次郎が力づける。

はんがわら
半瓦も口を出して、

「実は、手前も及ばずながら、ばば殿の身の上を聞いてお力添えをしておりますが、武蔵とやらの足どりが今のところ皆目、分らねえので」

と、話は婆の境遇を中心としてそれからそれへ結びつき、

「どうぞ、これからご懇意に」

と、半瓦がいえば、

「わしからも」

と、小次郎は、杯を洗って、彼のみでなく、乾児こぶんたちへも、順

々に廻して酌ぐ。

小次郎の実力は、たつた今、河原で見ているので、打ち解けると、お稚児ちごも菰こもも、無条件に尊敬をはらつた。また、半瓦の弥次兵衛は、自分の世話している婆の味方というので、肝胆かんたんを照らし合うところがあつた。婆は婆でまた、多くの後ろ楯に囲まれて、「渡る世間に鬼はないというが——ほんに小次郎殿といい、半瓦の身内の衆といい、わしのような老いさらばうた者を、ようして賜たまもる志……何というてよいやら。これも観世音の御庇護ごひごでがなあろう」

と、涙はなをかまないばかり、涙ぐんでいうのだつた。

話がしめつぽくなりかけたので半瓦が、

「——時に小次郎様。最前、あなた様が河原で討ち果しなすつた四人は、あれはどういう人間どもでござりますな」

と、訊ねると、待つていたように、小次郎が、それからの得意な雄弁であつた。

「アア、あれか——」

と、先ず最初は事もなげに一笑して、

「あれは、小幡おぼたの門に出入りする牢人で、先頃から五、六回ほど、わしが小幡を訪れて議論しておると、いつも横合から口をさし挿み、軍学上のことばかりか、劍についても小賢こぎやしくいので、さらば隅田河原に來い、幾名とでも立たちむか対つて、巖がんりゆう流が秘術と、物干竿の斬れ味を見せて進ぜるといったところ、今日五名して待

つとというので出向いたまです。……一人は立合うとたんに逃げおつたが、いやはや、江戸には、口ほどもないのが多くて」

とまた、肩で笑う。

「小幡というのは？」

と、訊ね返すと、

「知らんのか。甲州武田家の御人ごじんおぼた小幡入道 日にちじよう浄の末で——勘

んべえかげのり兵衛景憲。

——大御所に拾い出され、今では秀忠公の軍学の師

として、門戸を張っておる」

「アアあの小幡様で」

と、半はんがわら瓦は、そういう名だたる大家を、まるで友達のように

にいう小次郎の顔を、見まもつた。

そして心の裡うらで、

(いったいこの若い侍は、まだ前髪でいるが、どんなに偉いのか?)

と、思った。

二

六方むほうもの者は、単純である。市井の事々は複雑だが、その中を、単純に生きようというのが、男だてである。

半瓦はすつかり、小次郎に傾倒してしまった。

(この人は偉い)

と思うと、こういう持前の男だては、一本槍に惚れこんでゆく。「いかがでしょう一つ」

と、早速にも、相談であつた。

「てまえどもには、しよツ中、ごろついている若い奴らが四、五人はおります。裏には空地もあるし——そこへ道場を建ててもよろしゅうございますが」

と、小次郎の身を自宅で世話をしたいらしい意嚮いこうを漏らすと、「それは、教えてやってもいいが、わしの体は、三百石での、五百石でのと、諸侯から袖を引かれて、弱っているのだ。自分は、千石以下では奉公せぬ所存で、まだ当分は——今の邸やしきに遊んでおるが、その方の義理もあるから、急に身を移すわけにもゆかぬ。

——そうだな、月に三、四度ぐらいならば、教授に出向いて遣わ
そう」

と、いう。

それを聞くと、半瓦の乾児こぶんは、いよいよ小次郎を大きく買った。
小次郎のことばには、常に、単純でない伏線ひそで自己宣伝が潜ひそんで
いるが、それを噛みわけないのである。

「それでも結構です。ぜひ一つお願い申したいもので」
辞を低くして、

「また、お遊びに」

と半瓦がいえば、お杉ばばも、

「待っていますぞよ」

と、小次郎のことばをつがえた。

小次郎は京橋堀へ舟が曲る角で、

「ここで降ろしてくれ」

と、陸おかへ上がった。

小舟から見てみると、牡丹ぼたんいろ色の武者羽織は、すぐ町中の埃ほこりに

かくれてしまった。

「たのもしい人だ」

と半瓦はまだ感心していたし、ばばも、口を極めて、

「あれが、真まことの武士じやろう。あのくらいな人物なら、五百石で

も、大名の口がかかりましようわえ」

と、いった。

そして、ふと、

「せめて又八も、あのくらいに、人間が出来てくれれば……」
と呟つぶやいた。

それから五日程後、小次郎はぶらりと、半瓦の家へ遊びに来た。
四、五十名もいる乾こぶん児が、代る代る彼のいる客間へ、挨拶に出て来た。

「おもしろい生活くらしをしておるものだな」

小次郎は、そういつて、心から愉快になつたらしい。

「ここへ、道場を、建てたいと思ひますが、ひとつ地所を見てくださいませんか」

と、半瓦は、彼を誘つて、家の裏へ連れ出した。

二千坪ぐらいの空地だった。

そこには、紺屋こうやがあつて、染め上げた布ぬのを、たくさんに干していた。その地所は、半瓦が貸しているので、いくらでも広く取れるというのである。

「ここなら、往来の者が、立ちもすまいし、道場などは要るまい。野天でいい」

「でも、雨降りの日が」

「そう、毎日、わしが来られないから、当分、野天稽古としよう。……ただし、わしの稽古は、柳生やぎゅうや町の師匠などより、うんと手荒いぞ。——下手へたをすれば、片輪もできる。死人もできる。それをよく承知しておいてもらわんと困るが……」

「元より、合点でございます」

半瓦は、乾児を集めて、承知の旨を誓わせた。

三

稽古日は、月三回、三の日と極めて、その日になると、半瓦の家へ小次郎の姿が見えた。

「伊達者だてしやの中にまた一倍の伊達者が加わった」

と、近所では噂した。小次郎の派手姿は、何処にいても、人目立った。

その小次郎が、枇杷びわの長い木太刀を持って、

「次。——次！」

と、呼ばわりながら、紺屋の干し場で、大勢に稽古をつけている姿は、なおさら、目ざましかった。

いつになったら元服するのか、もう二十三、四歳にもなろうというのに、相変らず前髪を捨てず、片肌ぬぐと、眼を奪うような桃山刺繡ぬいの襦袢じゆばんを着、掛け褌だすきにも、紫革を用いて、

「枇杷の木で打たれると、骨まで腐ると申すから、それを覚悟でかかって来い。——さつ、次の者、来ないか」

身装みなりの艶あでやかなだけに、言葉の殺伐さつぱつなのが、よけい凄くひびく。

それに稽古とはいえ、この指南者は、少しも仮借かしゃくしないのだ。

きようまでにこの空地の道場は、稽古初めをしてから三回目だが、半瓦の家には一人の片輪と、四、五人の怪我人ができて、奥で唸うなつて寝ている。

「——もうやめか、誰も出ないのか。やめるならわしは帰るぞ」
例の毒舌が出始めると、

「よしつ、一番おれが」

と、溜りの中から、ひとりの乾児こぶんが、口惜しがって立ちかけた。小次郎の前へ出て来て、木剣を拾おうとすると、——ぎやつと、その男は、木剣も持たずにへたばつてしまった。

「剣法では、油断というものを最も忌いむ。——これはその稽古をつけたのだ」

小次郎は、そういつて、周りにいる三、四十人の顔を見まわしている。皆、生唾なまつばをのんで、彼の厳しい稽古おののぶりに顫いた。

へたばった男を、井戸端へ担いで行つて、水をかけていた乾児たちは、

「だめだ！」

「死んだのか」

「もう呼吸いきはねえ」

後から駈け寄る者もあつて、がやがや騒いでいたが、小次郎は、見向きもしなかつた。

「これくらいなことに恐れるようでは、剣術の稽古などはしないがいい。お前らは、六方者むほうものだの伊達者だてものだのといわれて、ややも

すると、喧嘩するではないか」

革足袋かわたびで、空地の土を踏んで歩きながら、彼は講義口調でいう。

「——考えてみる、六方者。おまえらは、足を踏まれたからといっては喧嘩をし、刀のこじりに触さわつたといつてはすぐに抜き合うがだ——いぎ、改めて、真劍勝負となると、体が固くなつてしまふのだろう。女出入りや意地張りの、ツマらぬことには生命いのちも捨てるが、大義に捨てる勇を持たない。——なんでも、感情と鼻っぱりで起つ。——それじゃあいかん」

小次郎は、胸を伸ばして、

「やはり修行を経た自信でなければ、ほんものの勇氣でない。さあ、起つてみる」

その広言を凹へこましてやろうと、一人が後ろから撲なぐりかかった。しかし、小次郎の体は地へ低く沈み込み、不意を襲った男は前へもんどり打った。

「——痛いてえっ」

と、叫んだままその男は坐ってしまった。枇杷びわの木剣が、腰の骨に当たった時、がつんといった。

「——もう今日はやめ」

小次郎は、木剣を抛ほうり出して、井戸端へ手を洗いに行った。たった今、自分が木剣で撲り殺した乾児こぶんが、井戸の流しに、こんなにやくみたいに白っぽくなって死んでいたが、その顔のそばで、ざぶざぶと手を洗っても、死人には、気の毒という一言もいわなか

った。——そして、肌を入れると、

「近頃、たいへんな人出だそうだな、よしわら葭原とやはは。……お前
たちは皆、明るいのだろう。誰か今夜案内せぬか」

と、笑っていった。

四

遊びたい時は、遊びたいというし、飲みたい時は、飲ませろと
いう。

てら銜いとも見えるが、率直だともいえる。小次郎のそういう気性
を、半瓦はいい方に買っている。

「葭原よしわらをまだ見ねえんですか。そいつあ一度は行つて見なくち

やいけねえ。手前がお供をしてもいいが何しろ死人が一人出来ち
まつて、そいつの始末をしてやらなければなりませんから——」

と、弥次兵衛は乾児のお稚児ちごと菰こもの兩名に金を預けて、

「ご案内してあげろ」

と、小次郎に付けて出した。

出かける際、彼らは親分の弥次兵衛からくれぐれも、

「今夜は、てめえ汝たちが遊ぶんじやねえ。先生のご案内をして、よく

観せてお上げ申すのだぞ」

といわれて来たが、門かどを出るとすぐ忘れて、

「なあ兄弟、こういう御用なら、毎日仰せつかつてもいいなあ」

「先生、これから時々、葭原が見てえと、仰つしやっておくんなさい」

と、はしやいでいる。

「はははは。よかろう、時々いつてやる」

小次郎は先に歩む。

陽が暮れる途端に、江戸は真つ暗だった。京都の端にもこんな暗さはない。奈良も大坂も、もつと夜は明るいが——と江戸へ来て一年の余になる小次郎でも、まだ足元が不馴れだった。

「ひどい道だ。ちようちん提燈くわを持って来ればよかつたな」

「廓くわへ提燈なんぞ持ってゆくと笑われますぜ。先生、そつちは堀の土を盛りあげてある土手だ。下をお歩きなさい」

「でも、水溜りが多いではないか。——今も葭よしの中へすべにつつて、草履を濡らした」

堀の水が、忽こっねん然と、赤く見え出した。仰ぐと、川向うの空も赤い。一廓かくの町屋の上には、柏餅のような晩春の月があつた。

「先生、あそこです」

「ほう……」

眼をみはつた時、三人は橋を渡つていた。小次郎は渡りかけた橋をもどつて、

「この橋の名は、どういふわけだな」

と、杭くいの文字を見ていた。

「おやじ橋つていうんでさ」

「それはここに書いてあるが、どういうわけで」

「庄司甚内つてえおやじがこの町を開いたからでしょう。廓くるわで流は行やつてゐる小唄に、こんなのがありますぜ」

菰こもの十郎は、廓くるわの灯に浮かされて、低い声で唄い出した。

おやじが前の竹れんじ

その一ひとつし節ふしのなつかしや

おやじが前の竹れんじ

せめて一夜と契ちぎらばや

おやじが前の竹れんじ

いく世も千代も契ちぎるもの

ちぎるもの……

仇にな引くな

切れぬ袂たもとを

「先生にも、貸しましょうか」

「何を」

「こいつで、こう顔を隠してあるきます」

と、稚児ちごと菰こものふたりは、茜染あかねぞめの手拭を払って、頭からかぶつた。

「なるほど」

と、小次郎も真似まねて袴はかま腰こしに巻いていた小豆色あずきの縮緬ちりめんを、前髪のうえからかぶって、顎の下にたっぷり結んで下げた。

「伊達だてだな」

「よう似合う」

橋を渡ると、ここばかりは、往来も燈ひに染まり、格子格子の人影も、織るようであつた。

五

暖簾のれんから暖簾へ、小次郎たちはわたり歩いていた。

あかねぞめ

茜染の暖簾や、紋を染めぬいた浅黄の暖簾などもある。或る楼うち

の暖簾には、鈴がついて、客が割つて入ると、鈴すずの音ねを聞いて、遊女たちが、窓格子まで寄つて来た。

「先生、隠したつてもうだめですぜ」

「なぜ」

「初めて来たと仰つしやいましたが、今、はいつた楼うちの遊女の中で、先生の姿を見ると、声を出して屏風びょうぶの陰へ、顔をかくした女があつた。もう泥を吐いておしまいなせえ」

菰もお稚児も、そういうが、小次郎には覚えがなかつた。

「はてな。どんな女が……？」

「空恍そらとぼけたつて、もういけません。登楼あがりましょう、今の楼うちへ」

「まったく、初めてだが」

「登楼あがつてみれば分るこつてさ」

今出て来たばかりの暖簾のれんの内へ、二人はもう引つ返している。

大きな三ツ柏がしわの紋を三つに割つて、端に、角屋すみやとしてある暖簾で

あつた。

柱も廊下も、寺のように大まかな建築だが、まだ縁の下には枯れない葭よしが埋まっているのである。なんの煤すすみもなければ床ゆかしさもない。家具ふすまも襖ふすまも、すべてが目には痛いほど新しかった。

三人が通つたのは、往来に向いた二階の広座敷であつたが、前の客ざんこうの残ざんこう肴さかんこうやら鼻紙はなしなどが、まだ掃はきもせず散らかつている。

下働きの女たちは、まるで女の労働者のように、ぶつきら棒ぼうにそれを片づける。お直なおという年寄が来て、毎晩、寝る間もない忙しきで、こんなことが三年も続いたなら死ぬかも知れませんかという。

「これが遊廓くるわか」

と、小次郎は、おびただ夥しい天井のふしだらけなのを眺めて、

「いや、殺伐な」

と、苦笑した。するとお直は、

「これはまだかりぶしん仮普請で、いま裏の方に、伏見にも京にもないよ
うな本普請にかかっているのでございますよ」

と、弁解する。そしてじろじろ小次郎を見ながら、

「お武家様には、どこかでお目にかかっておりますよ。そうそう
昨年、私たちが伏見から下つて来る道中で」

小次郎は忘れていたが、こほとけ小仏の上で出会った
すみや角屋の一行を思い出し、その庄しょうじ司甚内が、あるじここの主ということ
も分つて、

「そうか。……それは浅からぬ縁だ」

と、やや興に入る。菰の十郎は、

「それやあ、浅くねえわけでしょう。何しろ、此楼ここには、先生の知っている女がいるんだから」

と、擲や揄ゆして、その遊女をはやくここへ呼んでくれとお直へい
う。

こんな顔の、こんな衣裳の、と菰が説明するのを聞いて、
「ああ、わかりました」

お直は立つて行つたが、いつまで待つても、連れて来ないのみ
か、菰とお稚児が廊下まで出てみると、なんとなく楼内さわが躁さわがし
い。

「やいつ、やいつ」

二人が手をたたいて、お直を呼び、どうしたのだと極めつける。「いないでございますよ。あなたが呼べと仰つしやった遊女が」
「おかしいじゃねえか、どうしていなくなつたんだ」

「今も、親方の甚内様と、どうもふしぎだと、話しているのでございます。以前も、小仏の途中で、お連れのお武家様と甚内様が話していると、その間に、あの娘この姿が見えなくなつてしまったことがあるんでございますからね」

六

棟上げむねあをしたばかりの普請場ふしんばであった。屋根は葺ふきかけてあるが、壁もない、羽目板も打ってない。

「——花桐はなぎりさん、花桐さん」

遠くのほうで呼ぶ声がある。山のように溜たまっているかなな屑くずや、材木の間を、何度も、自分を探しまわる人影が通った。

「……………」

朱実あけみはじつと息をこらして隠れていた。花桐というのは、角屋へ来てからの自分の名である。

「…………いやなこった。誰が出てやるものか」

初めは、客が小次郎と分っていたので、姿を隠したのであるが、そうしている間に、憎らしいものは、小次郎だけではなくなった。

清十郎も憎い、小次郎も憎い、八王子で、酔っている自分を馬ま糧ぐさ小屋へ引きずりこんだ牢人者も憎い。

毎夜のように、自分の肉体をおもちやにして行く遊客たちもみな憎い。

それはみんな男というものだ。男こそは仇かたきだと思う。同時に彼女はまた、男を探して生きている。武蔵のような男を——である。

(似ている人でもいい)

と、彼女は思った。

もし似ている人に出会ったら、愛の真似事をして、慰められるだろうと朱実は思っていた。だが、遊客の中に、そんな者は見つからなかつた。

求めつつ、恋しつつ、だんだんにその人から遠くなるばかりな自分が朱実にはわかっていた。酒はつよくなるばかりだった。

「花桐つ……。花桐」

普請場ふしんばとすぐくっ付いている角屋の裏口で、親方の甚内の声が近く聞え、やがて空地の中へは、小次郎たち三名の姿も見えてくる。

さんざん詫びをいわせたり、文句をいったあげく、三名の影は空地から往来の方へ出て行った。多分、あきらめて帰ったものに見える。朱実は、ほっとして、顔を出した。

「——あら花桐さん、そんな所にいたのけ？」

台所働きの女が、頓狂な声を出しかけた。

「……叱っ」

朱実は、その口へ手を振って、大きな台所口を覗のぞきながら、

「冷酒ひやでひと口くれないか」

「……え。お酒を」

「ああ」

彼女の顔いろに怖れをなして、かたくちへ満なみなみ々と注ついでやると、朱実は、眼をつむって、器うつわと共に、白おもてい面を仰向けにのみほした。

「……ア、何処へ。花桐さん、何処へ」

「うるさいね、足を洗ってあがるんだよ」

台所の女は、安心して、そこを閉めた。けれど朱実は、土のつ

いた足のまま、有合う草履に足をかけて、

「ああいい気もち」

ふらふらと、往来のほうへ歩み出した。

赤い灯影ほかげに染まっている往来を、たくさんな男ばかりの影が、

ぞめき合つてながれていた。朱実のろは呪うように、

「なんだいこの人間たちは」

と、唾つばをして、そこを走つた。

すぐ道は暗くなつた。白い星が堀の中に浮いている。——じつと覗きこんでいると、後ろのほうから、ばたばたと駈けて来る蹠音がする。

「……あ、角屋の提ちようちん燈らしい。ばかにしてやがる、あいつら

はあいつらで、ひとが路頭に迷っているのをいい気になって、骨まで削けずらせて稼かせがせる気なんだろう。——そしてあたい達の血や肉が、普請場の材木になりやあ世話あないや。……誰がもう帰つてやるものか」

世間のあらゆるものが敵視されるのであつた。朱実は、まっしぐらに、的あてもなく闇の中へ駈け去つた。髪についていたかんな屑が一ひら、闇の中にひらひら動いて行つた。

ふくろう
梟

したたかに小次郎は酔っていたのである。もちろん、その程度に、どこかの揚屋あげやで遊びぬいた挙句あげくに違いない。

「肩……肩だおい……」

「ど、どうするんで？ 先生」

「両方から肩を貸せというのだ——もう、あるけない」

菰こもの十郎とお稚児ちごの小六の肩にすがって、汚れた夜更よふけの色いろま街ちを、蹠そうろう跟ろうともどって来るのだった。

「だから、泊ろうと、おすすめたのに」

「あんな楼うちに、泊れるか。……おい、もういちど、角屋へ行つてみよう」

「およしなさい」

「な、なぜ」

「だって、逃げ隠れするような女を、むりに、つかまえて、遊んだって……」

「……む。そうか」

「惚れているんですか、先生はその女に」

「ふ、ふ、ふ、ふ」

「何を思い出しているんで」

「おれは、女になど、惚れたことはないな。……そういう性格らしい。もつと、大きな野望を抱いているから」

「先生の望みってえのは？」

「いわずとも知れている。劍を持つて立つ以上、劍の第一人者にならずにはおかない。——それには將軍家の指南になるのが上策だが」

「生憎あいにくと……もう柳生家があるし……小野治郎右衛門じろうえもんという人も近頃、御推挙されましたぜ」

「治郎右衛門……あんな者が……柳生とておそ懼るるには足らん。……見ていろ、わしは今に、彼奴らきやつを蹴落してみせる」

「……あぶねえ。先生、自分の足元の方を、気をつけておくんなさいよ」

もう廓くるわの灯は、後ろだった。

通う人影もとんとなひ。行きがけにも悩んだ掘りかけの堀端へ

出て来たのである。盛り上げた土に柳の木が半分も埋まっているかと思うと、一方は低い蘆あしや葭よしの水たまりがまだ残っていて、白い星の影が更ふけている。

「すべ迂まりますぜ」

この堤どてから下へ、厄介者を担かついで、菰とお稚児が降りかけた時だった。

「——あつ」

叫んだのは、小次郎であつた。また、その小次郎に、突然、振り飛ばされたふたり兩人でもあつた。

「何者だつ」

と、小次郎は、堤どての腹へ、仰向けに身を伏せながら、再び呶鳴

つた。

その声を、びゅつと、虚空へ斬りながら、背後から不意を襲つた男の影は、自分の足先を、余勢に踏み外して、これも、あつ——といいながら下の沼地へ飛びこんでしまった。

「わすれたか、佐々木」

と、何処かでいう。

「よくもいつぞやは、隅田河原で同門の四名を斬りすてたな」
べつな者の声である。

「おうっ」

小次郎は、堤の上へ跳ね上がって、そこらの声を見廻した。——見ると、土の陰、木の陰、蘆の中、十人以上の人影が数えられ

た。彼がそこに立ったと見ると、すべてが、むらむらと刃やいばを向け、足元へ寄りつめてきた。

「——さては、小幡おぼたの門人どもだな。いつぞやは、五人で来て四人を失い、こん夜は何名で来て何名が死にたいのだ。望みの数だけ斬つてやろう。……卑劣者めツ、来いッ」

小次郎の手は肩越しに、背なかの愛劍、物干竿つかの柄に鳴った。

二

平ひらかわてんじん河天神と背なか合せに、森を負っている屋敷だった。旧

家の草くさいぶき葺屋根へ、新しい講堂や玄関を継ぎ建てて、小幡勘兵衛

景^{かげのり}憲は、軍学の門人を取つていた。

勘兵衛は元、武田家の家人^{けにん}で、甲州者の中でも武門の聞えの高
い小幡入道^{にちじょう}曰、浄の流れである。

武田の滅亡後久しく野に隠れていたが、勘兵衛の代になつて家
康に召出され、実戦にも出たが、病体だし、もう老年なので、

（願わくは、年来の軍学を講じて、余生を奉じたい）
と、今の所へ移つたのである。

幕府は、彼のためにも、下町の一区画を宅地として与えたが、
勘兵衛は、

（甲州出の武辺者が、華奢^{かしや}な邸宅が軒を並べている間に住むのは、
不得手でござれば——）

と、辞退して、平河天神の古い農家を屋敷構えに直し、いつも病室に閉じこもって、近頃は、講義にも滅多に顔を見せない。

森には、梟ふくろうが多くいて、昼間も梟の声がする程なので、勘兵衛は、

隠士梟翁いんしきようおう

と自ら名乗り、

(わしも、あの仲間の一羽か)

と、わが病骨を、さびしく笑ったりしていた。

病気は今でいう神経痛のようなものであった。発作ほっさが起ると、

坐骨のあたりから半身が猛烈に痛むらしい。

「……先生、少しはおよろしくなりましたか。水でも一口おあが

りなされては」

いつも彼の側には、北条新蔵という弟子が付き添っていた。

新蔵は、北条氏勝うじかつの子で、父の遺学を継いで、北条流の軍学を完成するために、勘兵衛の内弟子となつて、少年の頃から、薪まきを割り水を担になつて、苦学して来た青年だった。

「……もうよい。……だいぶ楽になつた。……やがて夜明け近くであろうに、さだめし眠たかろう。やすめ、やすめ」

勘兵衛の髪の毛は、まっ白であつた。体は、老梅のように痩せて尖とがっている。

「お案じくさいますな。新蔵は、昼寝しておりますから」

「いや、わしの代講ができる者は、そちのほかにはない。昼間も、

なかなか眠る間もあるまい……」

「眠らないのも、修行と存じますれば」

新蔵は、師の薄い背中をさすりながら、ふと、消えかける短たんけ
檠いを見て、油あぶら壺つつほを取りに起った。

「……はての？」

枕まくらに俯うつつ伏ふしていた勘兵衛が、ふと肉その削そげた顔をあげた。

その顔に、灯あかりが冴さえた。

新蔵は、油壺あぶらを持ったまま、

「何でござりますか？」

と、師の眼を見た。

「そちには聞えないか……水の音だ……石井戸の辺りに」

「才……人の気配が」

「今頃、何者か。……また、弟子部屋の者どもが、夜遊びに出おつたのかもしれない」

「おおかた、そんなことかと存じますが、一応見て参りまする」

「よく、たしな窘めておけ」

「いずれにせよ、お疲れでございましょう。先生は、おやすみなされませ」

夜が白みかけると、痛みもやみ、すやすや寝つく病人であつた。新蔵は、師の肩へ、そつと寝具をかけて、裏口の戸を開けた。

見ると、石井戸の流しで、釣瓶つるべを上げて、二人の弟子が、手や顔の血を、洗っていた。

三

北条新蔵は、それを見ると、はつとしたらしく眉をひそめた。
革足袋かわたびのまま石井戸の側まで駈け出して、

「出かけたな！ 貴様たちは」
と、いった。

その言葉には、あれほど止めたのに——と叱つても今は及ばないものを見た嘆息と驚きがこもっていた。

石井戸の陰には、二人が背負つて来た深傷ふかの門人が、もう一名、
今にも息をひきとりそうに、呻うめいていた。

「あつ、新蔵殿」

手足の血を洗っていた同門の二人は、彼の姿を仰ぐと、男泣きに泣き出しそうな皺しわを顔に刻んで、

「……ざ、残念です！」

弟が兄に訴えるような、甘えた嗚咽おえつと、齒がみをして叫んだ。

「馬鹿っ」

なぐ 撲らないだけがまだいい新蔵の声だった。

「馬鹿者っ」

と、もう一度つづけて、

「——貴公たちに討てる相手ではないから止せよと、再三再四、わしが止めたのになぜ出かけたか」

「でも……でも……。ここへ来ては、病床の師を辱はずかしめ、隅田河原では、同門の者を四名も討つた——あの佐々木小次郎ずれを、何でそのままに置けるものでしょうか。……無理ですつ、意地も抑え、手も抑えて、黙こらって泳こらえていると仰うつしやる新蔵殿の方が、ご無理というものです」

「何が無理だ」

年こそ若いが、新蔵は小幡門中の高足であり、師が病床にあるうちは、師に代つて弟子達に臨んでいる位置でもあった。

「貴公たちが出向いていい程なら、この新蔵が真まつ先に行く。——先頃からたびたび道場へ訪れて来て、病床の師に、無礼な広言を吐きちらしたり、われわれに対しても、傍若無人な小次郎とい

う男を、わしは怖れて捨てておいたのではないぞ」

「けれど、世間はそうは受けとりません。——それに、小次郎は、師のことや、また兵学上のことまでも、悪し^あざまに、各所でいいふらしているのです」

「いわせておけばいいではないか。老師の真価を知っている者は、まさか、あんな青二才と論議して、負けたと誰が思うものか」

「いや、あなたはどうか知りませんが、われわれ門人は、黙っていられません」

「では、どうする気だ」

「彼奴^{きやつ}を、斬り捨てて、思い知らせるばかりです」

「わしが止めるのもきかずに、隅田河原では、四人も返り討ちに

あい、また今夜も、かえって彼のために敗れて帰って来たではないか。——恥の上塗りというものだ。老師の顔に泥をぬるのは、小次郎ではなくて、門下の各 たちだという結果になるではないか」

「あ、あまりなお言葉。どうして吾々が、老師の名を」

「では、小次郎を討ったか」

「……………」

「今夜も、討たれたのは、恐らく味方ばかりだろう。…………各 にはあの男の力がわからないのだ。なるほど、小次郎という者は、年も若い、人物も大きくはない、粗野で傲慢な風もある。——けれど彼が持っている天性の力——何で鍛え得たか——あの物干竿

とよぶ大剣をつかう腕は、否定できない彼の實力だ。見縊みくびつたら
大間違いだぞ」

喰つてかかるように、門下の一人は、そういう新蔵の胸いたへ
不意に迫つて来た。

「——だから、彼奴きやつに、どんな振舞いがあつても仕方がないと仰
つしやるのですか。——それほど、あなたは、小次郎が怖ろしい
のでござるかっ」

四

「そうだ。そういわれても仕方がない」

新蔵は、^{うなず}頷いて見せながら、

「わしの態度が、臆病者に見えるなら、臆病者といわれておこう」

——すると、地に呻^{うめ}いていた深傷^{ふか}の男が、彼と二人の友の足元から苦しげに訴えた。

「水を……水をくれい」

「お……もう」

二人が、左右から掻い抱いて、釣瓶^{つるべ}の水を掬^{すく}つてやりかけると、新蔵があわてて止めた。

「待て。水を遣^やつては、すぐこときれる」

二人がためらっている間に、負傷^{ておい}は首をのばして釣瓶にかぶりついた。そして水を一口吸うと、釣瓶のなかに顔を入れたまま、

眼を落してしまった。

「……………」

朝の月に、梟ふくろうが啼いた。

新蔵は、黙然と立ち去った。

家にはいると、彼はすぐ師の病室をそつと窺うかがった。勘兵衛は昏こんこん々とふかい寢息の中にある。ほつと胸をなでて、彼は自分の居間へ退さがった。

読みかけの軍書が机のうえに開いてある。書に親しむ間もない程、毎夜の看護である。そこへ坐つて、自分の体に回かえると、同時に夜ごとのつかれが一時に思い出された。

机の前に、腕を拱くんで、新蔵は思わず太い息をついた——自分

を措いて今、誰が老いたる師の病床を見る者があるろう。

道場には幾人かの内弟子もいるが、皆、武骨な軍学書生である。門に通う者はなおさら、威を張り、武を談じ、孤寂な老師の心情をふかく酌んでいる者は少ない。ややともすれば、ただ外部との意地や争鬪にのみ走りやすい。

すでに今度の問題にしてもそうである。

自分の留守のまに、佐々木小次郎が、何か兵書の質疑で、勘兵衛に糺ただしたいことがあるというので、門人が彼を師の勘兵衛に会わせたところ、教えを乞いたいといった小次郎が、かえつて、僭せ越んえつな議論をしかけて、勘兵衛をやりこめるために来たかのような口吻くちぶりなので、弟子たちが、別室へ彼を拉らっして、その不遜ふそんをなじ

ると、かえつて小次郎は大言を放ち、そのうえ、

(いつでも相手になる)

と、いつて帰つたとかいのが原因なのである。

原因は常に小さい。しかし結果は大きなことになった。それと
いうのも小次郎がこの江戸で、小幡の軍学は浅薄なものだとか、

甲州流などというが、あれは古くからあるくすのきりゆう楠流や唐書の六

くとう

韜を焼直して、でツち上げたいかがわしい兵学だとか、世間で

悪声を放つたのが、門人の耳に伝わって、よけいに感情が悪化し
たせいもあるが、

(生かしてはおけぬ)

と、おぼた小幡の門人がこぞつて、彼に復讐をちかい出したのであつ

た。

北条新蔵は、その議が持ち上がると、最初から反対した。

——問題が小さい事。

——師が病中にある事。

——相手が軍学者でない事。

それからもう一つ、老師の子息の余五郎が旅先にいることも理由として、

(断じてこちらから喧嘩に向いてはならぬ)

と、戒^{いまし}めて来たのであつた。——にもかかわらず、先頃は新蔵に無断で隅田河原で小次郎と出会い、また、それにも懲^こりず衆を語らつて、ゆうべも、小次郎を待ちぶせ、かえつて手酷^{てひど}い目に遭

つて、約十名のうち生きて還つたのは幾人もない様子なのである。

「……困つたことを」

新蔵は、消えかける短檠たんけいへ、何度も嘆息をもらしては、また、腕ぐみの中に面おもてを沈めていた。

五

机に肘をのせて俯うつ伏ぶしたまま、北条新蔵はうとうとと眠つてしまつた。

ふと醒めると、何処かで騒がしい人声かすが幽かに聞える。すぐ門弟たちの寄より合あいだと分つた。明け方のことが、それと共に、頭に

はつと甦よみがえった。

——だが、声のする所は遠かった。講堂を覗のぞいても誰もいない。

新蔵は、草履を穿はいた。

裏へ出て、若竹のすくすくと青い竹林を越えようと、垣もなく、平河天神の森へつづいてゆく。

見るとそこに、大勢してかたまっているのは、案のじよう、小幡軍学所の門下生たちだった。

明け方、石井戸で傷を洗っていた二人は、白い布で腕を頸くびに吊っている。そして蒼白おもてな面を並べて、同門たちに、ゆうべの惨敗を告げているのだった。

「……では何か、十名も行って、小次郎一人のために、その半分

までも返り討ちになつたというのか」

一人が問うと、

「残念だが、何分、彼奴きやつが物干竿と称よんでいるあの大業刀おおわざものには、
どうしても、刃が立たんのだ」

「村田、綾部あやべなど、ふだん剣法にも、熱心な男なのに」

「かえつて、その二人などが、真つ先に、割りつけられ、後もみな深傷薄傷ふかであすで。与惣兵衛よそべえなど、ここまで気丈に帰つて来たが、ひと口、水をのむと、井戸端でこときれてしまった……。かえすがえす無念でならぬ。……御一同、察してくれ」

暗然と、皆、口をつぐんでしまう。平常、軍学に傾倒しているこの派の人々は、いわゆる剣というものを、あれは歩卒まなの習まなぶも

ので、將たる者の励むことではないように思っている者が多かった。

それが端なくこんな事態を生じて、一人の佐々木小次郎に出会^{であい}を仕掛けながら、二度まで、多くの同門が返り討ちになってみると、痛切に、ふだん軽蔑していた劍法に自信のないのが悲しまれてきた。

「……どうしたものか」

と、そのうちに誰か呻^{うめ}く。

「……………」

重い沈黙の上に、きょうも梟^{ふくろう}が啼いている。——と、突然、名案^{うま}が泛^うかんだように一人がいった。

「おれの従弟いとこが、柳生家に奉公している。柳生家へご相談して、お力を借りてはどうだろう」

「ばかな」

と、幾人もいった。

「そんな外聞にかかわることができるか。それこそ、師の顔に泥を塗るようなものだ」

「じゃあ……じゃあどうするか？」

「ここにいる人数だけで、もう一度佐々木小次郎へ、出会い状をつけようではないか。暗闇で待ち伏せるなどということはもうしない方がよい。いよいよ、小幡軍学所の名折れを増すばかりだ」

「では、再度の果し状か」

「たとい、何度敗れても、このまま退くわけにはゆくまい」

「もとよりだ。……だが、北条新蔵に聞こえたとまたうるさいが」

「勿論、病床の師にも、あの秘蔵弟子にも、聞かしてはならない。

——では、社家しゃけへ参つて、筆墨を借り、すぐ書面したたを認めて、誰か

一名、小次郎の手許へ使いに立つとしよう」

腰を上げて、大勢がひつそりと、平河天神の社家のほうへ歩みかけると、先に歩いていたのが不意に、あつと口走つて、身を退ひいた。

「……や？」

誰の足も皆、とたんに棒立ちに竦すくんでしまった。そして眼は——
 一様に平河天神の拜殿の裏にあたる——古びた廻廊の上へ、う

つろに注そそがれた。

陽あたりのよい壁に、青梅あおうめの実みのついた老梅の影が描かれていた。その欄らんに、片足をのせて、佐々木小次郎は、先刻さつきから、森の集まりを見ていたのであった。

六

大勢の顔は、一瞬、胆きもを奪われて、蒼白い腑ふ抜ぬけになっていた。そして、自分たちの眼を疑うように、廻廊の上に小次郎を見あげ、声を出すのはおろか、呼息いきも止まったように、身を硬こわめ合っている。

小次郎は、傲岸ごうがんな微笑を含んでその人々を見下みくだしながら、

「今、そこで聞いていけば、まだ懲こりもせず、この小次郎へ果し状を付けるとか付けぬとか、談合しておられたな。——使いの世話には及ばんことだ。わしは昨夜の血の手も洗わず、いずれ揺り返しがある筈と、卑怯者の後を慕って、この平河天神へ来て夜明けを待ちあぐねておった」

例の壮烈な舌を呵かして、一気に小次郎はこういったが、それに気を吞まれて、大勢の顔からぐの音ねも出ないので、また——

「それとも小幡の門人らは、果し合いをするにも、大安とか仏滅とか、暦こよみと相談でなければ出来ないのか。昨夜のように、相手が酌めいてい酌いていして帰る途中を待ち伏せして、暗討やみうちをしかけなければ刃

物はぬけないと申すのか」

「……………」

「なぜ黙っている。生きている人間は一匹もおらぬのか。一人一人来るもよし、束たばになつてかかるもよし、佐々木小次郎は、汝らごときが、たとい鉄甲に身を固め、鼓つづみを鳴らして襲よせて来たとして、背後うしろを見せるような武芸者ではないぞ」

「……………」

「どうしたつ」

「……………」

「果し合いは、見合せか」

「……………」

「骨のある奴はいないのか」

「……………」

「聞け。よく耳に留めておけ、刀法は富田五郎左衛門が歿後の弟子、抜刀の技は、片山伯耆守久安の秘奥をきわめて、自ら巖がんりゅう

流とよぶ一流を工夫した小次郎であるぞ。——書物の講義ばかり齧かじつて、六韜りくとうがどうの孫子そんしが何といったのと、架空な修行しておる者とは、この腕が違う、胆が違う」

「……………」

「貴様たちは、平常、小幡勘兵衛から何を学んでいるか知らぬが、兵学とは何ぞや？ わしは今、その實際を汝らに、身をもって教訓してつかわしたのだ。——なんとなれば、広言ではないが、ゆ

うべのような暗討ちに出会えば、たとい勝つても、大概な者なら逸いちはや早く安全な場所へ引揚げて、今朝あたりは、思い出してホツとしておる所だ。——それを、斬つて斬つて斬り捲り、なお、生きのびて逃げるを追い、突然、敵の本拠に現れ、足下そっからが善後策を講じる間もなく不意を衝いて、敵の荒胆あらぎもを挫ひしぐという——この行き方が、つまり軍学の極意と申すもの」

「……………」

「佐々木は、剣術家ではあるが軍学家ではない。それなのに軍学の道場へ来てまで、小癩こしゃくをいうなどと、誰やら何日いつか此方このほうを罵倒とうした者もいたが、これで佐々木小次郎が、天下の劍豪であるばかりでなく、軍学にも達していることが、よく分つたろう。……

あはははは。これはとんだ軍学の代講をしてしまった。この上、商売ちがいの蘊蓄うんちくを傾けては病人の小幡勘兵衛が扶持ふちばなれになろうも知れん。……ああ喉のどが渴かわいた。おい小六、十郎、気のきかぬ奴だ。水でも一杯持つて来い」

振向いていうと、拝殿の横で、へいと威勢のよい答えがする。菰こもの十郎とお稚児ちごの小六の二人だった。

土器かわらけへ水を酌くんで来て、

「先生。やるんですか、やらねえんですか？」

小次郎は、飲みほした土器かわらけを、茫然としている小幡の門人達の前へ投げつけて、

「訊いてみる。あのぼやっとした顔に」

「あははは。なんてえ面だ^{つら}」

小六^のが罵ると、十郎も、

「ざまあ見やがれ。意気地なしめ。……さ先生、行きましょう。どう見たって、一匹でも、蒐^かつて来られる面^{つら}はないじやアございませんか」

七

ふたりの六^む方^{ほう}者^{もの}を連れた小次郎の姿が、肩で風を切つて、平河天神の鳥居の外へ消えてゆくまで——物陰から北条新蔵は見送つていた。

「……おのれ」

新蔵はつぶやいた。

それと共に、苦汁くじゅうをのむような堪忍かんにんの顫えふるが体のなかを廻つた。しかし今は――

「今に見ろ」

と、念じておくよりほか彼にはなかつた。

出鼻を逆に衝かれて、拜殿の裏に立ち竦すくんでしまった大勢の者は、まだ一語を洩らす者もなくしんと白けたまま、かたまつていた。

小次郎が弁じ立てて行つたように、まったく、彼らは小次郎の戦法に乗ぜられてしまったのだ。

一度、臆病風に吹かれた顔に、最初の活気はもう甦よみがえつて来なかつた。

同時に、心頭に燃えるほどだった彼らの怒りも、女々めめしい灰になつてしまつたらしい。誰あつて、小次郎の後ろ姿へ向つて、

(おれが)

と、進んで追つて行く者もなかつたのである。

そこへ、講堂の方から、仲間ちゆうげんが駈けて来て、今、町の棺桶屋かんおけやから棺桶が五つも届いて来ましたが、そんなに棺桶を注文したのでしょうか——と訊ねて来た。

「……………」

口をきくのも嫌になつたように皆、それにも答える者が無い。

「棺桶屋が、待っておりますが……」

ちゆうげん
と仲間の催促に、初めて一人が、

「まだ取りにやった死骸が届かぬから、よく分らぬが、多分、もう一つぐらい要るだろうから、後のも頼んで、届いたのは、物置へでも一時仕舞っておけ」

と、重たい口吻くちぶりでいった。

やがて棺桶は、物置のなかにも積まれ、めいめいの頭の中にも、その幻影が、一個ずつ積まれた。

講堂で、通夜つやが営まれた。

病室へは知れぬように、極めてそつと送ったが、勘兵衛もうすうすわけを知ったらしく見える。

しかし、何も訊かないのだ。

そこへ侍かしずいている新蔵もまた、何も告げなかつた。

激していた人々は、その日から殆ど唾おしみたいに黙つて暗鬱あんうつになり、誰よりも消極的で、誰からも臆病者に見えていた北条新蔵のひとみには、もう我慢ならないといったようなものが常に底に燃えていた。

そうして彼は独り、

(今に、今に)

と、来る日を待つていた。

その待つ日の間に、彼はふと、或る日、病師の枕元から見える巨おおきな櫨けやきの木の梢こずえに、一羽ふくろうの梟おが止まつているのを見つけた。

その梟は、いつ眺めても、同じ所の梢こずえにとまっていた。

昼間の月を見ても、どうかすると、その梟は、ほうほうと啼くのであった。

夏を越えると、秋ぐちから、師の勘兵衛の病やまいあつは篤あつくなった。余病が出たのである。

(近い、近い)

と、梟の声こゑが、師の死期を知らせるように、新蔵には、聞えてならない。

勘兵衛の一子余五郎よごろうは旅先にあつたが、変を聞いて、すぐ帰ると書面でいって来た。——その人の着くのが早いか、死の迎えが早いか——と憂うれえられていたこの四、五日であつた。

どつちにせよ、北条新蔵には、自分の決意を果す日が近づいたのであった。彼は、もう明日あすは師の子息余五郎がここへ着くという前夜、遺書を残して小幡軍学所の門にわかれを告げた。

「無断で立ち去ります罪は、どうぞお宥ゆるし下さいまし」

樹陰から、老師の病間へ向つて、彼はいんぎんな挨拶を残して行つた。

「もはや明日は、御子息余五郎様が御帰宅ゆえ、ご病間のことも、安心して去ります。——したが、果たして、小次郎の首級しるしをさげて、御生前に、再びお目にかかれるや否や。……万一にも、私もまた、小次郎の手にかかり、返り討ちになつた時は、一足先に死出の山路でお待ちしております」

通夜童子
つやどうじ

一

そこは下総しもとうさのくに国行徳村からぎつと一里程ある寒村だった。いや村というほどな戸数こすうもない。一面に篠しのや蘆あしや雑木の生えている荒野こうやであつた。里の者は、法ほうてん典てんヶ原はらといつている。

常陸路ひたちじの方から今、ひとりの旅人が歩いて来る。相馬そうまの将門まさかどが、坂東ばんとうに暴勇をふるつて、矢唸うなりを恣ほしいにした頃いままから、この辺りの道も藪やぶもそのままにあるように蕭々しょうしょうとしたものだった。

「——はてな？」

武蔵は、行き暮れた足を止めて、野路の岐れわかに立ち迷っていた。秋の陽は野末に落ちかけ、ところどころの野の水も赤い。もう足元も仄ほのぐら暗く、草木のいろも定かでない。

武蔵は、燈ひを探した。

ゆうべも野に寝た。おとといの夜も山の石を枕に寝た。

四、五日前、栃木とちぎあたりの峠で豪雨にあい、それから後、少しからだけだるが気か懶ぜい。風邪かぜ気などというものは知らなかつたが——なんとなくこよいは夜露がもの憂ういのである。藁屋わらやの下でもよい。灯と、温かい稗飯ひえめしがほしかった。

「どこことなく潮の香がする……。四、五里も歩けば海があるとみ

える。……そうだ、潮風を^{あて}的に」

と、彼はまた、野道を歩いた。

しかし、その勘があたるかどうかわからない。もし海も見えず家の灯も見えなければ、こよいも秋草のなかに、萩と添^{そい}寝^ねをするしかないと思う。

赤い陽が沈みきれば、こよいも大きな月がのぼるであろう。満地は虫の音^ねに耳もしびれるばかりだった。彼一人の静かな^{あしおと}登^{あしおと}音^{あしおと}にさえ^{おどろ}愕^{おどろ}いて、虫は武蔵の袴^{はかま}や刀のつかにも飛びついてくる。

自分に風流があるならば、この行き暮れた道をも楽しんで歩くことが出来ように——とは思うのであったが、武蔵は、

(汝、楽しむや)

と、自分へ訊ねて、

(いな
否)

と、自分で答えるしかない気持であつた。

——人が恋しい。

——食物がほしい。

——孤独に倦うみかけた。

——修行に肉体がつかれかけている。

と正直に思う。

元より、これでいいとしている彼ではない。苦にがい反省を抱きつ

つ歩いているのだ。——木曾、なかせんどう中山道から江戸へと志して、そ

の江戸にはいること僅か数日で、再び陸みちのく奥の旅へ去つた彼であ

った。

ちようどあれから一年半余——武蔵は先に 逗とうりゆう 留ゆうし残した江戸へこれから出るつもりなのである。

なぜ、江戸を後にして、陸奥みちのくへいそいだか。それは諏訪すわの宿で会った仙台家の家士石母田いしもだけ外記の後を追ったのであった。自分の知らぬまに、旅包みの中にあつた大金を、外記の手へ返すためであつた。あの物質の恩恵を受けておくのは、彼にとって、大きな心の負担であつた。

「仙台家へ仕える程なら……」

武蔵は、自尊じそんをもつ。

たとい修行に疲れ、食しょくに渴かわいて、露衣ろいふうしん風身の漂泊さすらいに行き暮れ

ていても、

「おれは」

と、そのことを考えると、微笑がわいてくる。彼の大きな希望は伊達公六十余万石を挙げて迎えてくれても、まだ、満足とはしないに違いなかった。

「……おや？」

ふと、足の下で、大きな水音がしたので、武蔵は踏みかけた土橋に立ち止って、暗い小川の窪くぼを覗のぞきこんだ。

なにか、ばちやばちやと水音をたてている。まだ野末の雲が赤いだけに、川^{かわ}崖^{がけ}の窪^{くぼ}はよけいに暗く、土橋の上に佇^{たたず}んだ武蔵は、「河^{かわ}瀬^{うそ}か？」

と、眼を凝^こらした。

しかし、彼はすぐ、幼い土民の子を、そこに見出した。人間の子とはいいながら、河瀬と大差のない顔をしていた。怪しむように、その子は土橋の上の人影を下から見上げている。

そこで武蔵が、声をかけた。子供を見ると言葉をかけたくなるのは、彼には、いつものことで、特に理由のあることではない。

「子ども、何しているのだ」

すると土民の子は、

「泥鰻どじょう」

とだけいつて、またぎぶぎぶこぎる小箆を小川に浸ひたして振っていた。

「あ、泥鰻か」

なんの意味もないこんな会話も、この曠野こうやの中では親しくひびく。

「たくさん捕れたか」

「もう秋だから、そういないけど」

「拙者に少し分けてくれぬか」

「泥鰻をかい？」

「この手拭にひとつかみほど包んでおくれ。銭はやる」

「折角だけど、きょうの泥鰻は、お父とつさんに上げるんだから遣やれ

ないよ」

箆ざるを抱えて小川の窪から飛びあがると、子供は、野萩の中を栗り鼠すみたいに駈け去ってしまった。

「……迅はしこい奴」

武蔵は、取残されたまま苦笑をうかべていた。

自分の幼い時の姿が思い出された。友達の又八にもあんな時があつたなあと思う。

「……城太郎も、初めて見た頃は、ちょうどあのくらいな童わっぱだつたが」

——さて、その城太郎はその後どうしたろうか。何処に何をしていることぞ？

お通つうと共に迷はぐれてから、その年から数えれば足かけ三年目——
あの時十四、去年で十五、

「ああ、もうあれも、十六歳になる」

彼はこんな貧しい自分をも、師とよび、師と慕い、師として仕
えてくれた。——だが自分は彼に何を与えたか。ただ、お通と自
分とのあいだに挟まりながら、旅路の苦勞をさせたにすぎない。

武蔵はまた、野中たたくに佇たたくんだ。

城太郎のこと、お通のこと、さまざまな追憶おもいでに、しばらくつ
かれを忘れて歩いていたが、道はいよいよ分らない。

ただ倅しあわせなことには、秋の月がまんまると空にある。啼なきすだ
く虫の音がある。こんな夜にお通は笛をふくのが好きだったと思

う。……虫の音が皆、お通の声、城太郎の声に聞えてくる。

「……お。家がある」

灯を見つけた。武蔵は、しばらく何もわすれて、その一ツ灯へ向って歩いた。

近寄ってみると、まったくの一ツ家^やで、傾いた軒よりも、すすきや萩の背のほうが高く見える。大きな露と見えるのは、やたらに壁を這っている夕顔の花だった。

彼が近づくと、突然、大きな鼻息を鳴らして怒るものがあつた。家の横につないであつた裸馬である。馬の気配ですぐ知つたとみえ、明りのついている家の中から、

「誰だっ」

と呶鳴る者があつた。

——見ると、先刻さつき、泥鰯どじょうを分けてくれなかつた子どもである。

これはよくよく縁があると、武蔵は思わず微笑んで、

「泊めてくれぬか。夜明けにはすぐ立去るが——」

いうと、子どもは、先刻とはちがつて、武蔵の顔や姿をしげしげ眺めていたが、

「あ。いいよ」

と、素直うなずに頷いた。

これはひどい。

雨が降ったらどんなだろう。月明りが屋根からも壁からも洩る。旅装を解いても、掛ける釘もなかつた。床板に蓆は敷いてあるが、そこからも風が洩る。

「おじさん、先刻、泥鰯が欲しいといったね。泥鰯、好きかい」
童子は、前に畏かしこまつて訊く。

「……………」

武蔵は、それに答えるのを忘れて、この子供を見つめていた。

「……………何を見ているのさ」

「幾歳いくつになるの」

「え」

と、童子はまごついて、

「おらの年かい？」

「うむ」

「十二だ」

「……………」

土民の中にもよいつらだましい面ほ魂ほの子があるもの——と武蔵はなお惚ほれぼれ々々れぼれと見るのであつた。

洗わない蓮根あかみたいあかに垢あかで埋あかまつた顔あかをしている。髪あかは蓬あか々々あかと伸びて、小鳥あかの糞あかみたいあかな匂あかいがする。しかし、よく肥あかえていることと、垢あかの中あかにくるりと光あかっている眼あかのきれいなことはすばらしい。

「粟飯あわめしも少しあるよ。泥鰯どじょうも、もうお父とつさんに上げたから、喰べるなら、下げて来てやるよ」

「すまないなあ」

「お湯ものむのだろ」

「湯も欲しい」

「待つといで」

童子は、がたぴしと、板戸をあけて、次の部屋にかくれてしま
う。

柴を折る音や、七輪をあおぐ音がする。家の中は忽ち煙で充ち
てくる。天井や壁にたかっていた無数の昆虫が煙に追われて外へ
出て行く。

「ぎ、できた」

無造作に、食べ物が床^{ゆか}へじかに並んだ。塩からい泥鰯^{どじょう}、黒い味噌、粟飯。

「うまかった」

武蔵がよろこぶと、人の欣^{よろこ}びを童子もよろこぶ性質とみえ、

「うまかったかい？」

「礼をのべたいが、この家の主^{やあるじ}はもうお寝^{やす}みかの」

「起きてるじゃないか」

「どこに」

「ここに」

と、童子は、自分の鼻を指さして、

「ほかに誰もいないよ」

と、いう。

職業を訊くと、以前は少しばかり農もやっていたが、親がわずらうてから、農はやめて自分が馬子まごをして稼いでいるという。

「……ああ油がきれてしまった。お客さん、もう寝るだろう」
明りは消えたが、月洩る家は何の不便もなかった。

うすい藁わらぶとんに、木枕をかって、武蔵は壁に添って寝た。
とろとろと眠りかけると、まだ風邪気が抜けきらないせいか、
軽い汗が毛穴にわく。

そのたびに武蔵は、夢の中で雨のような音を聞いた。

夜もすがら啼きすだく虫の音は、いつか彼をふかい睡ねむりに誘つ

た。——もしそれが砥石といしをすべる刃物の音でなかったら、その深い眠りは覚めなかつたに違いない。

「……や？」

彼は、ふと、身を起していた。

ずし、ずし、ずし——と微かに小屋の柱がうごく。

板戸の隣で、砥石といしへ物を当てている力がひびいて来るのである。何を研といでいるのか？——それは問題でない。

武蔵はすぐ、枕の下の刀を握った。すると、隣の部屋から、「お客さん、まだ寝つかれないのかい？」

四

どうして自分が起きたのを、隣の部屋で知ったろうか。

童子の敏感に愕おどろきながら、武蔵は、その答えを外はずして、斬り返すように、此方こなたからいった。

「この深夜に、なんで其方そちは、刃物など研といでいるのか」
すると少年は、げらげら笑いながら、

「なアんだ、おじさんは、そんなことに恟びくびく々して、寝つかれなかつたのかい。強そうな恰好をしているけれど、内心は臆病なんだなあ」

武蔵は、沈黙した。

少年の姿を借りた魔魅まみと、問答でもしているような気持に打た

れたからである。

ごし、ごし、ごしつ……と童子の手はまた、砥石といしのうえに動いているらしい。不敵な今の言葉といい、砥とを揺する底力といい、武蔵はいぶからずにいられなかつた。

「……？」

で、板戸の隙間から覗いてみたのである。そこは台所と、蓆むしろを敷いた二坪の寝小屋になつている。

引窓から白い月明りが映さしこんでいる下に、童子は、研とぎ桶おけを据え、刃渡り一尺五、六寸の野差刀のざしを持って、一心やいばに刃をかけているのであつた。

「何を斬るのか」

隙間から武蔵がいうと、童子は、その隙間をちよつと振向いたが、一言も発せず、なお懸命に研いでいる。そしてやがてのこと、
晃々きらきらと匆ね返す光と研水とぎみずのしずくを拭ぬぐいあげて、

「おじさん」

と此方こなたを見て訊ねた。

「これでね、おじさん。人間の胸中が、二つに斬れる？」

「……さ。腕に依るが」

「腕なら、おらにだつておぼえがある」

「一体、誰を斬るのか」

「おらのお父さんとつを」

「何……？」

武蔵は、愕おどろいて、思わずその板戸を開け、

「童わっぱたわむ戯れにいったか」

「だれが、冗談など、いうものか」

「父を斬る？ ……それが本気ならおまえは人間の子ではない。

こんな曠野こうやの一家に、野鼠か土蜂のように育つた子にせよ、親

とは何かぐらいなことは、自然分っていないなければならない。……

獣けものにすら親子の本能はあるに、おまえは親を斬るために、その刀

を研いでいた」

「ああ……。だけど、斬らなければ、持つて行けないもの」

「どこへ」

「山のお墓へ」

「……え？」

武蔵は改めて眼を壁の隅へ向けた。先刻さつきからそこに気になるものを見ていたが、まさか、少年の父の死骸とは思いもつかなかつたのである。熟視すると、死骸には、木の枕をさせ、上から汚い百姓着がかぶせてある。そして一碗の飯と水と——さつき武蔵にもくれた泥鱒どじょうの煮たのが木皿に盛もって供そなえてある。

この仏は、生前泥鱒どじょうが、無二の好物であつたとみえる。少年は、父が死ぬと、父が一番好きな物は何であつたかを考え——もう秋も半ばというのに、懸命に、泥鱒をさがして、あの小川で洗すすっていたものにちがいない。

——とも知らずに、

(泥鰯を分けてくれぬか)

といった自分の心ない言葉が武蔵は恥ずかしく思い出された。同時にまた、父の遺骸を、山の墓地へ持って行くのに、一人の力では運ばれないから、死骸を両断して持って行こうという——この童子の剛胆な考え方に、舌を巻いて、しばらくその顔を見つめてしまった。

「いつ死んだのだ？ ……おまえの父は」

「今朝」

「お墓は遠いのか」

「半^{はんみち}里^りばかり先の山」

「人を頼んで、寺へ持って行けばよいではないか」

「おかねがないもの」

「わしが、布施ふせをしよう」

すると、童子は、かぶりを振っていった。

「お父さんは、人から物を恵まれるのは、嫌いだった。お寺も嫌いだった。——だから、いらぬ」

五

一言一句、この少年のことばには、奇骨がある。

父という仏も、察するに、凡ただの田夫野人でんぶやじんではなからう。由縁よしあ

る者の末にちがいはない。

武蔵は彼のことにばに任せ、山の墓所へ、仏を運ぶ力だけ貸した。それも、山の下までは、仏を馬の背にのせて行けばよいのであった。ただ嶮けわしい山道だけ、武蔵が仏を背負のつて上のつた。

墓所といつても、大きな栗の木の下に、丸い自然じねんせき石が一つ、ぼつねんとあるだけで、ほかに塔婆とうば一つない山だった。

仏を埋いけ終ると、少年は花を手向け、

「祖父おじいも、祖母おばあも、おつ母さんも、みんなここに眠いつてるんだぜ」と、掌てをあわせた。

——何の宿縁。

武蔵も共に仏の冥福を念じて、

「墓石もそう古くないが、おまえの祖父の代から、この辺に土着

したとみえるな」

「ああそうだった」

「その以前は」

「最上家の侍だったけど、戦いくさに負けて落ちのびる時、系図も何もみんな焼いちまつて、何も無いんだつて」

「それほどな家柄なら墓石にせめて、祖父の名ぐらい刻んでおき
 そうなものだが、紋もんじり印も年号もないが」

「祖父が、墓へは、何も書いてはいけないといつて死んだんだつて。蒲生家がもうけからも、伊達家だてけからも、抱かかえに来たけれど、侍奉公は、二人の主人にするものじゃない。それから、自分の名など、石に彫うっておくと、先の御主人の恥になるし、百姓になつたんだから、

紋も何も彫るなつていつて、死んだんだつて」

「その祖父の、名は聞いていたか」

みさわいおり

「三沢伊織というんだけれど、お父さんは、百姓だから、ただ三右衛門といつていた」

「おまえは」

「三之助」

「身寄りはあるのか」

「姉さんがあるけれど、遠い国へ行っている」

「それきりか」

「うん」

「明日からどうして生きてゆくつもりか」

「やっぱり馬子まごをして」

と、いつてすぐ、

「おじさん。——おじさんは武者修行だから、年中旅をして歩くんだろ。おらを連れて、何処までもおらの馬に乗ってくれないか」

「……………」

武蔵は先刻さつきから、白々と、明けてくる曠野を見ていた。そして、この肥沃ひよくな野に住む人間が、どうして、かくの如く貧しいかを考えこんでいた。

おほとね 大利根の水の、下しも総うしおの潮があつて、坂東平野は幾たびも泥海に化し、幾千年のあいだ、富士の火山灰はそれを埋め——やがて幾世いくよをふるうちに、葭よしや蘆あしや雑木や蔓つる草がはびこつて、自然の

力が人間に勝つてしまう。

人間の力が土や水や自然の力を自由に利用する時、はじめてそこに文化が生れる。坂東平野はまだ人間が自然に圧倒され、征服され、人間の智慧の眸は、茫然とただ天地の大をながめているにすぎない。

陽がのぼると、そこらを、小さい野獣が跳ぶ、小鳥が匆^はねる。未開の天地では、人間よりも、鳥獣のほうが、自然の恵みを、より多く享^うけ、より多く楽しんでいるかに見えた。

六

やはり、子どもは、子どもである。

土の下に、父を葬つて帰るさには、もう父のことを忘れてい
いや忘れてもいまいが、葉の露から昇る曠野の日輪に、生理的に、
悲しみなどは、吹きとんでいた。

「なあ、おじさん、いけないかい。おらは、今日からでもいい—
—。この馬に、何処までも乗つて行つて、何処までも、おらを通
れて行つてくれないか」

山の墓所を降りてからの帰り途——

三之助は、武蔵を、客として、馬にのせ、自分は、馬子として、
手綱を引いていた。

「……ウム」

と、うなずいてはいるが、武蔵は明瞭な返辞はしない。そして心のうちでは、この少年に、多分な望みをかけていた。

けれど、いつも流浪るろうの身である自分が先に考えられた。果たして、自分の手によって、この少年を幸福にできるかどうか、将来の責任を、自分に問うてみるのであった。

すでに、城太郎という先例がある。彼は、素質のある子だったが、自分が流浪の身であり、また自分にさまざまわずらな煩いがあるために、今では、手元を離れて、その行方もわからない。

(もし、あれで悪くでもなったら——)

と、武蔵は、いつもそれが、自分の責任でもあるかのように、胸をいためている。

——しかし、そういう結果ばかり考えたら、結局人生は、一歩も、あるくことが出来ない。自分の寸前さえ分らないのである。ましてや、人間の子、ましてや、育つてゆく少年の先のこと、誰が、保証できよう。また、傍^{はた}の意志をもつて、どうしよう、こうしようと思うことからして、むりである。

（ただ、本来の素質を、研^{みが}かせて、よい方へ歩む導きをしてやるだけなら——）

それならば、できると彼も思う。また、それでいいのだと、自身に答えた。

「ね、おじさん、だめかい、いやかい」

三之助は強^{せが}請む。

武蔵は、そこでいった。

「三之助、おまえは、一生涯、馬子になっていたいかな、侍になりたいか」

「それやあ、侍になりたいさ」

「わしの弟子になって、わしと一緒に、どんな苦しいことでもできるか」

すると、三之助は、いきなり手綱を放り出した。何をほうするのかと見てみると、露草の中に坐って、馬の顔の下から、武蔵へ両手をついていった。

「どうか、お願いです。おらを侍にしてください。それは死んだお父とつさんもいい暮していたんだけど……きょうまで、そういつて、

頼む人がなかつたんです」

武蔵は、馬から降りた。

そしてあたりを見廻した。一本の枯れ木の手頃なのを拾い、それを三之助に持たせて、自分も有り合う木切れを取って、こういつた。

「師弟になるかならぬか、まだ返辞はできぬ。その棒を持って、わしへ打ち込んで来い。——おまえの手すじを見てから、侍になれるかなれないか決めてやる」

「……じゃあ、おじさんを打てば、侍にしてくれる？」

「……打てるかな？」

武蔵はほほ笑んで、木の枝を構えてみせた。

枯れ木をつかんで立ち上がった三之助は、むきになって、武蔵へ打ちこんで来た。武蔵は、かしゃく仮借しなかつた。三之助は、何度も、よろめ躊じた。肩を打たれ、顔を打たれ、手を打たれた。

(今に、泣き出すだろう)

と思つていたが、三之助は、なかなかやめなかつた。しまいは、枯れ木も折れてしまったので、武蔵の腰へ武者ぶりついて来た。

「猪口才ちよこざいな」

と、わざと大げさに、武蔵は彼の帯をつかんで、大地へたたきつけた。

「なにくそ」

と、三之助はまた、刎はね起きてかかってくる。それをまた、武蔵は、つかみ寄せて、高々と、日輪の中へもろて双手で差し上げながら、「どうだ、参ったか」

三之助は、眩まぶしげに、宙でもが躓きながら答えた。

「参らない」

「あの石へ、叩きつければ、おまえは死ぬぞ。それでも参らないか」

「参らない」

「強情な奴だ。もう、貴様の敗けではないか。参ったといえ」

「……でも、おらは、生きてさえいれば、おじさんに、きつと勝つものだから、生きているうちは参らない」

「どうして、わしに勝つか」

「——修行して」

「おまえが十年修行すれば、わしも十年修行して行く」

「でも、おじさんは、おいらよりも、年がよけいだから、おらよりも、先へ死ぬだろう」

「……む。……ウム」

「そしたら、おじさんが、棺かん桶おけへはいつた時に、撲なぐつてやる。

——だから、生きてさえいれば、おらが勝つ」

「……あツ、こいつめ」

真つこうから一撃喰つたように、武蔵は、三之助のからだを、大地へ抛ほうり出だしたが、石のところへは、投げなかった。

「……？」

ぴよこんと彼方かなたに立った三之助の顔をながめて、むしろ愉快そうに、武蔵は手を叩いて笑った。

一指さす天

一

「弟子にする」

武蔵は、その場で、三之助に言葉をつがえた。

三之助の欣よろこびは、非常なものだった。子供は、欣よろこびをつつまな

い。

二人は、一度、家へ戻つた。——明日はもうここを去るとい
ので、三之助は、こんな茅屋あばらやでも、自分まで三代も住んだ小屋
かとながめて、夜もすがら、祖父おじいの思い出や、祖母おばあや亡母ははのこと
などを、武蔵へ話して聞かせた。

そうして、翌る日の朝。

武蔵は、支度して、先へ軒を出ていた。

「——伊織いおり、伊織。はやく来い。持つて行くような物は何もあ
るまい。あつても、未練を残すな」

「はい。今参ります」

三之助は、後ろから、飛び出して来た。着のみ着のままの支度

である。

今、武蔵が、「伊織」と彼を呼んだのは、彼の祖父が、最上家の臣で、三沢伊織といい、代々伊織を称して来た家だと聞いたので、

（おまえも、わしの弟子となつて、侍の子に返つた機しおに、祖先の名を襲ついだがよい）

と、まだ元服には早い年齢としであつたが、ひとつの心構えを抱かせるために、ゆうべからそう呼ぶことにしたのであつた。

しかし、今飛び出して来た姿を見ると、足にはいつもの馬まご子草鞋らじを穿はき、背中には、粟飯あわめしの弁当風呂敷を背負つて、尻しりきり着物一枚、どう眺めても、侍の子ではない、蛙の子の旅立ちである。

「馬を遠くの樹へ持つて行つて繫つないでおけ」

「先生、乗つて下さい」

「いや、まあいいから、彼方あっちへ繫いで歸つて来い」

「はい」

きのうまでは、何かの返辞も、へいであつたが、今朝からは急に、ハイに變つている。子供は、自分を改めることに、何のためらいも持たなかつた。

遠くへ馬を繫いで、伊織はまた、そこへ歸つて来た。武蔵は、まだ軒下に立っている。

（何を見てるんだらう？）

伊織には、不審であつた。

武蔵は、彼の頭つむりに、手を乗せて——

「おまえは、この藁屋わらやの下で生れた。おまえの肯きかない気性、屈しない魂は、この藁屋が育ててくれたものだ」

「ええ」

と、武蔵の手をのせたまま、小さい頭つむりはうなずいた。

「おまえの祖父は、二君に仕えぬ節操まつとをもつて、この野小屋にかくれ、おまえの父は、その人の晩節まつとを全うさせるために、百姓に甘んじて、若い時代を、孝養に送り、そして、おまえを残して死んだ。——けれどもおまえはもう、その親も送つて、きょうからは一本立ちだ」

「はい」

「偉くなれよ」

「……え、え」

伊織は、眼をこすつた。

「三代、雨露をしのがせて貰つた小屋に、手をつけて、別れをいえ、礼をのべろ。……そうだ、もう名残はよいな」

いうと、武蔵は、屋内へはいつて、火を放つた。

小屋は見るまに、燃えあがつた。伊織は、熱い眼をして見ていた。その眸が、余り悲しげなので武蔵は、説いて聞かせた。

「このままにして立ち去れば、後には野盜や追剥が住むにきまつている。それではせつかく忠節な人の跡が、社会を毒する者の便宜になるから焼いたのだ。……分つたか」

「ありがとうございます」

見ているうちに、小屋は一山ひとやまの火となり、やがて、十坪もな
い灰なに化つてしまった。

「さ。行きましょう」

伊織はもう先を急せく。少年の心は、過去の灰には、何の感奮も
なかった。

「いや、まだまだ」

武蔵は、首を振ってみせた。

「まだって？ ……これからまだ、何をするんですか」

伊織は、いぶかしそう。

その不審顔を笑って、

「これから、小屋を建てにかかるとだよ」

と、武蔵がいう。

「え？ どうしてだろ。 ……たった今、小屋を焼いちゃったのに」

「あれは、きのうまでのおまえの御先祖の小屋。きょうから建てるのは、われわれ二人の明日からあした住む小屋だ」

「じゃあ、またここへ住むんですか」

「そうだ」

「修行には出ないんですか」

「もう出ているではないか。わしも、おまえに教えるばかりではなく、わし自身が、もつともつと修行しなければならぬのだ」

「なんの修行？」

「知れたこと、劍の修行、武士の修行——それはまた、心の修行だ。伊織、あの斧おのをかついで来い」

指さす所へ行くと、いつの間にか、その草むらの中には斧のこぎりだのまた、農具などだけが、炎をかけずに、取り残されてあった。

伊織は、大きな斧をかつぎ、武蔵の歩む後に尾ついて行つた。

栗林がある。そこには松も杉もあつた。

武蔵は、肌を脱ぎ、斧ふるを揮つて樹きを伐り出した。丁ちよう々ちようと、

生木の肉が白く飛ぶ。

——道場を拵える？ この平野を道場に修行する？

伊織には、いくら説明されても分る程度しか分らなかつた。旅へ出ないで、この土地に止まることが何だかつまらない。

どさつ——と樹がたお仆れる。次々に斧が仆してゆく。

血のさした武蔵の栗色の皮膚には、黒い汗がりんりと流れ出した。この日頃からの情気だき、倦怠けんたい、孤愁などはみな汗となつて流れるかのようだ。

彼は昨日の未明、一個の農民で終つた伊織の父の墓のある山から——坂東平野の未開をながめて、勃ぼつぜん然と、今日のことを、思い立つたのであつた。

(しばらく、劍を措いて、くわ 劍を持とう！)

という発願だった。

劍を研みがくべく——禪をする、書をまなぶ、茶にあそぶ、画を描く、仏像を彫る。

鍬を持つ中にも、劍の修行はあるはずだと思ふ。

しかも、この広こうぼう茫な大地は、さながらそのまま行道を待つ絶好な道場であり、また鍬と土には、必ず開墾が生じ、その余恵は、幾百年の末まで、幾多の人間を養うことにもなる。

武者修行は、由来、行ぎょうこつ乞を本則としている。人の布施ふせに依つて学び、人の軒端をかりて雨露をしのぐことを、禪家その他の沙門しゃもんのように、当りまえなこととしている。

けれど、一飯いぱんの尊たかさは、一粒の米でも一茎いっけいの野菜でも、自分で裁つつてみて初めてわかることである。それをしない坊主のことはがまま口頭禪くつぜんとしか聞えないように、布施で生きている武者修行が剣のみを研みがいても、それを治国の道に生かすことを知らず、また、社会せけんばなれな武骨一偏いっぺんになつてしまひ易いことも当然である——と武蔵は思つた。

武蔵は、百姓の業わざは、知つている。母と共に、幼い頃は、郷土屋敷の裏畑へ出て、百姓のすることもしたものだつた。

けれど、今日からする百姓は、朝夕の糧かてのためではない、心の糧を求めたのだつた。また、行ぎよう乞こつの生活から、働いて喰らう生活を学ぶためだつた。

さらにまた、野茨のいばらや沼草の繁茂にまかせ、洪水や風雨の暴力にも、すべて自然に對して、諦めあきらの眼しか持たない農民に——子々孫々、骨と皮ばかりの生活くらしを伝えて来ながらも、依然、眼をひらかなない彼らに、身をもつて、自分の考えを、植えつけてやろうという望みもかけた。

「伊織、繩を持つて来て、材木をしばれ。——そして河原の方へ曳いてゆけ」

おの斧を立てて、ほつと、汗あせを肱ひじで拭いながら、武蔵は命じた。

伊織は、縄を結びつけて、材木を曳いた。武蔵は、斧や手斧ておので、面皮をとる。

夜になると、手斧屑くずで焚火たきびをし、火のそばに、材木を枕にして寝る。

「どうだ伊織、おもしろいだらうが」

伊織は正直に答えた。

「ちつとも、おもしろいことなんかないや。百姓するなら、先生の弟子にならなくなたって、できるんだもの」

「今におもしろくなる」

秋ふが更けてゆく。

夜ごとに、虫の音は減って行った。草木は枯れてゆくのである。

もうその頃には、この法典ヶ原に、二人の寝小屋が建ち、二人は毎日、鋤すきと鍬くわを持って、まず足元の一坪から開墾し始めた。

もつとも、それにかかる前に、彼は一応この附近一帯の荒地を足で踏んで、

(なぜ、この天然と人とが離反したまま雑木雑草に委まかされているか)

を考查してみた。

(水だ)

と、まず第一に、治水の必要が考えられた。

小高い所に立つてみると、ここの荒野は、ちようど応仁以後から戦国時代にわたる人間の社会みたいな図であった。

ひとたび、坂東平野に大雨がそそぐと、水は各、勝手に河を作り、流れたい方へ奔流し、激したいままに石ころを動かす。

それらを収める主流というものが無いのだ。天気の日眺めると、それらしいものは幅の広い河原を作っているが、天地の大に対する包容力が足りないし、元々、あるがままに出来た河原なので、秩序もないし、統制もない。

もつとなくてならないのに無いものは、群小の水を集めて、一体に指してゆくべき方角を持たないのだ。主体自らが、その折々の気象や天候にうごかされて、或る時は、野にあふれ、或る時は、林を貫き、もつと甚だしい時は、人畜を冒^{おか}して、菜^{さい}田^{でん}まで泥海にしてしまう。

(容易でないぞ)

と、武蔵は、踏査した日から思った。

それだけに、彼はまた、非常な熱と興味をこの事業に抱いた。

(これは政治と同じだ)

と思う。

水や土を相手に、ここへ肥沃ひよくな人煙をあげようとする治水開墾

の事業も、人間をあいてに、人文はなの華を咲かせようとする政治経け

緯いりんも、なんの変りもないことと考える。

(そうだ、これはおれの理想とする目的と、偶然にも合致する)

この頃からのことである。——武蔵は剣に、おぼろな理想を抱

き始めた。人を斬る、人に勝つ、飽くまで強い、——といわれた

ところで何になろう。劍そのものが、単に、人より自分が強いということだけでは彼はさびしい。彼の気持は満ち足りなかつた。

一、二年前から、彼は、

——人に勝つ。

劍から進んで、劍を道とし、

——おのれに勝つ。人生に勝ちぬく。

という方へ心をひそめて来て、今もなおその道にあるのであつたが、それでもなお、彼の劍に対する心は、これでいいとはしない。

(まこと真に、劍も道ならば、劍から悟り得た道心をもつて、人を生かすことができない筈はない)

と、殺さつの反対を考え、

(よしおれは、劍をもつて、自己の人間完成へよじ登るのみでなく、この道をもつて、治民を按あんじ、経国の本もとを示してみせよう)と、思い立ったのである。

青年の夢は大きい、それは自由である。だが、彼の理想は、今のところ、やはり単なる理想でしかない。

その抱負を実行に移すには、どうしても政治上の要職に就かなければできないからだ。

しかし、この荒野の土や水を相手としてそれをやる分には、要職もいらなければ、衣冠や権力をもつて臨む必要もない。武蔵は、そこに熱意と歓びを燃やしたのであった。

四

木の根瘤ねこぶを掘る。また、石ころを篩ふるう。

高い土を崩してならし、大きな岩は、水利の堤どてにするために並べる。

そうして日々、晨あしたは未明から、夕方は星のみえる頃まで、武蔵と伊織とが、孜し々として、法典ヶ原の一角から開墾に従事していると、時折、河原の向うに、通りがかりの土民たちが立ち止つて、「何をしてるだ？」

と、いぶかり顔に、

「小屋あ、ほつ建てて、あんな所に、住む気でいるのか」

「ひとりには、死んだ三右衛門とこの餓鬼がきでねえけ」

うわさが拡がる。

嘲わらう者ばかりでもなく、中にはわざわざやって来て、親切に呶わら鳴わらつてくれる者もあつた。

「そこなお侍よう、おめえツちら、そんなところを、せっせと開きりひ墾らいても、だめなこつたぜよ。いっぺん暴風雨あらしがやって来て見さつせ、百日の萱かやだかなあ」

幾日か経つて、また来てみても、黙々と、伊織を相手に、武蔵が労働しているのを見ると、親切者も少し、腹を立てたように、「おうい。くそ骨折つて、つまらねえところに、水溜りたまを拵こしらえる

でねえだ」

また——数日おいて来てみたところ、相変らず、二人の耳のな
いような姿が働いているので、

あほう
「阿呆よつ」

と、こんどは、ほんとに怒ってしまい、そして武蔵を、ふつう
の智恵のない馬鹿者と見なして、

「藪やぶや河原に、喰える物もンの芽がでるくらいならよ、おらたちや

あ、てんとう太陽さまに腹あ干して、笛ふいて暮らすだよ」

「飢饉ききんどし年は、ねえわい」

「止めさせ、そんなとこ、掘りちらすなあ」

「むだ骨折る奴あ、くそ袋もおんなじだよ」

鍬を打ち振りながら、武蔵は土へ向つたまま笑っている。

たしなめられてはいたが、伊織は時々、むツとして、

「先生、あんなこと、大勢していつてるよ」

「ほっとけ、ほっとけ」

「だって」

と伊織は、小石をつかんで、抛ほうりそうにするので、武蔵はくわつと眼をいからせて、

「これツ。師のことばを聞かぬやつは、弟子ではないぞ。——何する気かっ」

と、叱りつけた。

伊織は耳がしびれたようにハツとした。けれど、手に握った石

は素直に捨てられもせず、

「……畜生っ」

と、近くの岩にたたきつけて、その小石が、火花を出して、二つに割れて飛んだのを見ると、何だか悲しくなってしまう、すき鋤をすてて、しくしくと泣き出してしまった。

(泣け、泣け)

といわないばかりに、武蔵は、それも抛ほうつておく。

すすり泣いていた伊織は、だんだん声を高めて、果ては、天地にただ独りいるように、声をあげて、大泣きに泣き出した。

父の死骸を二つに断きつて、山の墓所へひとりで埋めに行こうとしたくらいな剛気を持っているかと思うと、泣けばやはり、から

子供であつた。

——お父さん！
とつ

——おつ母さん！

——おじい祖父。おばあ祖母つ。

届かぬ地下の人へ、届けよとばかり、訴えているかのように、
武蔵には、強く胸を打つてくる。

この子も孤独。われも孤独。

余りの伊織の泣き声に、草木も心あるもののように、
と、冷たい風に、たそがれ黄昏近い曠野はくら晦く戦そよぎはじめた。
蕭々しやうしやう

ポツ、ポツ、とほんとの雨もこぼれて来て——。

五

「……降つて来た。ひと暴れ来そうだぞ。伊織、はやく来い」

鍬くわや鋤すきの道具をまとめて、武蔵は小屋の方へ駈け出した。

小屋の中へ飛びこんだ時は、雨はもう真つ白に、天地を一色に降りくだいていた。

「伊織、伊織」

後から尾ついて来たものとばかり思っていたところ、見ると彼の姿は、側にもいない、軒端にも見えない。

窓から眺めやると、凄まじい雷いなびかり光が、雲を斬り、野面のづらをはためき、それに眼をふさぐ瞬間——思わず手は耳へ行つて、五体

に雷神かみなりのひびきを聞くのであつた。

「……………」

竹窓のしぶきに顔を濡らしながら、武蔵は恍惚こうこうと、見とれて
いた。

こういう豪雨を見るたびに、風のすさぶ度に、武蔵は、もう十
年近い昔になる——七宝寺の千年杉を思い出す、宗しゅう彭ほう沢庵たくあんの
声を思い出す。

まったく自分の今日あるのは、あの大樹の恩だと思ふ。

その自分が、今は、たとえ幼い童子にせよ、伊織という一弟子
を持っている。自分に果たして、あの大樹のような無量広大な力
があるか、沢庵坊のような肚があるか。——武蔵は顧みて、自分

の成長を思うと気恥ずかしい心地がする。

だが、伊織に対しては、どこまでも自分は千年杉の大樹の如くであらねばならぬと思う。沢庵坊のような酷い慈悲も持たねばならぬと思う。また、それが、かつての恩人に対しての、いささかな報恩ではないかとも思った。

「……伊織つ、伊織つ」

外の豪雨に向つて、武蔵は再三再四呼んでみた。

何の返辞もない。ただ雷と、いかずち、どうどうと軒先の水音が騒がしいのみである。

「どうしたのか」

武蔵すら、出てみる勇氣もなく、小屋に閉じこもっていたが、

そのうちに、はたと雨が小やみになったので、外へ出て見まわすと、何という強情な性質の童子だろうか、伊織はまだ依然として、前にいた耕地の所から一尺も動かずに立っているのだった。

(すこし白痴ばかか)

とすら、疑えないこともない。

あんぐりと口を開いて、先刻さつき、大泣きに泣いたままな顔をして、

——もちろん頭からズブ濡れになって、泥田になった耕地に案山かか子しみたいしに立っているのだ。

武蔵は、近くの、小高い所まで駈けて行って、思わず、

「ばかつ」と、叱った。

「はやく小屋へはいれ、そんなに濡れては体に毒だ。ぐずぐずし

ておると、そこらに河が出来て、戻れなくなるぞ」

——すると、伊織は、武蔵の声をさがすように見廻して、にやりと笑って、

「先生は、あわてもンだなあ。この雨はやむ雨だよ。この通り、雲が断きれて来たじやないか」

と、一指を天にさしていった。

「……………」

武蔵は、教える子に、教えられたような気がして、沈黙していた。

だが、伊織は、単純なのである。——武蔵のようにいちいち考えていったりしたりしているのではない。

「おいでよ、先生。まだ明るいうちにや、だいぶ仕事ができるよ」と、その姿のまま、また、前の労働をつづけ始めた。

この師この弟子

一

ここ四、五日青空をみせて、ひよ、もずの高音に穂すすきの根の土も乾きかけて来たかと思うとまた、野末の果てから背のびをした密雲が、見るまに坂東一帯を、日にっしょく蝕しょくのように暗くしてしまった。伊織は、空を見て、

「先生、こんどは、ほんものが襲^やつてきたよ」

と、心配そうにいった。

いううちにも、墨のような風が吹く。帰る所へ帰り遅れた小鳥は、ハタキ落されたように地に墜ち、草木の葉はみな葉裏を白く見せて戦^{おの}き立つ。

「一降り来るかな？」

武蔵が訊くと、

「一降りどころじゃないぜ、この空は——。そうだ、おらは村まで行つて来よう。先生は道具をまとめて、早く小屋へ引揚げたほうがいいよ」

空を見ていう伊織の予言は、いつも外^{はず}れたことがない。今も、

武蔵へそういい残すと、野分をよぎる鳥のように、見え隠れして草の海をどこともなく駈けて行つた。

果たして、風も雨も、伊織のいつたとおり、いつものとは變つて、兇暴に募^つつてくる。

「——何処へ行つたのか」

武蔵はひとり小屋へ歸つたが、案じられて時々外を見た。

きょうの豪雨は常と違う。おそろしい雨量である。そして一瞬にハタとやむ。やんだかと思うと前にも増して降ってくる。

夜になった。

雨はよもすがらこの世を湖底としてしまうかとばかり降りぬいた。ほつ建て小屋の屋根はいくたびも飛ぶかと危ぶまれ、屋根裏

に葺^ふいてある杉皮が、いっぱい散りこぼされた。

「困ったやつ」

伊織はまだ帰らない。

夜が明けてもなお見えない。

いや夜が白みかけて、きのうからの豪雨のあとを見渡すと、な

おのこと、伊織の帰りは絶望された。日頃の曠野^{こうや}は、一面の泥海

となっている。所々、草や木が、浮洲^{うきす}のように見えるだけだった。

ここの小屋は、やや高い所を選んであるので、幸いに、冒^{おか}され

ないが、すぐ下の河原は、濁流が押し流れて、さながら大河の奔

激である。

「……もしや？」

武蔵はふと案じ出した。その濁流に流されてゆく種々さまざまな物を
見て、ゆうべ闇夜に帰ろうとした伊織が、過あやまつて、溺れでもして
しまったのではあるまいか——と聯想されたからである。
だが、彼はその時、ごうごうと地も空も水に鳴る暴風雨あらしの中で、
伊織の声をどこかに聞いた。

「せんせーいつ。……先生ーッ」

武蔵は、鳥の浮巢うねみたいにみえる彼方あなたの洲すに、伊織らしい影を
見た。いや伊織にちがいない。

何処へ行ったのか、彼は牛の背に乗って帰って来たのだ。牛の
背には自分のほかに、何か縄で絡からげた大きな荷物を、後先に縛くくし
つけている。

「おおおう……？」

と見ているまに、伊織は、牛を濁流へ乗り入れた。

濁流の赤いしぶきと渦うずは忽ち彼と牛をつつんでしまふ。流され流され、やっと、此方こなたの岸へ着くと牛も彼も、身ぶるいしながら、小屋のある所へ駆け上がった。来た。

「伊織！ 何処へ行つたのだ」

半ば怒るように——半ばほつとしたように、武蔵がいうと、伊織は、

「何処へつて、おら、村へ行つて、食い物をうんと持つて来たんじゃないか。この暴風雨あらしは、きつと半年分も降ると思つたから。

——それに暴風雨がやんでも、この洪水みずはなかなか退ひかないにき

まってるもの」

二一

武蔵は、伊織の惻発おどろなのに愕おどろいたが、考えてみれば彼が惻発おどろなのではない、自分が鈍なのである。

天候の悪兆候をみたら、すぐ食物の準備を考えておくことは、野に住む者の常識で、伊織は、嬰兒あかこの時から、こういう場合を、何度も、経験しているにちがいない。

それにしても、牛の背から下ろした食物は、少ないものではない。むしろ蕤むしろを解き、あぶら桐油あぶらびきの紙を解いて伊織が――

「これは粟あわ、これは小豆あずき、これは塩魚しおうお——」

と、幾つもの袋をならべ、

「先生、これだけあれば、ひと月やふた月、水が退ひかなくつても、安心だろ」

と、いう。

武蔵の眼には涙が溜たまった。健気けなげよとも忝かたじけないともいいようがない。自分はここを開拓して、農土に寄与するものと、ただ気概のみを高く抱いて、自分の餓うえるのを忘れていたが、その飢うえは、この小さい者に依つて、からくも凌しのがれているのだった。

だが、自分たち師弟を、狂人呼ばわりしている村の者が、どうして、食物を施してくれたらうか。村の者自身さえ、この洪水で

は、自身の飢えにおののいているに違いない場合に。

武蔵が、その不審を糺すと、伊織は事もなげに、

「おらの巾着きんちやくを預けて、徳願寺様から借りて来た」と、いう。

「徳願寺とは？」

と聞くと、この法典ヶ原から一里余り先の寺で、いつも彼の亡ち父が、

（おれの亡なき後、独りで困った時は、この巾着の中にある砂金を
少しづつ費つかえ）

といわれていたのを思い出し、常に、肌身に持っていたその巾着を預けて、寺の庫裡くりから借りて来たのだ——と、伊織はしたり

顔に答える。

「では遺物かたみではないか」

と武蔵がいうと、

「そうだ、古い家は焼いちやつたから、お父とつさんの遺物は、あれと、この刀しかない」

と、腰の野差刀のざしを撫でる。

その野差刀も、武蔵は一見したことがあるが、生れからの野差刀ではない。無銘とはいえ、名刀の部に入つてよい品である。

思うに、この子の亡父ちちが遺物として、肌身に持たせておいた巾着にも、少しの砂金ばかりでなく、何か由緒ある物ではなからうか——それを食物の値あたに、巾着ぐるみ預けて来たのは、やはり子

どもらしいが——また、可憐いじらしい、と武蔵は思った。

「親の遺物など、滅多に、人に渡すものではない。いずれわしが、徳願寺へ行って、貰い返してやるが、以後は、手離すではないぞ」

「はい」

「ゆうべは、その寺に、泊めてもらったのか」

「和尚さんが、夜が明けてから帰れといたしましたから」

「朝飯は」

「おらもまだ。先生も、まだだろう」

「ウム。薪まきはあるか」

「薪なら、くれてやる程あるよ。——この縁の下は、みんな薪だ

よ」

むしろ
蓆を巻いて、床下へ首を突つ込むと、日頃、開墾するうちに心がけて運んだ木の根瘤ねこぶだの、竹の根だのが、山をなすほど蓄たくわえてある。

こんな幼い者にでも経済の観念がある。誰がそれを教えたか。まちがえばすぐ飢え死ぬ未開の自然が生活の師であった。

粟あわめし飯をたべ終ると、伊織は、武蔵の前へ一冊の書物を持って、来て、

「先生、水が退ひかないうちは、どうせ仕事にも出られないから、書を教ほんえてください」

と、畏かしこまつていった。

外は、その日も終日、吹き歇やまない暴風雨あらしであった。

三

見ると、論語の一冊である。これもお寺で貰ったのだという。

「学問をしたいのか」

「ええ」

「今までに、少し書ほんを読んだことがあるか」

「すこし……」

「誰に教わった」

「お亡とっ父さんから」

「何を」

「小学」

「すきか」

「すきです」

伊織は、その体から知識を燃やしていった。

「よし、わしの知ってる限り教えてやろう。わしに及ばない所は、今に、学問のよい師を見出して就くがよい」

暴風雨の中に、ここの一軒だけは、素読の声と講義に一日暮れて、屋根はふき飛んでも、この師弟は、びくとも膝を立てそうもなかった。

翌日も雨。次の日も雨。

それがやむと、野は湖水になっていた。伊織は、むしろ欣んで、

「先生、今日も」

と、書ほんを出しかけると、

「書ほんはもういい」

「なぜ」

「あれをみろ」

武蔵は、濁流を指さして、

「河の中の魚になると、河が見えない。余り書物に囚とらわれて書物の虫になってしまうと、生きた文字も見えなくなり、社よのなか会にもかえって暗い人間になる。——だから今日は、暢のんき気に遊べ、おれも遊ぼう」

「だって、きようはまだ、外へも出られないぜ」

「——こうして」

と、武蔵はごろりと横になつて手枕をかいたながら、

「おまえも、寝ころべ」

「おらも、寝るのか」

「起きているとも、足を投げ出すとも、好きにして」

「そして何するんだい」

「話をしてやろう」

「欣うれしいなあ」

と、伊織は、腹這いになつて、魚の尾のように、足をばたばた

させ、

「何の話？」

「そうだな……」

武蔵は自分の少年時代を胸にうかべ、少年の好きそうな合戦の話をした。

多くは源平盛衰記などで聞き覚えた物語である。源氏の没落から平家の全盛になると、伊織は憂鬱だった。雪の日の常磐御前に、眼をしばたたき、鞍馬の遮那王牛若が、僧正ヶ谷で、夜ごと、天狗から剣法をうけて、京を脱出するところへくると、

「おら。義経は好きだ」

と、刎ね起きて、坐り直した。そして、

「先生、天狗ってほんとにいるの」

「いるかも知れぬ。……いやいるな、世の中には。——だが、牛

若に剣法を授けたというのは、天狗ではないな」

「じゃあ何？」

「源家の残党だ。彼らは、平家の社会よのなかに、公然とは歩けなかつたから、皆、山や野にかくれて、時節を待つていたものだ」

「おらの、祖父おじいみたいに？」

「そうそう、おまえの祖父そふは、生涯、時を得ず終つてしまつたが、源家の残党は、義経というものを育てて、時を得たのだ」

「おらだつて——先生、祖父のかわりに、今、時を得たんだろ。
……ねえそうだろう」

「うむ、うむ！」

武蔵は、彼のその言葉が気に入つたとみえ、いきなり伊織の首

を寝たまま抱きよせて、脚と両手で手玉に取つて天井へ差し上げた。

「偉くなれ。こら」

伊織は、あかご嬰兒が欣ぶように、くすくす撥ツたがつて、きやツきやツといながら、

「あぶないよ、あぶないよ先生。先生も僧正ヶ谷の天狗みたいだなあ。——やあい天狗天狗、天狗」

と上から手をのぼし、武蔵の鼻をつま抓んで戯れ合つた。

四

五日たつても十日たつても、雨はやまなかつた。雨がやんだと
思うと、野は洪水に漲みなぎつて、容易に濁流が退ひかないのである。

自然の下には、武蔵も、じつと沈ちんぎん吟ぎんしているしかない。

「先生、もう行けるぜ」

伊織は太陽の下へ出て、今朝から呶鳴ななめっている。

二十日ぶりで、二人は道具を担かついで、耕地へ出て行つた。

そしてそこに立つと、

「あつ……？」

と、ふたりとも茫然としてしまった。

二人が孜しし々として開拓しかけた面積などは、なんの跡形も残して
いない。大きな石ころと、一面の砂利であつた。前にはなかつ

た河が幾筋もできて小さな人力を啜わらうが如く、
 石や小石を弄もてあそんでいた。奔々ほんほんと、その大

——阿呆。狂人きちがい。

土民たちが嘲わらった声も思い出される。思い知ったのである。

手の下しようもなく、黙然と立っている武蔵を見上げて、伊織
 は、

「先生、ここはだめだ。こんな所は捨てて、もつと他ほかのよい土地
 を探そう」

と、策を述べる。

武蔵はそれを容れない。

「いやこの水を、他ほかへ引けば、ここは立派な畑になる。初めから

地理を按じて、ここと決めてかかったからには——」

「でもまた、大雨が降ったら」

「こんどは、それが来ないように、この石で、あの丘から堤をつなぐ」

「たいへんだなあ」

「元よりここは道場だ。ここに麦の穂を見ぬうちは、尺地も退かぬぞ」

水を一方に導き、堰せきを築き、石ころを退のけて、幾十日の後には、やっとそこに、十坪の畑が出来かかった。

けれど、一雨降ると、一夜のうちに、また元の河原になってしまった。

「だめだよ先生。むだ骨ばかり折るのが、何も、戦の上手でもないだろ」

武蔵は、伊織にまでいわれた。

でも、耕地を変えて、ほかへ移る考えは、武蔵は持たなかった。彼はまた、雨後の濁流と闘って、前と同じ工事をつづけた。

冬に入ると、屢 《しばしば》、大雪が降った。雪が融けると、また濁流に荒らされてしまう。年を越えて、翌年の一月、二月になつても、二人の汗と鍬くわから一畝せの畑も生れなかった。

食物がなくなると、伊織は、徳願寺へもらいに行つた。寺の者もよくいわないとみえて、戻つて来ると、伊織の顔つきに、憂いが見えた。

そればかりでなく、この二、三日は武蔵も根負けこんましたか、鋤を
持たないのである。防いでも防いでも濁流になる耕地に立って、
終日黙然と何か考えこんでいた。

「そうだ！ ……」

或る時、何か大きな発見をしたように、武蔵は伊織へいうとも
なく、

「きょうまでおれは、土や水へ対して、烏澹おこがましくも、政治を
する気で、自分の経策に依つて、水をうごかし、土を拓ひらこうとし
ていた」

と、呻うめきだした。

「——間違いだつた！ 水には水の性格がある。土には土の本則

がある。——その物質と性格に、素直に従いて、おれは水の従僕、土の保護者であればいいのだ。——」

彼は今までの開墾法をやり直した。自然を征服する態度を改めて、自然の従僕となつて働いた。

次の雪融ゆきどけにも、大きな濁流が押しよせたが、彼の耕地は、被害から残された。

「これは政治にも」

と、彼は悟つた。

同時に、旅手帳へも、

——世々の道に反そむかざる事。

と、自戒の一句を覚え書きしておいた。

どひらい
土匪来

一

長岡佐渡さどは、度々この寺へ姿を見せる大檀那おおだんなの一人だった。彼は、名将の聞えの高い三齋公さんさいこう——豊前小倉ぶぜんこくらの城主細川忠興ただおきの家職であるから、寺へ来る日は、もちろん縁者の命日とか、公務の小閑に、杖を曳いて来るのである。

江戸から七、八里あるので、一泊になる場合もある。従者はいつも侍三名に小者一名ぐらい召連れ、身分からすれば極めて質素

であつた。

「寺僧」

「はい」

「あまりかもうてくれるな。心づくしは欣よろこばしいが、寺で贅ぜい沢をしようとは思わぬでの」

「恐れいります」

「それよりは、わがままに、くつろがせて貰もらいたい」

「どうぞお気ままに」

「無礼を許されよ」

佐渡は、横になつて、白い鬢びんづらへ手枕をかつた。

江戸の藩邸は、彼の体を寸暇もなく忙殺させる。彼は、寺詣り

を口実に、ここへ遁のがれてくるのかもしれない。野風呂を浴びて、
田舎醸いなかつくりの一酌しやくをかたむけた後、手枕てまくらのうつらうつらに、蛙かわずの
声を聞いていると、何もかも現世げんぜのものでなくなるように忘れて
しまう。

こよいも佐渡は此寺ここへ泊とつて、遠とお蛙かわずの音を聞いていた。

寺僧は、そつと、銚子ちようしや膳ぜんを下げてゆく。従者は、壁際に坐まつて明りの瞬またたきに、手枕てまくらの主人が、風邪をひきはすまいかと、案あんじ顔にながめていた。

「ああよい心地。このまま涅槃ねはんに入るかのようじゃ」
手枕てまくらをかえた機しおに、侍が、

「おかぜを召すといけません。夜風は露をふくんでおりますから」

注意すると、佐渡は、

「捨てておけ。戦場で鍛えた体、夜露でくさめをするような気遣いはない。この暗い風の中には、菜の花のにおいが芬々とする——其方たちにも香うか」

「とんと、分りませぬ」

「鼻のきかぬ男ばかりじやの。……はははははは」

彼の笑い声が大きいせいでもあるまいが、その時、四辺あたりの蛙の
声がハタと止んだ。

——と思ううち、

「こらっ、童わっぱツ！ そんなところへ立ってお客様のお居間をのぞいてはならん」

佐渡の哄こうしよう笑しょうよりも、遙かに大きい寺僧のがなり声が、書院の横縁で聞えた。

侍たちは、すぐ立って、

「何じゃ」

「何事じゃ？」

と見まわした。

その影を見ると、誰か、小さな登音がバタバタと庫裡くりの方へ逃げて行ったが、咎とがめた僧は、後に残って、頭を下げていた。

「お詫びいたしまする、何せい土民の親なし子、お見のがし下さいませ」

「覗のぞき見でもしておったのか」

「そうでござります。ここから一里ほど先の法典ヶ原に住んでいた馬子のせがれでございますが、祖父おじいが以前、侍であつたとかで、自分も大きくなるまでに、侍になるのだと口癖に申しております。——で、貴方がたのようなお武家様を見かけると、指を啜くわえて、覗き見をするので困りまする」

座敷の中に寝ころんでいた佐渡は、その話にふと起き直つて、

「そこの御房ごぼう」

「はい。……アアこれは長岡様で、お目ざめに」

「いやいや咎とがめ立てではない。——その童わっぱとやら、おもしろそうな奴。徒つれづれ然づれの話し相手には、ちようどよい。菓子でも遣とらせよう。これへ、呼んでおくれぬか」

二

伊織いおりは、庫裡くりへ来て、

「おばさん、粟あわがなくなつたから取りに来たよ。粟を入れておくれ」

と、一斗もはいる穀こくぶくろ袋の口を開けて、呶鳴っていた。

「なんじやこの餓鬼は。まるで貸した物でも取りに来るように」
大きな暗い台所から、寺の婆やは呶鳴りかえした。

いつしよに洗い物を手伝っていた納なっしよ所坊も、口をそろえて、
「お住持が、かあいそうじやから遣れと仰つしやるので、くれて

遣るのじやぞ。なんだ、大きな面つらして」

「おらの顔、大きいかい」

「物貰いは、あわれな声を出して来るものだ」

「おらは、物乞いじやない。和尚さんに、遺物かたみの巾きんちやくを着くを預け
であるんだもの。——あの中にやあ、おかねもはいつているんだ
ぞ」

「野中の一軒家の、馬子のおやじが、どれ程なおかねを餓鬼のこに遺
すものか」

「くれないのかい、粟を」

「だいいちおまえは阿呆だぞ」

「なぜさ」

「どこの馬の骨かわからない狂人^{きちがいろうじん} 牢人にこき使われて、あげくに、喰い物までおまえが漁^{あさ}つて歩くなどは」

「大きなお世話だい」

「田にも畑にもなりっこないあんな土地を掘^ほくり返して、村の衆は皆わらつてござるぞ」

「いいようだ」

「おまえも少し、狂人^{きちがい}にかぶれてきたな。あの牢人者はお伽^{とぎぞ}

草子^{うし}の黄金の塚でもほん気にして、野たれ死にするまで、掘りちらしているだろうが、おまえはまだ鼻たれンぼのくせに、今から自分の墓穴を掘るのは早いじゃないか」

「うるさいな、粟を出しておくれよ、はやく、粟をおくれよ」

「アワといわないで、アカといつてみる」

「アカ」

「んべ！……だ」

納所坊は、調子に乗ってからか擲揶いながら、眼の玉を剥むいて、ぬつと顔を突き出した。

ぐしゃつと、濡れ雑巾のようなものが、その顔へ貼りついた。

納所坊は、きやつと悲鳴をあげて青ざめた。彼の大好きな大きなイボがえる墓であつた。

「このお玉杓たまじやくし子め」

納所坊はおどり出して、伊織の首根ツこをつかまえた。そこへ奥に泊だんかっている檀家の長岡佐渡様がお召しになっている——とい

うべつな寺僧の迎えであつた。

「なにか、粗相でもあつたのか」

と、住持までが、案じ顔してそこへ来たが、いえいえただ佐渡様が徒然つれづれに呼んでこいと仰つしやるまでで——と聞いて、

「それならよいが」

と住持はほつとしたが、なお、心配は去らないとみえて、伊織の手を引っぱつて、自身、佐渡の前へ連れて来た。

書院の隣室には、もう夜の具ものが展べてある。老体の佐渡は、横になりたかつた所だが、子どもが好きとみえて、伊織が、ちよこなんと住職のそばに坐つたのを見ると、

「幾歳いくつじゃな」

と、訊ねた。

「十三。ことしから、十三になりました」

と伊織は、相手を心得ている。

「侍になりたいか」

と、訊かれると、伊織は、

「うん……」

うなず
と頷いた。

「では、わしの屋敷へ来い。水汲みから、ぞうりとり草履取を勤めあげたら、末は若党に取立ててやろう程に」

というと、伊織は、黙ってかぶりを振った。そんな筈はない、きまりが悪いのじやろう、明日は江戸へ連れて帰る——と重ねて

佐渡がいうと、伊織は、納所坊なっしよがしたように、アカンベーをし
て、

「殿様、お菓子をくれなければ嘘つきだぜ。はやくおくれよ、も
う帰るんだから」

住職は青くなって、眼から離れた彼の手を、ピシヤリと打った。

三

「叱るな」

と、佐渡は、住職の氣遣いを、かえつて窘たしなめて、

「侍は嘘をつかぬ。今、菓子を遣とらすであらう」

と、従者に、すぐいいつけた。

伊織は、それを貰うと、すぐ懐中ふとこへ入れてしまった。佐渡がそれを見て、

「なぜ、ここで喰べぬか」

と、訊ねると、

「先生が、待つてるから」

「ホ……先生とは？」

佐渡は、異な顔をした。

もう用はないといった容子ようすで、伊織は答えずに、その部屋から素迅すばしツこく飛出してしまった。長岡佐渡が笑いながら寝所へはいつてゆく姿へ、住職は、再三再四、低頭平身していたが、やがて、

追いかけるように、庫裡くらへ来て、

「小僧、どうしたか」

「今、粟を背負つて、帰つてゆきましたか」

と、そこにゐる者の答え。

耳を澄ますと、真つ暗な外の何処かを、頓狂な木の葉笛の音が流れてゆく――

びき、びー

びッびツき、びーの

びよ助、びゅー

伊織は、いい歌を知らないのが残念だった。馬子の唄うたう謡は、木の葉の音に乗らないのである。

お盆になると、踊りにうたうこの地方の歌垣から転訛てんかしたような謡うたも、木の葉笛には複雑すぎてだめだった。

結局、彼は、神楽囃子かぐらばやしの律調しりべを頭に描きながら、木の葉を唇くちに当て、しきりと妙な音を吹きたてて道の遠さを忘れて来たが、やがて法典ヶ原の近くまで来たかと思う頃、

「おやつ？」

と、唇の木の葉を、唾つばと一緒に吐き出して、同時にがさがさと傍らの藪やぶへ這いこんでしまった。

二筋の野川は、そこから一つになって、部落の方へ流れている。その土橋のうえに三、四人の大男が、顔を寄せて何かひそひそ声を交わしているのである。

伊織は、その人間たちを見たとき、

「——あつ、来た」

と、先おとしの秋の晩くれごろ頃の、或る事を思い出したのであつた。

子を持つこの辺の母親は、ふた言めにはすぐ、

(山神さまの輿こしへ入れて、山の衆へくれつちまうぞ)

と、子を叱る。

小さい頭に沁しみついたその怖さを——伊織も忘れていない。

ずっと昔は、その山神様の白木の輿こしが、ここから八里も十里も先の山の社やしろに、何年目かの順番が廻つて来ると、据えられたもので、土民は、報しらせをうけると、稼たぎ蓄めた五穀やら、大事な娘

までも、因果をふくめて化粧させ、わざわざ松たいまつ明行列を作つて、そこへ納めに行つたものだそうであるが、何時頃いつからか、山神様の正体は、やはり人間だと分つてから、土民のほうも狡ずるをきめこんで怠つてしまった。

ところが、戦国以来は、その山神様の徒党が、山の社やしろに白木の輿をおいて報らせても、貢物みつぎが来ないので、猪突ししつき槍だの、熊射ち弓だの、斧だの手槍だの、なるべく土民が見ただけでも縮み上がつてしまひそうな武器を携え、三年目とか二年目とか、物資の貯えられている状態を見ておいて、自身の方から、部落部落へ、出張して来るようになって来た。

この辺には、その兇きょう匪ひの群れが、先おとしの秋やつて来た。

——その時の惨たる光景で、おさなごころ幼心にも怖かった記憶が、今——土橋の上の人影を見ると共に、いなずまのように彼の頭に呼び起されたのであった。

四

——やがてのこと。

彼方からまた、一ひとむれ群の人間が、隊伍を作つて野を駈けて来た。

「おおい」

と、土橋の上の影が呼ぶ。

「おおい」

と、野の声が答える。

声は、幾つも、方々から聞えて来て、
夜霞よがすみの果てへ流れてゆく。

「……?」

伊織は、息づまるような眼をみはって、藪やぶの中から覗いていた。いつのまにか、土橋を中心として、約四、五十名の土匪どひが真つ黒にかたまっているのだった。そして、一ひと群むれ一群が、何やら首を寄せて凝議ぎようぎしていたが、或る手筈が整ったものとみえ、

「それ——」

と、首領らしい男が手をさし挙げると、一群ぐんのいなごのように、そのすべてが、村の方へ向って、一散に駈けて行った。

「たいへんだ！」

と、伊織は、藪の中から、首を伸ばして、怖ろしい光景を目に描いた。

平和な夜よがすみ霞につつまれて、眠りに落ちていた村には、忽ち、消魂けしたましい夜よどり鶏の啼き声わめが起り、牛が鳴き、馬がいなき、老としよ人や子どもの泣き喚わめくのが、手にとるように聞えだした。

「そうだ……徳願寺に泊っているお侍さまへ」

伊織は、藪を飛びだした。

そしてこの大變を、そこへ報しらせようと思つて、健氣けなげにも、後へ戻りかけると、もう人影は見えないとばかり思つていた土橋の陰から、

「やいつ」

人間の声がした。

伊織は、つんのめるように、逃げだしたが、大人の足には及ばなかつた。そこに張番していた二人の土匪どひのために、襟がみをつかまえられてしまった。

「どこへ行く」

「なんだ、てめえは」

——声をあげて、わアと泣いてしまえばいいのである。だが、伊織には、泣けなかつた。自分の襟がみを吊るしあげている逞しい腕を、生半可なまはんか、引掻ひっかきなどしたので、土匪どひは、この小さい者にも疑いぶかい眼を光らした。

「こいつ、おれたちを見かけて、何処かへ、知らせに行くつもりか何かだぞ」

「そこらの田に叩ツこんでしまえ」

「いや、こうして置こう」

土橋の下へ、彼は蹴落された。すぐ後から飛び下りて来た土匪どひは、彼を、橋杭はしぐいに縛りくくつけてしまった。

「よし」

と、見捨てて、二人は上へ跳ね上がって行つた。

ごうん、ごうん……と寺の鐘が鳴りだした。もう寺でも、土匪の襲来は知つたものとみえる。

村の方に、火の手が揚がった。土橋の下を流れる水が、血のよ

うに赤く染まつてみえる。嬰兒あかごの泣き声が走る。女の悲鳴がながれてくる。

そのうちに、伊織の頭の上を、ぐわらぐわらと、車の轍わだちが通つた。四、五名の土匪は、牛車や、馬の背に、盗んだ財物を満載して、そこを駈け通るのだった。

「畜生ツ」

「なにを」

「おらの嬢かかを返せ」

「生命いのちしらずめ」

何か——土橋の上で始まつた。土民と土匪との格闘だった。凄まじい呻うめき声や蹠音が、そこでみだれ合う。

——と思うまに、伊織の前へ、朱あけにまみれた死骸が、一つまた一つ——と続けさまに蹴落されて来て、彼の顔へ、しぶきを浴びせかけた。

五

死骸は流れて行き、まだ息のある者は、水草につかまって、岸へ這い上がった。

橋はしぐい杭いに縛られて、眼まのあたりにそれを見ていた伊織は、

「おらの縄を解いてくれ。おらの縄を解けば、敵かたきを取つてやるぞ」とさげんだ。

斬られた土民は、岸へは這い上がっても、水草の中に俯つ伏したまままで動かなかつた。

「おいっ、おらの縄を解かないか。村の者を助けるんだ。おらの縄を解け」

伊織の小さい魂は、その小さい身を忘れて大喝した。意気地ない土民を叱咤して、命令するように入った。

昏倒した者は、まだそれでも気がつかなくつた。そこで伊織は、もう一度、自分の力で自分の縄目を切ろうとするらしく、懸命にもがいてみたが、所詮しよせん、切れる筈はなかつた。

「おいッ」

彼は、体を摺すらずして、伸びるだけ足を伸ばし、昏倒している負て

傷おいの肩を蹴った。

泥と血にまみれた顔を上げて——土民は、伊織の顔を、にぶい眼で見た。

「はやく、この縄を解くんだよ、解くんだよ」

土民は、這つて来た。そして伊織の縄を解くと、そのまま、こときれてしまった。

「見てろ」

伊織は、土橋の上を見て、唇を噛んだ。土匪どひたちは、追つて来た百姓を皆、そこで殺害してしまつたが、財物を乗せた牛車わだちの轍わだちが、土橋の腐つた所へめり込んでしまつたので、それを引き出すのに騒いでいた。

伊織は、水に沿って、河^{かわがけ}崖の陰を夢中で走った。そして、浅瀬を渡って向う側へ這いあがった。

彼は、一目散に、野を駈けた。田も畑も家もない法典ヶ原を半里も駈けた。

武蔵と二人で住んでいる丘の小屋へやがて近づいた。見ると小屋の側に誰か立って空をながめている——武蔵であった。

「先生——っ」

「おお、伊織」

「すぐ行ってください」

「どこへ」

「村へ」

「あの火の手は？」

「山の者が襲よせて来たんですよ。先おとしも襲きた奴が」

「山の者？ 山賊か」

「四、五十人も」

「あの鐘の音ねはそれを告げておるのか」

「はやく行って、たくさんな人を、助けてやって下さい」

「よしっ」

武蔵は、一度小屋の中へ引つ返したが、すぐ出て来た。足拵あしごしらえをして来たのである。

「先生、おらの後に、従ついといでよ。おらが案内するから」

武蔵は、首を振って、

「おまえは、小屋で待っておれ」

「え、どうして」

「あぶない」

「あぶなかないよ」

「足手纏まといじや」

「だって、村へゆく近道を、先生は知るまい」

「あの火が、よい道案内。よいか——小屋の中でおとなしく待っているのだぞ」

「はい」

仕方なしに、伊織はうなずいたが、今までの、正義に昂たかぶった小さい魂は、飛躍のやりばを失って、急にぼつねんと、淋しい顔

をしてしまった。

村は、まだ焼けていた。

その炎に、赤く見える野面のづらを、鹿のように駈けてゆく影が、武蔵であつた。

征夷

一

親にえや良人は殺され、子は見失つて、数珠じゆずつなぎに捕われてゆく贄にえの女たちは、オイオイと手放しに泣きながら、野を追い立てら

れて行つた。

「やかましいっ」

「歩かねえか」

土匪^{どひ}たちは、鞭^{むち}を振つて、彼女^{なぐ}らを撲りつけた。

ひい伊つと、一人が仆れる。繋が^{つな}っている前の女、後ろの女も仆れる。

土匪^{どひ}は、綱をつかんで、引起しながら、

「こいつら、諦^{あきら}めのわるいやつらだ、稗^{ひえがゆ}粥^{がゆ}をすすつて、痩せ土を耕しながら、骨と皮ばかりになっているより、おれ達と暮してみろ、世の中が面白くて堪らなくなるから」

「面倒だ、その綱を、馬に繋いでしょツ引かせろ」

馬の背には、どの馬にも掠^{かす}めて来た財物や穀類が山と積んである。その一頭へ数珠^{じゆず}つなぎの綱の端を結びつけ、そして、馬の尻をぴしぴし打った。

女たちは悲鳴をあげながら、駈ける馬と一緒に駈け出した。仆れる者は黒髪を地に引き摺って、

「腕が抜けるツ、腕が抜ける——」
とさげんだ。

わははは、あははは、大笑いしながら、土匪たちは、その後から一団になって尾^ついて行つた。

「やいやい、こんだあ少し早すぎら。加減しろやい」

後ろからいううちに、馬も女の群れも止まった。——だが馬の

尻を打っていた土匪の仲間は、うんともすんとも答えなかった。

「あれ、こんだあ止めて待つてやがる。ドジめ」

げらげら笑う声がすぐそれへ近づいて行つた。嗅きゆう覚かくのつよ

い彼らは、すぐぷんと血のにおいを感じた。——オヤ？
と眼もいつせいに竦すくみ合つた。

「だ、だれだツ」

「……………」

「だれだツ、そこにいるなあ」

「……………」

彼らが認めた一個の人影は、のそのそと草を踏んで向つて来た。
手に提げている白刃しらばからは、霧のように血のにおいが立っていた。

「……や、や」

前の者から踵かかとを退ひいて、ず、ず、ず、と後ろへ押し合つた。

武蔵は、その間に、賊の人数を目つもりで、ざつと十二、三人と読んで、その中にも、手強てごわそうな男へ眼をつけていた。

土匪どひたちは山刀を抜きつれた。また、斧おのを持った男は横へ飛んで来た。猪槍ししやりの穂も、それと共に、斜めから武蔵の脾腹ひばらを窺うかがうように低くつめ寄つて来る。

「いのち知らずめ」

と、ひとりが喚わめく。

「——一体うぬあ、どこから来た風来人だ。よくも、仲間のを」

いつている間に、

「……ぐわッ」

おの斧を持っていた右側の男が、舌でも嚙んだような声を出して、武蔵の前をよろよると泳ぎ抜けた。

「知らぬかッ」

と、血けむる中で、武蔵は刀の切先を引きざまにいった。

「おれは、良民の土を護る、ちんじゆ鎮守の神のおつかいだ！」

「ふぎけるな」

かす掠め去った猪突ししつき槍を捨てておいて、武蔵は、山刀の群れの中へ一刀をかざして、駈け入った。

土匪が、自分らの力を過大に盲信し、ただ一名だという点に、敵を侮あなどりきつていゝうちは、武蔵も苦戦であつた。

けれど眼まのあたりに、その一名のため、仲間の多数が駈け散らされ、ばたばたと斃たおれ出した事実を見ると、土匪どもは、

(こんなことが一体あることか)

と、錯さくらん乱し始め、

(おれが)

と、氣負つて進む者から、次々に、醜しかばねい死屍を、曝さらして行つた。

駆け入って、一当て当ってみると、武蔵にはおよそ当面の敵の力量がもうわかつている。

数ではなく、一団の力である。多数を制する剣法は、彼の得意とはしないまでも、彼にとつては、生死を賭した中のみ学得る大きな興味ではあつた。個々の試合には体得し得ないものを、多数の敵から教えられるからであつた。

で——彼はこの場合、最初、ここを離れた彼方あちらの場所で、数珠じゆずつなぎの女たちを馬に引かせていた一人の土匪を血まつりに斬り捨てた時から、敵の山刀を奪つて用い、まだ、自分の帯びている大小は、使つていなかつた。

こんな鼠賊そぞくを斬るのに、自己のたましいともする刀を穢けがすまで

もない——というような高踏的な考えからではなく、もつと實際的な、武器の愛護を念とするからであつた。

相手の得物えものは雑多である。それと闘えば忽ち刃こぼれを生じる、刀の折れる懼れおそも勿論ある。また最後の絶対的な場合に、身に帯びる物がないために、不覚をとるような例はいくらもある。

だから彼は、容易に自分の物は抜かない。これはいつの場合でもである。敵の武器を奪つて敵を斬る。その神速の技に、彼は知らず知らず練磨も積んでいた。

「うぬ、覚えてろ」

土匪は、逃げはじめた。

約十名余りが五、六人になって、元来た方へ走って行つた。

村には、まだ沢山な仲間が残つて、狼藉ろうぜきの限りを尽している最中であろう。思うに、そこへ逃げ戻つて、他の猛獣どもを糾きゆう合ごうし、捲土重来けんどちようらいして眼にももの見せてやろうというつもりとみえる。

武蔵は一応、そこで自分も一息入れた。

そして先ず後へもどつて、数珠つなぎにされて、野に仆れている女たちの縛いましめを斬りほどき、まだ起てる気力のある者に、起てない者を介抱させた。

彼女らは、もう礼をいう口さえ失っている。武蔵のすがたを仰いで、ただ唾おしのように、こもこも手をつかえて泣くばかりだった。

「もう安心するがよい」

武蔵はまずいって——

「村には、まだおまえたちの親や子や良人が残っているのだろう」

「ええ」

と、彼女らはうなず頷く。

「それも救わなければなるまい。おまえ達だけが助かって、老いた者や、子たちが助からなかつたら、おまえ達はやはり不幸だろう」

「はい」

「おまえ達は、自分を護り、人を救い合う力を持っている筈なのだ。その力をお前たちは、結びあうことも、出すことも知らないで、賊にいたされるのだ。わしが手伝ってやるから、おまえ達

も劍を持って」

と彼は、土匪どひがそこらへ落して行つた武器を拾い蒐あつめ、彼女らの手にめいめい持たせて、

「おまえ達は、わしに尾ついて来ればよい。わしがいう通りになつておれ、炎と賊の中から、親や子や良人を救いに行くのだ。皆の上には、鎮守ちんじゆの神様が加勢かぜについている。怖れることはない」と、いいきかせ、土橋を渡つて、村の方へ近づいて行つた。

三

村は焼けている。しかし、民家が散在しているため、火の手は

一部らしい。

道は火光に赤く映えて、影法師が地にうつる程だった。武蔵が、彼女らを率いて、村へ近づいてゆくと、

「おう」

「われか」

「いたのか」

と、そこらの物陰に逃げ潜んでいた土民たちが、次々に集まり寄って、たちまち、何十名かの一団になった。

彼女らは、わが親、わが兄弟、わが子などの姿に出会うと、抱き合って号泣した。

そして、武蔵を指さし、

「あのお方に」

と、助けられた仔細を、なま誂りのひどい言葉に——しかし心からの歡びを現わして告げるのだった。

土民たちは、武蔵を見て、初めは皆、異様な眼をした。なぜならば、法典ヶ原の狂きちがい人牢人よと、常々、自分たちが、くちぎたな口汚く嘲笑あざわらっていた人だからである。

武蔵は、その男どもへも、先ほど、彼女らに告げた時と同じ言葉をもつて教え、

「皆、得物を把とれ。——そこらに有り合う、棒切れでも、竹でも」と、命じた。

ひとりもそむ反く者はなかつた。

「村を荒している賊は、すべてで何十人ぐらいいるか」

「五十名ばかりで」

と、誰か答える。

「村の戸数は」

と訊くと、七十戸ほどはあるという。まだ大家族的な遺風のある土民であるから、一戸当り少なくとも十名以上の家族はありとみていい。すると約七、八百名の土民が住んでいるわけで、そのうち幼児と老人と病人をのぞいても、男女五百名以上の壮者はいるであろう。それが五、六十名の土匪のために、年ごとの収穫を掠奪され、若い女や家畜など、蹂躪じゅうりんし尽されても、

「しかたがない」

と、諦めなければならぬ理由が、武蔵には発見できない。^{あきら}

それは、為政者の不備にもあるが、また彼ら自身に、自治と武力のないせいもある。武力のない者に限つて、ただ漫然と武力に絶対な恐怖をもつが、武力の性質を知れば、武力はそう恐いものではなく、むしろ平和のために在るものである。

この村に、平和の武力を持たせなければ、この惨害は根を絶つまい。武蔵は、今夜の土匪を討つことが目標ではなく、それがすぐ意図されていた。

「法典ヶ原の牢人様。さつき逃げ込んで行つた賊が、大勢ほかの仲間を呼んで、今こつちへやつて来るぞ」

駈けて来た一人の土民が、武蔵と村の者へ、手を振つて、急を

告げた。

得物は持つても、山の暴れ者は怖ろしいと先入主になっている土民たちは、すぐ浮き腰になって、動揺しはじめた。

「そうだろう」

武蔵は、まず彼らに安心を与え——そして命令した。

「道の両側わきへかくれる」

土民たちは、われがちに木の陰や畑にかくれた。

武蔵は一人残って、

「やがて来る賊は、わし一人で迎えて闘う。そしてわしは、一度逃げる」

彼らのかくれた左右を見まわして独り言のようにいう。

「——だが、お前たちはまだ出て来なくともよい。そのうちに、わしを追いかけて来た賊が、反対にまたここへ、散ちりぢり々に逃げて来るにちがいない。その時は、お前たちがわつと声をあげ、不意に横から衝け、足を払え、真つ向を撲りなぐつけろ。——そしてまた潜ひそんでは出、隠れては出、一匹も余さず打ちのめすのだ」

いつている間に、もう彼方から一ひとむれ群の土匪が、魔軍のように殺到した。

四

彼らのいでたちや隊伍ぶりは、まるで原始時代の軍隊みたいだ

った。彼らの眼には、徳川の世もない、豊臣の世もない、山は彼らの天地であり、里は彼らのあらゆる飢えを一時に満たす所だつた。

「あ、待て」

先頭の一人が、足を止めて、後に続くなかまの者を制した。

二十名も来たろうか、稀れな^{おおまさかり}大 鉞^さを提げたのや、錆びた長^な柄^{がえ}をかかえ込んだのが、赤い火光をうしろに背負い、黒々と立ち淀^{よど}んで、

「いたか」

「あれがそうじゃねえか」

すると、中のひとりが、

「オオ、あれだ」

と、武蔵の影を指さした。

約十間ほど隔てて、武蔵は、道を塞いで突つ立っていた。

これほどな殺到に、いっこう無感覺な様子で、彼が立っているのを見ると、この猛獣の群れも、

(おや、こいつ?)

と一応、自分の威勢を疑つてみたり、彼の態度に不審を起して、足をとめずにいられなかった。

——が、それは僅かな間だった。すぐずかずかと二、三名が進み出で、

「うぬか」

と、いった。

爛らんとした眼で、武蔵は近づいた者を見つめた。彼の眼に縛り寄せられたように、賊も武蔵を睨ねめすえたまま、

「うぬか、おれたちの邪魔に来た野郎というのは」

武蔵が、一言、

「——そうだッ！」

いった時は、ぶら下げていた彼の剣が、賊を真っ向に割りつけていた時であった。

わっ——と動揺どよめいた後は、もう誰彼の見わけもつかなかった。小さな旋風つむじの中に、かたまり合って吹かれてゆく羽蟻はありの群れみだいに乱闘が始まったのだ。

しかし、片方は水田だし、片方は並木の堤どてになつてゐる道なので、地の利は、土匪どもに不利で、武蔵には絶好だった。それに土匪は、兇猛ではあるが、武器の統一も、訓練もないので——これをいちじょうじぎが一乗寺下り松まつの決戦の時から思うと——武蔵はまだ生死の境にふみこんでゐる心地はしなかつた。

それと彼は、機を見て、退ひくことを考えていたせいもあるう。吉岡門下の大勢と闘つた時は、一步も「退ひく」などという考えはもたなかつたが、今はその反対に、彼らと互角に闘おうなどとは毛頭思つていないのである。ただ彼は兵法の「策」をもつて彼らを馭ぎよそうとしてゐるのである。

「あつ、野郎」

「逃げやがったッ」

「逃がすな」

土匪たちは、駈けてゆく武蔵を追いつめ追いつめて——やがて野の一端にまで誘われて来た。

地の利は、さっきの狭い場所よりも、ここの何物もない広い野原の方が、武蔵には当然不利に見えたが、武蔵は、彼方あっちへ逃げ、此方こっちへ駈け、彼らの密集を存分に分散させてから、突然、攻勢に変った。

「かつッ」

一颯さつ！

また一颯！

血しぶきから血しぶきへ、武蔵の影は跳び移とつてゆく。

麻幹おがらを斬るといふ言葉はあながち誇張ではない。斬られるものが、狼狽のあまり半ば喪そうしん心してしまい、斬る者は手に入つて、斬るごとに無我心業の境になつてゆくのである。土匪どもは、物々しいでたちほどもなく、わつと、元の道へ逃げ出した。

五

「——来たつ」

「来たぞ」

道を挟んで、物陰にかくれていた土民たちは、そこへ逃げて来

る賊の跫音を聞くと、

「わッ」

と、いちどに蜂起ほうきして、

「こなくそ」

「けだものめが」

竹槍、棒、雑多な得物を揮ふるいながら、押しつつんでは撲り殺した。

そしてまたすぐ、

「かくれろ」

と、身を伏せ、やがて散々ちりぢりになつて来る賊を見ると、再び、わつと包んで、

「野郎」

「野郎」

蝗いなごを退治するような衆の力で、賊の個々を、一人一人打ちのめしてしまった。

「こいつら、口ほどもねえがよ」

土民たちは、遽にわかに、氣負い出した。そこらに数えられる賊の死骸を見て、今までは観念的に、ないと思っていた力が、自分たちにもあると新しく発見したのだった。

「また、来たぞ」

「ひとりだ」

「やってしまえ」

土民たちは、犇^{ひし}めいた。

駈けて来たのは、武蔵だった。

「おう、違う違う。法典ヶ原の御牢人だ」

彼らは、将を迎える従卒のように、道の両側へ身を交わして、武蔵の朱^{あけ}にまみれた姿と、手の血刀を見まもった。

血刀の刃は鋸^{のこぎり}のように刃こぼれしていた。武蔵はそれを捨てて、落ちている賊の槍を拾った。

「賊の死骸が持っている刀や槍を、おまえたちも拾って持て」
彼がいうと、土民の若者たちは、われがちに武器を拾った。

「さ、これからだ。おまえ達は力を協^{あわ}せて、自分の村から賊を追い払え。自分の家と家族を奪^とり戻しに行け」

そう励ましながら、武蔵は先頭に駈け出した。

もう怯ひるんでいる土民は一人もなかった。

女や老人や子供までが、得物を拾って、武蔵の後から走って行った。

村へはいると、昔ながらの大きな農家が、今、熾さかんに燃えていた。土民の影も、武蔵の姿も、木も道も、真つ赤に見えた。

家を焼いた火が竹林へ燃えついたとみえ、青竹の爆裂する音が、パンパンと、炎の中で凄まじくはねている。

また、何処あかこやらで、嬰兒のさけび声うながする。火を見て狂う牛小屋の牛の唸りも物凄い。——しかし、降りしきる火の粉の中には、一人も賊の影が見えなかった。

武蔵はふと、

「どこだ、酒のにおいがする所は？」

と、土民にたずねた。

土民たちは、煙にばかり晦くらんでいたので、酒のにおいを感じなかつたが、そういわれて、

「酒甕さかがめに酒をたんと貯めてあるのは、村長おさの家しかねえが」

と、いい合つた。

賊は、そこを屯たむろにしていると武蔵は教え、一同へ、策を授け、

「わしに続け」

と、また駈けた。

その頃、彼方あっちこっち此方から戻つてきた村の者は、もう百名を越えて

いた。床下や、藪やぶの中に逃げこんでいた者も、次第に出て来て、彼らの団結は、強大になるばかりだった。

「村長おさの家はあれだ」

土民たちは、遠くから指さした。形ばかりの土塀に囲まれ、村では大きな家だった。近づいて行くと、そこらに酒の泉でも流れているように、酒の香が鼻を打ってくる。

六

土民たちが、附近の物陰へ隠れ込まないうちに、武蔵は、土塀をこえて、ただ一人、土匪の本拠ほんきよとしてゐる農家の中へはいっ

て行つた。

土匪の首領と、主なる者は、広い土間の中に屯して、酒壘を開け、若い女をとらえて、酔いつぶれていた。

「あわてるな」

土匪の首領は、なにか怒っていた。

「多寡がひとりの邪魔者が出たからつて、おれの手を煩わすまでのことはあるめえ、てめえ達の手で片づけて来い」

そんな意味らしい言葉だった。そして今ここへ急を告げに来た手下を、頭から叱りとばしているのだった。

——その時、首領は、異様な声をすぐ外に聞いた。炙った鶏の肉を裂き、酒を仰飲っていた周りの賊も、

「やつ、なんだ？」

一斉に突つ立ち、また無意識のうちに、得物をつかんだ。

その瞬間、彼らの前面は、心に何のまとまりもない虚うつろになっていた。そして不気味な絶叫の聞えた土間の入口にばかり気を奪とられていた。

武蔵はその時、疾とくに家の横手へ走っていた。そして母屋の窓口を見つけると、槍の柄えを足懸りとし、家の内へ飛び込んで、土匪の首領の後ろへ立った。

「おのれかつ、賊の首領かしらは」

声に振向いたとたん、彼の胸いたは、武蔵の突き出した槍に縫とおい貫とおされていた。

凜^{どうもう}猛なその男は、

「うわっ」

と、血にまみれながら、その槍をつかんで起ちかけたが、武蔵が軽く手を離したので、胸に槍を突き立てたまま土間へ転げ落ちた。

もう彼の手には、次にかかつて来た賊の手から引つ奪^たくつた刀があつた。それで一人を浴びせ、一人を突くと、蜂の子の出るように、土匪はわれがちに土間の外へ跳び出した。

その群れへ、武蔵は、刀を投げつけて、すぐその手へまた、死骸の胸いたから槍を抜いて持った。

「うごくくな」

鉄壁でも——という勢いで彼は槍を横にしたまま外へ駈け出した。竿で水面を打ったように、土匪の群れは、さつと分れたが、もう槍の自由な広さである。武蔵は櫂の黒い柄が撓うほど、それを振っていた、また突いてはねとばした、また上から撲りつけた。敵かなわぬと思つた土匪は、土塀の門へ向つて逃げ出したが、そこは得物を持った村の者が犇ひしめいたので、塀をこえて、外へ転び落ちた。

多くは、そこで皆、村の者に打ち殺された。おそらく逃げた者も、片輪にならなかつた者は少なかつたであらう。村の者は、老いも若きも、女も、生れて初めての声を出して、しばらくは凱歌に狂い、少し経つと、わが子や、わが妻や、父母たちを見つけ合

つて、欣^{うれ}し泣きに抱き合っていた。

すると誰かが、

「後の仕返しが怖い」

といった。土民たちは、またそれに動揺^{どよ}めきだしたが、

「もう、この村には来ぬ」

と、武蔵が諭^{さと}したので、やっと落ち着いた顔いろを取り戻した。

「——だがお前たちは、過信するな。お前たちの本分は、武器ではない鍬^{くわ}なのだ。穿^はきちがえて、生なかな武力に誇ると、土匪より恐ろしい天罰が下るぞ」

「見て来たか」

徳願寺に泊りあわせていた長岡佐渡は、寝ずに待っていた。

村の火は、原や沼の彼方かなたに、すぐ間近く見えていたが、もう火の手は鎮しずまっていた。

ふたりの家臣は、

「はっ、見届けて参りました」

と、口を揃えていった。

「賊は、逃げたか。村の者の被害は、どんなふうだ」

「われわれが、駈いけつける違とまなく、土民たちが、自分の手で、賊の半ばを打ち殺し、後は追いちりましたようにござります」

「はてな？」

佐渡は、のみこめない顔つきである。もしそうだとすれば、佐渡は、自分の主人細川家の領土の民治についても、だいぶ考えさせられることがある。

とにかく今夜はもう遅い。

そう考えて、佐渡は、臥床ふしどへ入ってしまったが、翌朝よくあさは江戸

へ帰る身なので、

「ちと、廻りになるが、ゆうべの村を通つて参ろう」と、駒をそこへ向けた。

徳願寺の寺僧が一名、案内に付いて来た。

村へかかると、佐渡は、二人の従者を顧みて、

「そち達は昨夜、何を見届けて来たのか。今、道ばたで見かけた賊の死骸は、百姓が斬つたものとは見えんが」

と、不審を抱いた。

村の者は、寝ずに、焼けた家やそんな死骸を片づけていたが、佐渡の馬上姿を見ると、みな家の中へ逃げこんだ。

「あ、これ。何かわしを思い違いしておるぞ。誰かすこし話の分りそうな土民を一名つれて来い」

徳願寺の僧が、どこからか一人連れて来た。佐渡はそれで初めて昨夜の真相を知ることが出来、

「そうだろう」

と、うなずいた。

「して、その牢人というのは、何という者か」

佐渡が、重ねて訊くと、その土民は首をかしげて、名は聞いたことがないという。佐渡は、ぜひ知りたいというので、寺僧はまた、聞き歩いて、帰って来た。

「宮本武蔵という者だそうでござります」

「なに、武蔵」

佐渡はすぐ、ゆうべの少年を思い起して、

「では、あの童わっぱが、先生と呼んでいたものなのだ」

「平常、あの子供を相手に、法典ヶ原の荒地を開墾し、百姓のまね事などをしておる、風の変った牢人にござります」

「見たいな、その男を」

佐渡は、つぶやいたが、——藩邸に待っている用事が思い起されて、

「いや、また参ろう」

と、駒をすすめた。

むらおき

村長の門まで来ると、ふと佐渡の目をひいた物がある。今朝建てたばかりのような、真新しい制札に、墨色まで水々と、こう書いてあるのだった。

村の者心得べき事

鍬も剣なり

剣も鍬なり

土にいて乱をわすれず

乱にいて土をわすれず

分に依つて一に帰るぶん

又常に

世々の道にたがわざる事

「ウウム……誰が書いたか、この高札は」

村長むらおさが出て来て、地に平伏しながら答えた。

「武蔵さまでござりまする」

「おまえ達に、分るのかこれが……」

「今朝、村の衆が、みな集まっている中で、このわけを、よく説いて下さいましたで、どうやら分りまする」

「——寺僧」

佐渡は振向いて、

「戻つてよろしい。ご苦労であつた。残念じゃが、心が急せく。また来るぞ、おさらば」
と、駒を早めて去つた。

卯月うづきの頃ころ

一

当主の細川三斎公は、豊前ぶぜん小倉の本地にいて、江戸の藩邸はんぢに
ゐることはなかつた。

江戸には、長子の忠利ただとしがいて、補佐の老臣と、たいがいなことは、裁断していた。

忠利は英邁えいまいだった。年齒もまだ、二十歳を幾つも越えてない若殿なので、新將軍秀忠を繞めぐつて、この新しい城府に移住していた天下の梟雄きょうゆうや豪傑的な大名のあいだに伍しても、父の細川三斎のこけんを落すようなことは決してなかった。むしろ、その新進気鋭なことと、次の時代に活眼をもっている点では、諸侯の中の新人として、戦国育ちの腕自慢ばかりを事としている荒胆あらぎもな老大名よりは、遙かに立ち勝まさつているところもある。

「——若殿は？」

と、長岡佐渡は探していた。

御書見の間にも見えない。馬場にもお姿はない。

藩邸の地域はずいぶん広かったが、まだ庭などは整っていない。一部には元からの林があり、一部は伐木して馬場となっている。若殿は、どちらにおいで遊ばすな

佐渡は、馬場の方から戻りながら、通りかかった若侍にたずねた。

「お的場でござります」

「ああお弓か」

林の小径を縫って、その方角へ歩いてゆくと、

——ぴゅうん

と、快い矢うなりがもう的場の方に聞える。

「おう、佐渡どの」

呼びとめる者があつた。

同藩の岩間角兵衛である。実務家で辣腕らつわんで、重く見られてい
る人物だつた。

「どちらへ」

と、角兵衛は寄つて来た。

「御前へ」

「若殿は今、お弓のお稽古中でごさるが」

「些事さじゆえ、お弓場でも」

行き過ぎようとすると、

「佐渡どの、お急ぎなくば、ちとご相談申したいことがあるが」

「なんじやの」

「立話でも——」

と、見まわして、

「あれで」

と、林の中の数寄屋の供待ともまちへ誘った。

「ほかではないが、若殿との間に、何かのお話が出た折に、ひとり御推挙していただきたい人物があるのじやが」

「御当家へ奉公したいという人間かの」

「いろいろな伝手つてを求めて、同じような望みを申し入れて来る者が、佐渡どのの所へなども沢山あろうが、今、てまえの邸に置いてある人物はちと少ない人物かと思うので」

「ほ。……人材は御当家でも求めておるのじやが、ただ、職にありつきたい人間ばかりでなあ」

「その手輩てあいとは、ちと質からして違う男でござる。実はそれがしの家内とは縁故もあつて、周防すおうの岩国から来てもう二年もわしの邸やしきにごろごろしているのじやが、何としても、御当家に欲しい人物でしてな」

「岩国とあれば、吉川家きつかわけの牢人かの」

「いや、岩国川の郷土の子息で、佐々木小次郎といい、まだ若年でござるが、富田流とだりゆうの刀法を鐘巻かねまき自齋じさいにうけ、居合いあいを吉川家の食客片山伯耆守ほうきのかみ久安から皆伝かいでんされ、それにも甘んじないで自ら巖流がんりゆうという一流を立てたほどの者で」

と、口を極めて角兵衛は、その人間を佐渡に領うなずかせようとする。誰でも、人物の推薦には、一応このくらいには肩入れするものである。佐渡はそう熱心に聞いていなかった。——むしろ彼は、彼の意中に、一年半も持ち越したまま、つい忙しいままに忘れていた、べつな人間を、ふと思ひ出していた。

それは、葛かつしか飾かの法典ヶ原で開墾に従事している、宮本武蔵という名であつた。

二

武蔵という名は、彼の胸に、あれ以来、忘れ得ないものになつ

て深く刻まれていた。

（ああいう人物こそ、御当家でお抱かかえになつておくときよいが）

と、佐渡は、密ひそかに胸に秘めていたのであった。

だがもう一度、法典ケ原を訪れ、親しくその人物を見極めた上で、細川家へ推挙するつもりでいたのである。

今——思い出してみると、そういう考えを抱いて帰つた徳願寺の一夜から、いつか、一年の余も経つていた。

公務の忙しきまぎにも紛れ、あれきりまた、徳願寺へ詣る折がなかつたためである。

（どうしているか）

と、佐渡がふと、ひとの話から思い出していると、岩間角兵衛

は、自分の邸やしきに置いてある佐々木小次郎の推薦に、佐渡の助力を期待して、なおしきりと小次郎の履歴や人物を話して、彼の賛同を求めた末、

「御前へ参られたら、どうぞひとつ、貴方あなたからもお口添えを」と、くれぐれも頼んで立ち去った。

「承知した」

と、佐渡は答えた。

けれど彼の胸には角兵衛から頼まれた小次郎のことよりも、やはり武蔵という名に何となく心が惹かれていた。

的場まとはへ行つてみると、若殿の忠利ただとしは、家臣を相手に、旺さかんに弓をひいていた。忠利の射る矢は、一筋一筋、おそろしく正確で、

その矢うなりにも、氣品があつた。

彼の侍者が、或る時、

（これからの戦場では、鉄砲がもつぱら用いられ、槍が次に使われ、太刀、弓などは、余り役立たぬように変遷しておるようにござりますから、お弓は、武家の飾りとしても、作法だけの御習得でよろしくはないかと存じますが）

と、諫め^{いさ}めた時、忠利は、

（わしの弓は、心を^ま的に射ておるのだ。戦場へ出て、十や二十の武者を射る稽古をしているように見えるか）

と、かえつてその侍者に反問したという若殿である。

細川家の臣は、大殿の三斎公には勿論、心から心服していたが、

そうかといつて、その三齋公の余光に伏して、忠利に仕えている者は一人もなかった。忠利の身边に近侍している者は、三齋公が偉くあつてもなくつても、問題ではなかった。忠利その人を心から、英主と仰いでいるのだった。

——これはずっと晩年の話であるが、その忠利をどんなに藩臣が畏敬していたかというよい話がある。

それは細川家が豊前小倉ぶぜんの領地から熊本へ移封された時のこと——その入城式に、忠利は熊本城の大手の正門で駕籠を下り、衣冠着用のまま、新あらむしろ 薙あに坐つて、今日から城主として坐る熊本城へ向つて手をついて礼拝したそうである。——すると、その時、忠利の冠かんむりひもの紐ひもが城門けいもんの蹴放けはなし——つまり門しきいの闕すわ——に触さわつたとい

うので、それから以後忠利の家臣は勿論、代々の家来も皆、朝夕、この門を通行するのに、決して真ん中を跨ぐまたことはしなかつたということである。

当時の一国の国守が「城」に対してどれほど厳肅な観念を抱いていたか、また、家臣がその「主」しゆに対して、どれほどな尊崇を抱いていたか、この一例はよくその辺の侍の気持を示している話であるが、壮年時代から既にそうした気宇のあつた忠利であるから、その君へ家臣を推挙するにしても、うかつな者は、当然、推薦し難にくかつた。

長岡佐渡はお弓場へ来て忠利の姿を見ると、すぐさつき岩間角兵衛へわかれ際に、うっかり、

(承知いたしました)

と、いつてしまった軽率なことばを胸に悔いていた。

三

若侍の中に立ち交^たじつて、競射に汗をながしている細川忠利は、やはり一箇の若侍としか見えないほど無造作な姿だった。

今、一息ついて、何か侍臣たちと哄笑しながら、弓場の控^{ひかえ}へ来て、汗を拭^{ぬぐ}っていたが、ふと老臣の佐渡の顔を見かけて、

「爺^{じい}、そちも一射、試してみないか」

と、いった。

「いや、このお仲間では、大人げのうておとな」

と、佐渡も戯れると、

「何をいう。いつまでわし達を角髻あげまきの子供と見おつて」

「されば、てまえの弓勢ゆんぜいは、山崎の御合戦の折にも、にらやまじよ 葦山

城うの城詰しろづめの折にも、しばしば大殿の御感にあずかった、極め

つきの弓でござる。的場のお子供衆の中ではお慰みになりませぬ」

「はははは、始まったぞ、佐渡どののご自慢が」

侍臣たちが笑う。

忠利も苦笑する。

肌を入れて、

「何か用か」

忠利は、真面目に返った。

佐渡は、公務の用向きを、ちよつと耳に入れて、その後で、

「岩間角兵衛から、誰か御推挙の人物がある由でございしますが、その仁じんを、御覧になりましたか」

と、訊ねた。

忠利は、忘れていたらしく、いやと、顔を振ったが、すぐ思い出して、

「そうそう。佐々木小次郎とかいう者を、頻りと、推挙しておつたが、まだ見ておらん」

「御引見なされてはいかがでござりますな。有能の人物は、諸家でも、争つて高禄をもつて誘いますゆえ」

「それほどな者かどうか？」

「ともかく、一度、お召寄せのうえで」

「……佐渡」

「は」

「角兵衛に、口添えを頼まれたかの」

と、忠利は苦笑した。

佐渡はこの若い殿の英敏を知っているし、自分の口添えが、決してその英敏を晦くらすものでないことも分っているので、ただ、

「御意」

と、いつて笑った。

忠利はまた、弓掛ゆがけを手に嵌はめて、侍臣の手から弓を受取りなが

ら、

「角兵衛の推挙いたした人物も見ようが、いつか、そちが夜話しに申した、武蔵とかいう人物も一度見たいものだな」

といった。

「若殿には、まだご記憶でございましたか」

「わしは覚えておるが、そちは忘れておったのではないか」

「いや、その後はついぞ徳願寺へも、詣もつでる折がございましたぬために」

「一箇の人材を求めるためには、忙せわしい用を省はぶいても苦しゆうあるまい。他用の序ついでになどとは、爺じいにも似あわぬ横着な——」

「怖れいりました。したが、諸方より御奉公申したいと、御推挙

も多い所、それに若殿にも、お聞き流しのようでござりましたゆえ、ついお耳に入れたまま、怠つておりましたが」

「いやいや、余人の眼鏡めがねなら知らぬこと、爺の眼で、よかろうというその人物。わしも心待ちにしていたのじゃ」

佐渡は、恐縮して、藩邸から自分の邸に帰ると、すぐ駒の支度をさせ、従者もただ一人連れてきりで、葛かつしか飾の法典ヶ原へいそいだ。

四

こよいは、泊つていられない。すぐ行ってすぐ帰るつもりであ

る。心が急せくので、徳願寺にも立ち寄らず、長岡佐渡は、駒を早めた。

「源三」と従者を顧みて、

「もはやこの辺りが、法典ヶ原ではないかの」

ともぎむらい

供侍の佐藤源三は、

「てまえも、そうかと存じますが——まだここらには、御覧の通り、青田が見えますから、開墾しておる場所は、もそつと、野の奥ではございませうまいか」

と、答えた。

「——そうかの？」

もう徳願寺からかなり来ている——これより奥へすすめば、道

は常陸路ひたちじへかかつてしまう。

陽が暮れかけた——青田には、白い鷺さぎが、粉のようにこぼれたり舞い立ったりしている。河原のへりや、丘の陰や、ところどころに、麻あさも植わっている。麦そよも戦いでいる。

「おお、御主人様」

「なんじや」

「あれに沢山、農夫がかたまっておりますが」

「……ム？ ……なるほど」

「訊ねてみましょうか」

「待て。何をしているのか、代る代るに地へ額ぬかずいて、拝んでおる様子ではないか」

「ともあれ、参ってみましょう」

源三は、馬の口輪をつかみ、河原の浅瀬を瀬ぶみしながら、主人の駒をそこへ導いた。

「これ、百姓たち」

声をかけると、彼らはびっくりした眼をして、群れを崩した。見ると、そこに一箇の掘建小屋がある。また、小屋の横には、鳥の巣箱ほどの、小さい御堂が出来ていて、彼らは、それを拝んでいたのだった。

一日の労役を終えた土民たちは、およそ五十名もそこにいた。めいめいがもう帰る間際まぎわであつたらしく洗った道具を携えていた。そして何かやがやいつていたが、その中から一人の僧が出て来

て、

「これはこれは、誰方かどなたと存じましたら、お檀家だんかの長岡佐渡様ではございませぬか」

「おう、おぬしは、昨年さねの春、村に騒ぎのあつた折、身の案内に立たれた徳願寺の僧侶じやの」

「さようでござります。今日もご参詣でございましたか」

「いやいや、ちと思ひ立つて急に急に出向いて来たまま、真つ直にこれまで参つたのじゃ。——早速に訊ねたいが、その折、当所で開墾くわんしていた牢人の武蔵と申す者と——伊織わっばという童は——今でも健在かの？」

「その武蔵様は、もうここにはいらつしやいませぬ」

「なに、いない？」

「はい、つい半月ほど前に、ふと何処かへ、立ち去っておしまいになりました」

「何ぞ、事情わけでもあつて、立ち退のいたのか」

「いえ。……ただその日だけは皆の衆も仕事を休んで、このように水ばかり出ていた荒地が、青々と、新田に変わりましたので、青田祭りの欣びをいたしました。すると、その翌朝はもう、武蔵様もあの伊織も、この小屋に姿が見えなかつたのでござりまする」

と、その僧侶は、まだそこらに武蔵様がいるような気がしてな
りませぬ——といいながら、次のような仔細を話すのであつた。

五

あの時以来。

土匪どひを懲こらし、村の治安が強固になり、めいめいの生活が平和かえに回ると、誰ひとりこの地方では、武蔵の名を呼び捨てにする者はなかつた。

——法典の御牢人さま。

とか、または、

——武蔵さま。

とか敬称して、今まで狂人きちがい扱いにしたり、悪口を叩いた者も、彼の開墾小屋へ来て、

(わしにも、お手伝いをさせて下され)

というように、変つてしまった。

武蔵は、誰にも平等に、

(ここへ来て手伝いたい者は手伝え。豊かになりたい者は来い。自分だけ喰つて死ぬことは鳥とりけだもの獣もする。少しでも、子孫のために、自分の働きを遺のこして行こうとする者はみんな来い)

そういうと忽ち、

(わしも、わしも)

と、彼の開墾地には、日々四、五十人ずつ、手空きの者が集まつた。農閑期には、何百人も来て、心を協あわせて、荒地を拓ひらいた。

その結果、去年の秋には、今までの出水もそこでみずだけは防ぎ止め、

冬には土を耕し、春には苗代なわしろに種子たねを蒔まき水を引き、この初夏には、わずかながら新田に青々と稲もそよぎ、麻も麦も一尺の余も伸びていた。

土匪は来なくなつた。村の者は気をそろえてよく働き出した。若い者の親たちや女房たちは、武蔵を神のように慕い、草餅や初物の野菜ができると、小屋へ運んで来た。

(来年は、田も畑も、この倍になるぞ。その次の年には、三倍になる)

と彼らは、土匪征伐と村の治安に信念を持つと共に、荒地の開墾にも、すっかり信念を持った。

その感謝の溢あふれから、村民たちは、一日仕事を休んで、小屋へ

酒壺をかついで来た。そして、武蔵と伊織を取り巻いて、里神楽かぐらの太鼓や笛をあわせて青田祭りをしたのであった。

その時、武蔵がいった。

「わしの力じゃない。おまえ達の力だ。わしはただ、おまえ達の力を引出してやっただけのものじゃ」

そして、その祭りに来あわせていた徳願寺の僧へ、

「わしの如き、一介の漂泊ひょうはくし士を、皆が頼りにしては、末が心もとない。——いつまでも、今の信念と一致よりが禊よの戻らぬように、これを、心の的まととしたがよかろう」

と、一体の木彫きぼりの観世音を包みから出して授けた。

その翌朝——来てみると武蔵はもう小屋にいなかった。伊織を

連れて、行く先も告げず、夜明け前に、何処かへ旅立ったもの
見え、旅包みもなかった。

「武蔵さまがない！」

「どこぞへ、消えてしまいなすった——」

土民たちは、慈父を見失ったように、その日は、仕事も手につ
かず、ただ彼のうわさと哀惜に暮れた程だった。

徳願寺の一僧は、武蔵のことばを、思い当って、

「それでは、あの方にすむまいぞ、青田を枯らすな。畑を殖ふやせ」
と、一同を励ました。そして小屋のそばに、小さい堂を作り、

そこへ観音像を納めると、土民たちは、いわれるまでもなく、朝
夕仕事にかかる前、仕事の終わった後には、武蔵へ挨拶するように、

必ずそこへ額ぬかずいた。

——僧の話はそれで終った。だが、長岡佐渡の悔はいつまでも、胸を嚙んで、

「……ああ遅かった」

卯月の夜は、草霽くさもやにぼかさされて来た。佐渡は、むなしく駒を返しながら、

「惜しいことをした……こういう怠慢は、ひとつの不忠も同じこと。……遅かった、遅かった」

何度も口のうちで呟つぶやいた。

入城府

一

両国という地名も橋が出来てから後のことである。まだ両国橋も、その頃はなかつた。

けれど、しもうさりよう下総領から来る道も、奥州街道からわか岐れて来る道も、後の橋の架かけられた辺りへ来て、大川に突き当つていた。

渡し場には、関門と呼んでよいくらいな、厳しい木戸があつた。そこには、江戸町奉行の職制ができてから、初めての初代町奉行、青山ひたちのすけただなり常陸介忠成の手の者が、

「待て」

「よろしい」

などと、いちいち通行人検あらためをしていた。

（ははあ、だいぶ江戸の神経も、尖とがっておるな）
と、武蔵はすぐ思った。

三年前、中山道から江戸へ足を入れて、すぐ奥羽の旅へ向つた時、まだ、この都市の出入りはさほどでなかつた。

それが、急激にこう嚴重になつたのはなぜか？

武蔵は、伊織を連れて、木戸口に順々に並んでゐる間に考えた。都市が都市らしくなつて来ると必然に、人間が殖ふえる、人間の種さまざま々な善業悪業が相そうこく剋し合う。制度が要いる、制度の法網を潜くぐる方も活潑になる。そして榮えを祈る文化を打ち建てながら、

その文化の下で、もう浅ましい生活や欲望が血みどろで地上に嘔み合う。

それもあるう。

がまた、ここが徳川家の將軍所在地となると共に、大坂方に対する警戒も、日に増して厳密を要するのである。——何しろ大川を隔てて見ても、この前、武蔵が見た江戸とは、家々の屋根が殖ふえていることや、緑が目立って減っていることだけでも、隔かく世いの感があつた。

「御牢人は——？」

そう呼ばれた時は、もう革かわ袴ばかまを穿はいた二人の木戸役人に、武蔵は、懐ふところ中から背や腰の——体じゆうを撫でまわされていた。

べつな役人が、側から厳しい目で詰問した。

「御府内へ、何用を帯びて行かつしやるか」

武蔵はすぐ答えた。

「何処とて、あて的もなく歩く修行者でござる」

「あて的もなく？」

と、とが咎め立てして、

「修行するというのがあるではないか」

「……………」

苦笑を見せると、

「生国は？」

と、たたみかける。

「美作みまさか吉野郷宮本村」

「主人は」

「持ちませぬ」

「然らば、路用その他の出費は、誰から受けておらるるか」

「行く所でいささか余技の彫刻をなし、画えなどを書き、また寺院に泊り、乞う者があれば太刀技たちわざもおしえ、人々の合力に依つて旅しておりますが……それもない時には、石にも臥し、草の根や木の実を喰らうておりまする」

「ふーム……。で、いずれからお越しなされた」

「陸奥みちのくに半年あまり、下総しもとうさの法典ヶ原に、百姓の真似事まねごとして、二年ほどを過ごし、いつまで、土いじりもと存じて、これまで、

参つてござります」

「連れの童は」わっぱ

「同所で拾い上げた孤児——伊織と申し、十四歳に相成ります」みなしご

「江戸で泊る先はあるのか。無宿の者、縁故のない者は、一切入れぬが」

き限りがない。後ろにはもうたくさん往来人がつかえている。

素直に答えているのも莫迦ばからしく、ひとにも迷惑と考えて、武蔵は答えた。

「あります」

「何処の、誰か？」

「柳生たじまのかみむねのり 但馬守宗矩 どの」

二

「何、柳生どのへ」

役人は、ちよつと、鼻白んで黙った。

武蔵は、おかしく思った。柳生家とは、われながら、いみじくも思い付いたものだと自分で感心する。

かねて大和の柳生石舟齋やまととは、面識はないが、沢庵たくあんを通じて相知る仲である。問い合せられても、

(そんな人間は知らぬ)

とは柳生家でも答えまい。

ひよつとしたら、その沢庵も江戸表へ来ているような気がする。石舟斎には、遂に、めんえつ面謁も遂げず宿望の一太刀も合せなかつたが、その嫡ちやくし子で——かつ柳生流の直じきりゆう流を享うけ、秀忠將軍の指南に就任して来ている但馬守宗矩には、ぜひと、会いもしたいし、試合も受けてみたい。

そう、日頃から思っていたのが——思わず直ぐ行く先かのように、木戸役人の質問に出てしまったのである。

「いや、それでは、柳生家に御縁故のあるお方でござつたか。：失礼いたしました。何分、うろんな侍どもが、御府内に入り込むため、牢人方と見れば、ひときわ一際、ひときわ厳密な取調べを要す——という上司からの厳達なので」

役人は、こう言葉も態度もあらためて、後の調べは、ほんの形式だけですまし、

「お通りなさい」

と、木戸口から送った。

伊織は後から尾ついて来て、

「先生、なぜ侍だけ、あんなにやかましいんだろ」

「敵方の間かんじや者に備えてであろうな」

「だって、間者なら、牢人のふうなんかして、通るもんか。お役人って、頭がわるいね」

「聞えるぞ」

「たった今、渡船わたしが出ちまったよ」

「待つ間に富士でも眺めておれというのだろう。——伊織、富士が見えるぞ」

「富士なんて、めずらしくないや。法典ヶ原からだって、いつも見えるじゃないか」

「きょうの富士はちがう」

「どうして」

「富士は、一日でも、同じ姿であつたことがない」

「同じだよ」

「時と、天候と、見る場所と、春や秋と。——それと観る者のその折々の心次第で」

「……………」

伊織は、河原の石を拾って、水面を切って遊んでいたが、ひよいと跳んで来て、

「先生、これから、柳生様のお屋敷へ行くんですか」

「さあ、どうするか」

「だって、あそこで、そういったじゃないか」

「一度は、行くつもりだが……先さきさま様は、大名だからの」

「將軍家の御指南役って、偉いんだろうね」

「うむ」

「おらも大きくなったら、柳生様のようになろう」

「そんな小さい望みを持つんじゃない」

「え。……なぜ？」

「富士山をござらん」

「富士山にやなれないよ」

「あれになろう、これに成ろうと焦心あせるより、富士のように、黙つて、自分を動かさないものに作りあげろ。世間へ媚こびずに、世間から仰がれるようになれば、自然と自分の値うちは世の人がきめてくれる」

「渡船が来たよ」

子供は、人に遅れるのが嫌いだ。伊織は、武蔵をささえ捨てて、真まつ先に乗合の舳ふなべりへ跳び移った。

広い所もあれば、狭い所もある。河の中には洲すもあるし、流れの早い瀬も見える。何しろ当時のすみだ川は、自由気ままな姿であつた。そして両国はもう海に近い入江であり、波の高い日は、濁流が両河岸を浸ひたして、平常ふだんの二倍にも見える大河になつた。

渡船の棹さおは、ガリガリと、川底の砂利を突いてゆく。

空の澄んだ日は、水も澄み切つて、舷ふなべりから魚の影が覗かれた。赤く錆びた兜かぶとの鉢金などが、小石の間に埋つているのもまま見え
た。

「どうだろう、このまま天下泰平に治まるものだろうか」
渡船わたしの中の話である。

「そうは行くめえなあ」

と、ひとりがいう。

その連れが、連れの者の言葉に裏書して、

「いずれ、大戦おおいくさ。——なけれやそれに越したことはねえが」

話は、弾はずみかけて弾まなかつた。中には、よせばいいにという顔して水を見ている者もある。役人の耳が怖いからだつた。

だが、お上の怖かみい目や耳を掠かすめながら、民衆はそういう物へ触れるのを好む。わけもなくただ好むのである。

「その証拠には、ここの渡船の木戸調べでもそうだ。こう往來あちた検めが厳しくなったのは、つい近頃のこつたが、それというものも、上方からどしどし隠密が入り込んでいからだという噂だぜ」

「そういえば、この頃、大名屋敷へよくはいる盗賊があるそうだ。——外聞に洩れては、見つともないので、はいられた大名は皆、口を拭いているらしいが」

「それも、隠密だろうぜ、いくら金の欲しい奴でも、大名屋敷などは、いのち生命を捨ててかからなければはいれねえ所だ。ただの泥棒である筈はねえ」

渡船の客を見渡すと、これは江戸の一縮図と**おかく**いっている。鋸おかくをおかく着おかくけておかくいる材木屋、上方流れの安芸人やすげいにん、肩かたひじ肱ひじを突ツ張おかくつおかくている無法者、井戸掘りらしいひとかたまりの労働者、それとふざけている売笑婦、僧侶、虚無僧——そして武蔵のような牢人者。

船が着くと、それらの人々がぞろぞろと、流れになつて、岸へ上がつて行く。

「もし、御牢人」

武蔵を追いかけて来た男があつた。見ると、船の中にいた背のずんぐりした無法者で――。

「お忘れ物をなすつたろう。こいつあ、おめえさんの膝ツ子から落ちたんで、拾つて来たが」

と、赤地錦の――といつても余りに古びて金欄きんらんの光よりは、垢あかびか光りの方がよけいにする巾着の耳をつま抓んで、武蔵の顔の前へ出した。

武蔵は、顔を振つて、

「いや、てまえの所持品ではありませぬ。誰ぞ、ほかの乗合の衆の物でござろう」

いうと、その横合から、

「ア、おらのだ」

と、無法者の手から、いきなりそれを奪^とつて、懐^{ふところ}中へ仕舞つた者がある。

武蔵の側にいると、あまり背の違いがあるので、よく見ないと気がつかないほど小さい、伊織であつた。

無法者は、怒つた。

「やいやい、いくら汝^{てめえ}の物だつて礼もいわずに、引ツ奪^たくるといふ奴があるか。もいちど、今の巾着を出せ。改めて三べん廻つて

お辞儀をしたら返えしてやるが、さもなければ、河ン中へ、叩つ込んでしまふから」

四

無法者の怒りようも大人げなく思われたが、伊織の仕方も重々よくない。——だが子供のことであるから自分に免じて寛ゆるしてくれ、と武蔵が代つて詫あやまると、無法者は、

「兄か、主人か、何か知らねえが、じゃあおめえの名を聞いておこう」

と、いう。

武蔵は、辞を低く、

「名乗るほどの者ではありませんが、牢人宮本武蔵という者です
すると、無法者は、

「えっ？」

と、目をみはって、しばらく凝視していたが、

「これから気をつけろ」

伊織へひとこと一言、捨てぜりふ科白を置いて、さつと身をかわ翻すように立去
ろうとした。

「待てっ」

処女のように柔和だった者の口から、こう不意にかつ一喝くつて、
無法者はびくつとしながら、

「な、なにしやがんでい」

つかまれている脇差のこじりを挽もぎ払おうとして振向いた。

「汝の名を申せ」

「おれの名」

「ひとの名を聞いたまま、会釈もなく立ち去る法があるうか」

「おらあ、半はんがわら瓦の身内のもんで、菰こもの十郎ってんだ」

「よし、行け」

突つ放すと、

「覚えてやがれ」

と、菰はのめツたまま素つ飛んで行った。

伊織は、自分のかたきを打って貰ったように、

「いい気味だ、弱虫」

またとない頼母しい人のように武蔵を見上げて、その側へくつ
ついた。

町へと、歩き出しながら、

「伊織」

「はい」

「今までのように、野原に住んで、栗鼠りすや狐が隣となり近きん所じよのうち
はよいが、このように多くの人の住んでいる町なかへ来たたら、礼
儀作法を持たねばならぬぞ」

「はい」

「人と人が円満に住んでゆければ地上は極楽だが、人間は生れ

ながら神の性と、悪魔の性と、誰でも二つ持っている。それが、ひとつ間違うと、この世を地獄にもする。そこで、悪い性質は働かせないように、人なかほど、礼儀を重んじ、体面を尊び、また、お上は法を設けて、そこに秩序というものが立ってくる。——おまえが先刻さつきしたような不作法は小さいことだが、そういう秩序の中では人を怒らせるのだ」

「はい」

「これから、何処へどう旅して行くか知れぬが、行く先々の掟おきてには素直に、人には礼儀をもって対むかうのだぞ」

「噛んで含めるようにいい聞かせると、伊織は、何なん遍べんもこつくりして、

「分りました」

と、早速に言葉もていねいになったり、取って付けたようなお辞儀もしてから、

「先生、また落すといけませんから、これを、済みませんが、先生のおふところに持っていて下さい」

と、さつき渡船わたしの中へ忘れてしまふところだった襪つづれの中着を、武蔵の手に預けた。

それまでは、かくべつ気にも止めなかつた武蔵は今、手にしてふと思ひ出した。

「これはお前が父から遺物かたみにもろうた品ではないのか」

「ええそうです。徳願寺へ預けておいたら、今年になって、お住

持さんが、黙って返してくれた。おかねも元のままはいつているよ。なにか要いる時には、そのおかね、先生が費つかつてもかまわらないよ」

五

「ありがとう」

武蔵は、伊織へそういった。

他愛もない言葉ながら、伊織の気持は欣うれしいものだった。彼は自分の侍かしずいでいる先生が、いかに貧しいかを、子供ごころにも常に案じているふうなのだ。

「では、借りておくぞ」

おしいただいて、武蔵は、彼の中着を懐ふところ中に預かつた。

そして歩きながら思うには、伊織はまだ子供だが、幼少から、あの痩せた土と藁わらの中に生れ、審つぶさに生活の困窮を舐なめてきたので、童心の中にもおのずから「経済」というものの觀念が、つよく養われている。

それに較べると、武蔵は自分ながら、自分には「かね」を軽視し、経済を度外視している欠点があることに気づく。

大きな経策には関心をもつのであるが、自己の小さい経済には、ほとんど無関心なのである。そして幼い伊織にさえその「私の経済」には、いつも心配を煩わずらわしている。

(この少年は、自分にはない才能を持っているようだ)

武蔵は、馴じむほど、伊織の性格の中に、次第に磨かれてくる聡明をたのもしく思った。それは彼自身にもまた、別れた城太郎にもないものだと思った。

「どこへ泊ろうな、今夜は」

武蔵には、^{あて}的がない。

伊織は、めずらしげに、町ばかり見廻していたが、やがて異郷の中に、自分の友達でも見つけたように、

「先生、馬がたくさんいるよ。町の中にも馬市が立つんだね」と軽い昂奮をして指さす。

博^{ばくろう}勞が集まって、博勞茶屋や博勞宿が無秩序に殖^ふえだしたの

で、近頃「ぼくろ町ちよう」と呼ばれている辻の辺りから——馬の背が無数に並んでいる。

市いちへ近づくと、馬うま蠅ばえと人間がわんわんいつている。関東訛なまりの、あらゆる地方語で喚わめいているので、なんの意味やら分らない騒音さわおんになっている。

従者をつれた武家の者が、頻りと名馬を探し求めていた。

世間に人材が乏しいように、馬の中にも、名馬が少ないものとみえ、その侍は、

「もう帰ろうわえ、一匹も殿へお薦すすめできるような馬はおりやせん」

こういい放って、馬の間から大股に身を反そらした時、はたと、

武蔵と正面に出会った。

「おう」

と、その侍は、胸を反らし、

「宮本氏ではないか」

武蔵もその顔を見つめて、同じように、

「おう」

と、顔を綻ほころばせた。

それは大和の柳生やまとノ庄で、親しく新陰堂へ招かれたこともあるし、一夜を剣談に更ふかしたこともある——柳生石舟斎の高足木村助九郎であつた。

「いつから江戸表へござつたな。意外な所で、お目にかかつたの

う」

と、助九郎は、武蔵のすがたを見て、武蔵が今なお、修行の途とにまみれている様子を見て取ったようにいった。

「いや、たった今、しもうさりよう下総領から来たばかりです。大和の大先生にも、その後、お健すこやかでおられますか」

「ご無事でござる。したが、もう何分、ご高齢でな」といって、すぐ、

「いちど但馬守様のおやしきにも、お越しがあるとよい。お紹介ひきあわせもしようし……それに」

と助九郎は、何の意味か、武蔵の面を見つめながら、にっと笑った。

「貴公の美しい落し物が、お邸へ届いておるぞ。ぜひ一度、訪ねてござらっしゃい」

——美しい落し物。

はて？ 何だろう。助九郎は仲間ちゆうげんを連れてもう往来の向う側へ、大股に移っていた。

蠅はえ

一

ここは裏町——つい今し方、武蔵の彷徨さまよっていた博労町ばくろちようの裏

通りである。

隣も旅籠屋はたご、その隣も旅籠屋、一町内の半分が、汚い旅籠屋であつた。

泊り賃が安いので、武蔵と伊織はそこへ泊つた。ここの家にもあるが、何処の旅籠屋にも、馬舎うまやが付きものになつていて人間の宿屋というより、馬の宿屋といったほうが近かつた。

「お侍さま、表の二階だと、少しは蠅はえが少のうございますで、部屋をお取替いたしますべ」

と、博労でない客の武蔵を、ここの旅籠では少し持ち扱い気味。勿体ない、きのうまでの開墾小屋の生活から較べれば、ここはこれでも畳のうえ。——かかわにも関らずつい、

(ひどい蠅だなあ)

と呟つぶやいたのが、氣にでも障さわったふうに、旅籠のかみさんの耳にはいったものとみえる。

だが——好意のままに、武蔵と伊織は、表二階へ移った。ここはまた、かんかんと西陽にしびが映さしている。——すぐそう思うだけでも、氣持が贅沢ぜいたくに変わっているのだと思ひながら、

「よしよし。ここがいい」

と、独り宥なだめて落着いた。

ふしぎなのは人間をつつむ文化の雰囀なえ気である。つい昨日までいた開墾小屋では、強い西陽は苗なえの育ちを思い、あしたの晴朗せいりやうな氣が卜ぼくされて、この上もない光明であり希望であつた。

汗の肌にたかる蠅を、土に働いている時は気にもならないし、むしろ、

（おまえも生きているか。おれも生きて働いているぞ）

といたいくらい、自然の中に生命を持つ友達にさえ思えるのに、大河を一つ越えて、この熾^{さかん}な勃興都市の一員となるとすぐ、

（西陽があつい。蠅がうるさい——）

などという神経と共に、

（なんぞ美味^{うま}い物でも喰いたいなあ）

と、思う。

そういう人間の横着な変り方は、伊織の顔にもありありと出ている。むりもないことには、すぐ横隣で博労の一群れが、鍋に物

を煮て、騒がしく酒を飲んでゐるのだ。法典の開墾小屋では、蕎麦を喰べたいと思えば、春先種子を蒔き、夏花を見て、秋の暮に実を乾し、ようやく冬の夜粉を挽いて喰べるのだが、ここでは手一つ叩いて、打ってもらえば、一刻もすると、蕎麦が出てくる。

「伊織、蕎麦を喰おうか」

武蔵がいうと、

「うん」

と、伊織は唾をのんで欣しそうに頷く。

そこで旅籠のかみさんをよんで、蕎麦を打って貰えるかと計ると、他のお客からもご注文があるから、きようは打って上げてもいいという。

蕎麦のできて来る間、西陽の窓に頬杖ついて、下の往来をながめてみると、すぐ斜すじむこ向うに、

おん
御たましい研とぎどころ所

ほんあみ
本阿弥門流厨ずし子野耕介

と読める板が軒先に出ている。

それを先に見つけたのは、眼のはやい伊織で、さも驚いた顔しながら、

「先生、あそこに、御たましい研所と書いてあるけれど、何の商売でしょう？」

「本阿弥門流とあるから、刀の研師とぎしであろう。——刀は武士のたましいというから」

そう答えて、武蔵は、

「そうだ、わしの刀も、いちど手入れしておかねばなるまいな。

後で、訊ねてみよう」

と、呟いた。

その時、襖ふすま隣となりで、なにか喧嘩が始まった。いや喧嘩ではな

く、賭博のもつれで、なにか紛争あらそいが起つたらしいのだ。——武

蔵は、なかなか来ない蕎麦の待ち遠しさに、手枕をかって、とろ
とろしていたが、ふと眼をさまして、

「伊織。隣の衆へ、少しお静かにしてくださいと申せ」

といいつけた。

二

その境を開ければ、すぐ事は済むが、武蔵の横になっている姿が先に見えるので、伊織は、わざわざ廊下へ出て、隣の部屋へ、いいに行つた。

「おじさん達、あんまり騒がないでくれよ。此方こつちに、おらの先生が寝ているんだから」

すると、

「何？」

と、博労たちは、賭博の紛争もつれに血ばしつた眼を、一斉せいに伊織の小さい姿へ移した。

「なんだと、小僧」

伊織は、その無礼に、むつとして口を尖とがらしながら、

「蠅やかまがうるさいから、二階へ越して来たら、またみんなが騒いでいて喧やかましくってしようがないや」

「てめえがいうのか、てめえの主人でも、そういつて来いといったのか」

「先生ががさ」

「いいつけたんだな」

「誰だつて、うるさいよ」

「ようし、てめえつちのような、兎くその糞くそみてえなチビに、挨拶しても仕方がねえ、後から、秩父ちちぶの熊五郎が返答にゆくから引つ込

んでろ」

秩父の熊か狼か分らないが、なにしろ獐猛どうもうそうなのが、その

中に二、三人いる。

その手輩てあいに睨まれて、伊織はあわてて帰って来た。武蔵は、手枕の肱ひじへ薄く眼をつぶって眠っている。その裾すそに西陽もだいぶ陰かげつて、足の先と、襖ふすまの端の残り陽に、大きな蠅が真つ黒にたかつていた。

起してはいけないと思つて、伊織はそのまま黙つて、また往來を視みていた。——しかし、隣の部屋やかまの喧やかましさは前と少しも変りはない。

こちらから持つて行つた抗議の衝動をうけて、賭博の紛争は沙

汰止みになつたらしいが、その代り今度は團結して、無礼にも、境のふすまを細目に開けて覗いたり、暴言を放つたり、嘲笑あざわらつたりしているのだった。

「ええこう、どこの牢人か知らねえが、江戸の真ん中へ風に吹かれて来やがって、しかも博労宿にのさばりながら、うるせえもねえもんじゃねえか。うるせえなあ、おれっちの持ち前だ」

「つまみ出しちまえ」

「わぎと、ふてぶてしそうに、寝ていやがるぜ」

「侍なんぞに、驚くような骨の細い博労は、関東にやいねえつてことを、誰か、よく聞かして来いよ」

「いっただけじゃだめだ、裏へつま抓み出して、馬の小便で顔を洗わ

せちまえ」

すると先刻さつきの——秩父の熊とか鷹とかいう男が、

「まあ、待て。ひとりや二人の乾飯ほしいざむらい、騒ぐにや当らねえ。

おれが懸合あやまいに行つて、謝り証文を取つて来るか、馬の小便で顔

を洗わせるか、かたをつけてやるから汝てめえたちは静かに呑みながら

見物しているやい」

「おもしろえ」

と、博労たちは、襖ふすまの陰に鳴りをしずめた。

その者たちから見ると、頼みがいある面つらだましいを持った博労

の熊五郎は、腹帯を締め直して、

「へい、御免なすつて」

と、間の襖あいをあけ、上眼づかいに、相手を見ながら、膝で這いずりこんだ。

武蔵と、伊織のあいだに、誂あつらえておいた蕎麦そばがもう来ていた。大きな塗ぬりの蕎麦箱の中に、蕎麦の玉が六ツ並んでいて、その一山を、箸はしで解ほぐしかけていた所である。

「……あ、来たよ先生」

伊織はびつくりして、そこを退のいた。熊五郎は、その後へ、大あぐらを掻いて坐りこみ、両手の肱ひじを膝へついて、獐どうもう猛つらな面がまえを頬杖に乗せながら、

「おい牢人。喰うなあ後にしちやあどうだ。胸につかえているくせに、何も落着きぶって、無理に喰うにやあ当らねえだろうに」

——聞えているのかいないのか、武蔵は笑いながら、次の箸にまた蕎麦をほぐして、美味うまそうに啜すすりこんだ。

三

熊はかん筋を立てて、

「止せっ」

と、ふいに呶鳴った。

武蔵は、箸と、蕎麦汁の茶わんを持つたまま、

「そちは、誰だ？」

「知らねえのか。博労町へ来ておれの名を知らねえ奴あ、もぐり

か、つんぼぐれえなものだぞ」

「拙者もすこし耳が遠いほうだから、大きな声でいえ。どこのなにがしだ」

「関東の博労なかまで、秩父の熊五郎といやあ、泣く子もだまる暴れ者だが」

「……ははあ。馬仲買か」

「侍あいての商売で、生き馬を扱ってる人間だから、そのつもりで挨拶しろい」

「なんの挨拶？」

「たった今、その豆蔵まめぞうをよこしやがって、うるせえとか、喧しやかまいとか、きいたふうな御託ごたくを並べやがったが、うるせえな博労の

地がねだ。ここは殿様旅籠はたごじゃねえぞ、博勞の多い博勞宿だ」

「心得ておる」

「心得ていながら、おれつちが遊び事をしている場所へ、何でケチをつけやがるんだ。みんな腐つて、あの通り、壺を蹴とばして、てめえの挨拶を待っているんだ」

「——挨拶とは？」

「どうもこうもねえ、博勞の熊五郎様、他ほか一統様へ宛て、詫証わびじよ文うもんを書くか、さもなければ、てめえを裏口へしよツぴいて、馬の小便で面つらを洗わしてくれるんだ」

「おもしろいな」

「な、なにを」

「いや、おまえ達の仲間でいうことは、なかなかおもしろいと申すのだ」

「たわ言を聞きに来たんじゃねえ。どっちとも、はやく返答しろい」

熊は、自分の声に、昼間の酔よをよけいに顔へ出して呶鳴った。額の汗が、西陽に光って、見る者の眼にも暑苦しい。それでもまだ、熊は威嚇いかくが足りないと思つたか、胸毛だらけな諸肌もろはだを脱いで、

「返答に依よつちや、ただは引退ひきざがらねえぞ。さ、どっちとも、早く吐ぬかせ」

肚はらまき巻から出した短刀を、蕎麦箱そばの前へ突き立てて、あぐらの

脛すねをさらに大きく組み直した。

武蔵は、笑みをつつみながら、

「——さ。どつちにしたがよいかなあ」

汁茶碗の手を少し下げ、箸の手を蕎麦箱へ伸ばして、蕎麦のたまにたかっている塵ごみでも取っているのか、何か挟はさんでは、窓の外へ抛ほうっていた。

「……………」

てんで相手にされていらないふうなので、熊は青筋を太らせて、ぐいと眼だまを剥むき直したが、武蔵はなお默然と、蕎麦のうえの塵を箸で取り退のけている。

「……………」

ふと、その箸の先に気のついた熊は、剥いた眼を、いやが上にも大きくして、息もせず、武蔵の箸に、気もたましいも抜かれてしまった。

蕎麦そばの上になかかっている黒いものは、無数の蠅であつた。武蔵の箸が行くとその蠅は、逃げもせず、黒豆を挟むように素直に挟まれてしまふのだつた。

「……限りきがないわい。伊織、この箸を洗つて来い」

伊織が、それを持って、外へ出ると、その隙間に、博労の熊も、消えるように隣の部屋へ逃げこんで行つた。

しばらくごそごそしていたかと思うと、またたくまに、部屋替えをしたものとみえ、襖ふすまの向うには人声もしなくなつた。

「伊織、せいせいしたな」

笑い合つて、蕎麦を食べ終えた頃、夕陽も陰かげつて、研屋とぎやの屋根の上に、細い夕月が見えていた。

「どれ、おもしろそうな前の研師とぎへ研を頼みに行つて来ようか」
 だいぶ荒使いをして傷いためている無銘のひとこし一腰——それを提ひっさげて、

武蔵が立上がった時、

「お客さん、どつかのお侍が手紙を置いて行かしゃりましたが」
 と、黒い梯子はしごだんの下から、宿のおかみさんが、一通の封書を
 つき出した。

四

(はて、何処から?)

と封の裏を見ると、

助

とただ一字しか書いてない。

「使いは？」

武蔵が問うと、宿のおかみさんは、もう帰りましたといいながら、帳場に坐る。

梯子だんの途中に立ったまま武蔵は封を切ってみた。「助」の字は、きよう馬市で出会った木村助九郎のこととすぐ読めた。

けさ程のお出会い、殿のお耳に入れ候処、たじまのかみ但馬守様、

なつかしき男と被^{おおせな}仰され候

お越しの日、いつ頃にやとのおことば、折返してお便り待入
申候

すけくろう

「お内儀^{かみ}、そこの筆をかしてくれぬか」

「こんなので、よろしゅうございましょうか」

「うむ……」

と帳場のわきへ立ち寄って、助九郎の手紙の裏へ、

武辺者には、ほかに用もなし。ただたじま^{のかみ}守様、御試合たま

わるなれば、何時なりと伺候^{しこう}申すべく候

政名

政名というのは武蔵の名のりである。そう書いて巻き直し、封も先の裏をつかつて、

柳生どの御内

助どの

と宛てて書く。

梯子だんの下から見上げて、

「伊織」

「はい」

「使いに行つてくれ」

「どこへですか」

「柳生但馬守さまのお邸へ」
やしき

「はい」

「所はどこか、知っておるまい」

「聞きながら参ります」

「む、賢い」

と、武蔵は頭をなでて、

「迷わずに行つて来いよ」

「はい」

伊織はすぐ草履を穿^はく。

宿のおかみさんはそれを聞いて、柳生様のお邸なら誰でも知っているから、聞きながら行つても分るが、ここの本通りを出て、街道をどこまでも真っすぐに行き、日本橋を渡つたら、河に沿つ

て左へ左へとおいで——そして木挽町こびきちょうと聞いて行くんだよと、親切に教えてくれる。

「あ。あ。わかったよ」

伊織は、外へ出られるのが欣うれしかった。しかも使いの行く先が、柳生様だと思つくと、手を振つて歩きたくなつた。

武蔵も、草履を穿はいて、往来へ出た。——そして伊織の小さい姿が、博労宿と鍛冶屋の四つ角を左へ曲がつたのを見届けて、

(すこし賢かしこすぎる)

と、ふとそんなことを思いながら——宿の斜向すじむかいの「御たまおんい研とぎ所どころ」の板が出ている店を覗のぞいた。

店といつても、格子のないしもた家やみたいな構えで、商品らし

い物は何も見あたらない。

はいるとすぐ、奥の細工場さいくばから台所まで繞めぐっているような土間だった。右側は一だん高い框かまちになっていて六畳ばかり敷いてある。そして、そこを店とすれば、店と奥との堺さかいには、注連しめが張り廻してあるのが——すぐ武蔵の眼についた。

「御免」

と、武蔵は土間に立った。——わざわざ奥へ向っていったのではない。——すぐその何も無い壁の下に、たった一つある頑丈な刀箱に頬杖をついて、絵に描いた莊子そうしのように、居眠りをしてる男がある。

それが亭主の厨子ずしのこうすけ野耕介という男らしいのである。肉の薄い、

そして粘土ねんどのような青い顔には研師のようなするどさも見えない。
 月さかやき代おとがいから顎あごまでは、怖ろしく長い顔に見えた。その上にまた、
 長々と、刀箱から涎よだれをたらして、何時覚むべしとも見えない体ていな
 のである。

「ごめん！」

少し声を張って、武蔵はもう一度、莊子の寝耳を訪れた。

かたな談義

武蔵の声が、ようやく耳にはいったとみえ、厨子野耕介は、百年の眠りから今醒めたように、おもむろに顔を上げて、

「……?」

おや、といたげに、武蔵のすがたを、まじりまじり眺めている。

ほどへ
程経て、

「いらつしやいまし」

やっと、自分が居眠っていたところへ客が来て、何度も起されたことを覚つたらしい。にたりと、涎のあとを掌でこすつて、

「何か御用で」

と、膝を直している。

怖ろしく暢^のんびりした男である。看板には「御たましい研^{とぎどこ}所^ろ」と高言しているが、こんな男に武士の魂を研がせたら、とんだ鈍^{なまくがたな}ら刀になつてしまふのではあるまいか——一応案じられもする。

だが、武蔵が、

「これを」

と、自分の一腰を差し出して、研^とぎをかけてもらいたいという
と、耕介は、

「拝見いたします」

さすがに、刀に對^{むか}うと、瘦せた肩を、突^{とつこつ}兀^{そび}と聳え立て、片手
を膝に、片手を伸ばして、武蔵の腰の刀^{もの}を取つて、慇^{いんぎん}懃に頭を

下げた。

人間が来た時には、ぶあいそに下げもしなかつた頭を、刀に対しては、まだそれが名刀か鈍刀かも知れないうちから——まず鄭重にこの男は礼儀をする。

そして懷紙をふくみ、鞆さやをはらつて、静かに、肩のあいだに白刃を立てながら、せつぱから切先まで、ずっと眼をとおしているうちに、この男の眼は、どこからかべつな物を持って来ては箆はめこんだように、爛らんとして、耀かがやきだした。

ぱちんと、鞆におさめ、何もいわずにまた、武蔵の顔を見ていたが、

「お上がりくだされい」

ずっと膝を退ひいて、初めて円座をすすめる。

「では」

と、武蔵は辞退せずに上がって坐つた。

刀の手入れも手入れであるが、実をいえば、ここの板看板に本ほん阿弥門流としてあつたので、京出きやうでの研師とぎしに違ちがひないと思うと同時に、恐らく本阿弥家の職しよく方かた長屋の一門下であろうとも考えられ、その後久しく消息を欠いている光悦はご無事か——また、いろいろ世話になつた光悦の母妙秀尼みやうしゆうにもご息災か——そうしたことも聞けるであろうと思つて、にわかとぎに、研刀の頼みをかこつけて来たわけであつた。

だが耕介は、元よりそんな縁故を知ろうはずもないので、並扱

いにしているにちがいないが、武蔵の腰の刀ものを見てから、どこか改まって、

「お刀は、重代のお持ち刀ものでござりますか」と、訊く。

武蔵は、いやべつにそんな来歴のある品ではないと答えると、耕介はまた、では戦場で使った刀か、それとも常用の刀かななどと訊ね、武蔵が、

「戦場で使ったことはない。ただ、持たないには勝まさろうかと、常に帯びている刀で、銘も素姓もない安やすがたな刀でござる」

と、説明すると、

「ふむ……」

と、耕介は、相手の顔を見まもりながら、

「これを、どう研げとというご注文ですか」

と、いう。

「どう研げとは？」

「斬れるように研げと仰っしゃるのか、斬れぬ程でもよいと仰っしゃるのか」

「元より、斬れるに越したことはない」

すると耕介は、さもさも驚嘆するような顔をして、

「え。この上にも」

と、舌を巻いていった。

二

斬れるべく研ぐ刀である、斬れるだけ斬れるように研ぐのが研師の腕ではないか。

武蔵が不審^{いぶか}り顔に、耕介の顔を見ていると、耕介は首を振って、「てまえには、この刀は、お研ぎできません。どうか他^{ほか}へ研ぎにやって下さるよう^にに」

と、武蔵の腰の刀^{もの}を押しもどした。

わけのわからない男、なぜ研げないというのかと、断られた武蔵は、やや不快な顔いろをつつめなかつた。

——で、彼が黙っていると、耕介も、ぶあいそに、いつまでも、

口を緘つぐんでいる。

すると門口から、

「耕介どん」

と、近所の者らしい男が覗きこんで――

「お宅に、釣竿つりざおがあつたら貸しておくれぬか。――今なら、そ

この河端に、上げ汐しおに乗つて、うんとこさと魚が来て跳ねている

ので、いくらでも釣れるでな、釣つたら晩のお菜を分けて上げる

から、釣竿があつたら貸して下され」

と、いった。

すると耕介は、他にも、機嫌のわるいものが胸にあつたところ

とみえて、

「わしの家には、殺生をする道具などはないつ。ほかで借りたが
いい」

と、呶鳴った。

近所の男は、びっくりしたように行ってしまった。——そして
後は、武蔵を前に、苦にがりきつていたのであった。

だが、武蔵は、漸くこの男のおもしろさを見出していた。その
おもしろさというのは、才や機智のおもしろさではない。古い陶や
器きものに見立てていうならば、巧みも見得みえもない土味を剥むき出しに、
どうなと見たいように見てくれとしているノンコウ茶碗か唐津徳
利ちりみたいな味の男だった。

そういえば、耕介の横うすはげびんに薄うすはげ禿はげがあつて、鼠ねずみに齧かじられたよ

うな腫物できものに、膏藥こうやくが貼つてあるところなど——窯かまの中で傷きずになつた陶器やきものの自然のくつつきとも見えて、一だんと、この男の風情ぜいを増して見えないこともない。

武蔵は、こみあげて来るおかしさを、顔には見せぬ程なごに和んで、

「御主人」

と程経ほどへていった。

「はい」

と気のない答えよう。

「——なぜこの刀は、研げないのでござろうか。研いでも効かいのない鈍刀なまくらというわけであらうか」

「うんにゃ」

と、耕介は首をふつて、

「刀は、持主のそこもと様が、誰よりようご存じじやろが、肥ひぜん前物もののよい刀でおぎる。——ですがの、実をいえば、斬れるようにというお望みが氣にくわんでな」

「ほ。……なぜで」

「誰も彼も、およそ刀を持つて来る者が、一樣にまずいう注文が——斬れるように——じゃ。斬れさえすればいいものと思うてる。それが氣に喰わぬ」

「でも、刀を研ぎによこすからには」

いいかける武蔵のことばを、耕介は、手で抑えるような恰好をして、

「まあ、待たつしやい。そこのを説くと話は長くなる。わしの家を出て、門の看板を読み直してもらいたい」

「御^{おん}たましい研^{とぎどころ}所——としてござった。他^{ほか}にまだ読みようがござりますか」

「ぎ。そこでござる。わしは刀を研ぐとは看板に出しておらぬ。

お侍方のたましいを研ぐものなりと——人は知らず——わしの習うた刀^{かたなとき}研の宗家では教えられたのじや」

「なるほど」

「その教えを奉じますゆえ、ただ斬れる斬れると、人間を斬りさえずれば偉いように思っているお侍の刀などは——この耕介には研げんというのじや」

「ウム、一理あることと聞え申した。——してそういう風に子弟に教えた宗家とは、何処の誰でござるか」

「それも、看板に誌しるしてあるが——京都の本阿ほんあ弥あみ光悦こうえつさまは、わしの師匠でございます」

師の名を名乗る時は、それが自分の誇りのように、耕介は猫背をのばして昂こうぜん然ぜんというのであつた。

三

そこで武蔵が、

「光悦どのなら、実は自分も面識のある間で、母御ははごの妙秀尼様に

もお世話になったことがある」

と、その当時の頃の思い出を一つ二つ話すと、ずしのこうすけ厨子野耕介は非常な驚き方をして、

「ではもしや貴方は、一乗寺下り松で、一世の剣名を轟かせた、とどろ宮本武蔵様ではございませぬか」

と、眼をすえていう。

武蔵は、彼のことばが、誇張に聞えて、少しむず痒くがゆ思いながら、

「されば、その武蔵でござる」

いうと耕介は、貴人へ対いむか直すように、ずっと席を退さげて、

「よもや武蔵様とは知らず、先ほどからしやか釈迦に説法も同様な過言

——どうぞ真つ平おゆるしのほどを」

「いやいや、御亭主のお話には、拙者も教えられるふしが多い。光悦どのが、弟子に諭さとされたという言葉にも、光悦どのらしい味がある」

「ご承知の通り、宗家は室町將軍の中世から、刀のぬぐいや研とぎをいたして、禁裡きんりの御劍ぎよけんまで承つておりますが——常々師の光悦が申すことには——由来、日本の刀は、人を斬り、人を害すために鍛えられてあるのではない。御代みよを鎮しずめ、世を護りたまわんがために、悪を掃はらい、魔を追うところの降魔ごうまの劍であり——また、人の道を研みがき、人の上に立つ者が自ら誠いましめ、自ら持じずるために、腰に帯びる侍のたましいであるから——それを研とぐ者もその心を

もつて研がねはならぬぞ——と何日も聞かされておりました」

「む。いかにもな」

「それゆえ、師の光悦は、よい刀を見ると、この国の泰平に治まる光を見るようだと申し——悪剣を手にすると、鞆さやを払うまでもなく、身がよだつと、嫌いました」

「ははあ」

と、思い当って、

「では、拙者の腰の刀ものには、そんな悪気が御亭主に感じられたのではありませんか」

「いや、そうした理わけでもございませんが、てまえが、この江戸へ下つて、多くの侍衆から、お刀を預かつてみますと、誰あつて、

刀のそういう大義を分つてくれるお人がないのでござります。ただ、四つ胴を払ったとか、この刀は、兜はちがね金から脳天まで切ったとか、斬れることだけが、刀だとしているような風でござります。で——、てまえはほとほと、この商売が厭いやになりかけましたが、いやいやそうでないと思ひ直し、数日前から、わざと看板を書きかえて、御おんたましい研所したたと認めましたが、それでもなお、頼みに来る客は、斬れるようにとばかりいつて見えますので、気を腐らしていた所なので……」

「そこへ、拙者までが、又またぞろ候同様なことをいつて来たので、それでお断りなされたのか」

「あなた様の場合は、また違ひまして——実は先ほど、お腰の物

を見たせつなに、余りにひどい刃こぼれと、むらむらと、拭いきれない無数の精靈の血^{あぶら}脂に——失礼ながら、益なき殺生をただ誇る素^{すろ}牢^{ろう}人^{にん}が——といやな気持ちに打たれたのです」

耕介の口を藉^かりて、光悦の声がそこにしているように、武蔵は、さし俯^{うつむ}向いて聞いていたが、やがて、

「おことばの数々、よう分りました。——なれどお案じ下さるまい、物心ついてより持ち馴れている刀なので、その刀の精^{こころ}神^{しん}を特に考えてみたこともなかつたが、今日以降は、よく胸に銘じておきます」

耕介は、すっかり気色を好くして、

「ならば、研いでさし上げましょう。いや、あなた様のような侍

のたましいを、研がせていただくのは研師の冥みよう加がと申すもので」と、いった。

四

いつか燈あかり火ともが点ともっている。

刀の研とぎを頼たのんで、武蔵が戻かえろうとすると、

「失礼ですが、代りの差料をお持ちでござりますか」と、耕介がいう。

ないと答えると、

「では、たいして良い刀ではございませんが、一ひとこし腰こし、その間だ

け、宅にある物をお用い下さいまし」

と、奥の部屋へ招く。

そして刀箆だんすや刀箱から、耕介が選り出した数本をそれへ並べて、

「どれでも、お気に召した物を、どうぞ」

と、いつてくれた。

武蔵は、眼も眩くらむ心地がして、選り取るのに迷った。元より彼も、良い刀は欲しかったが、今日まで、彼の貧囊ひんのうではそれを望んでみる余裕すらなかった。

けれど、良い刀には、必然な魅力がある。武蔵が今、数本の中から握り取った刀には、鞘さやの上から握っただけでも、何かしら、

それを鍛った刀鍛冶の魂が手にこたえてくるような気がした。

抜いて見ると、案のじよう、吉野朝時代の作かと思われるに
おの麗うるわしい刀である。武蔵は自分の今の境遇や気持には、やや優
雅に過ぎるかと思つたが、燈下にそれを見入っているまに、もう
その刀を手から離すのも惜しい気がして、

「では、これを——」

と、所望した。

拝借するといわなかつたのは、もう是非かかに関わらず、返す気持
が起らなかつたからである。名工の鍛うった名作には、人の気持を
そこまでつかむ怖ろしい力が必然あるのであつた。武蔵は心のう
ち、耕介の返辞を待つまでもなく、どうかしてこれを、自分の持

物にしたいと思つた。

「さすがに、お目が高い」

耕介は後の刀を、仕舞いながらいつた。

武蔵は、その間も、所有慾に煩悶はんもんした。売つてくれといえ、莫大な刀であろうし……などと思ひ惑つたが、どうしても抑えきれなくなつて、いい出した。

「耕介どの、これを拙者に、お譲りくださるわけにはゆかないでしようか」

「差上げましょう」

「お代は」

「てまえが求めた元値でよろしゅうございます」

「すると何程」

「金二十枚でございます」

「……………」

武蔵は、よしない望みと、よしない煩悶を、ふと悔くいた。そんな金のある身ではなかつた。で、彼はすぐ、

「いや、これは、お返しいたしましょう」

と、耕介の前へ戻した。

「なぜですか」

と、耕介はいぶかつて――

「お買いにならずとも、いつまでも、お貸し申しておきますから、どうかお使いなさいまして」

「いや、借りておるのは、なおさら心もとない。一目見ただけでも、持ちたいという慾望にくるしむのに、持てぬ刀と分りながら、しばしの間身に帯びて、またそちらへ返すのは辛うござる」

「それほど、お気に召しましたかな……」

と耕介は、刀と武蔵とを見くらべていたが、

「よかろう、それまでに、恋いなされた刀なら、此刀はあなたへ嫁にあげるとしよう。その代りに、あなたも手前に、何か、身に応じたことをして下さればよい」

うれ
欣しかつた。武蔵は遠慮なく、まず貰うことを先に決めた。それから礼を考えるのであつたが、無一物の一劍生けんせいには、何も酬むくいる物がなかつた。

すると耕介が、あなたは彫刻をなさるそうで、そんなことを、師の光悦から聞いていましたが、何か、観音像のような物でも、ご自分で彫った物があつたら、それを手前に下さい。それと取換えということにして、刀は差上げましょう——と、彼の工面くめん顔がおを、救うようにいつてくれた。

五

手すさびの観音像は、久しく旅包みに負つて持ち歩いてしたが、法典ヶ原に遺のこして来たので、今はそれもない。

で数日の余裕を与えてくれれば特に彫つても、この刀を所望し

たい——と武蔵がいうと、

「元より、直ぐでなくても」

と、耕介は当然のこととしているのみか、

ぼくろうやど

「博労宿にお泊りなさるくらいなら、てまえどもの細工場の横に、中二階の一間まが空いておりますが、そこへ移っておいでなさいませんか」

と、願つてもないことだった。

あした

では、明日からそこを拝借して、事の序ついでに観音像も彫りましょ

うと、武蔵がいうと耕介も欣よろこんで、

「それでは一応、そのこの部屋を見ておいて下さい」

と、奥へ案内する。

「然らば」

と、武蔵は従ついて行つたが、元よりさして広い家でもない。茶の間の縁を突き当つて五、六段のはしごを上がると、八畳の一室があり、窓のわきの杏あんずこずえの梢すえが、若葉に夜露をもつていた。

「あれが、研とぎをする仕事場なので——」

と主あるじが指さす小屋の屋根は、牡蠣かきの貝殻で葺ふいてあつた。

いつの間に吩咐いひつけけたのか、耕介の女房がそこに膳ぜんを運んで来て、

「まあ、一献こん」

と、夫婦してすすめる。

杯が交わされてからは、客でもなく主あるじでもなく、膝をくずして、

お互いに胸襟きょうきんをひらき合つたが、話は、刀のほかには出ない。

その刀のこととなると、耕介は眼中に人もない。青い頬は少年のように紅^{あか}らみ、口の両端に唾^{つば}を噛み、ともすれば、その唾が相手へ飛んで来ることも意に介さない。

「刀は、わが国の神器だとか、武士のたましいだとか、皆口だけでは仰つしやるが、刀をぞんざいにすることは、侍も町人も神官も、みな甚だしいものですな。——てまえは或る志を抱いて、数年間、諸国の神社や旧家を訪れ、古刀のよい物を観^みようものと歩いたことがあります。古来有名な刀で満足に秘蔵されている物が余りに尠^{すく}ないので悲しくなりましたよ。——例えば、信州諏訪^{すわ}神社には三百何十口^{ふり}という古来からの奉納刀があります。この中で、錆^{さび}ていなかっただのは、五口^{ふり}ともありませんでした。また、

伊予国いよのくにの大三島神社の刀かたなぐら蔵は有名なもので、何百年来の所蔵が三千口ふりにも上っておりますが、凡そ一カ月も籠こもつて調べたところ、三千口のうち光っている刀は十口ともなかったという、実に呆れた有様です」

——それからまた、彼は、こうもいう。

「伝来の刀とか、秘蔵の名剣とか、聞えている物ほど、ただ大事がるばかりで、赤鰯あかいわしにしてしまっているのが多いようです。

かあい子かあいこを盲愛しすぎて、お馬鹿に育ててしまう親のようなものですな。いや人間の子は、後からでも良い子が生れるから、数の中には、世間の賑わいに、少しはお馬鹿が出来てもいいかも知れませんが、刀はそうは参りませんぞ——」

と、ここでは口ばたの唾をいちど収め、眼の光を改めて、痩せた肩をいちだんと尖り立てる。

「刀は、刀ばかりはですな。どういふものか、時代が下るほど、悪くなります。室町から下って、この戦国になってからは、愈

《いよいよ》、鍛冶の腕が荒んで参りました。これから先も、なおなお、悪くなって行くばかりじゃないかと思われるんで——古刀は大事に守らなければいけないとてまえは思う。いくら今の鍛冶が、小賢しく、真似てみても、もう二度と、この日本でもできない名刀を——実に、可憐くやしいことじゃございませんか」

と、いうと、何思ったか、ふと立ち上がって、

「これなども、やはり他から研を頼まれて、預かっている名刀の

一つですが、ごらんなさい、惜しい錆さびをわかせています」

と、怖ろしく長い太刀作りの一刀を持ち出して来て、武蔵の前へ、話題の実証として置いた。

武蔵は、その長剣を何気なく見て、はつと驚いた。これは佐々木小次郎の所有する「物干竿」にちがいはなかった。

六

考えてみれば不思議はない。ここは研師とぎしの家であるから、誰の刀が預けられてあろうとも、べつだん奇とするには当たらない。

けれど、佐々木小次郎の刀を、ここで見ようとは思いがけない

ことと、武蔵は追想に耽りながら、

「ほ、なかなか長ながもの刀でござりますな。これほどな刀を差しこなす者は、相応な侍でございましょう」

と、いった。

「さればで」

と、耕介も合点して、

「多年、刀は観みていますが、これほどな刀は、まあ尠すくない。ところろが——」

物干竿の鞆さやをはらい、みねを客の方へ向けて柄つかを手渡しながら、「ごらんなさい、惜しい錆さびが三、四カ所もある。しかし、そのままだいぶ使つてもいる」

「なるほど」

「幸い、この刀は、鎌倉以前の稀れな名工の鍛刀ですから、骨は折れますが、錆さびの曇りも脱とれましょう。古刀の錆はサビても薄い膜まくにしかなくておりませんから。——ところが近世の新刀となると、これほど錆させたらもうだめですわい。新刀の錆は、まるで質たちのわるい腫物できもののように地鉄じがねの芯しんへ腐りこんでいる。そんなことでも、古刀の鍛冶と、新刀の鍛冶とは、較くらべ物ものになりはしません」

「お納めを」

と、武蔵もまた、刃を自分のほうに向け、みねを耕介の方にして刀を返した。

「失礼ですが、この刀の依頼主は、この家^やへ、自身で見えましたか」

「いえ、細川家の御用で伺いました時、御家中の岩間角兵衛様から、戻りに邸^{やしき}へ寄れと申され、そこで頼まれて参りましたので。

——何か、お客の品だとかいいましたよ」

「^{こしら}拵えもよい」

^{ともし}燈の下に、武蔵がなお、しげしげと見入りながら^{つぶや}呟くと、

「太刀作りなので、今までは肩に負って用いていたが、腰へ差せるように、^{あらた}革めてくれという注文ですが、よほどな大男か、腕に覚えがないと、この^{ながもの}長刀を腰にさして扱うには難しい」

と、耕介も、それを見ながら、呟くようにいった。

酒も体にまわり、だいぶ主の舌もくたびれて来たらしい。武蔵は、この辺でと思い立ち、程よく辞去して戸外へ出てきた。

外へ出てすぐ感じたことは、町の何処一軒も起きていない暗さであった。そう長い時間とも思わなかったが、案外長坐していたものとみえる。夜はもうよほど更けているに違いなかった。

しかし旅宿はすぐ斜向いなので何の苦もない。開いている戸の間からはいつて、寝臭い暗闇を撫でながら二階へ上がった。――

そして伊織の寝顔をすぐ見ることであらうと思つていたところ、二つの蒲団はしいてあるが、伊織の姿は見えないし、枕もきちんと並んでいて、まだ人の温みに触れた気配もない。

「まだ帰らぬのであらうか」

武蔵は、ふと、案じられた。

馴れない江戸の町——どこをどう道に迷っているのかもわからない。

梯子だんを降り、そこに寝そべっている寝ずの番の男を揺り起して訊ねると、寝ぼけ眼まなこで、

「まだ帰っておいでなさらねえようですが、旦那と一緒にやなかつたのでございますか」

と、武蔵が知らないことを、かえって不審いぶかり顔にいう。

「——はてな？」

このまま寝られもしない。武蔵は再び漆うるしのような外の闇へ出て、軒下に立っていた。

道草ぎつね

一

「ここが木挽町か」

と、伊織は疑った。

そして途々、道を教えてくれた者に対して、

「こんな所に、お大名の家なんかあるものか」

と、腹を立てて独り思った。

彼は、河岸に積んである材木に腰かけて、火照ほてった足の裏を、

草でこすった。

材木の筏いかだは、堀の中にも、水が見えないほど浮いていた。そこから二、三町先の端はすれはもう海で、闇の中に、潮うしおの白ひらい仄めきだけしか見えはしない。

それ以外は、渺びようとした草原と、近頃、埋めたばかりの広い土だった。もつとも其処此処と、ポチポチ灯あかりの影は見えるが、近づいて見ると、それは皆、木挽こびきや石工いしくの寝小屋だった。

水に近い所には、材木と石ばかりが、山をなしていた。考えてみると、江戸城さかんも旺さかんに修築しているし、市街にもどんどん家屋が建って行くので、町というほど、木挽の小屋が集まっているのも道理である。けれど、柳生但馬守ともある人の邸やしきが、こんな職人

小屋の部落と並んであるのは変だ——いやあるものじゃない——と伊織の幼い常識でも考えられるのであった。

「困ったな」

草には夜露がある。板みたいに硬くなった草履を脱いで、火照ほてった足で草を弄なぶつっていると、その冷たさに、体の汗も乾いてきた。尋ねる邸は知れないし、余りに夜も更けてしまつて、伊織は、帰るにも帰れなかつた。使いに来て、使いを果さずに帰ることは、子ども心にも、恥辱に思われた。

「宿屋のおばあが、いい加減なことを教えたから悪いんだ」

彼は、自分が、堺さかい町ちやうの芝居町で、さんざん道草をくつて遅くなつたことは、頭から忘れていた。

——もう訊く人もいない。このまま夜が明けてしまうのかと思うと伊織は、突然悲しくなつて、木挽小屋の者でも起して、夜の明けないうちに、使いを果して帰らなければならぬと、責任感に責められて来た。

で——彼はまた、歩き出した。そして掘建小屋の灯を頼りに歩き出した。

すると、一枚の菰こもを、番傘のように肩に巻いて、その掘建小屋を覗き歩いている女があつた。

鼠鳴きして、小屋の中の者を、呼び出そうとしては、失望して、彷徨さまよつている売笑婦であつた。

伊織は、そういう種類の女が、何を目的にうろついているのか、

元より知らないので、

「おばさん」

と、馴々しく声をかけた。

壁みたいな白い顔をしている女は、伊織をふり顧かえつて、近くの酒屋の丁稚でっちとでも見違えたのか、

「てめえだろ、さつき、石をぶつけて逃げたのは」
と、睨みつけた。

伊織は、ちよつと、驚いた眼をしたが、

「知らないよ、おらは。——おらはこの辺の者じゃないもの」

「……………」

女は歩いて来て、ふいに、自分でおかしくなったように、げた

げた笑いでした。

「なんだい。何の用だえ」

「あのね」

「かあいい子だね、おまえ」

「おら、使いに来たんだけど、お邸やしきが分らないで困っているんだ

よ。おばさん、知らないか」

「どこのお邸へゆくのか」

「柳生但馬守様」

「何だつて」

女は、何がおかしいのか、下品に笑いこ転けた。

二

「柳生様といえは、お大名だよおまえ」

と女は、そんな大身の所へ用があつて行くという伊織の小さな身なりを、見下^{みくだ}してまた笑つた。

「——おまえなんぞが行つたつて、御門を開けてくれるもんかね。將軍様の御指南番じゃないか。中のお長屋に、誰か知ってる人でもあるのかえ」

「手紙を持って行くんだよ」

「誰に」

「木村助九郎という人に」

「じゃあ、御家来かい。そんなら話は分つてゐるけれど、おまえのいつてるのは、柳生様を懇意みたいにいうからさ」

「どこだい、そんなことはいいから、お邸を教えておくれよ」

「堀の向う側さ。——あの橋を渡ると、紀伊様のおくら屋敷、そ

のお隣が、京きょう極ごく主膳様、その次が加藤喜介様、それから松平

すおうのかみ周防守様——」

女は、堀の向うに見える、浜倉だの、堀だのの棟を、指で数えて、

「たしか、その次あたりのお屋敷がそうだよ」

と、いう。

「じゃあ、向う側も、木挽町こびきちょうつていうのかい」

「そうさ」

「なあんだ……」

「人に教えてもらつて、なあんだとは何さ。だけど、おまえは可愛い子だね。あたしが、柳生様の前まで、連れて行つて上げるからおいで」

女は、先に歩き出した。

からかさ傘のお化けみたいに、こも菰をかぶっている姿が、橋の中ほどまでゆくとすれ交つたちが酒くさい男が、

「ちゅっ」

と、鼠鳴きして、女の袂たもとに戯れた。

すると女は、連れている伊織のことなどは、すぐ忘れて、男の

あとを追いかけて行き、

「あら、知ってるよこの人は。——いけない、いけない、通すも
んか」

男を捉とらえて、橋の下へ、引きずり込もうとすると、男は、

「はなせよ」

「いやだよ」

「かねがないよ」

「なくてもいいよ」

女は、モチみたいに男にねばりついたまま、ふと、伊織の呆ツ
気にとられている顔を見て——

「もう分ってるだろ。わたしはこの人と用があるんだから先へお

いで」

と、いった。

だが伊織は、まだ不思議な顔して、大人の男と女が、むきになつて争つている状を眺めていた。

そのうちに、女の力が勝つたものか、男がわぎと曳かれて行くのか、男女は橋の下へ、一緒に降りて行つた。

「……？」

伊織は、不審を覚えて、こんどは橋の欄干から、下の河原をのぞいた。浅い河原には雑草が萌えていた。

ふと、上を見廻すと、女は、伊織が覗きこんでいるので、

「ばかッ」と、怒つた。そして、打ちかねない顔つきをして、河

原の石を拾いながら、

「ませてる餓鬼だね」

と、投げつけた。

伊織は、胆をつぶして、橋の彼方へ、どんどん逃げだした。曠野のひと一ツ家やに育った彼だが、今の女の白い顔ほど、恐こわいものを見たことはなかった。

三

河を背なかにして、倉がある、塀がある。また、倉がつづく、塀がつづく。

「あ、ここだ」

伊織は、独り言に、思わずそういつた。

浜倉の白壁に、二階笠の紋が、夜目にもはつきり見えたからだ。柳生様は二階笠ということは、はやりうた流行歌でよく唄うので、はつと思ひ出したのであろう。

倉のわきにある黒い門が、柳生家にちがいない。伊織は、そこに立って、閉まっている門をどンドン叩いた。

「何者だっ」

叱るような声が、門の中から聞えた。

伊織も、声いっぱい、

「わたくしは、宮本武蔵の門人でございます。手紙を持って、使

いに参りました」

と、呶鳴った。

それからも、ふた言三言、ことみこと門番は何かいったが、子供の声をいぶかりながら、やがて、門を少し開けて、

「なんだ今時分」

と、いった。

その顔の先へ、伊織は、武蔵からの返事をつき出して、

「これを、お取次して下さい。ご返事があるなら、貰って帰ります。なければ、置いて帰ります」

門番は、手に取って、

「なんじゃ……？ ……おいおい子ども、これは、御家中の木村

助九郎様へ持って来た手紙じゃないか」

「はいそうです」

「木村様はここにはおらんよ」

「では、どこですか」

「日ヶ窪ひくぼだよ」

「へ。……みんな木挽町だって、教えてくれましたが」

「よく世間でそういうが、こちらにあるお邸は、お住居ではない。

お蔵やしきと、御普請ごふしんお手伝いのためにある材木の御用所だけだ」

「じゃあ、殿様も御家来方も日ヶ窪とやらにいるんですか」

「うむ」

「日ヶ窪って、遠いんですか」

「だいぶあるぞ」

「どこです」

「もう御府外に近い山だ」

「山つて？」

「麻布村あそぶだよ」

「わからない」

伊織はため息をついた。

だが、彼の責任感は、なおさら彼をこのままで帰る気持にはさせない。

「門番さん、その日ヶ窪とやらの道を、絵図に書いてくれないか」
「ばかをいえ。今から、麻布村あそぶまで行ったら、夜が明けてしまう

ぞ」

「かまわないよ」

「よせよせ、麻布ほど、狐のよく出る所はない。狐にでも化かばされたらどうするか。——木村様を知ってるのかおまえは」

「わたしの先生が、よく知っているんです」

「どうせ、こう遅くなつたんだから、米倉へでも行つて、朝まで、寝てから行つたらどうだ」

伊織は、爪を噛んで、考えこんでしまった。

そこへ蔵役人らしい男も来て、仔細を聞くと、

「今から、子供一人で、麻布村へなど行けるものか。辻斬りも多いのに——よく博労町から一人で来たものだな」

と、つぶやき、門番と共に、夜明けを待てとすすめてくれた。伊織は、米倉の隅へ、鼠のように、寝かしてもらった。しかし彼は、余りに米が沢山にあるので、貧乏人の子が黄金の中へ寝かされたように、少しとろとろとするとうなざ魘れていた。

四

寝るともう直ぐ、正体もない顔つきは、伊織も、まだやはり他愛のない少年でしかない。

蔵役人も、彼を忘れてしまい、門番からも忘れられて、米倉の中にぐっすり眠り込んだ伊織は、翌る日の午ひるも過ぎた頃、

「おや？」

がばと、醒めるなり直ぐ、

「たいへんだ」

と、使いの任務を思い出して、狼狽した眼をこすりながら、藁わらと糠ぬかの中から飛び出して来た。

陽なたへ出ると、彼は、ぐらぐらと眼が眩まわつた。ゆうべの門番は、小屋の中で、午ひるの弁当を喰べていたが、

「子ども。今起きたのかい」

「おじさん、日ヶ窪へ行く道の絵図を書いておくれよ」

「寝坊して、慌あわてたな。お腹なかはどうだ？」

「ペコペコで、眼がまわりそうだよ」

「ははは。ここに一つ、弁当が残っているから喰べてゆくがいい」
——その間に、門番は、麻布村へ行くまでの道すじと、柳生家のある日ヶ窪の地形を、絵図に書いてくれた。

伊織は、それを持って、道を急ぎだした。使いの大事なことは、頭に沁しみているが、ゆうべから帰らないで、武蔵が心配しているだろうということは、少しも考えていなかった。

門番の書いてくれた通り、おびただ夥しい市街を歩き、その町を貫いている街道を横ぎって、やがて江戸城の下まで行った。

この辺は、何処も彼かしこ処も、夥ほりしい濠が掘られ、その埋うめ土の上つちに侍屋敷だの、大名の豪壮な門ができていた。そして濠には、石や材木を積んだ船が、無数にはいつているし、遠くみえる城の石

垣や曲輪くるわには、朝顔を咲かせる助け竹のように、丸太足場が組まれてあつた。

日比谷の原には鑿のみの音や、手斧ちようなのひびきが、新幕府の威勢を謳歌していた。——見るもの、耳に聞えるもの、伊織には、めずらしくない物はなかつた。

手折たおるべい

武蔵の原の

りんどう、桔梗ききよう

花はとりどり

迷うほどあるが

あの娘こ思えば

手折れぬ花よ

露しとど

ただ裾すそが濡れべい

石曳き普請ぶしんの石曳きたちは、おもしろそうに歌っているし、鑿や手斧が、木屑を飛ばしている仕事にも、彼は、足を止められて、思わず道草を喰っていた。

新しく、石垣を築く、物を建てる、創造する。そうした空気は少年の魂と、ぴったり合致して何となく、胸がおどる。空想が飛びひろがる。

「ああ、早く、大人おとなになつて、おらも城を築きたいな」

彼は、そこらに監督して歩いている侍たちを見て、恍惚として

いた。

——そのうちに、濠の水は、
あかねいろ 茜色にそまり、
ゆうがらす 夕鴉の啼
 く声をふと耳にして、

「あ。もう陽が暮れる」

と、伊織はまた、急ぎ出した。

眼をさましたのが、午過ぎひるである。伊織は一日の時間を、きよ
 うは勘違いしていた。気がつくど、彼の足は、地図をたよりに、
 あたふたと急ぎ出し、やがて、麻布村の山道へさしかかっていた。

五

暗やみ坂とでも称いいそうな、木下このした闇やみを登りきると、山の上には、まだ西陽があたつていた。

江戸の麻布の山まで来ると、人家は稀れで、わずかに、彼方此方の谷底に、田や畑や農家の屋根が、点々と見えるに過ぎない。

遠いむかし、この辺りは、麻生あさおう里とも、麻布留山あさふるやまとも称よばれ、とにかく麻の産地であつたそうだ。——天てんぎ慶よう年中、平たい将らのまさ

かど門が、関八州にあばれた頃は、ここに源經つねもと基が対峙たいじしていたことがあり、またそれから八十年後の長元年間には、平忠恒ただつねが叛乱に際し、源頼信は征夷大將軍に補せられて、鬼丸の御劍を賜わり、討伐の旗をすすめて、ここ麻生あさおう山に陣を張り、八州の兵をまねき集めたともいい伝えられている。

「くたびれた……」

一息に上つて来たので、伊織はつぶやきながら、芝の海や、渋谷、青山の山々、今井、飯倉いいくら、三田、あたりの里を、ぼんやり見廻していた。

彼のあたまには、歴史も何もなかったが、千年も生きて来たよ
うな木だの、山間やまあいを流れてゆく水だの、ここらの山や谷のたた
ずまいは、麻生おう往古むかし、平氏や源氏をつわもの輩ばらが、野に生れた
道の——武家発生の故郷ふるさとだった時代の景色を——何とはなく感
じさせるものが、まだ残っていた。

どーん

どん、どん、どーん

「おや？」

どこかで太鼓の音がする。

伊織は、山の下をのぞいた。

鬱蒼とした青葉の中に、神社の屋根の鰹かつおぎ木が見える。

それは今、登って来る時に見て来た、飯倉いいぐらの大神宮さまだった。

この辺には、御所のお米を作る御田みたという名が残っていた。そして伊勢大神宮の御厨みくりやの土地でもあった。飯倉という地名も、そこから起つたのであろう。

大神宮さまとは、どなたを祀まつったものであるか。これは伊織もよく知っていた。武蔵に就いて勉強しない前からだって、それだ

けは知っていた。

——だからこの頃急に、江戸の人たちが、

(徳川様、徳川様)

と、^{あが}崇め奉るようになると、伊織はへんな気もちがした。

今も、たつた今、江戸城の大規模な改修工事をながめ、大名小路の金碧こんぺきさんらんたる門や構えを見て来た眼で——この暗やみ坂の青葉の底に、そこらの百姓家の屋根と変らない——ただ鯉木と注連しめだけが違う——^{わび}佗しいお宮を見ると、^{ななお}猶々、へんな気もちがして、

(徳川のほうが偉いのかしら)

と、単純いづかに不審いづかった。

(そうだ、こんど、武蔵さまに訊いてみよう)

やっと、そのことは、それで頭にかたづけしたが、肝腎な柳生家の屋敷は？——さてここからどう行くのか。

これはまだちつともはつきりしていないのである。そこで彼はまたふところから門番にもらった絵図を出し、ためつすがめつ、(はてな?)

と、小首を傾かしげた。

何だか、自分のいる位置と絵図とが、ちつとも、符合しないのだ。絵図を見れば、道が分らなくなり、道を眺めると、絵図が分らなくなる。

(変だなあ)

よく陽のあたる障子の中にいるように、辺りは陽が暮れるほど反対に、明るくなつて来る気がするが——それへ薄つすらと夕靄ゆうもがかかつて、眼をこすつてもこすつても、睫毛まつげの先に、虹みたいな光が遮さえぎつてならなかつた。

「けツ！　こん畜生つ」

何を見つけたか。

伊織は、やにわに跳ね飛んで、いきなり後ろの草むらを目かけ、いつも差している野刀の小さいので抜き打ちに斬りつけた。

ケーン！

と、狐が躍つた。

草と、血とが、虹いろの夕陽の靄もやに、ぱつと舞つた。

六

枯れ尾花のように、毛の光る狐だった。尾か脚かを、伊織に斬られて甲かんだかい啼き声を放ちながら征矢そやみたいに逃げ走った。

「こん畜生」

伊織は、刀を持ったまま、やらじとばかり追いかける。狐も迅はやい、伊織も迅い。

傷負ておいの狐は、すこし跛行びっこをひく気味で、時々、前へのめる様子なので、しめたと思つて、近づくと、やにわに神通力を出して、何なんげん間も先へ跳んでしまう。

野に育つた伊織は、母の膝に抱かれていた頃から、狐は人を化かすものだという実話を沢山に聞かされていた。野猪の子でも兎でもむささびでも愛すことが出来たが、狐だけは憎かった、また、怖かった。

——だから今、草むらの中に居眠りしていた狐を見つけると、彼は、とたんに、道に迷っている自分が、偶然でない気がした。こいつに誑かされているのだと考えたのである。——否、すでに昨夜から、この狐が、自分のうしろに憑き纏っていたに違いないという気持さえ咄嗟に起つた。

忌々しいやつ。

殺してしまわないとまた祟る。

そう思ったから伊織はどこまでも追いかけたのであったが、狐の影は、忽ち、雑木の生い茂った崖へ跳びこんでしまった。

——だが伊織は、狡智こうちに長けた狐のことだから、そう人間の眼には見せて、実は自分の後ろにかくれておりはしないかと、そこらの草むらを、足で蹴ちらしながら、詮議せんぎしてみた。

草にはもう夕露があつた。赤まんまとよぶ草にも、ほたる草の花にも露があつた。伊織は、へなへたと坐りこんで、薄荷草はつかそうの露を舐なめた。口が渴かわいてたまらなかつたのである。

それから——彼はようやく肩で息をつきはじめた。とたんに滝のような汗がながれてくる。心臓が、どきどきと、あばれてうつ。

「……アア、畜生、どこへ行つたろう？」

逃げたら逃げたでいいが、狐に傷を負わせたことが、不安になつた。

「きつと、何か、仇をするにちがいないぞ」

という覚悟を、持たざるを得なかつた。

果たせるかな。——すこし気が落着いたと思うと、彼の耳に、妖氣のこもつた音が聞えて来た。

「……？」

伊織は、キョロキョロ眼をくぼつた。化かされまいと、心を固めた。

妖しい音は近づいて来る。それは笛の音に似ていた。

「来たな……」

伊織は、眉に唾つばを塗りながら、用心して起ち上がった。

見ると、彼方から女の影が夕靄ゆうもやにつつまれてくる。女は、羅ろう衣すものの被衣かつぎをかぶり、螺鈿鞍らでんぐらを置いた駒へ横乗りのに騎のつて、手綱を、鞍のあたりへただ寄せあつめていた。

馬には、音楽が分るとかいうが、いかにも笛の音が分るように、馬上の女がふく横笛に聞き惚とれながら、のたり、のたりと、緩のろい脚を運んで来るのだった。

「化けたな」

と、伊織はすぐ思った。

うすずく陽を背後うしろにして、馬上に笛をすさびながら来る被衣の麗人は、まったく彼ならでも、この世の人とも思えなかった。

七

伊織は、青蛙のように、小さくなって、草むらに屈みこんでいた。

そこはちようど、南の谷へ降りる坂道の角になっていた。——もし女が馬上のまま、ここまで来たら、不意に斬りつけて、狐の正体を剥いでやろう——と、そう考えていたのである。

真つ赤な日輪は今、渋谷の山の端に沈みかけて、覆輪ふくりんをとつた夕雲が、むらむらと宵の空をつくりかけていた。地上はもう夕闇だった。

——おつうどの。

ふと、何処かで、そんな声がしたようだった。

（——おつうどの）

伊織は、口のうちに、口真似してみた。

疑ってみると、その声も、何だか人間放れのした五音であった。

（仲間の狐だな）

狐の友が、狐をよんだ声にちがいない。——伊織は、近づいて来る騎馬の女を、狐の化けたものと、飽くまで信じて疑わないのであった。

草の中からふと見ると、馬の背へ横乗りになった麗人は、もう坂の角まで来ていた。

この辺りには、樹が少ないので、馬上の姿は、宵闇の地上からぼかされて、上半身は、赤い夕空に、くつきりと明瞭に描かれていた。

伊織は、草むらの中に、身づくろいをしながら、

(おらの隠れていることを知らないな)

と、思つて、刀をかたく持ち直していた。

そして彼女が、もう十歩ほど出て、南の方の坂道を降りかけた
ら、飛び出して、馬の尻を斬つてやろうと考へていた。

狐というものは大概——化けている象かたちから何尺か後ろに身を置

いているものだ——これも幼少からよく聞いていた俚俗りぞくの狐狸

学を思い出して、伊織は固唾かたずをのんでいたのである。

だが。

騎馬の女性は、坂の口のでまえまで来ると、ふと、駒を止めてしまいい、吹いていた笛を、ふえぶくろ 笛 囊ふえぶくろ に納めて、帯のあいだに手挟たばさんだ。——そして——眉の上に当る被衣かつぎの端に手をかけて、

「……？」

何か、探すような眼をして、鞍の上から見まわしているのであった。

——おつうどのう。

またしても、どこかで同じ声が聞えた。——と思うと、馬上の佳人は、ニコと白い顔を綻ほころばせて、

「お。——ひょうご 兵庫さま」

と、小声にさげんだ。

するとやつと、南の谷から、坂道を上つて来たひとりの侍の影が——伊織の眼にも分つた。

——オヤツ？

伊織は、愕然がくぜんとした。

何とその侍は、跛行びっこをひいていではないか。さつき、自分が斬りつけて逃がした狐も跛行びっこだった。察するところ、この狐めは、自分に脚を斬られて逃げた狐のほうに違いない。よくもよくもこうまう巧く化けて来たもの——伊織は舌を巻くと共に、ぶるぶるツと、身ぶるいを覚えて、思わず、尿いばりを少し洩らしてしまった。

その間に、騎馬の女と、跛行の侍は、何か、ふた言三言話ことみことして

いたが、やがて侍は馬の口輪をつかんで、伊織のかくれている草むらの前を通りすぎた。

(今だ！)

と、伊織は思ったが、体がうごかなかつた。——のみならずその微かな身動きをすぐ気どつたらしく、馬のそばから振り顧つたかえ跛行の若い侍は、伊織の顔を、ぐいと睨みつけて行つた。

その眼まなざしからは、山の端の赤い日輪よりも、もつとするどい光が、ぎらりと射したような気がした。

で——伊織は、思わず草の中に俯うツ伏ぶしてしまった。生れてから十四の年まで、こんな怖いと思つたことはまだなかつた。自分の位置を覚おそえられる惧おそれさえなかつたら、わつと、声をあげて泣き

出したかも知れなかつた。

かか
ゆうど
懸り人

一

坂は急であつた。

兵庫は、駒の口輪をつかみ、
反り身そみになつて馬の脚元を撓ためな
がら、

「お通どの、遅かつたなあ」
鞍の上を振り仰いでいった。

「——参詣にしては、余り遅いし、日も暮れかかるので、叔父上は案じておられる。——で、迎えに来たわけだが、何処ぞへ、廻り道でもして来たのか」

「ええ」

お通は、鞍の前つぼへ、身を屈かがめながら、それには答えず、

「勿もつたい体ない」

と、いつて、駒の背から降りてしまった。兵庫は、足をとめて、「なぜ降りるのじゃ。乗っておればよいのに」

と、顧みる。

「でも、あなた様に口輪を把とらせて、女子おなごのわたくしが……」

「相変らず遠慮ぶかいなあ。さりとて、女子に口輪をつかませて、

わしが乗って帰るのもおかしい」

「ですから、二人して、口輪を把とつて参りましょう」

と、お通と兵庫は、駒の平首ひらくびを挟んで、両側から口輪を持ち合った。

坂を降りるほど、道は暗くなった。空はもう白い星だった。谷の所々には、人家の明りがともっている。そして渋谷川の水が音をたてて流れてゆく。

その谷川橋のてまえが、北日ヶ窪きたひくぼであり、向うの崖を、南日ヶ窪よとこの辺では称よんでいる。

その橋手前から北側の崖一帯は、看栄稟達りんたつおしょう和尚の創始されたという、坊さんの学校になっていた。

坂の途中に今見えた「曹洞宗そうとうしゅう 大学林梅檀苑せんだんえん」と書いてあった門がその入口なのである。

柳生家の邸は、ちようど、その大学林と向い合つて、南側の崖を占めているのであつた。

だから、谷あいの渋谷川に沿つて住んでいる農夫や、小商人こあきんどたちは、大学林の学僧たちを北の衆とよび、柳生家の門生たちを南の衆と呼んでいた。

柳生兵庫は、門生たちの中に交じっているが、宗家石舟斎の孫にあたり、但馬守からは甥おいにあたるので、ひとり別格な、そして自由な立場にあつた。

やまと大和の柳生本家に対して、ここはまた、江戸柳生と称されてい

た。そして本家の石舟斎が、最も可愛がっていたのは、孫の兵庫なのだった。

兵庫は二十歳を出ると間もなく、加藤清正に懇望されて、破格な高禄で、いちど肥後へ召抱えられてゆき、禄三千石を喰はんで熊本へ居着くことになっていたが——関ヶ原以後の——いわゆる関東お味方組と、かみがた上方加担の大名との色わけには、複雑極まる政治的な底流があるので去年、

(宗家の大祖父が危篤のため)

というよい口実を得た折に、いちど大和へ帰り、その以後は、(なお、修行の望みあれば)

と称して、それなり肥後へ帰らず、一兩年のあいだ諸国を修行

にあるいて、去年からこの江戸柳生の叔父の許に、足をとめてい
る身であつた。

その兵庫は、ことし二十八歳であつた。折から、この但馬守の
屋敷には、お通という一女性も居合わせた。年頃の兵庫と、年頃
のお通とは、すぐ親しくなつたが、お通の身の上には複雑な過去
があるらしいし、叔父の眼もあるので、兵庫はまだ、叔父にも彼
女にも、自分の考えは、一度も口に出したことはなかつた。

二

——だが、なおここで、説明しておかなければならないことは、

お通がどうしても、柳生家に身を寄せていたかということである。

武蔵の側を離れて、お通が、その消息を絶つてしまったのは、もう足掛け三年も前——京都から木曾街道を経て、江戸表へ向つて来た——あの途中からのことだった。

福島の間所と、奈良井の宿のあいだで、彼女を待つていた魔手は、彼女を脅迫して、馬に乗せ、山越えを押しして、甲州方面へ逃げのびた足どりだけは前に述べておいた。

その下手人げしゆにんは、まだ読者の記憶にもそう遠くはなつていない

筈の——例の本位田ほんいでんまたはち又八であつた。お通は、その又八の監視と

束縛そくばくをうけながらも、珠たまを抱いだくように、貞操を護持して、やが

て武蔵、城太郎など、行き迷はぐれた人々が、それぞれの道たどを辿つて

江戸の地を踏んでいたであろう頃には——彼女も江戸にいたのであつた。

何処に。

また、何をして。

と——今それを審つぶさに書き出すとなると、再び、二年前さかのほに遡つて語り直さなければならなくなるから、ここでは、以下簡略に、柳生家へ救われた経路だけを概説することに止とどめておく。

又八は、江戸へ着くと、

(とにかく喰う道が先だ)

と、職を搜した。

元より、職をさがして歩くにも、お通は一刻も放さない。

(上方から来た夫婦者で——)

と、どこへ行つても、自称していたのである。

江戸城の改築をしているので、石工^{いしく}、左官、大工の手伝いなどならその日からでも、仕事があつたが、城普請^{しろぶしん}の労働の辛い味は、伏見城でもさんざん嘗^なめていたので、

(どこか、夫婦して働けるような所か、家においてやる筆耕みたいな仕事でもありませんまいか)

と、相変らず、優柔不断なことばかりいい歩いているので、多少肩身を入れかけてくれた者も、

(いくら江戸でも、そんな虫のいい、お前方の注文どおりな仕事があるものか)

と、あいそをつかして、見向きもされなくなってしまうという風であつた。

——そんなことで、幾月かを過ごすうち、お通は、努めて、彼に油断させるよう、貞操にふれない限りでは、何でも、素直になつていた。

そのうち、彼女は或る日、往來を歩いていると、二階笠の紋をつけた挟はさみ箱や塗り駕籠かごの行列に行き会つた。路傍に避けて礼を執る人々の囁ささやきを聞くと、

(あれが、柳生様じゃ)

(將軍家のお手をとつて、御指南なさる但馬守たじまのかみ様じゃ)

——お通はふと、大和の柳生ノ庄にいた頃を思い出し、柳生家

と自分との由縁ゆかりを考え、ここが大和の国であつたらなどと、儂はかない頼りを胸に抱いて、その時も、又八が側にいたので茫然と見送つていと、

(オオ、やはり、お通どのだ。——お通どの、お通どの)

と、路傍の人々の散らかる中を捜し求めて、後ろからこう呼び止めた人がある。

今、但馬守の駕わきに歩いていた菅笠すががさの侍で——何と、顔を見合えば、柳生ノ庄でよく見知つている——石舟斎の高弟木村助九郎ではないか。

慈悲光明の御みほとけ仏が救いの使いを向け給うたかとはかり——お通は、取りすが継つて、

(才。あなたは)

と、又八を捨てて、彼のそばへ走り寄った。

その場から、彼女は、助九郎に連れられて、日ヶ窪の柳生家へ救われて行った。もちろんとんび鳶に油揚を攫さらわれた形の又八も、黙っている筈はなかったが、

(話があるなら、柳生家へ来い)

と、助九郎の一言に、口惜くちしげに唇をひん曲げたまま、例の臆お心くしんと、柳生家の名に、ぐの音もいえず見送ってしまったわけである。

石舟齋はいちども江戸表へは出て来なかつたが、秀忠將軍の指南役という大任をうけて、江戸に新邸を構えている但馬守の身は、本国柳生ノ庄にいながらも、たえず案じているらしかった。

今、江戸はおろか、全国的にまで、

(御流儀)

といえば、將軍家の学ぶ柳生の刀法のことであり、

(天下の名人)

といえば、第一指に、誰しも、但馬守宗矩むねのりを折るほどであった。

けれど、その但馬守でも、親の石舟齋の眼から見れば、

（あの癖が出ねばよいが）

とか、

（あの気まままで勤まろうか）

などと、昔ながらの子供に思えて、遠くから、明け暮れ取りこし苦勞をしていることは、およそ劍聖と名人の父子も、おやこ凡愚と俗才の父子も、その煩悩ほんのうさにおいては何のかわりもない。

殊に、石舟齋は、昨年あたりから病やまいがちで、そろそろ天寿をさとりと共に、よけいに、子をおもい、孫の将来についての念おもいと深くなつて来たようであつた。また、多年自分の側においた門下の四高足、出淵、庄田、村田なども、それぞれ越前家だの、さかき榊原ばら家だの、知己ちぎの大名へ推挙して、一家を立てさせ、この世の

暇いとまの心支度をしているかに見えた。

また、その四高足の中の一人、木村助九郎を国許くにもとから江戸へよこしたのも、助九郎のような世馴れた者が但馬守のそばにいれば、何かと役に立つであろうという、石舟齋の親心からであった。以上で、ざっと、柳生家のここ両三年の消息は伝えたとするが、そうした江戸柳生の新邸へ——否、もつと家庭的に、但馬守の許もとには、ひとりの女性と、ひとりの甥おいとが、どつちも、懸り人かかゆうどとして身を寄せていたのである。

それが、お通と、柳生兵庫ひょうごとであった。

助九郎がお通を連れて来た場合は、それが石舟齋かしずに侍かっていたこともある女性なので、但馬守も、

(心おきなく、何日までも足を留めておるがよい。奥向きの用な
ども手伝うてもらおう)

と、気軽であつたが、後から甥の兵庫も来て、共に寄食するよ
うになると、

(若いふたり)

という眼をもつて視なければならなくなつたので、何か、絶え
ず家長としての気ほねを抱くようになっていた。

——だが、甥の兵庫という人物は、宗むねのり矩とちがつて、至つて
気楽な性質とみえ、叔父がどう見ようが思おうが、

(お通どのはいい。お通どのはわしも好きだ)

と、いつてはばか憚らないふうであつた。しかし、その好きだ——と

いうにも多少の見得みえはつつんでいるとみえ、

(妻に)

とか、

(恋している)

とか、そんなことは、叔父にもお通にも、決して口に出すことはなかつた。

さて。

——その二人は今、駒の口輪を挟んで、とつぷり暮れた日ヶ窪の谷へ降り、やがて南面の坂を少し上ると、すぐ右側の柳生家の門前に足をとめ、兵庫がまずそこを叩いて、門番へ吠鳴った。

「平蔵、開けろ。——平蔵。——兵庫とお通さんのお戻りだぞ」

飛札ひざつ

一

但たじま馬守宗矩のかみむねのりは、まだ四十に二つ間があつた。

彼は、俊敏しゅんびんとか剛毅とかいう質たちではなかつた。どつちかと

いえば聡明そうめいな人で、精神家というよりも、理性家であつた。

その点が、英邁えいまいな父の石舟斎とも違つていたし、甥おいの兵庫の天才肌とも多分に違つていた。

大御所家康から柳生家に、

(誰ぞひとり、秀忠の師たるべき者を江戸へさし出すように)

と、いう下命かめいがあつた時、石舟齋が、子や孫や甥や門人や、多くの一門からすぐ選んで、

(宗矩むねのり、参るように)

と、いつつけたのも、宗矩の聡明と温和な性格が、適している
と見たからであつた。

いわゆる御流儀といわれる柳生家の大本たいほんとするところは、

——天下を治むる兵法
であつた。

それが石舟齋の晩年の信条であつたから、將軍家の師範たるものは、宗矩のほかにないと推挙したのであつた。

また、家康が、子の秀忠に、劍道のよい師をさがして、それに

就かせたのも、劍技に長じさせるためではなかった。

家康は、自分も奥山某（ぼう）に師事して、劍を学んでいたが、その目的は、

（見国の機を悟る——）
にあると常にいつていた。

だから御流儀なるものは、従って、個人力の強い弱いの問題よりも、まず大則として、

——天下統治の劍
であること。また、

——見国の機微に悟入する

のが、その眼目でなければならなかった。

だが、勝つ、勝ちきる、飽くまで何事にも打ち勝つて生き通す——ことが剣の発足であり、また最後まで目標である以上、御流儀だから個人試合においては弱くてもよいという建前はなり立たない。

いや、むしろ、他の諸流の誰よりも、柳生家はその威厳のためにも、絶対に、優越していなければならなかった。

そこに、絶えず、宗矩の苦悶があつた。——彼は、名誉を負つて江戸へ上つてから一門のうちで一ばん恵まれた幸運児のように見えているが、事實は、最も辛い試練に立たされていたのだった。

「甥は羨ましい」

と、宗矩はいつも、兵庫ひょうご庫の姿を見ては、心の裡うちでつぶやいた。

「ああなりたいが」

と思つても、彼には、その立場と性格から、兵庫のような自由にはなれないのだった。

その兵庫ひょうごは今、彼方かなたの橋廊下を越えて、宗矩むねのりの部屋のほうへ渡つて来た。

ここの邸は、豪壯を尊んで建築させたので、京大工きょうだいくは使わなかつた。鎌倉造りに倣ならわせて、わざと田舎大工ふしんに普請ふしんさせたものである。この辺は樹も浅く山も低いので、宗矩はそうした建築の中に住んで、せめて、柳生谷の豪宕ごうとうな故郷ふるさとの家を偲しのんでいた。

「叔父上」

と、兵庫がそこをさし覗いて、縁に膝まずいた。

宗矩は、知っていたので、

「兵庫か」

中庭の坪へ眼をやったままで答えた。

「かまいませんぬか」

「用事か」

「べつに用でもございませぬが……ただお話に伺いましたが」

「はいるがよい」

「では」

と、兵庫は初めて室^{へや}へ坐った。

礼儀の実にやかましいことは、この家風であつた。兵庫などから見ると、祖父の石舟斎などには、ずいぶん甘えられる所もあ

つたが、この叔父には寄りつく術すべがなかった。いつも端然と、真四角に坐っていた。時には、気の毒のような気持さえするほどだった。

二

宗矩は、ことば数も尠すくないたちであつたが、兵庫の来た機しおに、思い出したらしく、

「お通は」

と、訊ねた。

「戻りました」

と、兵庫は答えて、

「いつもの、氷川の社やしろへ参詣まじりに行つて、その帰り道、彼方あち此方こち、駒にまかせて歩いて来たので、遅くなつたのだと申しておりました」

「そちが迎えに行つたのか」

「そうです」

「……………」

宗矩は、それからまた、短たん檠けいに横顔を照らされたまま、しばらく口を緘つぶんでいたが、

「若い女子おなごを、いつまで邸に止めおくのも、何かにつけ、気がかりなものだ。助九郎にもいつているが、よい折に、暇を取つて、

どこぞへ身を移すようにすすめたがよいな」

「……ですが」

兵庫は、やや異議を抱くような口吻で、

「身寄りもなにもない、不愆ふびんな身の上と聞きました。ここを出ては、他ほかに行く所もないのではございますまいか」

「そう思い遣りを懸けたひには限りがない」

「心だての好いもの——祖父様おじいさまも仰せられていたそうで」

「気だてが悪いとは申さぬが——何せい若い男ばかりが多いこの邸に、美しい女がひとり立ち交じると、出入りの者の口もうるさいし、侍どもの気もみだれる」

「……………」

暗に自分へ意見しているのだ、とは兵庫は思わなかつた。なぜなら、自分はまだ妻帯していないし、またお通に対しても、そう人に訊かれて恥じるような不純な気持は持つていないと信じているからだつた。

むしろ、兵庫は、今の叔父のことばを、叔父自身が、自身へいつているように思われた。宗矩には格式のある権門から輿こしいれ入している妻室があつた。その妻室は、表方とはかけ離れていて、宗矩と琴瑟きんしつが和しているかいないかも分らないほど奥まつた所に生活しているが——まだ若いし、そうした深窓にいる女性だけに——良人の身辺にお通のような女性が現われたことは、決して、よい眼で見えていないことは想像に難かたくないことであつた。

こん夜も、浮いた顔いろでないが——時々、宗矩が、表の部屋で、ただひとり寂じやくねん然ねんとしている姿など見ると、

(何か奥であつたのではないか)

と、兵庫のような、独身者の神経にも、思い遣やられることがある。殊に、宗矩は、真面目な質たちだけに、女のいうことばだからといって、大まかに、

(黙っておれ)

と、一喝かつしておくことができない良人おととであつた。

表に対しては、將軍家師範という大任を感じていなければならぬ良人はまた、妻室へはいつでも何かと要いらない気をつかわなければならなかつた。

——といつて、そんな顔いろも愚痴も人には示さない宗矩だけに、ふと、沈^{ちんめん}湏と独りの想いに耽ることが多かつた。

「助九郎とも、相談してお煩^{わづら}いのないようになしましょう。お通どののことは、てまえと助九郎におまかせおきください」

叔父の心を察して、兵庫がいうと、宗矩は、

「はやいがよいな」

と、つけ加えた。

その時、用人の木村助九郎がちようど、次の間まで来て、

「——殿」

と、文^ふ笥^{ぼこ}を前に、灯影から遠く坐つた。

「なんじゃ」

振顧ると、その宗矩の眼まなざしに向つて、助九郎は膝をすすめ直して告げた。

「お国許もとから、ただ今早馬のお使いが到着いたしました」

三

「——早馬？」

宗矩は、思い当ることでもあるように、声を弾はずませた。

兵庫も、すぐ察して、

(さては)

と、思った。しかし口に出していいことではないので、無言の

まま助九郎の前から文笥を取次ぎ、

「何事でございましょうか」

と、叔父の手へ渡した。

宗矩は、手紙を披ひらいた。

本国柳生城の家老——庄田喜左衛門からの早打であつて、筆の
あとも走り書きに、

大祖（石舟斎）さま御事

又々、御風気のところ

此度は御模様ただならず

畏れながら旦たんせき夕たんせきに危ぶまれ申候

然し乍ながら、猶御氣丈おわに在し、

たとえ身不慮のことあるも、

但馬守は將軍家指導の大任あるもの故、

帰郷に及ばずとの仰せに候

さは仰せられ候ものの臣下の者、

談合のうえ、とりあえずまず先は飛札かくの如くにござ候

月 日

「……御危篤」

宗矩も、兵庫ひょうこも、つぶや呟いたまま、しばらく暗然としていた。

兵庫は、叔父の顔いろの中に、もうすべてが解決しているのを見た。こういう場合にあたつてもまど惑わず乱れず、すぐはら肚のきまる

ところは、やはり宗矩の聡明な点に依るものといつても感服する。

兵庫となると、ただ徒らいたずに、情がみだれて、祖父の死に顔だの、
国くに許もとの家来たちの嘆きだの——そうしたものばかり見えて時務じむ
の判断はつかなかつた。

「兵庫」

「はあ」

「わしに代つて、すぐに其方そちは発足してくれぬか」

「承知いたしました」

「江戸表の方——すべて何事もご安心なさるように——」

「お伝えいたします」

「ご看護もたのむ」

「はい」

「早打の様子では、よほどおわるいらしい。神仏の御加護をたのみ参らすばかり……急いでくれよ。お枕べに、間にあうように」

「——では」

「もう行くか」

「身軽な拙者。せめて、こんな時のお役にでも立たねば」

兵庫は、そういつて、すぐ叔父にいとまご暇乞いをし、自分の部屋へ退さがった。

彼が、旅支度をしている間に——もう国許の凶報は、召使の端にまで分つて、邸内には、どこともなく、人々の憂うれわしげな気もちが漂ただよい合つた。

お通も、いつのまにか旅支度をして、彼の部屋を、そつと訪れ、

「——兵庫様。どうぞ私も、お連れ遊ばしてくださいませ」

と、泣き伏して頼んだ。

「できないまでも、せめて、石舟齋様のお枕べに参つて万分の一の御恩返しでもさせて戴きとうございます。柳生ノ庄でも深い御恩をうけ、江戸のお邸においていただいたのも、恐らくは、大殿様の御余恵と存じあげております。……どうぞ、お召し連れ下さいますように」

兵庫は、お通の性質をよく知っていた。叔父なら断るであろうと思ひながら、彼は、その願いを断れなかつた。

むしろ、先刻宗矩さつきからの話もあつたところなので、ちようどよい折かも知れないとさえ考えられて、

「よろしい。しかし、一刻も争う旅。馬や駕かごを乗りついでも、わしに尾ついて来られるかな」

と、念を押した。

「はい。どんなにお急ぎ遊ばしても——」

と、お通は欣うれしげに、涙をふいて、兵庫の身支度をいそいそ手伝った。

四

お通はまた、但馬守宗矩たじまのかみむねのりの部屋へ行つて、自分の心もちを述べ、長い月日の恩を謝して、暇乞いをすると、

「おお、行つてくれるか。そなたの顔を見たら、さだめし御病人もお欣よろこびになるであらう」

と、宗矩も異存なく、

「大事に参れよ」

路銀や小袖の餞はなむけ別など、何くれとなく、さすがに離情をこめて心づけてくれる。

家臣たちは、門をひらき、こぞ挙つてその両側に並行して見送つた。「おさらば」

と、兵庫は一同へあつさり挨拶を残して出て行く。

お通は腰帯を裾すそみじか短短にくくり、塗ぬりの市女笠に、杖を持つていた。——その肩に藤の花を担になわせたなら、大津絵の藤娘になりそう

な——と人々はその優婉たおやかな姿が、あしたからここに見られないのを惜しんだ。

乗物は、うまやじ 駄路の行く先々で、雇うことにして、夜のうちに、三軒家あたりまでは行けようと兵庫とお通は、日ヶ窪を立つた。

まず大山街道へ出て、玉川の渡船わたしを経へ、東海道へ出ようと兵庫はいう。お通の塗笠には、もう夜の露が濡れ初そめていた。草深い谷間たにあいがわ川に沿って歩くと、やがてかなり道幅のひろい坂へかかった。

「道玄坂」

と、兵庫が独り言のように教える。

ここは鎌倉時代から、しやうよう 衝要な関東の往来なので、道は拓ひらけ

ているが、鬱蒼うっそうとした樹木が左右の小高い山をつつみ、夜となると、通る人影は稀れだった。

「さびしいかね」

兵庫は、大股なので、時々足を止めて待つ。

「いいえ」

にことして、お通は、そのたびに幾分か脚を早めた。

自分を連れていたために、柳生城の御病人の枕元へ着く日が、少しでも遅れてはすまないとい心のうちに思う。

「ここは、よく山賊の出たところだ」

「山賊が」

彼女が、ちよつと、眼をみはると、兵庫は笑って、

「昔のことだ。和田義盛よしもりの一族の道玄太郎とかいう者が、山賊になつて、この近くの洞穴ほらあなに住んでいたとかいう」

「そんな怖い話はよしましょう」

「さびしくないというから」

「ま、お意地のわるい」

「はははは」

兵庫の笑い声が、四辺あたりの闇に木魂こだまする。

なぜか兵庫は、心が少し浮いていた。祖父の危篤くにもとに国許へいそぐ旅路を——済まないと責めながらも、密ひそかに、楽しかった。思いがけなく、お通とこんな旅をすることのできた機会を、欣よろこばずにいられなかった。

「——あらっ」

何を見たか、お通は、ぎくと脚をもどした。

「なにか？」

兵庫の手は無意識に、その背を庇^{かば}う。

「……何かいます」

「どこに」

「おや、子供のようです。その道^{みち}傍^{ばた}に坐つて。……何でしょう、気味のわるい、何か、独り言をいって、喚^{わめ}いているではありませんか」

「……？」

兵庫が近づいて見ると、それは今日の暮れ方、お通と邸へもど

る途中、草むらの中にかくれていた見覚えのある童子であった。

五

兵庫とお通のすがたを見ると、

「——あつ」

何を思ったか、伊織は、やにわに跳ね起きて、

「ちくしようツ」

と、斬りつけて来た。

「あれっ」

お通がさけぶと、お通へも、

「狐め。この狐め」

子供の小腕だし、刀も小さいが、侮あなどり難がたいのは、その血相である。なにか、憑のり移りつていようように蒐かかつて来る向う見みずな切先には、兵庫も、一歩退ひかなければならなかつた。

「狐め。狐め」

伊織の声は、老婆みたいにシヤ嘎がれていた。兵庫は不審がに思つて、彼の鋭鋒を、そのなすがままに避けて、しばらく眺めていと、やがて、

「——どうだッ！」

伊織は、その刀を揮ふるつて、ひよろ長い一本の灌木をズバリと斬り、木の半身がばさつと草むらへ仆たれると、自分も共に、へなへ

など坐つて、

「どうだ！ 狐」

と、肩で息をついているのであつた。

その容子ようすが、いかにも、敵を斬つて血ぶるいでもしているような体ていなので、兵庫は初めて領うなずきながら、お通を顧みて微笑した。

「かあいそうに、この童わっぱは、狐に憑つかれているらしい」

「……ま、そういうえば、あの恐い眼は」

「さながら狐だ」

「助けてやれないものでしょうか」

「狂きちがい人と馬鹿なほは癒ならないが、こんなものはすぐ癒なる」

兵庫は、伊織の前へ廻つて、彼の顔をじいっと、睨ねめつけた。

くわつと、眼をつりあげた伊織はまた、刀を持ち直して、

「ち、畜生、まだいたかつ」

起ち上がろうとする出鼻を、兵庫の大喝が、彼の耳をつきぬいた。

「ええーいッ」

兵庫はいきなり、伊織の体を、横抱きにして駈け出した。そして坂を下ると、さつき渡った街道の橋がある。そこで、伊織の両脚を持って、橋の下から欄干の外へ吊り下げた。

「おつ母かさあん！」

かなきりごえ
金切声で、伊織はさけんだ。

とつ
「お父さん！」

兵庫はまだ、離さずに、吊り下げていた。すると三声目は、泣き声で、

「先生っ。たすけて下さいっ」といった。

お通は後ろから駈けて来て、兵庫の酷い^{むご}仕方に、自分の身が苦しむように、

「いけません、いけません、兵庫さま！ よその子を、そんな酷い^{むご}ことをしては——」

いう間に、兵庫は、伊織の体を橋の上へ移して、

「もうよかろう」

と、手を離した。

わあん、わあん……と伊織は大声で泣き出した。この世に自分の泣き声を聞いてくれる者が一人もないことを悲しむように、愈、声をあげて泣いた。

お通は、そばへ寄って、彼の肩をそつと触ってみた。もう先刻のように、その肩は硬く尖っていなかった。

「……おまえ、どこの子？」

伊織は、泣きじやくりながら、

「あっち」

と指さした。

「あっちって、どっち」

「江戸」

「江戸の？」

「ばくろ町」

「まあ、そんな遠方から、どうしてこんな所へ来たの」

「使いに来て、迷子になっちまったんだ」

「じゃあ、昼間から歩いているんですね」

「ううん」

と、かぶりを振りながら、伊織はすこし落着いて答えた。

「きのう昨日からだい」

「まあ。……二日も迷っていたのかえ」

お通は、あわ憐れをもよお催して、笑う気にもなれなかった。

六

彼女は、重ねて、

「そして、お使いとは、どこへお使いに？」

訊くと、伊織は、訊いてくれるのを、待っていたように、

「柳生様」

と、言下だった。

そしてそれ一つだけは、生命いのちがけで持っていたように、揉もみ苦

茶になった手紙を、臍へその辺りから取り出し、上書うわがきの文字を星に

透かして、

「そうだ、柳生様の中にいる、木村助九郎様つてえ人へ、この手

紙を持って行くんだよ」

と、さらにいい加えた。

ああ、伊織は何でその手紙を、折角、親切な人へ、ちよつとでも見せないのか。

使命を重んじているのか。

または、目に見えない運命の何ものかがこんな場合、物の陰にいて、わざとそうさせずにいるのか。

伊織が、彼女のすぐ前で、皺しわだらけにして握っている手紙は、お通にとって、七夕たなばたの星と星とよりも稀れに、ここ幾年、夢にのみ見て、会いも得ず、便りもなかった人の——天来の機縁に恵まれるものではないか。

それをまた。

——知らないということはずいもない。お通もべつに、眼をとめて、見ようともせず、

「兵庫さま、この子は、お邸の木村様を尋ねて来たのだそうです」と、あらぬ方へ、顔を向けてしまう。

「ではまるで、方角ちがいさまよを彷徨さまよっていたな。——だが子供、もう近いぞ。この川の流れに沿ってしばらく行くと、左の方へ登りになる。その三みつ又また道みちから、巨おおきな女め男おと松まつのある方を望んでゆけ」

「また、狐に憑つかれなないように」と、お通は危ぶむ。

だが、伊織は、ようやく霧のはれたような心地がして、もう大丈夫と自信を持ったらしく、

「ありがとう」

と、駈け出した。

渋谷川に沿って、少し行ったかと思うと、彼は、足をとめて、

「左だね。——左の方へ登るんだね」

と、念を押しながら、指さしている。

「うむ」

兵庫はうなず頷きを送って、

「暗い所があるぞ。気をつけて行けよ」

——もう返辞もしない。

伊織の影は、若葉のふかい丘道おかみちの中へ、吸われるように隠れ去った。

兵庫とお通は、まだ橋の欄らんに残つて、何を見送るともなく見ていた。

「鋭いな、あの童わっぱは」

「賢いところがありますね」

彼女は、胸の中で、城太郎と思いくらべていた。

彼女の描いている城太郎は、今の伊織に少し背を足したぐらいなものであるが、数えてみると、今年はもう十七歳になる。

(どんなに変つたらう)

と、思う。

ひいてはまた、武蔵を恋う痛いような物思いが、胸さきへ募りつのかかつて来たが、

(いや、ひよつとしたら、思いがけない旅先で、かえつてお目にかかれようも知れぬ)

と、はかな儂い頼みにまぎ紛らわしてしまふべく、この頃は、恋の苦しみに耐えることにも馴れた心地である。

「おう急ごう。こよいは仕方がないが、この先々では、もう道ぐさはしておられぬぞ」

兵庫は、自分をいまし誡めていう。どこかのんき暢気な兵庫には、そういう弱点のあることを、自分でも感じているらしいのだ。

——かくてお通も、道を急いだが、心は道の辺べの草にも措おいて、

(あの草の花も、武蔵さまが踏んだ草ではなからうか)

などと、連れにも語れぬ想いばかりを独り胸に描いては歩いた。

仮名かながき 経きょうてん 典

一

「オヤ、お婆ば、手習いか」

今、外から戻つて来たお菰こもの十郎は、お杉ばばの部屋をのぞき

込むと、呆れたようなまた感心したような——顔をした。

そこは、半はんがわら瓦 弥次兵衛の家。

ばばは振向いて、

「おいのう」

と答えたのみで、うるさそうにまた、筆を執り直し、何か書き物に余念がない。

お菰は、そつと側へ坐つて、

「なんだ、お経きようもん文を写しているんだな」

と、つぶや呟く。

ばばが耳も傾けないので、

「もういい年よりのくせに、今から手習いなんぞして、どうするつもりだ。あの世で手習い師匠でもする気かえ」

「やかましい。写経は、無我になつてせねばならぬ。去いんでくだ

され」

「今日は外で、ちと耳よりな拾い物をしたので、はやく聞かしてやろうと思つて帰つて来たのに」

「後で聞きましよう」

「いつ終るのか」

「一字一字、菩提ぼだいの心になつて、ていねいに書くので、一部書くにも三日はかかる」

「気の永げえこつたな」

「三日はおろか、この夏中には、何十部も認めしたたましよう。そして生命いのちのあるうちには、千部も写経して世の中の親不孝者に、遺のこして死にたいと思つているのじゃ」

「へエ、千部も」

「わしの悲願じゃ」

「その写した経文を、親不孝者へ遺すというのは、いったいどう
いう理由か、聞かしてもらいてえもんだな。自慢じゃねえが、こ
う見えても、親不孝の方じゃあ、おれも負けねえ組だが」

「おぬしも、不孝者か」

「ここの部屋にごろついている極道者は、みんな親不孝峠を越え
て来た崩れにきまつてらアな。——孝行なのは、親分くれえのも
んだろう」

「嘆かわしい世の中よの」

「あはははは。ばあさん、ひどくおめえしよげ悄気てるが、おめえの子

も、極道者とみえるな」

「あいつこそ、親泣かせの骨頂。世に、又八のような不孝者もおろうかと、このふもおんじゆうぎよう父母恩重經の写經を思い立ち、世の中の不孝者に読ませてやろうと悲願を立てたが——親泣かせは、そんなにも、多いものかのう」

「じゃあ、その父母恩重經とやらを、生涯に千部写して、千人に頒わけてやる気か」

「一人に菩提ぼだいの胚子たねをおろせば、百人の衆を化し、百人に菩提の苗を生ずれば、千万人を化すともいう。わしの悲願は、そんな小さいものじゃない」

と、お杉はいつか筆を擱おいてしまって、傍らに重ねてある写し

終りの薄い写経五、六部のうちから一冊をぬいて、

「——これを其方そなたに与えますから、暇のあるたびに誦よんだがよい」と、恭うやうやしく授けた。

お菰こもは、ばばの真面目くさった顔に、ぷつとふきだしかけたが、鼻紙のように懐ふところ中へねじこむわけにもゆかず、写経を額ひたいに当てて、ちよつと拝む恰好をしながら、

「ところで」

と、身を交わすように、急に話のほこをすげ替えた。

「——おばば、てめえの信心が届いたか、今日、外出そとでの先で、おれはえらい奴に出でツ会くわしたぜ」

「何。えらい者に会ったとは」

「おぼぼが、かたき仇とねらつて探している、宮本武蔵という野郎よ。

——隅田川の渡船わたしから降りた所で見かけたんだ」

二

「えつ、武蔵に出会つたと？」

聞くと、ぼぼはもう、写経どころではない。机を押しやって、

「して、どこへ行きましたぞえ。その行く先を、突き止めてくれ
たかよ」

「そこは、お菰こもの十郎だ、抜け目はねえ。野郎と別れるふりをし
て、横丁にかくれ、後を尾行つけてゆくと、ばくろ町の旅籠はたごでわらじ

を脱いだ」

「ウウム、ではこの大工町だいくちようとは、まるで目と鼻の先ではないか」

「そう近くもねえが」

「いや近い近い。きようまでは、諸国をたずね、幾山河を隔てている心地がしていたのが、同じ土地にいるのじゃものう」

「そういうやあ、ばくろ町も日本橋のうち、大工町も日本橋の内、十万億土ほど遠くはねえ」

ばばは、すつくと立つて、袋戸棚の中をのぞきこみ、かねて秘蔵の伝家の短い一こしを把とると、

「お菰どの、案内してたも」

「どこへ」

「知れたことじゃ」

「おそろしく気が永げえかと思ふとまた、怖ろしく気が短げえなあ。今からばくろ町へ出向く気か」

「おいの。覚悟はいつもしていることじゃ。骨になったら、みまさ美作^かの吉野郷、本位田家へ骨は送ってください」

「まあ、待ちねえ。そんなことになつたひにやあ、折角、耳よりな手懸りを見つけて来ながら、おれが親分に叱られてしまう」

「ええ、そのような、氣遣いしておられようか。いつ武蔵が、旅籠を立てしまわぬとも限らぬ」

「そこは、大丈夫、すぐ部屋にごろついているのを一匹、張番にやつてある」

「では、逃がさぬことを、おぬしがきつと保証しやるか」

「なんでえまるで……それじゃあこつちが恩を着るようなものじやねえか。——だがまあ仕方がねえ、年よりのことだ、保証した保証した」

と菰は、なだめて、

「こんな時こそ、落着いて、もちツとその写経とやらをやっつていなすつちやどうだ」

「弥次兵衛どのは、きょうもお留守か」

「親分は、講中のつきあいちちぶで、秩父みつみねの三峰へ行つたから、いつ帰るか分らねえ」

「それを待つて、相談をしてはおられまいが」

「だから一つ、佐々木様に来てもらつて、ご相談をしてみなすつちやどうですえ」

翌る日の朝。

ばくろ町へ行つて、武蔵の張番に立っている若い者からのちよう謀報ほうによると、

(武蔵はゆうべおそ晩くまで、旅籠の前の刀屋へ行つて話しこんでいたらしいが、今朝は旅籠を引払つて斜向すじむかいの刀かたなとぎ研ずし厨子野耕介のこうすけの家の中二階へ移つた)

とある。

お杉ばばは、それ見たことかといわんばかりに、

「見やれ、先も生きている人間じゃ、じつと、何日まで一つ所に
いるものかいの」

と、お菰こもへいって、今朝は、焦いらいら々と、写経の机に坐りかねて
いる容ようす子。

だが、ばばの気性は、お菰も半はんがわら瓦の部屋の者も、今では皆
よく知りぬいている所となつているので、気にもかけず、

「いくら武蔵だつて、羽が生えているわけじゃなし、まあそう、
焦あせ心りなさんなツてえことよ。あとで、お稚ちご児の小六が、佐々木
様の所へ行つて、篤とくと相談して来るといつているから——」

菰がいうと、

「なんじゃ、小次郎殿のところへ、昨夜ゆうべ行くといつていながら、

まだ行っていないのか。——面倒な、わしが自身で行って来る程に、小次郎殿の住居すまいは何処か教えてたも」

と、ばばは、自分の部屋にあつて、もう身支度せわに忙しない。

三

佐々木小次郎が江戸の住居は、細川藩の重臣で岩間角兵衛が邸内ひとむねの一棟——その岩間の私宅というのは、高輪たかなわ街道の伊皿子いさらご坂の中腹、俗に「月の岬みさき」ともいう地名のある高台で、門は赤く塗つてある。

——と、眼をつぶつても行けるように、半瓦の部屋の者が、教

えて聞かすと、

「わかつた。分つた」

お杉ばばは、年よりの鈍どんを、若い者たちから見くびられたように取つて、

「造作もない道、行いて来る程に、後あをたのみますぞ。親分おやぢのものお留守、わけて火の用心に気をつけての」

草履わらじの緒おを結ゆい、杖つゑをつき、腰こしには伝家でんけの一いこしを差し、半瓦はんがわの家いへを出でて行いつた。

何か用ようをして、ふと、出て来た菰こもの十郎じゅうらうが、

「おや、ばあさんは」

見廻みまわして、訊きねると、

「もう、出かけましたぜ。佐々木先生の住所ところを教えろというから
教えてやると、早のみこみに、たつた今」

「しよあのねえ婆さんだな。——おいおい小六あにい兄哥」

広い若者部屋へ、声をかけると、遊び事をしていたお稚児の小
六が、飛び出して来て、

「なんだ兄きょうでえ弟」

「なんだじゃねえ、おめえが呑み込んだまま、ゆうべ佐々木先生
の所へ行かなかつたものだから、ばあさんが、癩かんしゃく癩やくを起して、
一人で出かけちまつたじゃねえか」

「自分で行ったら、行ったでいいだろう」

「それもゆくめえ。親分が帰けえって来てから、告げ口するにちげ

えねえ」

「口は達者だからな」

「そのくせ、体はもう、かまきり 蠅螂みてえに、折ればポキリと折れそうに痩せこけてやがる。氣ばかり強いが、馬にでも踏まれたら、それきつ限りだぞ」

「ちえつ、世話がやけるな」

「すまねえが、今出かけて行つたばかりだから、ちよつくら、追いかけて行つて、小次郎先生の住居すまいまで、連れて行つてやつてくれよ」

「てめえの親の面倒さえ見たことがねえのに」

「だから、罪つみほろ亡ぼしにならアなあ」

遊び事を半ばにして、小六はあわてて、お杉のあとを追いかけ
て行つた。

菰こもの十郎は、おかしさを噛みながら、若者部屋へはいつて、ご
ろりと、片隅に寝ころんだ。

部屋は三十畳も敷ける広さで、藺いむしろ蕈が敷いてあり、大刀どす、手
槍、鈎かぎぼう棒などが、手を伸ばす所にいくらでも備えてある。

板壁には、ここに起おき、ふし臥する無法者の乾児こぶんが、手拭だの、着替
えだの、火事頭巾だの、襦じゆばん袷だのを雑多に釘へ掛けつらね、中
には、誰も着きて手のいるわけがない、紅絹裏もみうらのあでやかな女小袖な
ども掛け、蒔まきえ絵の鏡立ても、たった一つ置いてあつた。

誰かが、或る時、

(何だ、こんな物を)

と、外はずそうとすると、

(外しちやいけねえ。それは佐々木先生が掛けといたんだから)と、いったことがある。

理由を糺ただすと、

「野郎どもばかりを大勢部屋に詰めておくと、癩かんが立つて、ふだんのケチなことにはばかり殺氣立ち、ほんとの死に場所へ出てから役に立たねえと、先生が親分へいつていたぜ」

と、説明した。

しかし——女の小袖と蒔絵の鏡台ぐらいでは、なかなかこの殺氣なまは和むべくもない。

「やい、胡魔化すな」

「だれが」

「てめえがよ」

「ふざけるな、いつおれが」

「まあ、まあ」

今も、大部屋の真ん中では、壺か加留多か、半瓦の留守をよいことにして、賭け事にかたまっている連中の額から、その殺気がもうもうと立ち昇っている。

四

菰は、その態ていを見て、

「よくも飽きもせず、やってやがるなあ」

ごろんと仰向けに寝て、脚を組んだまま、天井を見ていたが、わいわい連の勝った負けたに、昼寝もならない。

そうかといって、三下の仲間にはいつて彼らのふところをしば搾つてみたところではじまらないので、眼をつむっていると、

「ちえつ、きようは、よくよく芽が出ねえ」

と、矢も弾たまも尽き果てたのが、惨澹たる顔をして菰こものそばへ来ては共に、ごろんと枕を並べる。一人殖ふえ、ふたり殖え、ここへ来て寝ころぶのは皆、時利あらずの惨敗組だった。

ひとりがひよいと、

「菰の兄哥あにきこれやあ何だい」

彼の懐ふところ中から落ちていた——一部の経きようもん文へ、手をのぼし

て、

「お経じゃねえかこれやあ。がらにもねえ物を持つてるぜ。禁まじな厭いか」

と、めずらしがる。

やっと少し眠くなりかけていた菰こもは、しぶい眼をあいて、

「ム……それか。そいつあ、本位田のばあさんが、悲願を立てて、生涯に千部写すとかいってる写経だよ」

「どれ」

少し文字の見えるのが、手へ奪って、

「なるほど、ばあさんの手蹟だ。児童にも読めるように、仮名
で振ってあら」

「じゃあ、てめえ汝にも、読めるか」

「読めなくってよ、こんな物」

「ひとつ、節をつけて、美しい声で誦んで聞かせてくれ」

「じようだんいうな。小唄じゃあるめえし」

「なあにおめえ、遠い昔にやあ、お経文をそのまま、歌謡にうた
つたものだあな。——和讃わさんだってその一つだろうじゃねえか」

「この文句は、和讃の節じゃあやれねえよ」

「何の節でもいいから聞かせろツていうに。聞かせねえと、取っ
ちめるぞ」

「やれやれ」

「——じゃあ」

と、そこで男は、余儀なく仰向けのまま、写経を顔の上にひらいて、

仏説ぶもおんじゆうぎよう父母恩重經——

かくの如くわれ聞けり

ある時、ほとけ

王舎城の耆闍崛ぎしゃくつ山中に

菩薩、声聞しょうもんの衆といましければ

比丘びく、比丘尼びくに、憂婆塞うばそく、憂婆夷うばい

一切諸天の人民

龍神鬼神など

法を聴かんとして来り集まり

一心に宝座をいによう圍繞し

またたきもせで尊顔を

仰ぎみ瞻たりき——

「なんのこツたい」

「比丘尼つてえな、近頃、鼠色におしろいを塗って、
傾城町けいせいまちよ
り安く遊ばせるといふ、あれとは違ふのか」

「しつ、黙つてろい」

こ是の時、ほとけ

すなわ乃ち法を説いてのたま宣わく

一切の善男子善女人よ

父に慈恩あり

母に悲恩あり

そのゆえは

人のこの世に生るるは

宿業を因とし

父母を縁とせり

「なんだ。おやじと、おふくろのことか。お釈迦しゃかなんぞも、知れ切った御託ごたくしか並べやしねえ」

「叱しつ……。うるせえぞ武たけ」

「みろ、誦よみ手が、黙もくつちまつたあ。聞きながらトロトロいい気

持で聞いていたのに」

「よし、もう黙ってるから、先を謡うたえよ。もつと、節をつけて——」

五

——父にあらざれば生れず

母にあらざれば育せず

ここをもつて

気を父の胤たねに稟うけ

形を母の胎たい内ないに托たくす

誦^よみ手は、行儀わるく、仰向けの寝相をかえて、鼻くそをほじりながら――

この因縁を以ての故に

悲母^{ひも}の子を念^{おも}うこと

世間に比^{たぐ}いあることなく

その恩、未形に及べり

こんどは、余り皆、黙っているので誦^よむ方が、張合いがなくなつて、

「オイ聞いているのか」

「聞いているよ」

始め胎^{たい}を受けしより

とつき
十月をふるの間
ぎようじゆう
行、住、坐、臥が

もろもろの苦惱をうく

苦惱休む時なきが故に

常に好める飲食衣服を得るも
おんじきえふく

欲執の念を生ぜず

一心ただ安く生産せんことを思う
しようさん

「くたびれた、もういいだろ」

「聞いているのに、なぜやめるんだよ。もつと謡えよ」
うた

月充ち日足りて
み

生産の時いたれば
しようさん

業ごうふう風ふうふきて是これをうなが促し

骨ほね節ふしことごとく痛み苦しむ

父も心身おののきおそ懼れ

母と子とを憂念し

諸親けんぞく眷けんぞく族ぞくみな苦惱す

すでに生れて草上に墮おつれば

父母、欣び限りなく

猶ひんによ、貧女ひんによの如意珠にょいじゆを得たるが如し

初めはふざけていた彼らも、次第に意味が酌くめて来ると、聞くともなく聞き惚れていた。

——その子、声を発すれば

母も此の世に生れ出たるに似たり

爾それより来

母の懐ふところを寝処ねどころとし

母の膝を遊び場とし

母の乳を食しよくもつ物となし

母の情いのちけを生命となす

母にあらざれば、着ず脱だがず

母飢うえあに中あたる時も

哺ふくめるを吐はきて子こに啗くわしめ

母にあらざれば養やしなわれず

その闌らん車しゃを離はなるるに及およべば

十指の爪の中に

子の不浄を食らう

……計るに人々

母の乳をのむこと

一日八十斛こく

父ちちはは母の恩重きこと

天の極きわまり無きがごとし

「……………」

「どうしたんだい、おい」

「今、誦よむよ」

「オヤ、泣いてるのか。ベソを搔きながら誦んでやがら」

「ふぎけんない」

と、虚勢を出してまたつづけた。

母、東西の隣里りんりに傭やとわれ

或は水汲み、或は火燒たき

或は碓うすき、或は磨うすひく

家に還るの時

未だ至らざるに

わが児家に啼こくき哭して

我を恋い慕わんと思ひ起せば

胸さわぎ心愕おどろき

乳ながれ出でて堪たうる能あたわず

すなわ
乃ち、走り家に還る

児、遙かに母の来るを見

なずきろう、かしら
脳を弄し、頭をうごかし

そらなき
嗚咽して母に向う

母は身を曲げて、両手を舒^のべ

わが口を子の口に吻^っく

両情一致、恩愛の洽^{あまね}きこと

復^またこれに過ぐるものなし

——二歳、懐^{ふところ}を離れて始めて行く

父に非ざれば火の身を焼く事を知らず

母に非ざれば刀^{はもの}の指^{おと}を墮すを知らず

三歳、乳を離れて始めて食らう

父に非ざれば、毒の命を落すを知らず

母に非ざれば薬の病を救うを知らず

父母、外の座席に往き

美味 珍 羞 を得るあれば

みずから喫わず懐に収め

喚びて子に与え、子の喜びを歡ぶ

「やい。……またベソを搔いてんのか」

「何だか、思い出しちまった」

「よせやい、てめえがベソを搔き搔き誦むもんだから、おれっち

まで、変てこに、涙が出て来やがるじゃねえか」

六

無法者にも、親があつた。

粗暴な、生命いのち知らずな、その日暮しな、あらくれ部屋のゴロン棒も木の股またから生れた子ではない。

ただここの仲間では平常、親のことなど口にするど、

(てツ、女々めめしい野郎だ)

と、片づけられるので、

(へん、親なんぞ)

と、有あつてもない顔をしているのを、潔いさぎよしとしてゐる風なのだ。

その父母がふと今、彼らの心の底から喚び起されて、急にしみりしてしまったのであつた。

初めは、鼻からちようちんを出すように、ふざけた節をつけて、謡うたに唄うたつて誦よんでいた。父母ふもおんじゆうぎよう恩重じんじゆう経ぎようのことばも、それがいろはのように平易なので、誦よむにつれ、聴きくに従したがひ、だんだん分わつて来たものとみえる。

(おれにも親があつた)

ことを思い出すと、その身が、乳をのみ、膝ひざに這はつた頃の、幼おさななごころ心こころに返かえつて——形こそ皆、腕枕うでまくらをかつたり、足の裏を天井にあげたり、毛脛けずねをむき出したりして、ごろごろ寝転んではいたが、知らず知らず頬ほに涙を垂たれていた者が尠すくなくなかつた。

「ヤイ……」

と、そのうちに一人が、誦み人の男へいう。

「まだ、その先が、あるのか」

「あるよ」

「もちつと、聴かしてくれ」

「待てよ」

と誦み人の男は、起きあがって、鼻紙で涙をかんでから、こんどは坐つて先を誦んだ。

——子、やや成長して

とも朋友と相交わるに至れば

父は子に衣を索め

母は子の髪を梳くしけず

己おのが美好はみな子に捧げ尽し

みずからふる

自は故やぶを着、弊やぶれたるを纏まとう

—— 既よめに子、婦もとを索もとめて

他の女子おなごを家に娶めとれば

父母をばうた転た、疎遠うたにして

夫婦は特に親近にし

私房の中に語らい楽しむ

「ウーム、思い当るぞ」

と、誰かうなる。

……父母年高たけて

氣老い、力衰えぬれば

倚よる所の者はただ子のみ

頼む所の者はただ婦よめのみ

しかるに朝あしたより暮まで

未だ敢えて一たびも来り問わず

夜半ふすま衾冷ややかに

五体安んぜず、復また談笑なく

孤客の旅寓たびに宿泊するが如し

——或は復また、急に事ありて

疾とく子と呼びて命ぜんとすれば

十たび喚よびて、九たび違い

遂に來りて給仕せず

却つて怒り罵りていわくのし

老い耄ほれて世に残るよりは

早く死なんに如しかずと

父母聞きて怨おんねん念胸ふさに塞がり

涕てい涙るい、瞼まぶたを衝き目くらみ

噫あゝ、汝幼少の時

吾れにあらざれば養われざりき

吾れに非ざれば育てられざりき

噫あゝ、吾れ汝を……

「もう、おらあ、おらあ……誦よめねえから、誰か誦んでくれ」

経を抛ほうつて、誦よみ人の男は泣きだしてしまった。

ひとりとして、声を出す者が無い。横になつてゐる者も、仰向けにひっくり転かえつてゐる者も、胡坐あくらの中へ鴨かものように首を突ツこんでゐる者も——

同じ部屋の、すぐ向うの組では、勝つた敗けたの賭け事に、慾の餓鬼が修羅のまなじりを吊りあげてゐるかと思えば——この組は、がらにもない無法者が、しゆくしゆく噉すすり泣いてゐる。

その奇妙な部屋を見まわしながら入口に立つて、

「半はん瓦がわらは、まだ旅先から帰らぬのか」

佐々木小次郎が、ぶらりと訪れて、姿を見せた。

ちさみだれ
血五月雨

一

一方では、賭け事に熱中しているし、ここでは皆、沈みこんで泣いているし、返辞をする者もないので、小次郎は、

「これ、どうしたのだ」

両腕で顔をおおい、仰向けに寝ている菰こもの十郎のそばへ立つと、

「あ。先生で」

菰も、他ほかの者も、あわてて眼を拭いたり涙はなをかんだりして起上

がり、

「ちつとも、存じませんで」

と、間まが悪そうに、揃まつて辞儀をする。

「泣いておるのか」

「いえ、なあに、べつに」

「おかしな奴だの。——稚児ちごの小六は」

「おばばに尾ついて、今し方、先生のお住居すまいへ出かけましたが」

「わしの住居へ」

「へい」

「はて、本位田のばばが、わしの住居へ、何用があつて出かけたのか」

小次郎の姿が見えたので、賭博ふけに耽ふつていた組も、あわてて散

らかつてしまい、菰こものまわりにベソを搔かいていた連中も、こそこそ姿を消してしまふ。

菰は、きのう自分が、渡船口わたしで武蔵に出会ったことから話して、「生憎あいにく、親分が旅先なんで、どうしたものか、とにかく先生にご相談した上のことにしようというので出かけましたが」

——武蔵と聞くと、小次郎の眼には、ひとりでに爛らんとして燃えるものが充みちて来るのだった。

「ううむ、然らば武蔵は今、ばくろ町に逗と留りゆうしておるのか」「いえ、旅籠はたごは引払って、そのすぐ前まへにある刀かたな研とぎの耕介の家へ移うつったそうで」

「ほ。それはふしぎな」

「何がふしぎで」

「その耕介の手許には、わしの愛刀物干竿ものほしざおが研とぎに遣やつてある」

「へエ、先生のあの長い刀が。——なるほどそいつあ奇縁ですね」

「実はきょうも、もうその研ができていてもよい頃と、取りに出かけて来たのだが」

「えつ、じゃあ耕介の店へ寄つてお在いでなすつたんで？」

「いや、ここへ立ち寄つてから参るつもりで」

「ああ、それでよかった。うツかり先生が知らずに行つたりなどしたら、武蔵が気取けどつて、どんな先手を打つかもしれねえ」

「なんの、武蔵如きを、そう恐れるには当らん。——だが、それにしても、ばばがおらねば何の相談もならぬが」

「まだ伊皿子いざらひまでは行きますまい。すぐ、足のはや迅い野郎をやつて、呼び戻して参りましょう」

小次郎は、奥で待った。

——やがて灯ひともし頃。

ばばが町駕かつに昇あがれ、お稚児ちごの小六と迎えに行つた男はわきに付き、慌あわしく戻たつて来る。

夜、奥では凝ぎ議ようぎ。

小次郎は、半はん瓦がわら弥次兵衛の帰りを待つほどのことはない。

自分がいるからには、助太刀して、きつと、ばばに武蔵を討たせてみるという。

菰もお稚児も、相手は近頃うわさにも上手と聞えた武蔵ではあ

るが、小次郎ほどの腕とは、どう高く買つても想像できない。

「じゃあ、やるか」

となる。

ばばは元より、

「おう、討たいでおこうか」

と、気がつよい。

けれどただ、ばばも年齢としだけは如何いかんとも仕方がない。伊皿子ま

で往復した疲れに、今夜は腰が痛いというのだ。——そこで小次

郎の研とぎの刀を取りに行くのは差控え、翌日あすの夜を待つことになっ

た。

翌日の昼間。

彼女は行ぎようずい水を浴び、齒をそめたり、髪を染めたりした。

そして、黄昏たそがれとなれば、物々しくも扮装いでたちにかかった。彼女

の死装束しにしようぞくとする白晒布しろさいらしの肌着には、紋散らしのように、諸

国にわたる神社仏閣の印が捺おしてある。

浪華なにわでは住吉神社、京では清水寺きよみずでら、男山八幡宮、江戸では浅

草の観世音かんぜおん、そのほか旅の先々で受けた所の神々や諸仏天は、

今こそ、自分の肌身を固め給うものと信じて、ばばは、鎖帷くさりかたび

子らを着たよりも、心丈夫だった。

——でも、帯揚おびあげの中には、子の又八へ宛てた遺書を入れておくのを忘れていない。自分で写しゃきよう経した「父母恩重経」の一部にそれを挟んで、ふかく秘めておく。

いや、もつと驚くべき用心は、金入れの底にはいつも、次のように書いた一札を入れていることである。

わたくし事、老齡にてありながら、大望のためさすらい居り候えば、いつなん時、返り討たれんも知れず、行路に病軀をさらし候わんも計られず、その砌みぎりは、御ふびんと思召し、このかねにていかよう共、御始末たまわりたく、途上の仁人とおやくにん様方へ、おねがい申上げおきそろ

作州吉野郷士

本位田後家 すぎ

自分の骨の届け先にまで心が届いていた。

さてまた、腰には一刀、脛すねには白脚絆しろきやはん、手にも手甲てっこう、袖そで無しの上からさらにくけ帯をしかと締めなし、すっかり身支度が成ると、自分の居間の写経机に、一椀わんの水を汲み、

「行いんで来るぞよ」

と、生ける人へいうように、しばらく、瞑目めいもくしていた。

おそらく旅で死んだ、河原の権叔父へ告げているのであろう。障子を細目に、菰こもの十郎は、そつと覗のぞいて、

「おばば、まだか」

「支度かの」

「もう、よさそうな時刻だから——小次郎様も待っている」

「いつでもよいがの」

「いいのか。じゃあ、こっちの部屋へ来てくれ」

奥では、佐々木小次郎と、お稚児ちごの小六、それに菰こもの十郎を加えて、こよい助太刀三名、疾とくから身支度して待つていた。

ばばのために床の間まの席あは空けてあつた。ばばはそこへ備前焼の置物かざりみたいかざりに硬かたくなつて坐つた。

「門出かどの祝いいに」

と、三方かわらけの土器かわらけをとつて、お稚児は、ばばの手に持たせ、銚ちやう子を把とつてそつと酌つぐ。

次に小次郎。

順に飲みわけて——ではと四名はその灯を消して立ち出でた。おれも、てまえもと、こよいの途とに、氣負つて助太刀をいい出した乾児こぶんも多かつたが、多人数はかえつて足手まとい、それに夜とはいえ、江戸の町なか、世上の聞えもあるからと、それらの希望は小次郎が退けたのであつた。

「お待ちなすツて」

と、門かどを踏み出す四名の背なかへ、乾児のひとりが、カチカチと切火きりびを磨すつた。

外は、雨雲の空もよう。

ほととぎすのよく鳴くこの頃の闇であつた。

三

犬がしきりと闇で吠える。

どこか四人の影に、ただごと凡事ならぬものが、けもの獣の眼にもわかるとみえる。

「……はてな？」

暗い辻で、お稚児ちごは後ろを振り顧かえつた。

「なんだ、小六」

「変な奴が、さつきから、後を尾行つけて来るようなんぞ」

「ははあ、部屋の若い奴だな。なんでもかんでも、助太刀と一緒に連れて行けと強請せがんで肯かない奴が、一、二名いたではないか」

小次郎のことばに、

「しよしのねえ奴だな。斬きり合あいが飯より好きだという野郎ですか
らね。——どうしましょう」

「抛ほつておけ。来るなど叱ちられても、尾ついて来るような人間なら
頼たのもしいところがある」

で——気にも止めず、そのまま四名は、ばくろ町の角を曲が
た。

「ム……そこだな。刀かたな研とぎの耕介の店は」

遠く離れて、向い側の廂ひさしの下に小次郎は佇たたずむ。

もうお互いに、声をひそめて、

「先生は、今夜、初めて来たんですか」

「刀の研を頼む折は、岩間角兵衛どのの手から頼んだからな」

「で。どうしますか」

「先程、打合わせておいた通り、お婆ばも、其方たちも、そこらの物陰に潜ひそんでおれ」

「だが、悪くすると、裏口から逃げやしませんか、武蔵のやつ」

「大丈夫、武蔵とわしとの間には、意地でも背後うしろを見せられぬものがある。万一、逃げたりなどしたら、武蔵は剣士としての生命を失うことになる。だがあれば、それでも逃げるほど反省力のない男ではない」

「じゃあ両側の軒下に、わかれていますか——」

「家の中から、わしが武蔵を連れ出して、肩を並べながら往来を

歩いて来る。足数にして、十歩ほども、歩いた頃に、わしが一太刀、抜き打ちに浴びせておくから——そこを、おばばに斬つてかからせるがよい」

お杉は、何度も、

「ありがとうございます……。あなた様のおすがたが、八幡の御化身ごけしんのように見えまする」

と、掌てをあわせて拝んだ。

自己の影を拝まれながら「御おんたましい研とぎどころ所」の厨子ずし野耕介の門口へ歩み寄つて行つた小次郎の心には、自分の行為に対する正義観が、他人には想像もつかないほど、大きく胸に拡がついた。

彼と、武蔵のあいだには、初めから、そう宿怨というほどなことは何もなかった。

ただ、武蔵の名声が高まるにつれて、小次郎は、何となく快くこころよなかつたし、武蔵はまた、小次郎の人よりもその力を、尋常でなく認めているので、彼に対しては、誰よりも特殊な警戒を抱いて迎えた。

それが数年も前から続いて来たのである。要するに、当初は双方がまだ若く、げんき衝気や覇気や壮気に充ちきっていた。そして力の互角した者同士が起しややすい摩擦から醸かもされた感情と感情のくいちがいに過ぎなかつた。

だが――

顧みると、京都以来、吉岡家の問題を挟み、また、火を啜くわえて彷徨さまよつて歩くような朱実あけみという女性を挟み、今また、本位田家のお杉ばばという者を、その喰い交ちがいの感情に挟んで、小次郎と武蔵とのこの世における面識は、宿怨といえないまでも、決して再び溶けないほどな、対立的な渠みぞを深めて来つつあることは否いなみ難い。

——ましてや、小次郎が、お杉ばばの観念を、そのまま自己の観念に加えて、あわれむべき弱者を扶たすけるという形に似た自己の行為のもとに、自己の歪ゆがんだ感情をも、正義化して考えるようになって来ては、もう二人の相剋そうこくは、宿命というほかあるまい。

「……寝たのか。……刀屋、刀屋」

耕介の店の前に立つと、小次郎は、閉まっているその戸を、
かろく叩いた。

四

戸の隙間から明りが洩れている。店に人気ひとけはないが、奥では起きてゐるに違いない——と小次郎はすぐ察していた。

「——どなたで？」

あるじ
主の声らしい。

小次郎は、戸の外から、

「細川家の岩間角兵衛どのの手から、研とぎを頼んである者じゃ」

「あ、あの長剣ですかな」

「ともあれ、開けてくれい」

「はい」

——やがて戸が開く。

じろりと、双方で観る。

耕介は立ち塞がったまま、

「まだ研^とげておりませぬが」

無愛想にいう。

「——そうか」

と、返辞をした時は、小次郎はもう関^{かま}わらず中へはいって、土間わきの部屋の^{かま}框へ、腰をすえこんでいたのである。

「いつ研げる？」

「さあ」

耕介は自分の頬をつま抓む。長い顔がよけいに伸びて眼じりが下がる。何か人をやゆ揶揄しているように見え、小次郎はすこしいらいら焦々した。

「あまり日数がかかりすぎるではないか」

「ですから、岩間様にも、お断りしておいたわけで。日限のところは、おまかせ下さいと」

「そう長びいては困る」

「困るなら、お持ち帰りねがいたいもので」

「なに」

職人ずれがいえる口幅ではない。小次郎は、そのことばや形を見て、人間の心を覗のぞこうとしないので、さては、自分の訪れを早くも知って、武蔵が背後にひかえていることを、この男、強がっているに違いないと受け取った。

で、かくなつては、早いがいいと考え、

「時に、話はちがうが、其方の家に、作州の宮本武蔵どのが泊っているということではないか」

「ほ……。どこでお聞きなさいましたな」

それには、耕介も少し不意を受けた顔つきで、

「おるには、おりますが」

と、いい濁にごる。

「久しく会わぬが、武蔵どのとは、京都以来存じておる。ちよつと、呼んでくれまいか」

「あなた様のお名前は」

「佐々木小次郎——そういえばすぐわかる」

「何と仰っしゃいますか、とにかく申しあげてみましょう」

「あ、ちよつと待て」

「なんぞまだ」

「余り唐突だから、武蔵どのが疑うといけないが、実は、細川家の家中で、武蔵どのとよく似た者が、耕介の店におると話したので、訪ねて来たわけだ。よそで一献こん上げたいと思うから、お支度して来られるように、ついでに申してくれ」

「へい」

耕介は、暖簾のれんぐち口の見える縁を通つて、奥へかくれた。

小次郎は後で、

（万一、逃げないまでも、武蔵がこつちの手にのらず、出て来ない場合にはどうするか？ いっそ、お杉ばばに代つて、名乗りかけ、意地でも、出て来ずにいらねぬように仕向けるか？）

二段、三段の策までを、その間に考えていると——突然、彼の想像を遙かに跳び越えて、戸外おもての闇で、

「——ぎやつ」

と、ただの肉声ではない。直じかに他人の生命へもひびいて、ぞつと戦慄を覚えさせるような悲鳴が走つた。

五

——しまったつ。

と、小次郎は抛ほうり上げられたように、腰かけていた店みせ 框がまちから突つ立たつた。

——こつちの策は破れた！

いや、策のウラを搔かかれた！

武蔵はいつのまにか、裏口から戸外おもてへまわり、お杉こもばばや、菰こもや、お稚ち児ごや、手易てやすい者へ先に挑戦して行いつたらしい。

「よしつ、その分なら」

彼は、闇の往来へ、ぱつと躍り出した。

時は来た！

と、思う。

体じゅうの肉がぎゅつと緊しまりながら、血ぶるいするように闘志がいきり立つ。

(いつかは剣を把とつて会おう)

それは叡えいざん山から大津越えの峠の茶屋で、別れに誓ったことばである。

忘れてはいない。

その時が来たのである。

たといお杉ばばは返り討ちになっても、ばばの冥福には自分が

武蔵の血をもって供養してやろう。

——と瞬間、小次郎の頭には、そんな義侠と正義の念が、火花みたいに突きぬけたが、十歩も跳ぶと、

「せ、先生っ」

道ばたに、苦悶していた人間が、彼の登音に絶^{すが}つて、悲痛な声でさげんだ。

「やつ、小六？」

「……斬^やられた！ ……や、斬^やられました……」

「十郎は、どうした。……お菰^{こも}は」

「お菰も」

「なにっ」

見れば、そこから五、六間離れたところに、もう虫の息となっているお菰の十郎の朱あけにまみれた体が見出された。

見えないのはお杉ばばの影である。

だが、それを探す眼の違いとまもなかった。小次郎自身が、自身の警戒にそそけ立っているのだ。八方の闇がみな、武蔵のすがたである如く、彼の五体には構えを要した。

「小六、小六」

ことぎれかかるお稚児ちごへ、彼は早口に呶鳴って、

「武蔵は——武蔵はどこへ行つたか。武蔵は？」

「ち、ちがう」

小六は、上がらない首を、地で振りながら、やっといった。

「武蔵じゃねえ」

「何」

「……む、武蔵が、相手じゃねえのです」

「な、なんだと？」

「……………」

「小六つ、もういちどいえ。武蔵が相手ではないというのか」

「……………」

お稚児はもう答えなかつた。

小次郎の頭は、もんどり打ったように掻き乱れた。武蔵でなくて誰が、一瞬にこの二人を斬って捨てたか。

彼は、こんどは、菰の十郎の仆れているそばへ行つて、血でび

しよ濡れになつてゐる襟がみをつかみ起した。

「十郎つ、確乎しつかりせいっ。——相手は誰だ、相手は、どっちへ行つた？」

すると、菰の十郎は、びくつと眼を開いたが、小次郎の訊ねたこととも、この場合の事件とも、まったく関聯のないことを、臨いま終の息で、泣くように呟いた。

「おつ母あ、……おつ母あ……ふ、ふ、不孝を」

きのう、彼の血の中に浸しみこんだばかりの「父母恩重経」が、破れた傷口から噴きこぼれたのである。

——小次郎は知らず、

「ちいつ、何をくだらぬ」

と襟がみを突き放した。

六

——と。何処かで、

「小次郎どのか。小次郎どのかよ」

と、お杉ばばの声がする。

声をあてに、駈け寄つてみると——これも無残な。

下水溜だめの中に、ばばは墜おち込んでいたのだった。髪や顔に、
屑くずだの藁わらだのこびりつけて、
菜な

「上げて下され。はやく、上げて下され」

と、手を振っている。

「ええ、この体は、いったい何としたことだ」

むしろ腹立ち紛れである。力まかせに引ツぱり上げると、ばばは、雑巾のようにべたつと坐つて、

「今の男は、もう何処ぞへ走つてしまふたか」

と、小次郎の問いたいことを、却つて問う。

「ばば！ その男とはそも、何者なのだ」

「わしには理が分らぬ——ただ先ほども、途中で誰か気づいたが、わし達の後を尾行て来たあの人影に違いない」

「いきなり、菰とお稚児へ、斬りつけて来たのか」

「そうじゃ、まるで疾風はやてのようにな、何かいう間もない、陰から

不意に出て来て、菰どのを先に仆したお、稚児の小六が、驚いて抜き合はずわす弾みに、もう何処か斬られていたような」

「して、どつちへ逃げたか」

「わしも、傍そばづえ杖くつて、こんな汚むじい所へ墜おちてしまったので、見もせなんだが、登音はたしかに、あつちへ遠のいて行つた」

「河の方へだな」

小次郎は宙を駈けた。

よく馬市の立つ空道を駈けぬけ、柳原の堤どてまで出て見た。

伐きつた柳の材木が、原の一部に積んである。そこに人影と灯が見えた。近づいてみると四、五挺ちようの駕を置いて、駕かきたむろが屯むろしているのだつた。

「才、駕屋」

「へい」

「この横丁の往来に、連れの者がふたり斬られて仆れている。それに下水溜りへ墜ちた老婆とがいるから、駕にのせて、大工町の半はんがわら瓦の家まで送り届けておいてくれい」

「えつ、辻斬ですか」

「辻斬が出るのか」

「いやもう、物騒で、こちとらも、迂濶うかつにや歩けやしません」

「下手人はたった今、その横丁から逃げ走って来たはずだが、其方たちは、見かけなかったか」

「……さあ、今ですか」

「そうだ」

「嫌だなあ」

駕かきは、空からかご駕かごの三挺を、残らず昇かついで、

「旦那、駄賃はどちらで戴かくんですえ？」

「半瓦の家でもらえ」

小次郎はいい捨てて、また、そこらを駈かけ廻まわった。河べりを覗いてみたり、材木の陰あられたを検あらめてみたりしたが、どこにも見当らなかつた。

（辻斬だろうか？）

少し戻ると火除地ひよけちの桐の木畑がある。そこを通つて、彼はもう半瓦の家へ戻ろうと考えていた。出鼻の不首尾ではあるし、お杉

ばばがいけないでは意味がない。また、こう乱れた気持で武蔵と劍のあいだに相見ることとは、避けるほうが賢明で、当ってゆくのは愚おろかであると考えたからである。

すると。

桐林の道のわきから、ふいに刃らしい光がうごいた。ハツと眼を向ける間もなかつた。頭の上の桐の葉が四、五枚ばさつと斬れて散りながら、その迅はやい光はすでに彼の頭へ臨んでいた。

七

「——卑怯ツ」

と、小次郎はいった。

「卑怯でない」

と二の太刀は、ふたたび、彼の退いた影を追い——ばさつと青桐の木陰から、闇を破つて、跳ね出した。

三転して、小次郎は、七尺も跳び退き、

「武蔵ともあろう者が、なぜ尋常に——」

と、いいかけたが、そのことばを途中から驚きの声に変えて、
「やッ、誰だっ？ ……おのれは何者だ。人ちがいするな」
と、いった。

三の太刀まで交わされた男の影は、はや肩で息をついていた。
四の太刀はもう、自己の戦法の非を知って、中段にすえたまま、

眼を刀の銚子ほうしに燃やし、じりじり迫り直して来るのである。

「だまれ。人違いなどいたそうか。平河ひらかわ天神境てんじん内に住む小幡おぼた

勘兵衛景憲かげのりが一弟子、北条新蔵とはわしがこと。こういつたら、もう腹にこたえたであろうが」

「あつ、小幡の弟子か」

「ようもわが師を恥かしめ、また重ねて同門の友を、さんざんに討つたな」

「武士の慣ならい、討たれて口惜しければ、いつでも来い。そういえば、佐々木小次郎、逃げかくれする侍ではない」

「おおつ、討たいでおくか」

「討てるか」

「討たいでか」

尺——また二寸——三寸。

詰め寄つて来るのを見つめながら、小次郎はしずかに、胸をひらき、右手を腰の大刀へ移して、

「——来いつ」

と誘う。

はつと、その誘いに、相手の北条新蔵が、戒心かいしんを持ったせつなに、小次郎の体が——いや腰から上の上半身だけが——びゅつと折れて、肱ひじの弦つるを切つたかと思えたが、

——ちりん！

次の瞬間に、彼の刀の鏢つばは、彼の鞆さやへ戻つていた。

むろん、刃やいばは鞘を脱し、そして鞘へ返っていたのであるが、肉眼で見える速度ではない。ただ、一線のほそい光が、相手の北条新蔵の首すじのあたりへ、キラと、届いたか、届かないかと、思えたくらいなものであった。

だが――

新蔵の体は、まだまた股を踏みひらいたまま立っているのだ。血らしいものは、どこにも流れてはいない。けれど、何かの打撃をうけたことは事実である。なぜなら、刀は中段に支えたまま持っているが、左の片手は、左の首すじを、無意識に抑えていた。

――と。その体を挟んで、

「あつ？ ……」

これは、小次郎の声とも、後ろの闇でした声とも、どっちつかない所から起つたのである。小次郎もそれに依つてすこし慌あわて、闇の中から駈けて来た登音も、それに依つて、足を速めて来た。

「おおつ、どうなされた」

駈けつけて来たのは、耕介であつた。棒立ちの男の姿勢が、すこしおかしいと思つたので、抱き支えようとする、とたんに北条新蔵の体は、どたと朽木だおれに、あやうく大地へ仆れかけた。

耕介は、両の手に不意の重みをかけられて驚きながら、

「やつ、斬られてるな。——誰か来てくれいつ。往来の衆でも、この近くのお人でも、誰か来てくれ。人が斬られているっ——」

と、闇へ向つてどなつた。

その声と共に、新蔵の首すじから、ちようど蛤はまぐりの片貝ほど、肉を削そぎとられている傷口が、ぱくと赤い口をあいて、こんこんとぬる温い液体を、耕介の腕から裾すそへそそぎかけた。

しんぎようむぎよう
心形無業

一

ぼとつ——と、時折、中庭の闇で青梅の实みの落ちる音がする。
武蔵は、一穗すいの灯ひに向つて屈こごみこんだまま顔も上げない。

灯皿ひげらから燃えゆらぐ小さな燈火ともしびは、側近く俯向うつむいている彼の蓬ぼうぼう々とした月代さかやきを鮮あやらかに照らして余す所がない。彼の髪は毛こわの硬こわい性しょうと見えた。そして油気がなくてやや赤っぽい。またよく見ると、その毛の根には、大きな灸きゆうの痕あとみたいな古傷がある。幼少の時に病ちようんだ疔ぢようという腫物できもののあとで、

(こんな育て難にくい子があるうか——)

と、よく母を嘆なげかせたそのころの、きかない性しょう分ぶんの痕あとは、まだ、まざまざと消えきらずにあつた。

——彼は今、心のうちで、その母をふと思というかべ、刀とうの先で彫り刻うんでいる顔が、だんだん母に似てくるように思われた。

「……………」

先刻。さつき

いや、たつた今し方。

ここの中二階の障子の外から、この家の主あるじの耕介が、はいるのをはばか憚はばつて、

（まだ、御精が出ていらつしやいますか。ただ今、店先へ佐々木小次郎とかいう者がみえ、お目にかかりたいようなことをいっています、お会いなさいますか、それとも、もうお寝やすみだと、ていよく断ことわつておきましようか……どうなさいますかな？ ……どうにでも、お氣のままに、返事をしておきませんが）

二、三度、部屋の外でいったようには思おもつたが——武蔵はそれに返辞へんじをしたかしないか——自分自身わかまで弁わえていない。

そのうちに、耕介が、

(あつ?)

と、何か物音を聞きつけて、忽然と去つてしまつたらしいが——それにもべつに気を惹かれず、武蔵はなお、依然として小刀の先を、八、九寸ほどの彫刻の木材に向けて、その小机から、膝から身のまわりまで、いっばいな木屑にして屈み込んでいたのであつた。

彼は、観音像を彫ろうとしていた。——耕介から申し受けた無銘の名刀のかわりに——観音様を彫つてやる約束をしたので、きのうの朝から、それにかかつているのである。

ところで、その依頼について、凝り性な耕介には、特別な望み

があつた。

それは何かというと、

(折角あなたに彫つていただくものなら、自分が、年来秘蔵して
いる古材があるので、それをお用い下さいませんか)

とて、^{うやうや}恭しく取り出して来たのを見ると、なるほど、それは少
なくも六、七百年の年数は枯らしてあつたろうと思われる一尺ほ
どな枕形の角材。

だが、こんな古材木の切れ端がなんで有難いのか、武蔵には怪^け
訝^{げん}であつたが、彼の説明を口^{こうふん}吻のままかりていうと、これなん
か^{かわち}河内石川郡東条磯^{しなが}長の^{れいびよう}霊廟に用いられてあつた天平年代の古
材で、年久しく荒れていた聖徳太子の御^{ごびよう}廟の修築に、その柱の

取代えをなしていた心なき寺僧や工匠が、これを割つて庫裡くりかまどの竈たきぎへ薪として運んでいたのを見かけ、旅先ではあつたが、勿体なさの余り、一尺ほど切つてもらつて来たものだとある。

木目はよし、小刀の触りさわもよいが、武蔵は、彼が珍重して措おかないのみでなく、失敗しくじると、懸け替えのない材で——と思うと、刀とうの刻みが、つい硬くなつた。

——がたんと、庭の柴折しおりを、夜風はすが外す。

「……?」

武蔵は顔を上げた。

そして、ふと、

「伊織ではないかな?」

と、^{つぶや}呟いて、耳を澄ました。

二

案じている伊織が戻つて来たのではなかった。また裏の木戸が開いたのも風のせいではないらしい。

^{あるじ}主の耕介が、呶鳴つていた。

「はやくせい、女房。なにを呆^あつかけにとられている。刻^{とき}を争うほど、重い怪我人じゃ。手当次第で助かるかもしれぬ。寢床？——どこでもよいわ、はやく静かな所へ」

耕介のほかにも、その怪我人を担^{にな}つて、尾^ついて来た人々も、

「傷口を洗う焼耐しょうちゆうはあるか。なくば自宅うちから取つて来るが」

とか——

「医者へは、わしが飛んで行つてくる」

とか、ややしばらく、ごたごたしている気配であつたが、やがてひと落着きすると、

「ご近所の衆、どうも有難うございました。どうやら、お蔭様で命だけは、取り止めそうな様子でございますから、安心して、お寝やすみなすつて下さいまし」

挨拶しているのを聞くと、どうやらこの主あるじの家族でも、不慮な災難に出会つたかのように——武蔵には思われた。

そこで、捨て置けない気がしたのであろう、武蔵は、膝の木屑きくず

を払って、中二階の箱段を降りて行つた。そして廊下のいちばん隅から灯りが洩れているのでさし覗くと、そこに寝かしてある瀕死の負傷の枕元に、耕介夫婦が、顔を寄せていた。

「……才才、まだ起きておいでなされましたか」

振返つて、耕介は、そつと席をひらく。

静かに、武蔵も、枕元へ坐つて、

「どなたでござるか」

燈下の蒼い寝顔をのぞきながら訊くと、

「驚きました……」

と、耕介はさも驚いたふうを示して、

「知らずにお救たすけしたのでございますが、ここへ連れて来てみる

と、わたくしのお出入り先で、わたくしの最も尊敬している甲州流の軍学者、小幡先生おぼたの御門人ではございませんか」

「ホ。この人じんが」

「はい。北条新蔵と仰おっしや有いまして、北条安房守あわのかみの御子息——兵学を御修行なさるために、小幡先生のお手許に、長年お仕えを
しているお方でございます」

「ふーム」

武蔵は、新蔵の首に巻いてある白い布ぬのをそつとめくつてみた。今焼酎で洗ったばかりの傷口は赤貝の肉片ほど、見事に刀えぐで抉り飛ばされていた。灯影あかりは凹へこんだ傷口の底まで届き、淡紅色ときいろの頸動脈はありありと眼に見えるほど、露出していた。

髪一すじ——とよくいうが——この負傷ておいの生命いのちは、正に髪一すじの差で取りとめていた。それにしても、この凄あさましい——冴え切つた太刀の使い手は、いったい何者だろうか。

傷口に依つて考えると、この太刀は、下からしやくり上げて、しかも燕尾えんびに匆はね返したものらしい。さもなければこう鮮やかに、頸動脈を狙つて、貝の肉を削そぐように抉えぐれている筈はない。

——燕斬り！

ふと、武蔵は、佐々木小次郎が得意とする太刀の手を思いうかべ、とたんに先刻の、主あるじの耕介が自分の室の外から、その訪れを告げた声を——今になつてハツと思ひあわせたのであつた。

「事情は、分つておるのか」

「いえ、何もまだ」

「そうであろう。——しかし、下手人は分つた。いずれ、負傷がておい本復したうえで聞いてみるがよい。相手は佐々木小次郎と見えた」
武蔵はそういつて、自身のことばに自身でうなず頷くのであつた。

三

部屋へ戻ると、彼は手枕で、木屑の中へごろりと横になつた。
夜具が展のべてないわけではないが、夜具の中にはいる気持がしないのである。

きょうで二日ふた晩。

伊織はまだ帰って来ない。

道に迷っているにしては永すぎる。もつとも使い先が柳生家であり、木村助九郎という知人もいるので、子供だし、まあ遊んで行けと、ひき止められて、いい気になっているのかも知れない――

で、案じながらも、それについては、さして心を労してはいないが、きのうの朝から、刀とうを持って向っている観音像の彫りには、だいぶ心身のつかれを彼は覚えていた。

武蔵は、その彫りに向って、技巧を心得ている玄くろうと人ではない。また、賢い逃げ道や、上手らしい小刀の痕あとをつけて誤魔化ごまかしてゆく方法を知らない。

ただ彼の心のなかには、彼の描いている観音の象かたちだけがある。

彼は、無念になつて、その心のなかの象ものを、木彫として現わそうとするだけに過ぎないが、その真摯しんしな狙いどころが、手となり、小刀の先の動きにまでくるあいだに、種さまざま々な雑念が、狙うところの心しんぎよう形を散漫に乱してしまふ。

そこで彼は、折角、彫るところの物が、観音の形になりかけると、それを削つて、また彫り直し、また乱れては、また彫り直し——何度もそれを繰り返しているうちに、ちやうど鰹魚かつおぶし節を費つかい削つてしまふように、与えられた天てんびよう平の古材も、いつか八寸に縮み、五寸ほどに痩せ、もうわずかに、三寸角ぐらいまで、小さくしてしまつていた。

——時ほととぎす鳥の声を二度ほど聞いたと思ううちに、彼は半刻ほ

ど、とろとろと眠った。ふと眼をさますと、彼の健康な体力は、
頭の隅々の疲労まで洗い去っていた。

「今度こそ」

と、起きると共にすぐ思う。

裏の井戸へ行つて、顔を洗う、口を嗽すすぐ。そして彼は、もう暁
に近い灯を剪きり直し、気を革あらためて、また、彫刀を持ち直した。

サク、サク、サク……

と、眠らない前と、眠った後とでは、小刀の刃味までが違つて
くる。古材の新しい木目の下には、千年前の文化が細やかな渦を
描いている。もうこれ以上彫り損じては、この貴重な古材はふた

たび木屑から一尺の角材に帰るよしもないのだ。どうしても、今夜はうまく彫り上げなければならぬと思う。

劍を把とつて敵に立ち対むかった時のように、彼の眼はらんらんとし、彼の小刀には力がこもっていた。

背も伸ばさない。

水も飲み立たない。

夜が白んで来たのも——小鳥の声が始めて来たのも——またこの家の戸が、彼の部屋を余す以外すべて開け放されたのもまったく知らずに——彼は三昧まいにはいつていた。

「武蔵さま」

どうしたのか？ ——と案じて来たように、主あるじの耕介がうしろ

を開けてはいつて来たので、彼は初めて、背ぼねを伸ばし、

「……ああ、だめだ」

初めて、小刀を投げていった。

見るともう、削り削りして痩せた木材は、その原型はおろか、
拇おやゆび指ほども残らず、すべて、木屑となつて、彼の膝からまわり
に、雪を積んだようになっていた。

耕介は、眼をみはつて、

「……あつ、だめですか」

「ウム、だめだ」

「天平の古材は」

「みんな削ってしまった。——削つても削つても、木の中から、

とうとう菩薩ぼさつのおすがたが出て来なかつたよ！」

こう、われかえに回つて、嘆声をもらすと、武蔵は初めて、菩提ぼだいと煩惱の中間から地上へ放し落されたように、両手を頭の後ろに結んで、

「だめだ。これから少し禅でもやろう」

と仰向けに寝ころんだ。

そして、眠るべく目を閉じてから、やつと、種々な雑念が去つて、なごんだ脳膜のうちに、ただ「空くう」という一字だけが、うとうと、頭の中に漂っていた。

四

朝立ちの客が物騒がしく土間から出てゆく。多くは博^{ぼくろ}勞^{ろう}たちだった。この四、五日立っていた馬市の総勘定も、きのうで片づいたとかで、こここの旅籠^{はたご}もきようから閑散^{ひま}になるらしい。

伊織は、今朝、そこへ帰つて来て、すたすたと二階へ上がりかける

「もしもし。子ども衆」

と、宿の内儀^{かみ}さんが、帳場からあわてて呼ぶ。

梯子段の中途から、伊織は、

「なんだい」

と、振向いて、お内儀さんの頭髪^{あたま}の禿^{はげ}をそこから見下ろす。

「どこへ行きなされるのかね」

「おらか？」

「ああさ」

「おらの先生が二階に泊ってるから、二階へ行くのに、ふしぎはあるまい」

「へえ……？」と、呆れ顔して、

「一体、おまえさんは、何日いつここを出かけたんだえ」

「そうだなあ？」

指を繰って――

「おとといの前の日だろ」

「じゃ、先おとといじゃないか」

「そうそう」

「柳生様とかへ、お使いに行くといっていたが、今帰つて来たのかえ」

「あ。そうだよ」

「そうだよもないものだ、柳生さまのお邸は江戸の内だよ」

「おばさんが、木挽町こびきちようだなんて教えたから、とんだ廻り道をし

ちまったじやないか。あそこは蔵屋敷くらやしきで、住居すまいは麻布村の日ひケ

窪くぼだぜ」

「どつちにしたつて、三日もかかる所じやないじやないか。狐にでも化かされていたんだろ」

「よく知ってるなあ。おばさん、狐の親類かい」

「からか 擲揄いながら伊織が、梯子段をのぼりかけるのを、かみ 内儀さんはまた、あわてて止めて、

「もう、おまえの先生は、ここ 此宿には泊っていないよ」

「嘘だい」

伊織は、ほんとにせず、駈け上がって行つたが、やがてぼんやり降りて来て、

「おばさん、先生は、ほか 他の部屋へ代つたんだろ」

「もうお立ちになつたというのに疑ぐりぶかい子だね」

「えっ、ほんとかいっ」

「嘘だと思ふなら、帳面をござらんよ、この通り、お勘定だつて済んでる」

「ど、どうしてだろう、どうして、おらの帰らないうちに、立つちまつたんだろ」

「あんまり、お使いが遅いからさ」

「だって……」

伊織は、ベソを掻き出して、

「おばさん、先生は、どツちへ立つて行つたか、知らないか、何か、いい置いて行つたら」

「何も聞いてないね。きつと、おまえみたいな子は、お供に連れて歩いて、役に立たないから、捨てられたんだよ」

眼いろを変えて、伊織は往来へ飛び出した、——そして西を見、東を見、空をながめて、ぽろぽろ泣き出した様子に、
中なかぞり剃はげの禿

を櫛くしの齒で搔きながら、お内儀かみはケタケタ笑った。

「嘘だよ、嘘だよ。おまえの先生は、すぐ前の刀屋さんの中二階へ引つ越したのさ。そこにいるから、泣かずに行つてごらん」

今度は、ほんとのことを教えてやると、その言葉が終るや否、内儀さんのいる帳場の中へ、往来から馬の草鞋わらじが飛びこんできた。

五

寝ている武蔵のすその方へ、伊織は畏おそる畏るかしこまって、

「ただ今」

と、いった。

彼を、ここへ通した耕介は、すぐ跫音をひそめて、母屋おもやの奥の病室へかくれた様子——

どことなく、きょうのこの家は陰気いんきだった。伊織にも、感じられる。

それに、武蔵の寝ているまわりには、木屑がいつぱい散らかつていて、燈ともしきつて、油の濁かいた燭台かもまだ片づけてない。

「……ただ今」

叱られることが、何よりも彼の心配であった。で、大きな声が出ないのであった。

「……誰だ」

武蔵がいう。

眼をあいたのである。

「伊織でございます」

すると武蔵は、すぐ身を起した。そして足の先にかしこまっ
ている伊織の無事をながめると、ほっとしたように、

「伊織か」

と、いったが、それきり何もいわなかつた。

「遅くなりました」

それにも何もいわず、伊織がふたたび、

「すみません」

と、お辞儀しても、べつだん次の問いを発せず、帯を締め直
して、

「窓を明けて、ここを掃除しておけ」

いいつけて、出て行つた。

「はい」

伊織は、家人に箒ほうきを借りて、部屋の掃除にかかったが、なお、心配になるので、武蔵が何をしに行つたのかと、裏庭をのぞくと、武蔵はその井戸ばたで口を嗽すすいでいた。

井戸端のまわりには、青梅の実みがこぼれている。伊織は、それを見るとすぐ、塩をつけて齧かじる味を思った。そして、あれを拾つて浸つけこんでおけば、一年中梅干に困らないのに、この人はなぜ拾つて漬けないのかと考えたりした。

「耕介どの。怪我人の容態はどうじゃな」

武蔵は、顔を拭きながら、そこから裏の端の部屋へ、ことばを掛けていた。

「だいぶ、落着いたようで」

と、耕介の声もする。

「おつかれでござろう。後で少し代りましようかな」

武蔵がいうと、耕介は、それには及ばない由を答えて、

「ただ、このことを、平河天神の小幡おぼたかけのり景憲様の塾まで、お知らせしたいと思いますが、人手がないので、どうしたものかと、それを案じておりますが」

と、相談する。

それなら、自分が行くか、伊織を使いに出すから——と武蔵が

ひきうけて、やがて中二階の箱段をのぼって来ると、部屋は手ばやくもう掃はかれてある。

武蔵は、坐り直して、

「伊織」

「はい」

「使いの返事は、どうであつたな」

——多分、いきなり叱られるに違いないと惧おそれていた伊織は、
やつとニコついて、

「行つて参りました。そして柳生様のお邸にいる木村助九郎様からここに、御返事をもらつて来ました」

ふところ
懐の奥のほうから、返書の一通を出して、したり顔をした。

「どれ。……」

武蔵は手を伸ばし、伊織は、膝をすすめてその手へ渡した。

六

木村助九郎からの返辞には、ぎつと、こうした文言が認め^{したた}てあつた。

（——せつかくの御所望ではあるが、柳生流は將軍家のお止^{とめりゆ}流^う。何人^{なんびと}とも、公然の試合はゆるされない。しかし、試合としてお越しあるのでなければ、時に依つて、主人^{たじまのかみ}但馬守様が、道場で御挨拶のある場合もある。——なお、強^たつて、柳生流真骨

法に接したいというお望みならば、柳生兵庫様とお立合いになるのが最上と思うが——折わるく、その兵庫様には、本国大和やまとの石舟齋様の御病氣再発のために、にわかには昨夜、大和へ向けてお立ちになってしまった。かえすがえす遺憾であるが、そういう御心配もある折なので、但馬守様を御訪問の儀も他日になされてはどうか)

と、結んで、

(その時にはまた、自分が御周旋申しあげてもよい)
と、追伸してある。

「……………」

武蔵は、ほほ笑みながら、長い巻紙をゆるゆる巻き納めた。

彼の微笑を見ると、伊織はよけい安心した。その安心をしたところ、窮屈な脚を伸ばして、

「先生、柳生さまのお邸は、木挽町こびきちょうじゃないぜ。麻布の日ヶ窪つととこさ、とても大きくて、立派な家だよ。そしてね、木村助九郎様が、いろんな物を、ご馳走してくれた」

狎なれて、話し出すと、

「伊織」

武蔵の眉が、すこし難むずかしく変っている。その気色に、伊織はあわててまた、足を引っ込めて、

「はい」

と改まる。

「道を間違えたにせよ、きょうは三日目、あまり遅過ぎるではないか。どうしてこんなに遅く帰って来たか」

「麻布の山で、狐に化かされてしまったんです」

「狐に」

「はい」

「野原の一軒家に育って来たおまえが、どうして狐になど化かされたのか」

「わかりません。……けれど半日と一晩中、狐に化かされて、後で考えても、何処を歩いたのか、思い出せないんです」

「ふーム……。おかしいな」

「まったく、おかしゅうございます。今まで狐なんか、何でもな

いと思つていましたが、田舎より江戸の狐のほうが、人間を化かしますね」

「そうだ」

彼の真面目まじめが顔おを見てみると、武蔵は叱る気も失せて、

「そちは、何か悪戯いたずらしたろう」

「ええ、狐が尾行つて来つけましたから、化かされないうちにと要心して、脚あだだか尻尾あだだか斬ありました。その狐が、仇あをだしたんです」

「そうじゃない」

「そうじゃありませんか」

「うム、あだをしたのは、眼に見えた狐でなくて、眼に見えない自分の心だ。……ようく落着いて考えておけ。わしが帰つて来る

までに、その理わけを解いて、答えるのだぞ」

「はい。……けれど先生は、これから何処かへ行くんですか」

「翹こうじまち町の平ひらかわ河天神の近所まで行ってくる」

「今夜のうちに、帰って来るんでしょうね」

「はははは、わしも狐に化かされたら、三日もかかるかも知れぬぞ」

きようは伊織を留守において、武蔵は梅雨つゆぐもりの空の下へ出て行った。

雀じゃく羅らの門もん

平河天神の森は、蟬せみの声につつまれていた。梟ふくろの声もどこかで
する。

「ここだな」

武蔵は、足を止めた。

昼間の月の下に、物音もしない一構えの建物がある。

「たのむ」

まず玄関に立つてこう訪れた。洞窟どうくつへ向つてものをいうように、自分の声が自分の耳へがあと返ってくる。——それ程、人ひ気が感じられなかった。

——しばらく経つと、奥の方から跫音がして来た。やがて彼の前に、取次の小侍とも見えぬ青年が、提げ刀さがたなで立ち現れ、

「誰方どなただな？」

立ちはだかったままでいう。

年ばえ二十四、五歳、若いが、革足袋かわたびの先から髪のの毛まで、一見して、能のうもなく育つて来た骨のがらでないものを備えていた。

武蔵は、姓名を告げて、

「小幡勘兵衛おぼたかんべえどのの小幡兵学所はこちらでございますな」

「そうです」

青年は、膠にべがない。

次にはさだめし、兵法修行のため諸国を遊歴しておる者で——

と武蔵がいうに違いないと、見ているような体ていだったが、武蔵が、「御当家の一弟子、北条新蔵と申さるる人じんが、仔細あつて、ご存じの刀研とぎ耕介の家に救われて、療養中にござりますゆえ、右まで、耕介の依頼に依つて、お報しらせにうかがいました」

と述べると、

「えつ、北条新蔵が、返り討ちになりましたか」

と、青年は驚愕して、気を落着けると、

「失礼いたしました、わたくしは勘兵衛景憲かげのりの一子、小幡余五郎にございます。わざわざのお報しらせ有難う存じます。まず、端近ですが御休息でも」

「いやいや、一言、お伝えすればよいこと、すぐお暇いとまをいたす」

「して、新蔵の生命は」

「今朝になつて、いくらか持直したようです。お迎えに参られても、今のところでは、まだ動かされませんまいから、当分は耕介の家に置かれたがよいでしよう」

「何分、耕介へも、頼み入るとお言ことづつて伝ねがいたい」

「伝えておきましょう」

「実は当方も、父勘兵衛がまだ病床から起ち得ぬところへ、父の代師範をつとめていた北条新蔵が昨年の秋から姿を見せませぬため、このように講堂を閉じたまま、人手のない始末あし、悪あしからずお推察を」

「佐々木小次郎とは、何かよほどな御宿怨でもござるのか」

「私の留守中ゆえ、詳しくは存じませぬが、病中の父を、佐々木が恥かしめたとかで、門人たちの間に遺恨を醸かもし、幾たびも彼を討とうとしては、かえって彼のために、返り討ちになる始末に、遂に、北条新蔵も意を決して、ここを去つて以来、小次郎をつけ狙つていたものとみえまする」

「なるほど。それでいきさつが相分つた。——しかし、これだけは御忠告しておく。佐々木小次郎を相手にとって争うことはおやめなされ。彼は、尋常に刃向つても勝てぬ相手、策をもつてもなお勝てぬ相手。——所詮しよせん剣でも、口先でも、策略でも、おおよそ一かどぐらいな器量の者では、太刀打ちにならぬ人物です」

武蔵が、小次郎の凡物でない点を揚げて称揚すると、余五郎の

若い眸には、ありありと不快ないろが燃えた。武蔵は、それを感じるのでなおさら、未然の警戒を、繰返したくなつて、

「誇る者には誇らしておくに限る。小さな宿怨に、大禍を招いてはなりません。北条新蔵が仆れたからには、自分がなどと重なる遺恨を追つて、また、前車の血の轍をお踏みなさるなよ。愚かです、愚かなことです」

そう忠言すると、彼は、玄関先からすぐ歸つて行つた。

二

——その後で、余五郎は、壁に倚りかかつたまま、独りで腕を

拱くんでいた。

多感な唇くちが、かすかに、

「残念な……」

と、顫ふるえを洩らした。

「新蔵までが、とうとう、返り討ちにされたのか……」

うつろな眼で、天井を見る。広い講堂も母屋おもやも、今では、ほとんど無人のようにしんとしていた。

自分が旅先から帰って来た際には——新蔵はもういなかったのである。ただ、自分へ宛てた遺書だけがあった。それには、佐々木小次郎をきつと討つて帰るとあった。討てなければ今生でお目にかかる折はもうあるまいとしてあった。

その、希^{ねが}わぬことの方が、今は、事実となつてしまつた。

新蔵がいなくなつてから、兵学の授業も自然やすみとなり、世間の評は、とかく小次郎に加担して、この兵学所に通う者を卑怯者の集まりのように、また、理論だけで実力のない人間の屯^{たむろ}のように悪くいつた。

それを、潔^{いさぎよ}しとしない者だの、父勘兵衛景^{かげ}憲の病氣や、甲州流の衰微を見て、長沼流へ移つてゆく者だの——いつのまにか門前はさびれてしまい、近頃では内弟子のほんの雑用をする者が二、三止まつているきりだつた。

「……父にはいうまい」

彼は、すぐそう心に決めた。

「——後は後のことだ」

とにかく、老父の重病に手を尽すことが、子としては、今は最善なつとめだと思う。

しかし、その恢復は、到底、覚つおぼかないことだとは、医者からもいわれていることだった。

——後は後のこと。

と、そこで悲しい我慢が胸をさするのだった。

「余五郎っ。余五郎っ」

奥の病室から、こう父の声がその時間聞えた。

子の眼からは、今にもと危ぶまれる病父も、何かに激して、子を呼ぶ時の声は、病人とも思われなかった。

「——はいっ」

あわてて、余五郎は、駈けて行つた。

そして次の間から、

「お呼びですか」

ひざまずいて見ると、病人はいつも寝くたびれた時するのように、自分で窓をあけ、枕を脇きようそく息にして、床のうえに坐つていた。

「余五郎」

「はい。ここにおります」

「今——門の外へ行つた武士があつたな。——この窓から、後ろ姿だけを見たのだが」

もう、父はそれを知っていたのかと、包んでいるつもりだった

余五郎は、ややうろたえた。

「は……。では……。ただ今見えた使いの者でございましょう」

「使いとは、どこから」

「北条新蔵の身に、ちと変事がござりまして、それを知らせに来てくれた——宮本武蔵とか申すお人です」

「ふム？ ……宮本武蔵。 ……はてな、江戸の者ではあるまいが」
「作州の牢人とか申しておりますが——お父上には只今の人間に、何ぞお心当りでもあるのでござりまするか」

「いや——」

勘兵衛景憲は、白い髯ひげのまばらに伸びた顎あごの先をつよく振って、
「なんの由縁ゆかりも見おぼえもない。したが、この景憲も、若年から

この年まで、数々の戦場はおろか平時のあいだに、随分人らしい人は見たが、まだ真に武士らしい武士に出会うたのは幾いくたり人もない。——ところが、今立ち去った侍には、何か、心が惹ひかれた。

——会いたい。ぜひその宮本殿とやらに会って話してみたい。——余五郎、すぐ追いかけて、これへ、ご案内申して来い」

三

あまり長く話してもいけない——と医者からも注意されている病人である。

——呼んでこい。

と、病人が、やや昂奮していうだけでも、余五郎は、父の容態に障^{さわ}りはしないかと、案じられるのだった。

「かしこまりました」

一応は、病人に従って、彼はこういったが立とうとはせず、

「しかしお父上、今のさむらいの何処がそんなにお気に召しましたか。この御病間の窓から、後ろ姿をご覧になっただけでしょうに」

「おまえには分るまい。——それが分る頃になると人間も、もはやこの通り寒^{かん}巖^{がん}枯^こ木^{ぼく}に近くなる」

「でも、何か理由^{わけ}が」

「ないこともない」

「お聞かせ下さいませ。余五郎などには後学にも相成りましょう」
「わしへ——この病人にさえ——今の侍は油断をせずに行つた。

それが偉いと思う」

「父上が、こんな窓の中に、お在いでになることを、知る筈はありませぬが」

「いや、知っていた」

「どうしてでしょう」

「門をはいって来る時、そこで一足止めて、この家の構くまえと、明いている窓や明いていない窓や、庭の抜け道、その他、隈くまなく一目に彼は見てしまった。——それは少しも不自然なていではなく、むしろ慇いんぎん懃ぎんにさえ見える身ごなしではいつて来たが、わしは遥

かにながめて、これは何者がやって来たかと驚いておったのじゃ」

「では、今の侍は、そんな嗜たしなみのふかい武士でしたか」

「話したら、さだめし尽きぬ話ができよう。すぐ追いかけて、お呼びして来い」

「でも、お体に障さわりはいたしませんか」

「わしは、年来、そういう知己を待っていたのだ。わしの兵学は、子に伝えるため積んで来たのではない」

「いつも、お父上の仰っしやっておらるることです」

「甲州流とはいうが、勘兵衛景憲かげのりの兵学は、ただ甲州武士の方

程式陣法を弘めてきたのではない。信玄公、謙信公、信長公などが、覇を争っていた頃とは、第一時世がちがう。学問の使命も違

う。——わしの兵学は、あくまで小幡勘兵衛流の——これから先、真の平和を築いてゆく兵学なのだ。——ああ、それを誰に伝えるか」

「……………」

「余五郎」

「……はい」

「そちに伝えたいのは山々だ。だけど、そちは今の武士と、面と対^{むか}つてさえ、まだ相手の器量がわからぬほど未熟者じゃ」

「面目のう存じます」

「親のひいき目に見てすらその程度では——わしの兵学を伝えるよしもない。——むしろ他人の然^{しか}るべき者に伝えて、そちの後事

を託しておこう——と、わしはひそかにその人物を待っていたの
じや。花が散ろうとする時は、必然に、花粉を風に託して、大地
へこぼして散るようにな……」

「……ち、父上、散らないでください。散らないように、御養生
遊ばして」

「ばかをいえ、ばかを申せ」

二度繰り返して、

「はやく行け」

「はい」

「失礼のないように、よくわしの旨を申しあげて、これへ、お連
れ申して来るのじやぞ」

「はっ」

余五郎は、いそいで、門の外へ駆け出して行つた。

四

——追つて行つたが、武蔵の影はもう見えなかつた。

ひらかわ

平河天神の辺りを探し、こうじまち麴町の往来まで出て行つたが、

やはり見当らなかつた。

「しかたがない。——また折があらう」

余五郎は、すぐ諦めた。あきら

父がいうほど、彼にはまだ、武蔵がそれほど優れた人間とは、すぐ

受け取れなかった。

年齢も、自分と同じくらいな彼が、たといどれ程、才分があつたとしても、知れたものだと思われなかった。

それに、武蔵が帰り際に、

（佐々木小次郎を相手になさるのは愚かである。小次郎は凡物ではない。小さな宿怨はお捨てになつたほうがお為であろう）

などといった言葉も、頭のどこかに聞^{つか}えている感じである。あたかも、わざわざ小次郎を称揚しに來たような印象を、余五郎は受けていた。

（何の！）

と、いう気持が、当然、それに対して、彼にはある。

小次郎に対しても抱くが如く、武蔵に対しても、その軽いものを抱いているのだ。——いや、父に対しても、従順には聞いていたが、心の裡うちでは、

（私とても、そうお父上が見縊みくびるほどな未熟ではございません）と、呟つぶやいた程だった。

一年、時には二年、三年と、余五郎も許された暇いとまのあるたびに、武者修行にも歩いたり、他家へ兵学の内弟子となったり、時には、禅家へも通つたり、一通りな鍛錬は積んで来たつもりなのである。——それを父はいつまでも乳くさいように自分を視みている。そしてたまたま窓越しに見た武蔵のような若輩者を、おそろしく過賞し、

(すこし貴様も見ならえ)

と、いわないばかりな口吻くちぶりであつた。

「――戻ろう」

と、決めて、家のほうへ帰りながら、余五郎はふと淋しかった。
「親という者は、いつまでも子が乳くさく見えてならないのだらうな」

いつかはその父に、お前もそんなになつたかといわれてみたい。しかし、その父は明日も知れない病身である。それが淋しかった。

「おう、余五郎どの。――余五郎どのじゃないか」

呼びかける声に、

「やあ、これは」

と、余五郎も踵きびすを回して、双方から近づいて行つた。

細川家の家士で、近頃はあまり見えないが、一頃はよく講義を

聞きに来ていた なかとがわはんだゆう 中戸川範太夫であつた。

「大先生の御病気はその後いかがでございませぬ。公務に追われて、ごぶさたを致しておりますが」

「相変らずでございませぬ」

「なにせい、御老齢のことでもあるしの。……才才時に、教頭の北条新蔵どのが、またしても、返り討ちにされたという噂ではござらぬか」

「もうご承知ですか」

「つい今朝方、藩邸で聞きましたか」

「ゆうべのそれを——もう今朝細川家で」

「佐々木小次郎は、藩の重臣、岩間角兵衛殿の邸やしきに食客しておるので、その角兵衛どのが、早速、吹ふい聴ちようしたものでござろう。

若殿の忠ただとし利公すら、すでにご存知のようでござった」

余五郎の若さでは、それを冷静に聞いていることはできなかつた。そうかといって、顔いろの動きを見られるのも嫌だつた。さり気なく範太夫には別れて家へ戻つたが、その時はもう、彼の肚は決まっていた。

まち
街の雑草ざつそう

耕介の妻は、粥かゆを煮ている。

奥の病人のためにである。

その台所を覗いて、

「おばさん、もう梅の実みが黄色くなつたよ」

と伊織が教えた。

耕介の妻は、

「ああ、熟うれて来たね、蟬せみも啼なき出すし」

と、なんの感激もない。

「おばさん、どうして、梅の実を漬けないのさ」

「小人数だもの。あれだけ漬けるには、塩だつて沢山いるだろ」
「塩は腐らないけれど、梅の実は漬けとかないと腐ちまうじやないか。小人数だつて、戦争の時だの、洪水の時には、ふだんに要心しておかないと困るぜ。——お婆さんは病人の世話で忙しいから、おらが漬け込んでやるよ」

「まあ、この子は、大洪水の時のことまで考えているのかえ。子供みたいじゃないね」

伊織はもう、物置へ入つて、あきだる空樽を庭へ持ち出している。そして梅の樹を仰いだ。

よそ他家の世話女房をたしな窺める程、子供に似げない才覚や生活の自衛を心得ているかと思うと、もうすぐ樹の肌に止つているミンミン

蟬ぜみを見つけて、それに気を奪とられていた。

そつと寄つて、伊織は、蟬をおさえつけた。蟬は彼の掌ての中で、老人の悲鳴みたいに啼き立てた。

自分の拳こぶしをながめて、伊織は不思議な感に打たれている。蟬には血がない筈なのに、蟬の体は自分の掌よりも熱かった。

血がない蟬でも、死ぬか生きるかの境には、火のような熱を体から燃やすのであろう。——伊織は、そこまでは考えなかつたが、ふと怖くなつて、また可哀そうになつて、その掌てを大空へ上げて開いた。

蟬は、隣の屋根へぶつかつて町の中へ反それて行つた——。伊織はすぐ梅の樹へのぼり出した。

かなり大きな樹だった。恙なく育つた毛虫は、驚くほど美しい毛を着て這っていた。天道虫もいたし、青葉の裏には、青蛙の子もはりついていた。小さい蝶も眠っていた。虻も舞っていた。

人間の世界を離れた別な世界を覗いたように、伊織は、見惚れていた。いきなり梅の枝をユサユサ揺すつて、昆虫の国の紳士淑女を愕かすのは気の毒みたいな気がしたのかもしれない。まず薄く色づいた梅の実を一個挽いで、ポリツと、齧った。

そして手近の枝から、揺すぶり始めた。落ちそうに見えていて、梅の実は案外落ちない。手の届く実は手で撈つて、下の空樽へ抛り投げた。

「——あつ、畜生つ」

何を見たのか、伊織はふいにそう呶鳴つて、家の横手の露地へ向つて、ぱらぱらツと、三ツ四ツ梅の実を投げつけた。

垣根へ懸け渡してあつた物干竿が、それと共に、大きな音を立てて地へ落ちた。続いて、慌^{あわ}てふためいた登音が、露地から往来へ飛び出して行つた。

きようも、武蔵は外出して、その留守中のことなのである。細工場で、余念なく、刀を研^といでいた耕介は、竹窓から顔を出して、

「なんだ？ 今の音は」
と、眼をまるくした。

二

伊織は、樹の上から、飛び降りて――

「おじさん、露地の陰へ、また変な男が来て、しやがみ込んでたよ。梅の実を打^ぶつけてやったら、びっくりして、逃げてったけれど、油断してると、また来るかもしれないぜ」

と、細工場の窓へ告げた。

耕介は、手を拭きながら出て来て、

「どんな奴だった？」

「無法者だよ」

「半^{はん}瓦^{がわら}の乾^{こぶん}児か」

「こないだの晩も、店へ押し襲^かけて来たろ。あんな風態^{ふうてい}さ」

「猫みたいな奴らだ」

「何を狙^{ねら}いに来るんだろ」

「奥の怪我人へ、仕返しにやって来るのだ」

「あ。北条さんか」

伊織は、病人のいる部屋を、振返つた。

病人は粥^{かゆ}を喰^くべていた。

その北条新蔵の負傷^{てきず}も、もう繃^{ほう}帯^{たい}を脱^とつていい程に恢復して
いた。

「——御亭主」

新蔵がそこから呼ぶので、耕介は縁先へ歩いて行って、

「いかがですな」

と、なぐさ慰めた。

食事の盆を片寄せて、新蔵は坐り直した。

「耕介どの。思わぬお世話に相成った」

「どういたしました。仕事があるのでつい行き届きませんで」

「何かとお世話ばかりでなく、拙者を狙うはんがわら半瓦の部屋の者が、

絶えずこそこそ立ち廻るらしいな。長居するほど迷惑はかさむし、

万一当家へあだをするようでは、この上にも申し訳がない」

「そんなごしんしゃく斟酌は……」

「いやそれに、この通り、体も恢復いたしたから、今日はもうおいとま暇をしようと思う」

「え、お帰りですって」

「お礼には、後日改めてお伺いする」

「ま……お待ち下さい。ちようど今日は、武蔵様も外へ出ていらつしやいますから、帰った上で」

「武蔵どのにも、種々いろいろと手厚いお世話になったが、戻ったらよろしくいつてくれい。——この通り歩行などにはもう少しも不自由はない程に」

「でも、半瓦の家にいる無法者たちは、いつぞやの晩、菰こもの十郎と、お稚児ちごの小六という者を、あなたのために斬り殺されたため、それを恨んで、あなたが一步でも此家このやの軒下を出たら喧嘩をしかけようと、待ち構えております。それで毎日毎夜、あの通りち

よいちよい様子を覗きに来ておりますのに、それを承知で、お一人でここから帰すことはできません」

「何の、菰やお稚児を斬つたのは、こちらには、堂々と理由のあること。彼らのうらみは逆恨みじゃ。それを、事を構えて仕懸けて参れば——」

「と、いつても、まだその体では心もとのうござりまする」

「ご心配は忝かたじけないが大事はござらぬ。御家内はどこにおられるか。御家内へも礼を申して……」

と、新蔵はもう、身支度を直して、立ち上がった。

ひき止めても、きかないので、夫婦もぜひなく、送り出すと、ちようどその店先へ、陽ひに焦やけた顔に汗をたたえて、武蔵が外か

ら戻つて来た。

出合いがしらの眼をみはつて、

「や。北条どの、何処へ出かけられるか。——何、御帰宅と。——
 —そういう元気になってくれたことは欣うれしいが、一人では途中が
 物騒。よい所へ戻つて来た。拙者が平ひらかわ河天神までお送りしよう」
 と、武蔵はいつた。

三

一応は辞退したが、

「何。——まあよい」

武蔵は受けつけない。

で、好意に甘えて、北条新蔵は彼に伴れられて、耕介の家を出た。

「久しく歩かれなかつたから、ご大儀ではないか」

「何か、こう、地面が高く見えるようで、足を踏み出すのに、よろめ躊躇ちゆうじゆきまする」

「無理もない。平河天神まではだいぶある。町まち駕かごが来たら、あなただけお乗りなさい」

武蔵がいうと、

「申し遅れましたが、小幡兵学所へは帰りませぬ」

「では、どちら何処まで」

「……面目ない気もいたしますが」

と、新蔵はさし俯向うつむいて、

「——一時、父の許へ帰るといたしまする」

と、いった。そして、

「牛込です」

と、行く先を告げた。

武蔵は、町駕を見つけ、強たつて新蔵だけに乗せた。駕屋は、武蔵へもすすめたが、武蔵は乗ろうともしない。新蔵の駕のわきに付いて歩いて行くのだった。

「あ。駕へ乗せやがった」

「こつちを見たぞ」

「騒ぐな、まだ早い」

駕と武蔵が、外濠そとぼりを見て右へ曲ると、町角に現われた一団の無法者が、各、裾すそをまくり、腕をたくし上げて、その後から、尾ついて行つた。

半はんがわら瓦の部屋の者である。今日の遺恨ばらしを待つていたぞという顔つき。どの眼もどの眼も武蔵の背と駕の中に飛びつきそうにぴかぴかしている。

牛ヶ淵ふちまで来た時である。駕の棒へ小石が一つカンと匆はね返つた。それと共に、遠巻きに拡がった無法者の群れが、

「やいつ、待て」

「野郎、待て」

「待て」

「待て」

すでに前から怯おびえていた駕かきは、かくと見るや、駕をおいて、横つ飛びに逃げ出した。その姿を越えて、また二ツ三ツ石つづてが武蔵へ向つて飛んで来た。

卑怯と見られることは無念なように、北条新蔵は、刀を抱えてすぐ、駕から這い出し、

「待てとは、わしか」

と、突っ起つて、応戦の身構えを取った。武蔵は、彼の身を庇かばいながら、

「用事をいえ」

石の飛んで来る方へいった。

無法者たちは、浅瀬を探るように、だんだん寄り詰めて来たが、
「知れたことつ」

叩き返すようにいつて、

「その野郎を渡せばよし、小生意気なまねをすると、てめえも共に生命がねえぞ」

味方の言葉に氣勢が揚がつて、無法者たちはそこで、どつと殺氣を漲みなぎらした。

——といつて、誰あつて、先に大刀だんびらかざして斬りこんで来る者もない。また、武蔵の眼光がそうさせなかつたともいえる。いずれにしろかなり距離をおいて一方は吠ほえ、武蔵と新蔵は、それを

眺めすえて沈黙していた。

「半瓦とか申す無法者の親分はその中におるのか。おるならばそれへ出てもらいたい」

時ならぬ時分に、武蔵がこういった。すると、無法者の中から、

「親分はいねえが、部屋の留守は年寄役でおれが預かっている。

おれは、ねんぶつたざえもん念仏太左衛門というおやし老爺だが、何か挨拶があるなら聞いてやろう」

と、しろかたびら白帷子を着て、えり襟に大きなずず数珠を懸けている無法者の老人が、前へ進んで名乗った。

四

武蔵はいった。

「其方たちは、なんで、この北条新蔵どのに、恨みを抱くのか」
すると、念仏太左衛門は、一同に代って肩をそびやかした。

「部屋の兄弟分を二人まで叩つ斬られて、黙つていぢやあ、無法
者の顔にさわる」

「だが、北条どのにいわせれば、その前に、菰こもの十郎と稚児ちごの小
六とやらは、佐々木小次郎に手伝うて、小幡家の門人衆を、幾名
も、闇打ちにしているというではないか」

「それはそれ、これはこれ、おれたちの兄弟分がやられた時は、

おれたちの手で仕返しせねば、無法者の飯を喰つて、男でござると歩いていられねえのだ」

「なるほど」

武蔵は、肯定を与えておいてからまた、いった。

「それは、おまえ達の住む世界ではそうだろう。だが、侍の世界は違う。——侍の中では、いわれのない意趣は立たぬ。逆恨みさかうらや亦恨みまたは、許されぬ。——侍は義を尊び、名分のために、復讐はゆるさされているが、遺恨のための遺恨ばらしは、女々めめしい振舞いと笑うのだ。——たとえば、其方たちのような」

「何、おれたちの振舞いが、女々しいと？」

「佐々木小次郎を先に立て、侍として、名乗り来るなら分つてお

るが、手伝い人の騒ぎ立てを、相手に取るわけにはゆかぬ」

「侍は侍のごたく。何とでもぬかせ。おれたちは無法者だ。無法者の顔を立てにやあならぬ」

「一ツの世間に、侍の仕方、無法者の仕方、二ツが立とうとすれば、ここばかりではない、街のいたる所に、血まみれが生じる。

——これを裁くものは奉行所しかない。念仏とやら」

「なんだ」

「奉行所へ参ろう。そして是非を裁いて戴こう」

「くそでもくらえ。奉行所へ行くくれえなら、しよて初手からこんな手

間ひまはかけねえ」

「おぬし、とし年齢はいくつ幾歳だ」

「何」

「よい年とし齡して、若い者の先に立ち、好んで無益な人死にを見よ
うとするか」

「つべこべと、理窟はおけ。こう見えても、太左衛門、喧嘩に年とし
齡は取つていねえぞ」

——太左衛門が脇差を抜いたのを見ると、後ろにひしめいてい
た無法者たちも、一度に声をあげて、

「やツちまえ」

「老おやし爺を打たすな」

と、かかつて来た。

武蔵は、太左衛門の脇差をかわして、太左衛門の白しら髪首がくびのど

こかをつかむと、大股に十歩ほど持つて来て、外濠そとぼりの中へその体を抛ほうりこんでしまった。

そしてまた、無法者の群れへ駈け入ると、その乱争の間から、北条新蔵の体を拾つて、横抱さくらきに攫さらい取り、彼らが、驚さわき躁さわぐまに、早くも、牛ヶ淵ふちの原を駈け出して、九段坂の中腹あたりを、その遠い影は、小さくなつて、駈け上がつていた。

五

牛ヶ淵とか、九段坂とかいったのも、勿論ずっと後世の地名である。当時まだその辺は、蒼古とした樹林の崖や、外濠の淵へあ

つまる溪流だの、青い沼水を湛たえた湿地が見られるだけで、地名としても、こおろぎ橋とか、もちの木坂とか、極めて土俗的な称呼があるに過ぎなかつたであろう。

——呆つ気にとられている無法者の群れを捨てて坂の中腹まで、駈けて来ると、

「もうよい。北条どの。さあ、逃げよう」

武蔵はいつて、新蔵の体を、小脇から下ろし、ためらう彼うながを促して、なおも彼方へいそぎ出した。

無法者たちは、初めて、

「あつ、逃げたつ——」

と、われかえに回つて、遽にわかにまた、氣勢を改め、

「逃がすな」

と、坂の下から、追い上がりながら、口々に罵ののつた。

「弱虫」

「口ほどもねえぞ」

「恥を知れ」

「それでも侍か」

「よくも、部屋がしらの太左衛門を、お濠へ叩つこんだな。返せ、

野郎」

「もう武蔵も、相手だ」

「ふたりとも、待てっ」

「卑怯者め」

「恥知らずめ」

「駄ぎむらいめ」

「待たねえか」

——その他、あらゆる罵詈譎ぼりざんぼうがうしろから飛んで来たが、武蔵は見向きもせず、また、北条新蔵にも、足を止めることを許さず、

「逃げるに如しくはない」

と、呟いて逃げ出し、

「逃げるのも、なかなか楽ではない」

などと笑いながら、足のかぎり、彼らの追撃から遁のがれてしまつた。

振りかえってみると、もう追つて来る影も見えない。病後の新蔵は、駈けたただけでも、蒼白まつさおになつて、息を喘きつていた。

「お疲れだな」

「い……いえ……さほどでもありませんが」

「彼らの罵ばり詈に甘んじて、残念だと仰うつしやるのか」

「……………」

「はははは。落着いてから分つて来ます。逃げるのも、時には、心地よいものだということが。……そこに流れがある。水で口でもお嗽すすぎなさい。そしてお宿までお送りしよう」

赤城の森はもう見えていた。北条新蔵の帰る家は、赤城明神の下だという。

「ぜひ、屋敷へ寄つて、拙者の父にも会つていただきたい」

と、新蔵はいつたが、武蔵は、赤土の土堀が見える段の下で、

「また、お目にかかる折もあろう。ご養生なさい」

と、いつて、そこで別れて立ち去つた。

——こういうこともあつて、武蔵の名は、それから後、いやが上にも、江戸の街に有名になつた。

——彼は、喰わせ者だ。

——卑怯者の張本だ。

——恥知らず、武士道よごしの骨頂だ。あいつが京都で吉岡一門を相手にしたなどというのは、よくよく吉岡が弱かつたか、逃げの一手で、巧く逃げて、虚名を売つたに違いない。

有名とは、そうした悪評の有名であつて、誰ひとり、武蔵を弁護する者もなかつた。

なぜならば、その後、半瓦の部屋の者が、口を極めて、いいふらしたばかりでなく、街の辻々に、公然と、こういう立て札を幾十となく江戸中へ建てたからであつた。

いつぞや、おら衆に、うしろを見せて、突ン逃げた、

宮本武蔵へ、物いうべい。

本位田のおばも、かたき讐と尋ねてあるぞ。おら衆にも、

兄弟ぶんの意趣があるぞ。出て来ずば、侍とはいわれまいが。

半瓦いちまきの者

青空文庫情報

底本：「宮本武蔵（五）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年12月11日第1刷発行

2002（平成14）年10月8日第36刷発行

「宮本武蔵（六）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年1月11日第1刷発行

2002（平成14）年12月5日第37刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2012年12月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

宮本武蔵

空の巻

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 吉川英治
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>